ＮＥＴテレビ（現：テレビ朝日）
「にっぽんの歌」放送全記録

目　次

1　はじめに……　1

2　放送記録……　5

第１回～第３９回……　7

第４０回～第７８回……　２５

第７９回～第１３１回……　３７

第１３２回～第１８２回……　５５

第１８３回～第２１３回……　７５

第２１４回～第２３９回……　８９

第２４０回～第２６５回……　１０３

第２６６回～第２９１回……　１１５

第２９２回～第３１７回……　１２７

第３１８回……　１３９

3　番組解説……　１４１

4　番組の特徴……　１５９

5　おわりに……　１７９

1　はじめに

昭和４０年代に毎週テレビで放送されていたなつメロ番組と言えば、東京１２チャンネル（現・テレビ東京）制作・放送の「なつかしの歌声」と、読売テレビ制作・日本テレビ系列放送の「帰ってきた歌謡曲」が代表的な存在として挙げられる。これら二番組の放送記録については、林田雄一氏が「なつかしの歌声」、筆者が「帰ってきた歌謡曲」をそれぞれ担当し、共同作業を経て令和２年（増補改訂版は令和４年）に同人誌としてまとめ上げた（『東京１２チャンネル（現：テレビ東京）「なつかしの歌声」放送全記録《増補改訂版》』及び『よみうりテレビ（読売テレビ）「帰ってきた歌謡曲」放送全記録《増補改訂版》』）。

今回本書で取り上げるのは、ＮＥＴテレビ（昭和５２年４月より“テレビ朝日”に呼称変更）が制作し、同系列局にて昭和４６年１０月から昭和５３年３月まで、一部休止期間を除き毎週放送された「にっぽんの歌」である。『週刊ＴＶガイド』昭和４６年１０月１日号では、新番組として「にっぽんの歌」を「第３の“なつメロ番組”が登場」との見出しにより次のように紹介している。

> ＮＨＫの恒例となった“なつメロ特集”や東京12チャンネルの「なつかしの歌声」といった昔なつかしい歌番組がブームを呼んでいるが、この人気に目をつけたＮＥＴ・毎日・中京・ＫＢＣテレビも十月一週からなつメロ歌手総出演による「にっぽんの歌」を登場させ、“懐メロブーム”に便乗する。
>
> これは同社で放送してきた「ヒットで勝負」や「９時のビッグヒット」が若い層を対象に放送してきたが、「“フォー・リーブス”が出演しても視聴率が上がらないのに、“なつメロ歌手”が出ると意外に好評。九時台はやっぱり若い人よりも三十代から四十代の主婦層がチャンネルを握っていることが、いままでのデータでわかりました」（広報部・鳥山番組担当者）と、なつメロ歌手総出演による「にっぽんの歌」の放送となったもの。
>
> 出演する歌手は「ディック・ミネ、東海林太郎、渡辺はま子ら“なつメロ歌手を総ナメ”（スタッフ）する」。一方で、なつメロを歌って受けている鶴田浩二、森進一、水前寺清子、藤圭子など人気歌手も出演させることになっている。
>
> 司会は加東大介と山東昭子。

この記事では「帰ってきた歌謡曲」への言及こそないものの、「なつかしの歌声」を第1、「帰ってきた歌謡曲」を第２のなつメロ番組と位置づけた上で、「にっぽんの歌」をそれに続く第３の存在として捉えていたものと思われる。

また、『週刊平凡』昭和４９年１月３１日号には、「テレビでは見られないベテラン歌手の秘話」（副題：「なつかしの歌声」を司会するコロムビア・トップと“なつメロ”番組スタッフ座談会）と題する記事が掲載されているが、その記事では、「なつかしの歌声」「帰ってきた歌謡曲」「思い出のメロディー」（ＮＨＫ）と並んで、「にっぽんの歌」の番組スタッフも座談会の参加者として名を連ねており、この記事からも「にっぽんの歌」がなつメロ番組の一つとして認識されていたことが伺える。

本書では、“第３のなつメロ番組”とされた「にっぽんの歌」が、先行する「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」と比較してどのような特徴を持っていたのか、更に、昭和

４０年代後半から５０年代前半という時代状況の中で、この番組が“なつメロ”をどのように取り扱っていたのかを、放送記録の作成を通して解き明かしていきたい。

調査に当たっては、主として放送期間中の各新聞に掲載されたテレビ欄の記述を参照した。また、国立国会図書館の音楽・映像資料室に、放送初期の回を中心とした同番組の台本が２５回分所蔵されており、これらも併せて参照した。放送初期においては、新聞のテレビ欄で放送内容が紹介される頻度が少なかったため、これらの台本は初期の放送内容を把握する上で大きな助けとなった。

2　放送記録

「にっぽんの歌」は、概ね半年ないし一年間隔で司会者が入れ替わっていた。そこで、司会者交代のタイミングで期間を区切って放送記録をまとめることとした。

各回の放送記録の凡例は以下のとおりである。

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）　④放送概要

以下は、各凡例の特記事項である。

1　放送回

国立国会図書館所蔵の番組台本には放送回と放送日の双方の記載があるため紐付けが可能だが、所蔵台本は放送初期のものにとどまり、第６６回分が確認できる最も後年の台本である。新聞紙面には放送回の情報は記載されていないため、第６７回以降の放送回は推測のみでの記載となっている。

昭和５０年１２月２９日放送分は唯一の２００回記念特集であり、ちょうど“＃２００”となったため、第２００回までの記載は正確であると考えられるが、それ以降の記載にはずれが生じている可能性がある。なお、昭和５４年１月３日放送分の単発放送を制作局側が放送回にカウントしているかどうかは不明であるが、本書においては便宜上“第３１８回”として記載した。

2　曲目

既公開の「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」の放送記録では、曲目名は原則として最初に発売されたオリジナルレコードの表記に準拠してきた。しかし本書では、番組内で紹介されたと思われる曲目名を採用することとした。例えば、「婦系図の歌」は「湯島の白梅」、「復活唱歌」は「カチューシャの唄」、「明治一代女の唄」は「明治一代女」といった具合である。このような表記としたのは、放送当時の視聴者に近い感覚を再現し、その受容形態に接近することを意図したためである。

第1回～第39回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和46年10月4日～ 昭和47年6月26日	月	21時00分～ 21時56分

司会：加東大介　（第　1回～39回）
　　山東昭子　（第　1回～26回）
　　松任谷国子（第27回～39回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和４６年１０月４日

①「藤山一郎・40年の栄光」　＃１

②島倉千代子、ジャッキー吉川とブルー・コメッツ、松尾和子、バーブ佐竹、仲宗根美樹、小畑実、藤山一郎、池部良、伊豆肇、杉葉子、若山セツ子、坂本九

③**（出演順）**「からたち日記」（島倉）、「ブルーシャトー」（ブルー）、「誰よりも君を愛す」（松尾）、「女心の歌」（バーブ）、「川は流れる」（仲宗根）、「湯島の白梅」（小畑）、「丘を越えて」（藤山）、「東京ラプソディ」（藤山）、「懐しのボレロ」（藤山）、「長崎の鐘」（藤山）、「青い山脈」（藤山）、「見上げてごらん夜の星を」（坂本）、「赤とんぼ」（全員）

④　日本における愛唱歌、ヒット曲、名曲をいろいろな角度から取り上げる歌謡番組。主として、昭和の歌を対象としている。司会は歌謡番組初登場の加東大介と、山東昭子。

番組は、第一部では毎週幅広く各出演者に思い出のヒット曲を歌ってもらう“思い出のヒットパレード”、第二部は一人のスターをゲストに迎え、歌にまつわる思い出などを語ってもらう“今週のハイライト”、第三部は視聴者や有名人からリクエスト曲をつのる“私の心の歌”で構成する。

第一部では、島倉千代子が「からたち日記」、小畑実が「湯島の白梅」を歌う他、ブルー・コメッツ、松尾和子、バーブ佐竹らが出演する。

第二部は、“藤山一郎四十年の栄光”と題して、歌謡生活４０年の藤山一郎が登場する。まずは思い出の歌として「丘を越えて」を聞いた後、司会の加東と藤山の友情の話に話題が及ぶ。続いて「東京ラプソディ」「懐しのボレロ」「長崎の鐘」と三曲続けて歌った後、「青い山脈」の同窓会として、若山セツ子、杉葉子、池部良、伊豆肇が登場し、「青い山脈」の映画の思い出や藤山の吹き込みの思い出などを聞く。「青い山脈」を歌うシーンでは、四番の歌詞に入ると四人も加わり大合唱になる。

第三部“私の心の歌”は、坂本九の”心の歌”「見上げてごらん夜の星を」の思い出話を聞き、歌う。

誰でもよく知っている懐かしい歌を全員で歌うお別れの歌は、「赤とんぼ」。

昭和４６年１０月１１日

①「ディック・ミネ不滅の青春」　＃２

②佐川満男、菊池章子、池真理子、初代コロムビア・ローズ、一節太郎、鶴岡雅義と東京ロマンチカ、ディック・ミネ、木暮実千代、望月優子、中村是好

③**（出演順**（「ダイナ」以外)**）**「無情の夢」（佐川）、「星の流れに」（菊池）、「愛のスイング」（池）、「東京のバスガール」（ローズ）、「浪曲子守唄」（一節）、「小樽のひとよ」（ロマンチカ）、「愛の小窓」（ディック）、「上海ブルース」（ディック）、「或る雨の午後」（ディック）、「長崎エレジー」（ディック）、「夜霧のブルース」（ディック）、「ダイナ」（佐川）、「月光価千金」（望月・中村）、「旅愁」（全員）

④　第一部“思い出のヒット・パレード”では、菊池章子「星の流れに」、池真理子「愛のスイング」といったナツメロを聞かせ、その間を司会の加東大介と山東昭子が綴る。同年１０月１４日付読売新聞東京版朝刊では、「まったくスレていない加東のおだやかな司会ぶりがまたいい。二児の母親という初代コロムビア・ローズの『東京のバスガール』など、しあわせそうな家庭生活がそのまま茶の間に伝わってくる感じであった。」と、視聴した記者が感想を綴っている。

第二部“今週のハイライト”は「ディック・ミネのコーナー」。サブタイトルの“不滅の青春”の通り若々しく柔らかく数曲を歌う。加東はディックと話をするのは今日がはじめてのため、初対面の挨

挨を交わす。「愛の小窓」で始まり、続いて独特の”ミネさん調”の名曲「上海ブルース」「或る雨の午後」「長崎エレジー」のメドレー。その後、「夜霧のブルース」に話題が移り、松竹映画「地獄の顔」出演の思い出話の際にハプニング風にゲストたち（国会図書館所蔵のこの回の台本（準備稿）に具体的な出演者が書かれていないため、木暮実千代以外は不明）が登場。また、当該台本には記載がないが、前掲の読売新聞東京版朝刊の記事では、「ダイナ」を佐川満男が物まねしたとある。

第三部“私の心の歌”では参議院議員の望月優子の“心の歌”を伺う。望月と中村是好が登場し、昭和初期のカジノ・フォーリー時代を思い出しながら「月光価千金」を歌って踊る。

お別れの歌は全員合唱の「旅愁」。

昭和４６年１０月１８日

①「高峰三枝子ゴールデンアルバム」　＃３

②平尾昌晃、織井茂子、藤島桓夫、日野てる子、竹越ひろ子、近江俊郎、高峰三枝子、上原謙、三橋美智也、寺内タケシとブルージーンズ

③**（出演順）**「星はなんでも知っている」（平尾）、「黒百合の花」（織井）、「月の法善寺横町」（藤島）、「夏の日の思い出」（日野）、「東京流れもの」（竹越）、「湯の町エレジー」（近江）、「湖畔の宿」（高峰）、「純情二重奏」（高峰）、「別れのタンゴ」（高峰）、「南の花嫁さん」（高峰）、「懐しのブルース」（高峰）、「おんな船頭唄」（三橋）、「津軽じょんがら節」（三橋）、「故郷の空」（全員）

④　第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者が順番に出演、トークの後に歌を歌ってもらう。

第二部“今週のハイライト”は、”高峰三枝子ゴールデンアルバム”。冒頭で「湖畔の宿」を歌いトークの後、「純情二重奏」「別れのタンゴ」「南の花嫁さん」のヒット・メドレー。上原謙が加わり、高峰と上原のコンビの思い出を聞く。

第三部“私の心の歌”は、三橋美智也の”心の歌”、「おんな船頭唄」と「津軽じょんがら節」の思い出を聞く。「津軽じょんがら節」は、前半の三味線演奏から後半の寺内タケシのエレキギター伴奏への切り替わりが見もの。

お別れの歌は「故郷の空」を全員で合唱。

昭和４６年１０月２５日

①「三波春夫・魂のうた」　＃４

②若山彰、松山恵子、克美しげる、青山和子、黒沢明とロス・プリモス、二葉あき子、三波春夫、並木路子、吉村朝子

③**（出演順）**「喜びも悲しみも幾歳月」（若山）、「未練の波止場」（松山）、「さすらい」（克美）、「愛と死をみつめて」（青山）、「ラブユー東京」（ロス・プリモス）、「夜のプラットホーム」（二葉）、「チャンチキおけさ」（三波）、「雪の渡り鳥」（三波）、「船方さんよ」（三波）、「高田屋嘉兵衛」（三波）、「異国の丘」（三波）、「靖国の母」（三波）、「リンゴの唄」（並木）、「この道」（全員）

④　第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者が順番に出演、トークの後に歌を歌ってもらう。

第二部“今週のハイライト”は、“三波春夫魂のうた”。まず、「チャンチキおけさ」「雪の渡り鳥」「船方さんよ」「高田屋嘉兵衛」と、デビュー当時のなつかしいヒット曲と最新の新曲をメドレーに綴って歌う。その後、三波がシベリアでの抑留生活当時、収容所で戦友たちのために「喜劇金色夜叉」

など、いくつかの曲本を書き演出し主演した思い出を語り、加東も”演芸分隊”の思い出を語る。自分の芸が大勢の人たちを喜ばせたこれらの思い出は、現在の仕事の姿勢にもつながっていると言えよう。そして、祖国の土を踏まずに死んだ戦友たちの御霊に捧げる意味で「異国の歌」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、視聴者から寄せられた”心の歌”を紹介する。埼玉県在住の吉村朝子さんとお嬢さんが登場。「リンゴの唄」の思い出を綴った吉村の手紙の一部を山東が読み、並木路子が登場。並木は「リンゴの唄」についての自分の思い出を話した後、歌う。

お別れの歌は山田耕筰作曲の「この道」。

昭和４６年１１月１日

①「三橋美智也・ふるさと慕情」　＃５

②内山田洋とクール・ファイブ、小川知子、渡辺マリ、ダーク・ダックス、岡本敦郎、ディック・ミネ、三橋美智也、葦原邦子、加藤峯次

③**（出演順）**「長崎は今日も雨だった（クール）、「ゆうべの秘密」（小川）、「東京ドドンパ娘」（渡辺）、「北上夜曲」（ダーク）、「白い花の咲く頃」（岡本）」「旅姿三人男」（ディック）、「哀愁列車」（三橋）、「リンゴ村から」（三橋）、「夕焼けとんび」（三橋）、「人生の並木路」（三橋・ディック）、「古城」（三橋）、「さようなら」（葦原）、「すみれの花咲く頃」（葦原）、「私の青空」（全員）

④　第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者が順番に登場し、トークを挟みながら歌を歌ってもらう。

第二部“今週のハイライト”は、“三橋美智也ふるさと慕情”。まず、日本のふるさと、ひなびた田舎の村を舞台に歌ったなつかしいヒット曲「哀愁列車」「リンゴ村から」「夕焼けとんび」をメドレーで歌ってもらう。その後、最近、おもしろいＬＰを吹き込んだという話を加東が振り、そのＬＰは新しいレパートリーを入れたもので、昔ディックが歌った「人生の並木路」も入っているとの話題に及ぶ。ディックも話に加わり、二人で「人生の並木路」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、視聴者から寄せられた”心の歌”を紹介する。今週は足立区の加藤峯次さんのリクエストで葦原邦子が歌った「さようなら」。山東が加藤さんの手紙を読み、葦原はその歌に対する自分の思い出を語り心を込めて聞いてくれた礼を加藤さんに言い、歌を歌う。その後、葦原自身の心の歌として「すみれの花咲く頃」の思い出を語り、歌う。

お別れの歌は、ディックの大ヒット曲から「私の青空」を全員で合唱する。

昭和４６年１１月８日

①「島倉千代子・服部メロディーに挑戦！」　＃６

②大津美子、ちあきなおみ、山田真二、笹みどり、和田弘とマヒナスターズ、奈良光枝、島倉千代子、服部良一、宮城まり子

③**（出演順）**「ここに幸あり」（大津）、「雨に濡れた慕情」（ちあき）、「哀愁の街に霧が降る」（山田）、「下町育ち」（笹）、「泣かないで」（マヒナ）、「赤い靴のタンゴ」（奈良）、「小雨の丘」（島倉）、「蘇州夜曲」（島倉）、「銀座カンカン娘」（島倉）、「花の素顔」（島倉）、「夜のプラットホーム」（島倉）、「浜辺の歌」（全員）

④　第一部“思い出のヒットパレード”は、各出演者から話を聞きながら歌を歌ってもらう。

第二部“今週のハイライト”は、“お千代さん服部メロディーに挑戦！”と題して、ベテランの作曲家と歌手との、はじめての出会いというテーマで送る。「小雨の丘」で幕開け。今まで服部は島倉との縁はほとんどなかったとの紹介の後、服部に対し島倉との初対面の思い出を聞き、島倉に今まで縁のなかった服部作品に今回取り組むことになった動機を聞く。続いて、服部に”泣き”の島倉ぶしと”明るさ”の服部メロディーとの食い違いを感じなかったかを聞く。続いて「蘇州夜曲」「銀座カンカン娘」「花の素顔」の三曲メドレー。最後に、服部の数多い名曲の中で島倉が一番好きな曲という「夜のプラットホーム」を服部の指揮で歌う。

国会図書館所蔵の台本（準備稿）冒頭の出演者欄には第三部に宮城まり子の名があるが、第三部の箇所のページが破られているため、内容や歌は不明。

エンディングは全員で「浜辺の歌」。

昭和４６年１１月１５日

①「村田英雄・男の演歌」　＃７

②神戸一郎、千昌夫、藤圭子、松島アキラ、井沢八郎、渡辺はま子、ジョージ・ルイカー、村田英雄、宮城まり子

③**（出演順）**「銀座九丁目水の上」（神戸）、「星影のワルツ」（千）、「女のブルース」（藤）、「湖愁」（松島）、「ああ上野駅」（井沢）、「支那の夜」（渡辺）、「王将」（村田）、「柔道一代」（村田）、「俺は生きる」（村田）、「人生劇場」（村田）、「ガード下の靴みがき」（宮城）、「浜千鳥」（全員）

④　第一部は広くにっぽんのスタンダード・ナンバーを集めた“ゴールデン・ヒット・パレード”。神戸、千、藤、松島、伊沢、渡辺と順に登場し、５年前日本を離れ、オーストラリアで新しい事業をしているジョージ・ルイカーが珍しいお客様として紹介される。ルイカーは渡辺と同じ横浜生まれで、今日は久しぶりに渡辺に逢ったので是非「支那の夜」を聞きたいとリクエストする。

第二部“今週のハイライト”は、村田英雄の登場で“村田英雄男の演歌”。まず、忘れられないヒット曲と新曲、「王将」「柔道一代」「俺は生きる」をメドレーで聞く。続いて、村田は昭和３３年、「無法松の一生」でデビュー、ヒットとなり、翌年「人生劇場」のリバイバルで完全に地位を確立することが紹介される。村田に「人生劇場」の思い出を聞き、「人生劇場」が現在ＮＥＴテレビにて連続ドラマで放送されているため、山東がそのスタジオを訪問した際のＶＴＲが流れる。ＶＴＲ中で山東はドラマ出演者にインタビューする。

第三部“私の心の歌”は宮城まり子の”心の歌”「ガード下の靴みがき」。スタジオにガード下セット、宮城が靴みがきの少年、加東が初老の小使いを演じ、宮城が歌う。その後、宮城自身の思い出を語る。

昭和４６年１１月２２日

①「オース！バタヤン」　＃８

②守屋浩、松尾和子、城卓矢、二宮ゆき子、ロス・インディオス、平野愛子、田端義夫、ジャネス田端、杉狂児

③**（出演順）**「僕は泣いちっち」（守屋）、「再会」（松尾）、「骨まで愛して」（城）、「まつのき小唄」（二宮）、「知りすぎたのね」（ロス）、「港が見える丘」（平野）、「大利根月夜」（田端義夫）、

「かえり船」（田端義夫）、「玄海ブルース」（田端義夫）、「島育ち」（田端義夫）、
「親子舟唄」（田端義夫・ジャネス田端）、「二人は若い」（杉）」

④　第一部は“ゴールデン・ヒット・パレード”。順番に歌手が登場しトークを行った後に一曲ずつ歌う。
　第二部は”バタヤン”の名で親しまれている田端義夫を迎えての“今週のハイライト”。ギターを抱えて「オース」と気軽に呼びかけるバタヤンは、大衆の中に根を下ろした歌手として、にっぽんの歌の歴史を飾る人である。冒頭で「大利根月夜」を歌った後、”海の歌”メドレーとして三曲続けて「かえり船」「玄海ブルース」「島育ち」を歌う。その後、アメリカンスクールに通う１１歳の愛娘ジャネスちゃんも共演して田端義夫の人間像を捉える。特にテレビで初めて田端父娘競演で「親子舟唄」をデュエットするのが見もの。
　第三部“私の心の歌”は、杉狂児の”心の歌”、「二人は若い」を特集。山東は、杉が歌も歌うことを今回初めて知ってびっくりしたことを話す。杉と一緒に「二人は若い」を映画の中で掛け合いで歌った星玲子の親戚筋にあたる加東が星の近況を話す。杉は自身の”心の歌”、「二人は若い」を自身で歌う。
　エンディングで全員合唱（曲不明）。

昭和４６年１１月２９日
①「淡谷のり子・愛の詩」　＃９
②淡谷のり子、三浦洸一、大津美子、井上ひろし、黛ジュン、畠山みどり、菅原都々子、東千代之介
③
④

昭和４６年１２月６日
①「魅力の低音・フランク永井」　＃１０
②曽根史郎、黒沢明とロス・プリモス、三沢あけみ、美川憲一、小林さち子、藤山一郎、フランク永井、灰田勝彦
③**（出演順）**「若いお巡りさん」（曽根）、「たそがれの銀座」（ロス）、「島のブルース」（三沢）、
「柳ヶ瀬ブルース」（美川）、「ウソツキ鴎」（小林）、「丘は花ざかり」（藤山）、
「有楽町で逢いましょう」（フランク）、「夜霧の第二国道」（フランク）、
「俺は淋しいんだ」（フランク）、「新雪」（フランク・灰田）、「君恋し」（フランク）、
「燦めく星座」（灰田）、「森の小径」（全員）
④　第一部は、永遠に輝くヒット曲を集めた“ゴールデン・ヒット・パレード”。曽根史郎、黒沢明とロス・プリモス、三沢あけみ、美川憲一、小林さち子、藤山一郎が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。
　第二部は日本歌謡史の一頁“今週のハイライト”。今週は、ジャズから歌謡曲に転向・低音の魅力で新しい都会的な歌の世界を作り出したフランク永井の特集で”魅惑の低音　フランク永井”。まずは「有楽町で逢いましょう」「夜霧の第二国道」「俺は淋しいんだ」のヒット・メドレー。次いで山東が、低音のフランクが反対にハイトーンもハイトーン、裏声まで使った灰田勝彦のレパートリーが得意という話を振り、灰田を呼ぶ。そして、「新雪」を一番フランク、二番灰田で歌う。

第三部“私の心の歌”は、灰田の心の歌「燦めく星座」。「燦めく星座」の思い出を灰田に聞き、歌ってもらう。

エンディングは全員合唱の「森の小径」。

なお、国会図書館所蔵の台本（準備稿）は、１２月１３日ＯＡの第１１回放送分として記載されており、準備稿段階では翌週の放送予定としていたようである。

昭和４６年１２月１３日

①「春日八郎・演歌ひとすじ」　＃１１

②春日八郎、高英男、佐川満男、中村晃子、ジェリー藤尾、マヒナスターズ、ペギー葉山、川田正子

③

④

昭和４６年１２月２０日

①「鶴田浩二・男の詩」　＃１２

②鶴田浩二、水原弘、美樹克彦、藤本二三代、松山恵子、藤島桓夫、三條町子、三木鶏郎、
デューク・エイセス

③

④

昭和４６年１２月２７日

①「石原裕次郎・ミリオンセラーズ」　＃１３

②初代コロムビア・ローズ、にしきのあきら、九重佑三子、弘田三枝子、ビリー・バンバン、宝田明、石原裕次郎、奥田良三

③**（出演順）**「どうせひろった恋だもの」（ローズ）、「もう恋なのか」（にしきの）」、
「ウェディング・ドレス」（九重）、「人形の家」（弘田）、「白いブランコ」（ビリー）、
「美貌の都」（宝田）、「錆びたナイフ」（石原）、「俺は待ってるぜ」（石原）、「二人の世界」（石原）、
「赤いハンカチ」（宝田・石原）、「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、「これぞマドロスの恋」（奥田）、
「椰子の実」（全員）

④　オープニング・メドレーの後の第一部は、誰でもよく知っているにっぽんの歌を集めた“ゴールデン・ヒット・パレード”で、初代コロムビア・ローズ、にしきのあきら、九重佑三子、弘田三枝子、ビリー・バンバン、宝田明が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。

第二部“今週のハイライト”は、石原裕次郎を迎えての“裕次郎ミリオンセラー”。まず思い出のミリオンセラーから「錆びたナイフ」「俺は待ってるぜ」「二人の世界」のメドレー。歌の合間に加東、山東、宝田が石原の歌の魅力をそれぞれ語る。

第三部“私の心の歌”は、名テナー奥田良三を迎えて、奥田の”心の歌”「これぞマドロスの恋」の思い出を聞き、歌ってもらう。

お別れの歌は、奥田がよく歌った「椰子の実」を全員で合唱。

昭和４７年１月３日

①「美空ひばり新春歌いぞめ」　＃１４

②美空ひばり、鹿島密夫

③**（出演順）**「柔」（美空）、「悲しき口笛」（美空）、「越後獅子の唄」（美空）、「私は街の子」（美空）、「あの丘越えて」（美空）、「リンゴ追分」（美空）、「花笠道中」（美空）、「港町十三番地」（美空）、「哀愁出船」（美空）、「悲しい酒」（美空）、「九段の母」（美空）、「麦と兵隊」（美空）、「戦友の遺骨を抱いて」（美空）、「暁に祈る」（美空）、「唄入り観音経」（美空）、「ひばり仁義」（美空）

④　今日は、年の始めにふさわしく、「にっぽんの歌」を代表する大歌手、美空ひばりを迎えて一時間、たっぷり歌ってもらう。

オープニングは「柔」。

第一部は“美空ひばりヒット・パレード”で、デビュー当時から現在までのヒット曲を、「悲しき口笛」から「悲しい酒」まで歌う。司会の二人は、美空が自伝で”わたしは日本の歌をうたう”というはっきりした自覚を持っていることを賞賛し、美空も日本の歌を愛する気持ちを語る。そして、加東はこの番組もまったくそのとおりの精神であることを述べる。また、歌の合間に司会の二人が「これが『にっぽんの歌』ですよ！日本人の喜怒哀楽の心ですよ！」（加東）、「すばらしいですねえ！」（山東）と賞賛する。

第二部は“美空ひばり涙の軍歌集”で、「九段の母」から「暁に祈る」まで。冒頭で加東は、「戦争を経験したすべての人にとって、軍歌や戦時歌謡は、心の底に深い思い出となって残っています。美空さんにとっても、それは幼い日の愛誦歌でした。戦争を知る人はもちろん、戦争を知らない若いみなさんもひとりの日本人、美空ひばりさんの心の歌として、静かに耳をかたむけて下さい。」と語る。歌の合間に美空は、戦時中の思い出を語る。

第三部は、“美空ひばりのお年玉”。美空は浪曲も上手いと加東が話を振り、美空と仲のよかった川田晴久の話題にも及ぶ。そこに川田の愛弟子の鹿島密夫さんが登場する。美空からのお年玉代わりに、鹿島の伴奏で三門博の浪曲「唄入り観音経」のホンのサワリを聞かせる。「唄入り観音経」は美空が子どものころものまねが上手で、三門を驚かしたという。

最後に、今年の新曲として期待を集めている「ひばり仁義」を歌う。

昭和４７年１月１０日

①「懐かしのポピュラーソング」　＃１５

②笈田敏夫、武井義明、旗照夫、ウイリー沖山、松尾和子、ベッツイ＆クリス、ジャッキー吉川とブルー・コメッツ、ヒデとロザンナ

③

④

昭和４７年１月１７日

①「東海林太郎・オン・ステージ」　＃１６

②畠山みどり、三船浩、森山加代子、ピーター、菅原都々子、林伊佐緒、東海林太郎、西村小楽天、古関裕而、玉木千恵子、音羽ゆりかご会

③**（出演順）**「恋は神代の昔から」（畠山）、「男のブルース」（三船）、「白い蝶のサンバ」（森山）、
「夜と朝のあいだに」（ピーター）、「江の島悲歌」（菅原）、「ダンスパーティーの夜」（林）、
「赤城の子守唄」（東海林）、「野崎小唄」（東海林）、「上海の街角で」（東海林）、
「ああ草枕幾度ぞ」（東海林）、「国境の町」（東海林）、「とんがり帽子」（玉木・音羽）、
「谷間のともしび」（全員）

④　第一部は“ゴールデン・ヒット・パレード”。畠山みどり、三船浩、森山加代子、ピーター、菅原都々子、林伊佐緒が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。

第二部“今週のハイライト”は、歌謡界の最長老東海林太郎を迎え、“東海林太郎オン・ステージ”。長い間東海林の舞台の司会を務めた西村小楽天の名調子に乗せて、折り目正しいステージをそのまま再現する。

第三部“私の心の歌”は、作曲家の古関裕而になつかしい「鐘の鳴る丘」の思い出を聞く。当時、東京放送児童合唱団のメンバーで、毎日主題歌の「とんがり帽子」を歌っていた玉木千恵子にも当時の思い出を聞く。

お別れの歌は「谷間のともしび」を全員合唱。

昭和４７年１月２４日

①「上を向いて歩こう」　＃１７

②坂本九、田谷力三、松島詩子、三浦洸一、黒木憲、久保幸江、榎本美佐江、
ダニー飯田とパラダイス・キング、新川二郎

③

④

昭和４７年１月３１日

①「花も嵐も踏みこえて」　＃１８

②バーブ佐竹、三沢あけみ、ザ・キング・トーンズ、矢吹健、鈴木三重子、若原一郎、加山雄三、
松本めぐみ（加山夫人）、小唄勝太郎、吉崎法夫

③**（出演順）**「ネオン川」（バーブ）、「涙の渡り鳥」（三沢）、「グッドナイト・ベイビー」（キング）、
「あなたのブルース」（矢吹）、「愛ちゃんはお嫁に」（鈴木）、「おーい中村くん」（若原）、
「夜空を仰いで」（加山）、「お嫁においで」（加山）、「美しいビーナス」（加山）、
「旅の夜風」（加山・松本）、「君といつまでも」（加山）

④　第一部“ゴールデン・ヒット・パレード”は、バーブ佐竹、三沢あけみ、ザ・キング・トーンズ、矢吹健、鈴木三重子、若原一郎が順番に登場し、トークを行った後に一曲ずつ歌う。

第二部“今週のハイライト”は、”青春といつまでも”と題して加山雄三のワンマンショー。”シンガー・ソングライター”という言葉がなかった頃から加山はずっとそのスタイルで通してきたことを、山東は加東にレクチャーする。歌の合間に、加山と古くから親交がある加東は、素顔の加山像、その好青年ぶり、ガキ大将みたいなところがあった、など昔の話をする。夫人も加わり、若大将も一家の主におさまる年になって、最近ナツメロに興味を持ち始めたという話題を加東が振り、加山は演歌がおもしろくなってきたという話をする。そして、加東のリクエストで加山の父・上原謙に関係のある

「旅の夜風」を夫人とのデュエットも交え歌う。
第三部“私の心の歌”は、福島県の吉崎法夫さんのリクエストで「明日はお発ちか」。

昭和４７年２月７日
①「花の演歌三人衆」　＃１９
②橋幸夫、北島三郎、都はるみ、奥田良三、松崎葉子
③**（出演順）**「なみだ船」（北島）、「アンコ椿は恋の花」（都）、「潮来笠」（橋）、「いつでも夢を」（橋）、「涙の連絡船」（都）、「函館の女」（北島）、「雨の中の二人」（橋）、「好きになった人」（都）、「仁義」（北島）、「東京の花売娘」（都）、「裏町人生」（橋）、「男の純情」（北島）、「旅姿三人男」（北島）、「名月赤城山」（都）、「大利根月夜」（橋）、「ちゃっきり節」（橋・北島・都）、「椰子の実」（奥田）、「早春賦」（全員）
④　「にっぽんの歌」の中でも、特に日本人の魂の中から生まれた歌といわれる「演歌」を得意とするトップ歌手、橋幸夫、北島三郎、都はるみの三人を招き、題して“花の演歌三人衆”。自分の持ち歌を披露する他、今もなお日本人の心に生きるなつメロを歌う。
オープニングは北島「なみだ船」、都「アンコ椿は恋の花」、橋「潮来笠」と一曲ずつ歌っての登場。
第一部は「ゴールデン・ヒット・パレード」。歌の合間にデビューするまでの道や歌の道に入ろうと決心したきっかけ、お母さんの思い出などを三人に聞く。曲は「いつでも夢を」（橋）から「仁義」（北島）まで。
第二部「今週のハイライト」では、この演歌三人衆にそれぞれ好きな”なつかしのメロディ”を歌ってもらう。まずは都会ものの歌を集めて「東京の花売娘」（都）、「裏町人生」（橋）、「男の純情」（北島）の三曲メドレー。続いてガラリとムードを変えて股旅ものメドレー。最後は三人で「ちゃっきり節」を合唱。
第三部「私の心の歌」は、茅ヶ崎市の松崎葉子さんのリクエストによる「椰子の実」。当時小学生だった松崎さんの学校に奥田良三が来て「椰子の実」を歌ってくれた思い出と、もう一度奥田に椰子の実を歌ってほしいという手紙の内容を山東が読む。奥田と松崎が思い出話を披露した後、奥田が「椰子の実」を歌う。なお奥田は第１３回に続いての出演となるが、国立国会図書館所蔵の台本には、前回の出演が好評であったため再出演となった旨が書かれている。
お別れの歌は季節にふさわしく「早春賦」を全員で歌う。

昭和４７年２月１４日
①「きらめく四つの星座」　＃２０
②倍賞千恵子、青江三奈、舟木一夫、灰田勝彦、川田正子、音羽ゆりかご会、北田悦子
③**（出演順）**「下町の太陽」（倍賞）、「恍惚のブルース」（青江）、「高校三年生」（舟木）、「燦めく星座」（灰田）、「伊勢佐木町ブルース」（青江）、「北国の街」（舟木）、「さよならはダンスのあとに」（倍賞）、「長崎ブルース」（青江）、「さくら貝の歌」（倍賞）、「絶唱」（舟木）、「ジャワのマンゴ売り」（灰田）、「鈴懸の径」（灰田）、「アルプスの牧場」（灰田）、「お玉杓子は蛙の子」（灰田・舟木・倍賞・青江）、「東京の屋根の下」（灰田）、「お山の杉の子」（川田・音羽）、「新雪」（全員）
④　先週は歌謡界に輝く大スター達の中から、特に演歌を得意とする三人を迎えて特集したが、今回は

大型スター競演第二弾ということで、都会的な感覚の歌で親しまれている倍賞千恵子、青江三奈、舟木一夫、灰田勝彦の四人を招いての特集で、題して“きらめく四つの歌の星座”。

オープニングは「下町の太陽」(倍賞)、「恍惚のブルース」(青江)、「高校三年生」(舟木)、「燦めく星座」(灰田)と、四人が一曲ずつ歌って登場する。

第一部は舟木、倍賞、青江に、それぞれヒット曲を歌い、歌の合間に加東は舟木、倍賞、青江の順に三人との交遊録を話す。

第二部は灰田を中心に送る。まずは「ジャワのマンゴ売り」「鈴懸の径」「アルプスの牧場」の三曲メドレー。その後、加東は「灰田さん、この番組はね、ハワイやロスアンゼルスでも放送されていて、むこうの日系人のかたがたのあいだでたいへんな人気なんだそうですよ。アメリカの有名な作家のヘンリー・ミラー氏もこの番組のファンなんですって」と話し、続いて山東がロスアンゼルスの中村秋子さんという視聴者からのリクエストの手紙を灰田に渡す。山東は灰田にウクレレを渡し、灰田の弾き語りで、「お玉杓子は蛙の子」をワンコーラスずつ灰田(原語)→舟木→倍賞→青江→四人の順に歌う。最後に東京の町の歌として「東京の屋根の下」を歌う。

第三部“私の心の歌”は、川崎市在住の北田悦子さんのリクエストによる「お山の杉の子」。山東が北田さんの手紙を読み、加東が北田さんに質問をした後、川田正子と音羽ゆりかご会が歌う。

最後は「新雪」を全員で合唱。

昭和４７年２月２１日

①「水原弘・酒こそ我が命」　＃２１

②水原弘、菊池章子、岡本敦郎、竹山逸郎、三島敏夫、ちあきなおみ、ヒデとロザンナ、日吉ミミ

③「異国の丘」(竹山)

④　”私の心の歌”コーナーはアメリカのロサンゼルス近郊に住む一主婦・反田孝子さんのリクエスト「異国の丘」が登場する。反田さんは満州(中国の東北地区)から引揚げ、アメリカに移住した時、引揚げ船の上で歌った「異国の丘」が忘れられない歌となった。当時この歌を歌っていた竹山逸郎は現在胸を病み療養中だが、反田さんの話を聞いてスタジオに現われ「異国の丘」を披露する一方、ロサンゼルスの反田さんに国際電話で声の対面をする。

昭和４７年２月２８日

①「遠藤実・歌も涙もあたたかい」　＃２２

②**(出演順)**藤島桓夫、五月みどり、北原謙二、舟木一夫、扇ひろ子、小野由紀子、山本リンダ、遠藤実、田端義夫、千昌夫、大木英夫、津山洋子、小林旭

③「お月さん今晩は」(藤島)、「おひまなら来てね」(五月)、「若い二人」(北原)、「学園広場」(舟木)、「哀愁海峡」(扇)、「他人船」(小野)、「こまっちゃうナ」(山本)、「自作詩朗読」(遠藤)、「出世船」(田端)、「星影のワルツ」(千)、「新宿そだち」(大木、津山)、「ついて来るかい」(小林)、「浅草姉妹」(遠藤)

④　今週から２回にわたって、にっぽんの歌の作り手――作曲家に焦点を合わせた特集を送る。今日は、数々のヒット曲とともに大勢のスター歌手を育て上げ、世に送り出したことでも知られる遠藤実を迎える。

遠藤のヒット曲を年代順に送っていくが、遠藤学校の先輩・扇ひろ子に続いて、新入生の小野由紀子が、やはり先輩の三船和子が歌ってヒットした「他人船」のリバイバル。出演者が全員集合し、遠藤のエピソードを聞く。

山本リンダの「こまっちゃうナ」の後、演歌師時代の思い出に寄せた自作詩を遠藤が朗読する。

千昌夫の「星影のワルツ」の後、遠藤にとって演歌とは何かを司会の加東が聞く。

最後に、病気で今回出演できなかったこまどり姉妹の妹さんが早くよくなるようにはげましをこめて、遠藤が「浅草姉妹」をギターで弾き語りする。

昭和４７年３月６日

①「船村徹・巷の唄演歌の心」　＃２３

②島倉千代子、春日八郎、舟木一夫、コロムビア・ローズ、西来路ひろみ、京山船太郎、船村徹

③

④

昭和４７年３月１３日

①「ミネさんと懐かしのジャズ」　＃２４

②佐良直美、西郷輝彦、朝丘雪路、ディック・ミネ、薗田憲一とデキシーキングス、藤島信人、金子三雄、渡邊浦人、河野ヨシユキ、城北合唱団

③**（出演順）**「世界は二人のために」（佐良）、「君だけを」（西郷）、「島育ち」（朝丘）、「ダイナ」（ディック）、「星のフラメンコ」（西郷）、「いいじゃないの幸せならば」（佐良）、「ふり向いてもくれない」（朝丘）、「私の好きなもの」（佐良）、「真夏のあらし」（西郷）、「雨がやんだら」（朝丘）、「リンゴの木の下で」（ディック）、「アイルランドの娘」（ディック）、「奥様お手をどうぞ」（ディック）、「黒い瞳」（ディック）、「月光価千金」（全員）、「赤銅鈴之助」（合唱団）、「私の青空」（全員）

④　にっぽんの歌の中でも特に、モダンな感覚のものを得意とする佐良直美、西郷輝彦、朝丘雪路、ディック・ミネが出演。

オープニング・パレードは、「世界は二人のために」（佐良）、「君だけを」（西郷）、「島育ち」（朝丘）、「ダイナ」（ディック）と、一曲ずつ歌う。

第一部は西郷、佐良、朝丘がそれぞれヒット曲を歌う。加東は、おなじ歌でも年月をかけて歌いこんでいるうちに、昔の自分の歌を練り直していく楽しさや、細かいところが変わってきたかどうかを三人に聞く。三人の歌の後、ディックが加わり、ディックが学生時代、ジャズバンドで活躍していた頃のジャズポピュラーのヒット曲を聞き、「昔はジャズと歌謡曲が、水と油みたいにはっきり分かれていたが、今はポップス風の流行歌が多くなった」という話題に移る。佐良と西郷に、そういうモダンな「にっぽんの歌」として、「私の好きなもの」（佐良）と「真夏のあらし」（西郷）を歌ってもらう。

第二部はジャズソングに燃えるディックの特集。薗田憲一とデキシーキングの演奏で「リンゴの木の下で」他を歌う。最後は全員で「月光価千金」。

第三部“私の心の歌”は、福岡県太刀洗町の高松禎子さんのリクエストで「赤銅鈴之助」。「赤銅鈴之助」は、ラジオドラマで語り手を務めていた山東にとっても思い出の作品である。関係者のみなさ

んを紹介し、児童合唱団が歌う。
　お別れの歌は「私の青空」を全員で合唱。

昭和４７年３月２０日
①「アイ・ジョージ日本歌曲を歌う」　＃２５
②伊東ゆかり、美川憲一、鶴岡雅義と東京ロマンチカ、アイ・ジョージ、相川芳郎、
森田克子とザ・プリティーズ
③**（出演順）**「小指の想い出」（伊東）、「柳ヶ瀬ブルース」（美川）、「旅路の人よ」（ロマンチカ）、
「硝子のジョニー」（ジョージ）、「恋のしずく」（伊東）、「釧路の夜」（美川）、
「君は心の妻だから」（ロマンチカ）、「おんなの朝」（美川）、「北国の町」（ロマンチカ）、
「朝のくちづけ」（伊東）、「城ヶ島の雨」（ジョージ）、
「荒城の月」（美川・伊東・ロマンチカ・ジョージ）、「戦友」（ジョージ）、
「真白き富士の根」（プリティーズ）、「花」（全員）
④　今回は、「にっぽんの歌」の中でも特にユニークな個性が魅力の４人が登場。
　オープニングパレードは、「小指の想い出」（伊東）、「柳ヶ瀬ブルース」（美川）、「旅路のひとよ」（ロマンチカ）、「硝子のジョニー」（ジョージ）と、一曲ずつ歌う。
　第一部は伊東、美川、東京ロマンチカがそれぞれのヒット曲を歌い、歌の合間にそれぞれの結婚観や家庭の近況を聞く。
　第二部“今週のハイライト”は、“アイ・ジョージ　日本歌曲をうたう”。ジョージは日本歌曲のよさについて語り、「城ヶ島の雨」を歌う。続いて、「荒城の月」を一番が美川、二番が伊東、三番をロマンチカ、四番をジョージが歌う。続いてジョージが「戦友」を歌う。
　第三部“私の心の歌”は、横須賀市の相川芳郎さんのリクエストで「真白き富士の根」。山東が相川さんの手紙の要点を紹介した後、加東が相川さんにインタビューし、森田克子とザ・プリティーズが歌う。
　お別れの歌は、明治時代の日本の歌を作曲した滝廉太郎の作品の中から、春の季節にふさわしく「花」を全員で合唱する。

昭和４７年３月２７日
①「山田耕筰の世界」　＃２６
②菅原洋一、内山田洋とクール・ファイブ、岸洋子、山田真梨子、高木東六、中井あきら
③**（出演順）**「知りたくないの」（菅原）、「長崎は今日も雨だった」（クール）、「私の回転木馬」（岸）、
「赤とんぼ」（高木のピアノソロ）、「夜明けのうた」（岸）、「今日でお別れ」（菅原）、
「逢わずに愛して」（クール）、「愛の旅路を」（クール）、「忘れな草をあなたに」（菅原）、「希望」（岸）、
「からたちの花」（山田）、「待ちぼうけ」（山田）、「野薔薇」（菅原）、「赤とんぼ」（クール）、
「中国地方の子守唄」（岸）、「この道」（菅原・岸・山田）、「思案橋ブルース」（クール・中井）、
「水色のワルツ」（全員）
④　オープニングパレードは、各出演者が順番に登場し、ワンコーラスずつ披露する（「知りたくないの」（菅原）、「長崎は今日も雨だった」（クール）、「私の回転木馬」（岸）、「赤とんぼ」（高木のピアノ

ソロ))。

第一部は岸洋子の「夜明けのうた」からスタート。

第二部“今週のハイライト”は、”山田耕筰の世界”と題して高木東六の「からたちの花」のピアノソロからスタート。加東は、「いまは故人となられた、作曲家山田耕筰さんは、にっぽんの歌の歴史に不滅の光を残す巨大な星です。今日は山田さんの数多い作品の中から、広く愛誦されている童謡風の名曲をいくつかえらんでお送りしましょう。」とナレーションする。ナレーションの後、山田耕筰の未亡人、山田真梨子が「からたちの花」を歌う。ピアノ伴奏は、生前の山田耕筰と親しくしていた作曲家、高木。二人に人間山田耕筰の横顔を聞く。また、菅原洋一が高木のピアノ伴奏で「野薔薇」、クール・ファイブがフルバンドで「赤とんぼ」、岸が高木のピアノ伴奏で「中国地方の子守唄」、最後は高木のピアノ伴奏で菅原・岸・山田が「この道」を歌う。

第三部は、以前同じコーラス・グループのメンバーであった内山田洋と中井あきらの友情物語を聞く。そして、中井にもソロを歌ってもらって“クール・シックス”として本邦初演の「思案橋ブルース」を聞く。

お別れの歌は、高木が出演しているため、高木の名曲「水色のワルツ」を全員で歌う。

昭和４７年４月３日

①「石原裕次郎・懐メロを歌う」　＃２７

②坂本九、小川知子、ディック・ミネ、石原裕次郎

③

④

昭和４７年４月１０日

①「青春哀歌」　＃２８

②石原裕次郎、雪村いづみ、丸山明宏、加藤登紀子、ダーク・ダックス

③**（出演順）**「知床旅情」（加藤）、「メケ・メケ」（丸山）、「ともしび」（ダーク）、「青いカナリヤ」（雪村）、「俺は待ってるぜ」（石原）、「あざみの歌」（ダーク）、「琵琶湖周航の歌」（加藤）、「ゴンドラの唄」（丸山）、「リンゴ追分」（雪村）、「帰りたい帰れない」（加藤）、「母さんのうた」（ダーク）、「ひえつき節」（雪村）、「人生劇場」（石原）、「ヨイトマケの唄」（丸山）

④　第一部は加藤登紀子の「知床旅情」からスタート。次いで、昭和３２年の大ヒット「メケ・メケ」を丸山明宏が歌い、ダーク・ダックスの「ともしび」と続く。そして、雪村いづみ、石原裕次郎のベテラン二人がデビュー当時のヒット曲を歌う。

第二部“今週のハイライト”は、「にっぽんの歌」の中で青春の感傷をうたった抒情的な名曲を特集する“青春哀歌”。歌の合間に司会の加東が各出演者に、にっぽんの昔のうた―なつかしのメロディーを、それぞれどう受け止めているかを聞く。曲は、ダーク「あざみの歌」、加藤「琵琶湖周航の歌」、丸山「ゴンドラの唄」、雪村「リンゴ追分」。

第三部は”ふるさとに寄せる慕情”と題し、故郷を想うムードの歌を特集。曲は加藤「帰りたい帰れない」、ダーク「母さんのうた」、雪村「ひえつき節」。

続いて新企画“今月のＬＰ”。石原にこの番組への連続出演をお願いし、今度石原が出す古賀メロ

ディーのＬＰの中に収められている名曲を生で歌ってもらい、視聴者にこのＬＰレコードをプレゼントするというもの。加東は石原に”ナツメロ観”を聞く。今週は「人生劇場」を特集。

視聴者からのリクエストにこたえる“リクエスト・コーナー”は、三重県小津市の工藤洵子さんの希望曲、丸山の「ヨイトマケの唄」。丸山にこの歌を作った動機を聞き、丸山が歌う。

昭和４７年４月１７日

①「高峰・石原の二人の世界」　＃２９

②高峰三枝子、石原裕次郎、フランク永井、松尾和子、和田弘とマヒナスターズ

③**（出演順）**「夜霧に消えたチャコ」（フランク）、「誰よりも君を愛す」（松尾）、
「ワン・レイニー・ナイト・イン・トーキョー」（マヒナ）、「俺はお前に弱いんだ」（石原）、
「湖畔の宿」（高峰）、「二人の世界」（高峰・石原）、「あなたなしでは」（高峰・石原）、
「粋な別れ」（高峰・石原）、「おかあさん」（高峰）、「グッドナイト」（松尾・マヒナ）、
「夜霧の第二国道」（フランク・マヒナ）、「東京ナイトクラブ」（フランク・松尾）、
「人生の並木路」（石原）、「南の花嫁さん」（高峰）

④　”歌えるスター”石原裕次郎と、３月３０・３１日に帝劇で催された三十五周年記念リサイタルが大好評であった高峰三枝子を特別ゲストに迎え、その魅力を特集する。

“今週のハイライト”は、“高峰・石原　二人の世界”。二人にお互いのヒット曲をデュエットで歌ってもらい、おしゃべりの方もおまかせして二人きりの世界を作ってもらう。映画を通じての二人の長い間の交友は有名だが、高峰と石原が仕事を兼ねて行ったスペイン旅行の思い出などのエピソードを披露する。そして、「二人の世界」「あなたなしでは」「粋な別れ」をデュエットし、二人で恋愛論などを語り合う。この他、高峰は新曲「おかあさん」を歌う。

また、高峰・石原ご両人に負けずにフランク永井、松尾和子、マヒナスターズにもそれぞれデュエットで歌ってもらう。

“今月のＬＰ”は、石原の古賀メロディのＬＰの中から「人生の並木路」を生で歌う。また、ＬＰレコードを視聴者にプレゼントする。

視聴者からのリクエストにこたえる“リクエスト・コーナー”は、練馬区の小山澄夫さんの希望曲で、高峰の「南の花嫁さん」。高峰は「南の花嫁さん」の思い出を語り、歌う。

昭和４７年４月２４日

①「ピンキラ変身！」　＃３０

②石原裕次郎、灰田勝彦、ピンキーとキラーズ、三橋美智也、布施明

③

④

昭和４７年５月１日

①「哀愁の流し唄」　＃３１

②石原裕次郎、橋幸夫、由紀さおり、藤圭子

③**（出演順）**「恋をするなら」（橋）、「圭子の夢は夜開く」（藤）、「夜明けのスキャット」（由紀）、「俺は待ってるぜ」（石原）、「すみだ川」（由紀・石原）、「流転」（橋）、「湯島の白梅」（藤・橋）、「船頭小唄」（石原）、「恋の町札幌」（石原）、「京都から博多まで」（藤）、「土に還るまで」（由紀）、「子連れ狼」（橋）、「影を慕いて」（石原）

④　オープニングは紹介パレード。

第一部では各出演者から話を聞き、歌ってもらう。途中、石原裕次郎と橋幸夫の珍しい顔合わせがあり、二人ともスポーツマンという共通点からスポーツ談義に話が及ぶ。

第二部“今週のハイライト”は、”哀愁の流し歌”と題して、各出演者に和服に衣装がえしてもらい、日本情緒ゆたかな名曲をたっぷりきかせてもらおうという趣向。各歌の冒頭で、司会の加東が口上を入れる。由紀さおりが歌う「すみだ川」では、セリフのタイミングで石原の青年が入り、由紀とともに掛け合いを行い、芝居しながら歌う。「湯島の白梅」は、藤圭子と橋が芝居しながら歌う。和服姿の石原の「船頭小唄」の後、新曲に移る。

第三部“リクエスト・コーナー”は、多くの視聴者から寄せられた「影を慕いて」を取り上げる。この歌はちょうど“今月のＬＰ”になっている石原の古賀メロディーの中にも入っているため、石原に「影を慕いて」の思い出を聞き、石原が歌う。

昭和４７年５月８日

①「港と恋と故郷と」　＃３２

②田端義夫、春日八郎、島倉千代子、北島三郎、ちあきなおみ

③

④

昭和４７年５月１５日

①「ビッグ４・藤山一郎を唄う」　＃３３

②春日八郎、小林旭、青江三奈、都はるみ、藤山一郎

③

④

昭和４７年５月２２日

①「大正の歌・ベスト10」　＃３４

②春日八郎、三橋美智也、ペギー葉山、ザ・ピーナッツ、加山雄三

③

④

昭和４７年５月２９日
①「きわめつけ股旅名曲集」　＃３５
②高田浩吉、村田英雄、春日八郎、渚ゆう子、園まり
③
④

昭和４７年６月５日
①「森進一・哀愁の古賀メロディー」　＃３６
②森進一、青江三奈、和田弘とマヒナスターズ、二葉あき子
③
④

昭和４７年６月１２日
①「懐かしの旅情を歌う」　＃３７
②島倉千代子、都はるみ、菊池章子、フランク永井、ジャッキー吉川とブルー・コメッツ
③
④

昭和４７年６月１９日
①「懐かしの唱歌ベスト10・故郷のうたくらべ・明治大正ベスト10」　＃３８
②ダーク・ダックス、ペギー葉山、デューク・エイセス、砂原美智子、坂本博士
③**（出演順）**「われは海の子」（ダーク）、「牧場の朝」（ダーク）、「港」（ペギー）、「汽車」（デューク）、「故郷」（ダーク）、「児島高徳」（ダーク）、「元寇」（坂本・ダーク・デューク）、「青葉の笛」（ダーク）、「野なかの薔薇」（砂原）、「ローレライ」（ダーク）、「君の故郷は」（デューク）、「てんさぐの花」（ペギー）、「フェニックスハネムーン」（デューク）、「よさこい節」（ペギー）、「女ひとり」（デューク）、「木曽節」（ペギー）、「いい湯だな」（デューク）、「南部牛追唄」（ペギー）、「ホッフアイホー」（デューク）、「ソーラン節」（ペギー・デューク）、「庭の千草」（砂原）、「故郷の空」（坂本）、「夏は来ぬ」（砂原）、「荒城の月」（坂本・砂原）、「人を恋うる歌」（坂本・ダーク）、「浜辺の歌」（ペギー・デューク）、「宵待草」（砂原）、「ディアボロの歌」（坂本）、「叱られて」（砂原）、「出船の港」（坂本）、「鉄道唱歌」（全員）
④　第一部は、幼い日の想い出に満ちた唱歌の数々の中から、特になじみの深い曲１０曲を選んで歌う“懐しの唱歌ベストテン”。歌の合間に各人の唱歌の思い出を聞く。途中、「児島高徳」「元寇」「青葉の笛」と、歴史ものの唱歌の代表作を聞く。最後の２曲「野なかの薔薇」「ローレライ」は、もともとは外国の曲だが唱歌になって今はもう日本の歌みたいになっている曲である。
　第二部は“故郷の歌くらべ”。新しい日本の故郷の歌を歌い続けてきたデューク・エイセスと、「南国土佐を後にして」で民謡入りの大ヒットを飛ばしたペギー葉山が登場。古い民謡と新しい“日本の歌”とで、新旧の故郷の歌くらべという趣向。デュークの「君の故郷は」の後、沖縄の復帰をお祝い

して南国からスタートし「てんぐさの花」。その後北上していく。歌の合間に、加東、松任谷、砂原美智子、坂本博士、ダーク・ダックスで各人の新旧の故郷の歌の感想を語り合う。

第三部は、前に“大正の歌ベストテン”を特集したところたいへん好評を得たため、砂原・坂本を主役に“明治・大正の歌ベストテン”を特集。「庭の千草」からスタートし“明治の部”を何曲か取り上げた後、“大正の部”として「浜辺の歌」ほかを取り上げる。最後に番外として加東のリクエストにより「鉄道唱歌」を、一番ペギー、二番デューク、三番坂本、四番ダーク、五番砂原、六番を全員で歌う。

昭和４７年６月２６日

①「加東軍曹従軍記」　＃３９

②森光子、林伊佐緒、ペギー葉山、藤山一郎、ミュージカルアカデミー、演芸分隊の戦友たち、
遺骨収拾団

③**（出演順）**「出征兵士を送る歌」（林・アカデミー）、「暁に祈る」（アカデミー）、「長崎物語」（ペギー）、
「ダンチョネ節」（森）、「懐しのボレロ」（藤山）、「浅草の灯　女心の唄」（加東）、
「別れのブルース」（森）、「蘇州夜曲」（ペギー）、「ブンガワンソロ」（藤山）、
「誰か故郷を想わざる」（アカデミー（ハミング））、「南の島に雪が降る」（林）、
「さらばマノクワリ」（全員）、「海ゆかば」（アカデミー・加東・戦友）

④　この番組の司会をしていた加東大介が来週から高島忠夫にバトンタッチするので、最後を飾って加東大介の”心の歌”を特集する。なお、コンビの松任谷国子も松尾ジーナにバトンタッチ。

加東は昭和１８年１０月８日に召集令状を前進座出演中に受け取り、ニューギニアの戦場に送られた。輸送船で着いた所はニューギニアの西端マノクワリ。野戦病院の勤務になった加東は、希望をなくした兵隊たちの気持ちをやわらげるため「演芸分隊」を組織し班長となり、兵隊たちを慰めた。その思い出を書いた「南の島に雪が降る」はベスト・セラーになり、映画や舞台化されて話題を呼んだ。

番組では、当時の演芸分隊の戦友たち４名を招き、戦地でのエピソードなどを語ってもらうほか、「マノクワリ歌舞伎座」で加東が一度だけ歌った「浅草の灯」の劇中の「女心の唄」を加東が披露する。また、マノクワリ歌舞伎座には楽団もあり、「蘇州夜曲」「別れのブルース」「誰か故郷を想わざる」などが主なレパートリーであった。

また、藤山一郎、林伊佐緒、森光子が歌のゲストとして出演し、慰問団で南方を回った頃の話を聞く。

終盤の対談コーナーには、先日マノクワリへ遺骨収拾に行ってきた５名が登場し、現地で撮った８ミリフィルムを見ながら話し合う。

エンディングは、ミュージカル・アカデミー、加東、戦友たちが歌う「海行かば」。加東と松任谷がお別れの挨拶を行った後、加東が新司会者―高島忠夫と松尾ジーナの紹介を行い、二人が挨拶して幕が閉じる。

なお、昭和４７年６月２９日付朝日新聞西部版・名古屋版朝刊に、「感慨催させるなつメロ番組」（名古屋版は「なつメロ番組が伝える感慨」）という見出しで、「画面に写しだされる座談会出席者諸氏の表情そのものに、歳月の流れがきざまれていて、見るものに感慨を催させた」との記者の感想が載っている。

第40回～第78回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和47年7月3日～ 昭和47年9月25日	月	21時00分～ 21時56分
昭和47年10月2日～ 昭和48年3月26日	月	21時00分～ 21時55分

司会：高島忠夫　（第40回～78回）
　　松尾ジーナ（第40回～65回）
　　磯野洋子　（第67回～78回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和４７年７月３日
①「郷愁の愛唱歌集」　＃４０
②尾崎紀世彦、西郷輝彦、ちあきなおみ、ペッツイ＆クリス、にしきのあきら
③「麦と兵隊」（不明）
④　同年７月９日付読売新聞東京版朝刊に、「お粗末にっぽんの歌」と題した視聴者（会社員男性（４１歳））からの投書が以下のとおり掲載されている。

> ＮＥＴ三日夜の「にっぽんの歌」のお粗末さにはがっかりした。「麦と兵隊」はじめ、歌った人たちの力不足のためだろう。歌唱力のない歌手を引っ張り出してこの種の歌を歌わせても茶番になってしまう。この種の歌はやはり、声楽家を使ったほうがいいのではないだろうか。

昭和４７年７月１０日
①「さすらいの艶歌決定版！」　＃４１
②江利チエミ、青江三奈、水前寺清子、ヒデとロザンナ、鹿内孝、欧陽菲菲
③
④

昭和４７年７月１７日
①「御存じ！股旅ソングでござんす」　＃４２
②ディック・ミネ、橋幸夫、五木ひろし、安倍律子、美川憲一、ちあきなおみ
③
④

昭和４７年７月２４日
①「御当地ソング・東京編」　＃４３
②灰田勝彦、水原弘、三田明、鶴岡雅義と東京ロマンチカ、和田アキ子、日吉ミミ、灰田有紀彦
③「真赤な封筒」（灰田）、「太陽の恋人たち」（三田）、「夏の夜のサンバ」（和田）
④

昭和４７年７月３１日
①「あゝ涙の流し唄」　＃４４
②加山雄三、菅原洋一、伊東ゆかり、都はるみ、青江三奈、ちあきなおみ
③
④

昭和４７年８月７日
①「歌のバカンス旅行／村田英雄・男の勝負」　＃４５
②村田英雄、朝丘雪路、三田明、都はるみ、佐良直美、野村真樹
③
④

昭和４７年８月１４日
①「男と女の哀愁夜曲／大阪恋唄」　＃４６
②フランク永井、坂本スミ子、青江三奈、由紀さおり、五木ひろし、森田克子とザ・プリティーズ
③
④

昭和４７年８月２１日
①「懐しの童謡唱歌名曲集／近江俊郎・ゴールデンアルバム」　＃４７
②近江俊郎、坂本九、伊東ゆかり、ピンキー、にしきのあきら、川田正子、音羽ゆりかご会
③
④

昭和４７年８月２８日
①「艶姿・日本調祭り」　＃４８
②高田浩吉、神楽坂はん子、神楽坂浮子、笹みどり、大月みやこ、小松みどり
③
④　放送当日の朝日新聞大阪版に小唄勝太郎の出演記載があるが、実際に出演していたかどうか不明。

昭和４７年９月４日
①「涙の波止場恋唄」　＃４９
②渡辺はま子、北島三郎、渚ゆう子、美川憲一、黒沢明とロス・プリモス、ちあきなおみ
③「なみだ船」（北島）、「出船」（渚）、「いとしあの星」（渡辺）
④　第一部は歌謡曲につきものの波止場ものを特集。
　第二部は渡辺はま子ゴールデンアルバム。
　第三部は美川憲一ら出演歌手による新曲メドレーで、心にしみる歌、明日の思い出につながる歌を紹介する。

昭和４７年９月１１日
①「なつかしの青春歌謡」　＃５０
②小畑実、菅原都々子、岡本敦郎、榎本美佐江、藤島桓夫、松山恵子、三浦洸一
③「白い花の咲く頃」（不明）、「月がとっても青いから」（不明）、「高原の駅よさようなら」（不明）
④　小畑実、藤島桓夫、菅原都々子、松山恵子ら往年の人気歌手１０人を集めて四部構成で送るなつメロ特集。
「白い花の咲く頃」「月がとっても青いから」「高原の駅よさようなら」など青春の歌を中心に送る。

昭和４７年９月１８日
①「艶歌・昭和任侠伝／慕情・長崎の歌」　＃５１
②北島三郎、三田明、ちあきなおみ、五木ひろし、野路由紀子、セルスターズ、
ミュージカル・アカデミー
③
④　第一部は「艶歌・昭和任侠伝」。
第二部は「ご当地ソング長崎編」。
第三部は「新曲パレード」。

昭和４７年９月２５日
①「愛のデュエット／ミネ・フランク酒場の恋唄」　＃５２
②ディック・ミネ、フランク永井、藤圭子、白川奈美、ヒデとロザンナ、和田アキ子
③
④

昭和４７年１０月２日
①「ご当地ソング・ベスト５!!／想い出の日本映画主題歌集」　＃５３
②藤山一郎、ペギー葉山、青江三奈、美川憲一、ちあきなおみ、渚ゆう子
③
④

昭和４７年１０月９日
①「東海林太郎追悼・歌声は永遠に」　＃５４
②東海林太郎（VTR）、西村小楽天、霧島昇、渡辺はま子、小唄勝太郎、美ち奴、菊池章子、三浦洸一、
松山恵子、若原一郎、大津美子、杵屋定之丞、杵屋定二、藤田まさと、中村邦雄、日本合唱協会
③**（出演順）**「赤城の子守唄」（東海林　47.1.17）、「国境の町」（東海林　47.1.17）、
「野崎小唄」（東海林　47.1.17）、「上海の街角で」（東海林　47.1.17）、
「ああ草枕幾度ぞ」（東海林　47.1.17）、「琵琶湖哀歌」（渡辺）、「名月赤城山」（美ち奴）、

「国境の町」（霧島）、「むらさき小唄」（松山）、「旅笠道中」（若原）、「お駒恋姿」（菊池）、
「湖底の故郷」（大津）、「麦と兵隊」（三浦）、「野崎小唄」（勝太郎）、「赤城の子守唄」（全員）

④　去る１０月４日に亡くなった東海林太郎の在りし日の姿を、東海林と縁の深かった数々のゲストとともに偲ぶ。

東海林が出演した同年１月１７日放送分のＶＴＲを流すとともに、ゲストから東海林との思い出を聞き、東海林の歌を歌ってもらう。

なお、『週刊ＴＶガイド』の当日の番組表には、三波春夫、三橋美智也、春日八郎らが出演した翌週のプログラム内容が記載されており、東海林の死により急遽放送内容を変更したことが推察される。

昭和４７年１０月１６日

①「三波春夫・明治大正はやり唄／春日・三橋ヒットアルバム／中山晋平名曲選」　＃５５

②三波春夫、三橋美智也、春日八郎、菅原洋一、内山田洋とクール・ファイブ

③

④

昭和４７年１０月２３日

①「作詞 25 年・石本美由起名歌集」　＃５６

②美空ひばり、石本美由起、小畑実、島倉千代子、都はるみ、神戸一郎、コロムビア・ローズ、
青木光一、奈良光枝、星野哲郎

③

④　『週刊ＴＶガイド』の番組表では、サブタイトルが「演歌の花道・石本美由紀作品集」となっている。

昭和４７年１０月３０日

①「想い出のゴールデンヒット」　＃５７

②守屋浩、松山恵子、和田弘とマヒナスターズ、大津美子、若原一郎、菊池章子、三浦洸一、三條町子

③

④

昭和４７年１１月６日

①「懐かしのビッグ・ヒット／田端義夫・リバイバル名曲選」　＃５８

②田端義夫、パーブ佐竹、松尾和子、三島敏夫、三船浩、井沢八郎、若山彰

③「島の船唄」（田端）、「浜千鳥」（田端）、「大利根月夜」（田端）、「九段の母」（田端）、「別れ船」（田端）、
「ネオン川」（パーブ）、「女のなみだ唄」（パーブ）、「再会」（松尾）、「女のなみだ唄」（松尾）

④　男心、女心を歌った“想い出のゴールデンヒット”、田端義夫のワンマンショー“バタヤンの心のリバイバル名曲選”、男と女の涙うたなど四部構成で送る。

第一部“想い出のゴールデンヒット”では松尾和子が「再会」、バーブ佐竹が「ネオン川」を歌い、男女の情感を歌う苦心を語る。

第二部は田端義夫のワンマンショー“バタヤンの心のリバイバル名曲選”。田端がデビュー曲「島の船唄」をはじめ、「浜千鳥」「大利根月夜」「九段の母」など６曲を歌い、歌手生活３３年を振り返る。

第三部はバーブ、松尾らによる「女のなみだ唄」。

最後の「リクエスト・コーナー」では、田端が当時の世相を語りながら、昭和１５年にヒットした「別れ船」を披露する。

昭和４７年１１月１３日

①「青空をうたおう／哀愁古賀メロディー」　＃５９

②舟木一夫、ピンキー、南沙織、青江三奈、加山雄三、ミュージカル・アカデミー

③「高校三年生」（舟木）、「サーカスの唄」（舟木）、「恋の季節」（ピンキー）、「十七歳」（南）、「青春日記」（青江）、「人生の並木路」（青江）、「影を慕いて」（青江）、「人生劇場」（加山）、「北大寮歌」（アカデミー）

④　第一部「青空をうたおう」では舟木一夫、南沙織、加山雄三、ピンキーらが歌手になった動機や好きな歌、好きな歌手について語り合う。曲目は高校三年生からのファンレターが多いという舟木の「高校三年生」をはじめ、南の「十七歳」、ピンキーの「恋の季節」など、青春の歌を綴る。

第二部は「哀愁古賀メロディ」。青江三奈が「青春日記」「人生の並木路」「影を慕いて」、舟木が「サーカスの唄」、加山が「人生劇場」などを歌う。

第三部は「今週の話題曲」。

第四部「リクエスト・コーナー」では、ミュージカル・アカデミーが「北大寮歌」を歌う。

昭和４７年１１月２０日

①「水原弘・愛のデュエット集／港町別れ唄」　＃６０

②藤島桓夫、松山恵子、水原弘、由紀さおり、渚ゆう子、欧陽菲菲、ミュージカル・アカデミー

③「銀座の恋の物語」（水原・由紀・欧陽）、「二人の銀座」（水原・渚）、「初めて来た港」（藤島・松山）、「未練の波止場」（藤島・松山）、「かえりの港」（藤島・松山）、「波止場気質」（藤島・松山）、「空の神兵」（水原）

④　水原弘のヒット曲や港にまつわる歌を特集する。

第一部「水原弘・愛のデュエット」では水原が由紀さおり、欧陽菲菲とともに「銀座の恋の物語」、渚ゆう子と「二人の銀座」などを歌う。

第二部は「港町別れ唄」。藤島桓夫、松山恵子が「初めて来た港」「未練の波止場」「かえりの港」「波止場気質」など、港にまつわる歌を集めて歌いまくる。

第三部は最近ヒットした「新曲特集」。

最後の「心の歌」は室蘭市の丹波信吉さんのリクエストで、軍歌「空の神兵」を水原が歌う。

なお、お客さまとして、ロサンゼルスでこの番組を見ているという児玉ユーニスさんを紹介、あちらでの反響を聞く。

昭和４７年１１月２７日
①「森光子・想い出の歌と共に～戦前編」　＃６１
②森光子、菅原洋一、江利チエミ、三田明、坂本スミ子
③「赤とんぼ」（森）、「ゴンドラの唄」（森）、「並木の雨」（森・菅原）、「人生の並木路」（森）、「白い花の咲く頃」（菅原）、「北上夜曲」（菅原）、「明治一代女」（江利）、「ここに幸あり」（江利）、「新雪」（三田）
④　ベテラン女優森光子が、歌手森光子として登場、彼女の半生の思い出をその時々の歌に託して歌う”森光子ワンマンショー”を二回に渡って放送する。今夜は戦前編。来週はその続編を送る。今夜は菅原洋一、江利チエミ、三田明、坂本スミ子らが賛助出演。
　森は「赤とんぼ」と「ゴンドラの唄」を、また菅原洋一とデュエットで「並木の雨」を歌う。江利チエミは森の大好きな歌「明治一代女」をプレゼントする。

昭和４７年１２月４日
①「チータの根性大演歌／森光子・想い出の歌と共に」　＃６２
②森光子、水前寺清子、ちあきなおみ、渡哲也、西村小楽天
③「戦友」（森・西村）、「リンゴの唄」（森）、「星の流れに」（森）、「いっぽんどっこの唄」（水前寺）、「ゆさぶりどっこの唄」（水前寺）
④　第一部は水前寺清子が「いっぽんどっこの唄」「ゆさぶりどっこの唄」などを歌う、ワンマンショー。
　第二部では先週に続き森光子を特別ゲストに、彼女の戦中・戦後史を歌で綴る。戦時中、慰問歌手として活躍した思い出を語りながら、一緒に戦地を巡回した西村小楽天と「戦友」などを歌い、終戦直後流行した「リンゴの唄」「星の流れに」などを披露する。
　第三部は「男の別れ唄」特集。

昭和４７年１２月１１日
①「ゴールデン歌謡史キングレコード特集（前編）」　＃６３
②荒井恵子、松島詩子、小畑実、江利チエミ、若原一郎、春日八郎、三橋美智也、林伊佐緒、天池真佐雄
③「テネシーワルツ」（江利）、「啼くな小鳩よ」（不明）
④　ヒット曲の歴史をシリーズとして企画、まず第一回の今夜は、キングレコード特集の前編。
　第一部では、既に亡くなった岡晴夫や津村謙の持ち歌も披露しながら、当時の世相を織り込み「啼くな小鳩よ」、江利チエミの「テネシーワルツ」などのなつかしい歌を。
　第二部は引退した荒井恵子が近況を語りながら、ＮＨＫラジオなどで活躍していた頃の思い出の歌を歌う。

昭和４７年１２月１８日

①「ゴールデン歌謡史キングレコード特集（後編）」　＃６４

②熊倉一雄、大津美子、三船浩、ペギー葉山、倍賞千恵子、梓みちよ、大月みやこ、バーブ佐竹、中村晃子、布施明、高英男、ピンキーとキラーズ、ひばり合唱団

③「ゲゲゲの鬼太郎」（熊倉）、「ここに幸あり」（大津）、「南国土佐を後にして」（ペギー）、「こんにちは赤ちゃん」（梓）、「ゲゲゲの鬼太郎」（合唱団）

④　前週に続き、キングレコード歌手による歌謡曲ヒット史。昭和３０年から現在までのヒット曲を、ペギー葉山、倍賞千恵子、布施明ら１１人の出演で特集。

曲目は、大ブームを巻き起こしたペギーの「南国土佐を後にして」、外国でもヒットした大津美子の「ここに幸あり」、三船浩の「男のブルース」、梓みちよの「こんにちは赤ちゃん」、倍賞の「下町の太陽」、中村晃子の「虹色の湖」、特別出演の熊倉一雄とひばり合唱団の「ゲゲゲの鬼太郎」など、ヒット当時のエピソードを織り込みながら聞かせる。

昭和４７年１２月２５日

①「競演・艶歌十八番」　＃６５

②島倉千代子、都はるみ、青江三奈、春日八郎、美川憲一、藤圭子、大川栄策

③「東京の人よさようなら」（島倉）、「逢いたいなァあの人に」（島倉）、「女の海峡」（都はるみ）、「涙の連絡船」（都）、「池袋の夜」（青江）、「別れの波止場」（春日）、「別れの一本杉」（春日）、「釧路の夜」（美川）、「新宿の女」（藤）

④　今夜は、日本人の心のふるさと”演歌”をベテランと新進歌手の出演で特集。

第一部「港町演歌」は、港や海に関係のある演歌の特集。春日八郎の「別れの波止場」、島倉千代子の「東京の人よさようなら」、都はるみの「女の海峡」「涙の連絡船」など。

第二部は「裏町演歌」で、藤圭子の「新宿の女」、美川憲一の「釧路の夜」、青江三奈の「池袋の夜」などが登場。

第三部は「ふるさと演歌」。春日の「別れの一本杉」、島倉の「逢いたいなァあの人に」などで人生の哀歓を味わう。

昭和４８年１月１日

①「我が心のうた～美空ひばり・新春に歌う」　＃６６

②美空ひばり、森繁久弥、堺正章、音羽ゆりかご会

③**（出演順）**「リンゴ追分」（美空）、「ゴンドラの唄」（美空）、「ジントネ」（森繁）、「銀座の雀」（森繁・美空）、「まごころ」（堺）、「あの町この町」（美空）、「砂山」（堺）、「雨降りお月さん」（美空・音羽）、「赤い靴」（堺・音羽）、「ペチカ」（音羽）、「七つの子」（美空）、「叱られて」（美空）、「故郷」（堺・音羽）、「通りゃんせ」（美空・堺・音羽）、「この道をゆく」（美空）、「悲しき口笛」（美空）、「東京キッド」（美空）、「悲しい酒」（美空）、「柔」（美空）、「人生一路」（美空）、「ある女の詩」（美空）

④　第一部は“美空ひばり、森繁久弥の歌とお話のコーナー”。森繁のナレーションに続く美空の「リンゴ追分」からスタート。「ゴンドラの唄」では、間奏で森繁が詩の朗詠を行う。続いて森繁が沖縄古謡

「ジントネ」を歌う。

第二部は美空と堺正章が綴る童謡集。「あの町この町」は美空のナレーションの後、美空が歌う。続く「砂山」は美空のナレーションの後、堺が歌う。

第三部はヒット・パレード“新春美空ひばりショー”。美空の新しい歌、なつかしい歌をたっぷり歌いまくる。芸能生活三十五周年記念曲「この道をゆく」からスタート。

フィナーレは美空が今年の抱負を語り、話題曲「ある女の詩」を歌う。

なお、昨年まで高島とともに司会を務めていた松尾は、ＴＢＳテレビ系列毎週水曜の「歌と笑いでつっぱしれ！」のレギュラーでもあったが、先月１３日の生放送を無断ですっぽかした影響で半年間、芸能界を活動休止となったため、この番組も降りることとなった。よって、この回の司会は高島一人であった。

昭和４８年１月８日

①「忘れじの歌・古関裕而名曲選」　＃６７

②古関裕而、伊藤久男、藤山一郎、渡辺はま子、奈良光枝、織井茂子、岡本敦郎

③「雨のオランダ坂」（渡辺）、「憧れの郵便馬車」（岡本）、「露営の歌」（不明）、「白鳥の歌」（不明）

④　美しいメロディーを作り続けて４３年。作曲家の古関裕而の半生を、氏作曲の歌謡曲、軍歌、ホームソングなどの数々のエピソードを紹介しながらたどっていく。

古関の人となりを披露し、渡辺はま子が「雨のオランダ坂」、岡本敦郎が「憧れの郵便馬車」などを歌う。古関自身のハモンドオルガン演奏も。

この回より女性陣の司会として磯野洋子が務めることとなった。

昭和４８年１月１５日

①「思い出の唱歌・冬の巻／青春の詩集」　＃６８

②菅原洋一、ダーク・ダックス、日野てる子、野口五郎、真理ヨシコ、園まり、ロス・インディオス

③

④　同年１月２０日付毎日新聞東京版朝刊に、「ひとり涙して見る」と題した視聴者からの投書が以下のとおり掲載されている。

> ＮＥＴテレビ 15 日「にっぽんの歌・思い出の唱歌・冬の巻」は、にぎやかでケバケバしい正月番組にうんざりしていた者にとっては、とてもいい贈り物だった。とくにダーク・ダックスの小学唱歌などは、日本の正月の味の良さを思う存分味わわせてくれた。こうした純日本的な歌や番組をいつまでも続け、失いたくないものと、ひとり涙して見た。

昭和４８年１月２２日

①「ゴールデン歌謡史・ビクターレコード特集第一夜」　＃６９

②小唄勝太郎、市丸、小畑実、フランク永井、榎本美佐江、松尾和子、浜村美智子、山田真二

③

④

昭和４８年１月２９日
①「ゴールデン歌謡史・ビクターレコード特集第二夜」　＃７０
②渡辺はま子、灰田勝彦、三浦洸一、曽根史郎、和田弘とマヒナスターズ、渡辺マリ、松島アキラ
③
④

昭和４８年２月５日
①「競演・艶歌三羽烏／バタヤン・東海林太郎を唄う」　＃７１
②田端義夫、春日八郎、水原弘、都はるみ、西村小楽天
③
④

昭和４８年２月１２日
①「ゴールデン歌謡史・テイチクレコード特集」　＃７２
②ディック・ミネ、三波春夫、石原裕次郎、菊池章子、菅原都々子、矢吹健、長津義司
③
④

昭和４８年２月１９日
①「ゴールデン歌謡史・コロムビアレコード特集第一夜」　＃７３
②藤山一郎、近江俊郎、奈良光枝、池真理子、神楽坂はん子、並木路子、青木光一、花村菊江、
西来路ひろみ
③
④　具体的な放送内容は不明であるが、翌々週にかけて西来路ひろみが出演している。その経緯と思われる記事が、「高島忠夫夫妻が演歌を作曲」との見出しで『週刊平凡』昭和４７年１２月２１日号に載っているため紹介したい。

> 高島忠夫・寿美花代のおしどり夫婦が、『夜霧』（2 月 10 日発売）を合作、お気に入りの歌手・西来路（さいらいじ）ひろみにプレゼントした。
> 西来路が『にっぽんの歌』（ＮＥＴ）にゲスト出演したとき、一目惚れした夫妻が「そのうちきっとステキな曲をプレゼントする」と約束、実現したもの。
> 夫妻はこれまでにもミュージカルなどで作詞作曲のマネゴトはやってきたが、本格的な演歌はこれがさいしょ。すでに発売にあわせ、西来路を『にっぽんの歌』にレギュラー出演させるなどの段取りもつけた。

この回よりも前に西来路が当番組に出演したのは、高島が司会になる前の昭和４７年３月６日放送回（第２３回）のみのため、この回をテレビで視聴して「一目惚れ」したのであろうか。

昭和４８年２月２６日
①「ゴールデン歌謡史・コロムビアレコード特集第二夜」　＃７４
②霧島昇、島倉千代子、岡本敦郎、織井茂子、ちあきなおみ、アントニオ古賀、西来路ひろみ
③
④

昭和４８年３月５日
①「あゆみと明の十年史／なつかしのラブ・ソング／想い出の童謡集」　＃７５
②二葉あき子、ペギー葉山、いしだあゆみ、三田明、川田正子、川田孝子、西来路ひろみ、
　音羽ゆりかご会
③
④

昭和４８年３月１２日
①「ゴールデン歌謡史・クラウンレコード特集」　＃７６
②北島三郎、西郷輝彦、水前寺清子、美川憲一、石橋正次、笹みどり
③
④

昭和４８年３月１９日
①「御存じ！花の大演歌」　＃７７
②春日八郎、村田英雄、松山恵子、畠山みどり、都はるみ
③
④

昭和４８年３月２６日
①「想い出のメロディ、青江・ちあき歌合戦！／小林旭・ヒットを歌う！」　＃７８
②小林旭、青江三奈、ちあきなおみ
③
④

第79回～第131回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和48年4月2日～ 昭和49年4月1日	月	21時00分～ 21時55分

司会：山口淑子　（第79回～96回、99回～131回）
　　藤原弘達　（第79回～131回）
　　森光子　（第97回）
　　高島忠夫　（第98回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者 ③曲目（歌唱者）　④放送概要

昭和４８年４月２日
①「石原裕次郎ビッグヒットを唄う／藤原弘達歌謡放談」　＃７９
②石原裕次郎、ペギー葉山、坂本九、藤山一郎
③
④

昭和４８年４月９日
①「愛のヒット集／藤原弘達歌謡放談」　＃８０
②近江俊郎、フランク永井、佐良直美、藤圭子、五木ひろし
③「山小舎の灯」（近江）、「緑の牧場」（近江）、「南の薔薇」（近江）、「想い出は雲に似て」（近江）、
「有楽町で逢いましょう」（フランク）、「夜霧に消えたチャコ」（フランク）、
「世界は二人のために」（佐良）、「陽が当たるまで」（佐良）、「夢は夜ひらく」（藤）、
「よこはまたそがれ」（五木）、「霧の出船」（五木）
④　今回は、ベテラン近江俊郎のなつかしのラジオ歌謡ヒット曲集、フランク永井ヒット曲メドレー、藤原弘達が分析する大正末期から昭和初期にかけての流行歌と世相のかかわり合いなどの内容。
　まず、五木ひろしの「よこはまたそがれ」、藤圭子の「夢は夜ひらく」、佐良直美の「世界は二人のために」で幕をかけたあと、フランクが「有楽町で逢いましょう」「夜霧に消えたチャコ」ほかを歌う。
　近江が自分で選んだ一番好きなラジオ歌謡ヒット曲集は「山小舎の灯」「緑の牧場」「南の薔薇」「想い出は雲に似て」の４曲。
　新曲コーナーは、佐良が「陽が当たるまで」、五木が「霧の出船」などを歌う。

昭和４８年４月１６日
①「艶歌・花の饗宴」　＃８１
②北島三郎、水前寺清子、青江三奈、美川憲一
③
④

昭和４８年４月２３日
①「忘れじの歌・古関裕而名曲選」　＃８２
②伊藤久男、藤山一郎、渡辺はま子、奈良光枝、織井茂子
③
④　東京・福岡・名古屋・北海道では、プロ野球「大洋対巨人」を放送。当日のテレビ欄には野球中止の場合に「上原謙思い出の映画主題歌集」を放送すると記載されていたが、試合中止にならなかったため放送されなかった。
　大阪はプロ野球ではなく、「忘れじの歌・古関裕而名曲選」（＃６７）を再放送した。
　この日を放送回にカウントしないと、＃１００が「100回記念特集」から外れてしまうため、カウントしている。

昭和４８年４月３０日
①「上原謙思い出の映画主題歌集」　＃８３
②上原謙、加山雄三、春日八郎、坂本スミ子、三條町子、東京ロマンチカ
③
④

昭和４８年５月７日
①「森繁久弥・あゝ戦友」　＃８４
②森繁久弥、島倉千代子、都はるみ、千昌夫
③
④　同年６月２６日付朝日新聞西部版夕刊によると、司会の山口は得意の中国語を披露し、「ニイ・ハオ」に始まり李香蘭時代や満州時代の思い出話がつきず、録画終了後、「この番組で私の中国語講座開いてくれないかしら……」という一幕もあったとのこと。

昭和４８年５月１４日
①「艶姿！演歌日本調」　＃８５
②灰田勝彦、尾崎紀世彦、由紀さおり、松尾和子、松平直樹とブルーロマン
③「新雪」（灰田）、「湯島の白梅」（尾崎）、「明治一代女」（由紀・松尾）、「島の娘」（由紀・松尾）
④　今夜は、ベテランの灰田勝彦をはじめ、松尾和子、由紀さおり、尾崎紀世彦、元マヒナスターズのメンバーだった松平直樹らの出演で、“艶姿！演歌日本調”“灰田勝彦・青春哀歌”“ムード歌謡特集”の三部構成。
　第一部“艶姿！演歌日本調”では、由紀と松尾がそれぞれ艶やかな芸者姿で「明治一代女」「島の娘」を、尾崎は書生姿で「湯島の白梅」を歌う。（なお、「明治一代女」「島の娘」は、デュエットではなくソロの可能性あり。）
　第二部は、“灰田勝彦・青春哀歌”で、藤原弘達が当時の世相とともに分析する。
　灰田は昭和１７年のヒット曲「新雪」を歌うが、本番の後、司会の山口淑子の「それにしてもお若いですね」に「いやあなたも」と灰田。ついでに由紀にまで「お若いですね」とやり、「私は二十三年生れ。皆さまと関係ございません」。

昭和４８年５月２１日
①「ご存じマドロス演歌」　＃８６
②三橋美智也、都はるみ、五月みどり、宮史郎とぴんからトリオ
③「リンゴ村から」（三橋）、「達者でナ」（三橋）、「あこがれのハワイ航路」（不明）、「涙の連絡船」（不明）
④　デビュー二十年の三橋美智也、同じく十年の都はるみ、カムバックした五月みどり、そして苦節十年、花咲いたぴんからトリオの登場。
　第一部は、都はるみ、ぴんからトリオほかの「ご存じマドロス演歌」で、「あこがれのハワイ航路」

「涙の連絡船」など、マドロスものの名曲の特集。

第二部は“三橋美智也ふるさとを唄う”で、「リンゴ村から」「達者でナ」など、ふるさとを歌ったヒット曲。

第三部は“お座敷談義”。同年５月２３日付読売新聞東京版朝刊では、批評家の藤原弘達が芸者を最大級の賛辞で礼賛していたことについて、「いただけぬ時代錯誤的放言」と題した以下の記者の批評記事が載っている。

> （前略）いつもそうなのか、その夜の「にっぽんの歌」は演歌ばかりずらりだったものの、正直いって面白かったのである。断っておくが、私はヨ、ナ抜きのメロディーはシンから好きでないから、演歌にひかれたわけではない。ゲストの批評家センセの発言とテレビとしての、その処理の仕方に興味を持ったのだ。
>
> それは“お座敷ソング”コーナーのときである。センセ、そのとき、芸者を最大級の賛辞で礼賛なさる。いかにもそこに、日本的風習と心情の典型があるかのごとく、芸者は日本の無形文化財だとし、それを非難し、放棄しようとするヤカラは風上にも置けんとばかり、日本人の軽薄をたしなめ？た。
>
> 時代錯誤もいいとこ、噴飯ものだけど、センセの一家言としておこう。しかし、テレビがそれを、いかにも痛快事であるかのように、だれにも一言も反論させず“放談”とはいえ、一方的に流したのはいただけない。
>
> 考えてもみるがいい。芸者制度というのは前近代的遺物である。だれもが好ましいとは思ってもいまい。出来ることなら、廃止してしまいたいのである。センセも言っていたが、悪のたれ流しの”待合政治“の例を思ってみることだ。（後略）

昭和４８年５月２８日

①「競艶！涙の別れ唄」　＃８７

②菅原洋一、青江三奈、渚ゆう子、三善英史、ミュージカル・アカデミー

③

④

昭和４８年６月４日

①「競艶！股旅三度笠」　＃８８

②橋幸夫、水前寺清子、ちあきなおみ、田端義夫

③「男なら」（不明）、「人生劇場」（不明）、「男の純情」（不明）、「潮来笠」（不明）、「鷲奪道中」（不明）

④　ベテラン田端義夫、円熟の橋幸夫、ファイター水前寺清子とお色気のちあきなおみと、いずれ劣らぬ”芸達者”を集め、歌はもとよりユーモアとウィットに富んだやりとりも楽しむという趣向で、演歌を特集する。

第一部は、きびしい男の人生航路をうたった傑作特集「これが男の生きる道」で、「男なら」「人生劇場」「男の純情」など。

第二部”藤原弘達歌謡放談”では田端の大ヒット、”船シリーズ”を聞きながら当時の世相と歌の関係を分析。

第三部は橋、水前寺、ちあきによる“競艶！股旅三度笠”で、「潮来笠」「鴛鴦道中」など、戦前戦後の股旅歌謡の代表作を総ざらいする。

昭和４８年６月１１日
①「石原裕次郎”魅惑の宵”」　＃８９
②石原裕次郎、ダーク・ダックス、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎
③「赤いハンカチ」（石原）
④　石原裕次郎が「赤いハンカチ」など全５曲を魅惑たっぷりに歌う他、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎がそれぞれのヒット曲を披露。

昭和４８年６月１８日
①「なつかしの歌謡ショー決定版！」　＃９０
②淡谷のり子、小畑実、菅原都々子、三島敏夫
③
④　東京・福岡・名古屋・北海道では、プロ野球「広島対巨人」を予定し、野球中止の場合に「にっぽんの歌」を放送するとしていた。当日はプロ野球が雨天中止となったため、「にっぽんの歌」を放送。
大阪は「小柳ルミ子リサイタルマシンガンＢ」という番組を放送した。

昭和４８年６月２５日
①「慕情！長崎の詩」　＃９１
②霧島昇、春日八郎、美輪明宏、青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ
③
④

昭和４８年７月２日
①「ああ大正の大演歌！」　＃９２
②ディック・ミネ、水原弘、笹みどり、英亜里、田谷力三
③
④

昭和４８年７月９日
①「服部メロディ・青春の譜」　＃９３
②服部良一、近江俊郎、二葉あき子、奈良光枝、菅原洋一、都はるみ、佐良直美
③「黒いパイプ」（近江）、「夜のプラットホーム」（二葉）、「青い山脈」（奈良）、「夢去りぬ」（菅原）、「東京ブギウギ」（不明）、「湯の町エレジー」（不明）

④　作曲生活４０年、戦前から現在に至るまで数々のヒット曲を世に出した服部良一をゲストに、”服部メロディー”を満喫する。

第一部“服部メロディ・青春の譜”では、奈良光枝の「青い山脈」、近江俊郎の「黒いパイプ」、二葉あき子の「夜のプラットホーム」、菅原洋一の「夢去りぬ」などのほか、服部を囲んで司会の山口淑子や出演歌手が歌にまつわる思い出や、時代背景を語り合う。また、「東京ブギウギ」に合わせ、山口淑子と菅原洋一がジルバを踊る。

第二部“藤原弘達歌謡放談・ブギウギ時代”では、終戦直後のブギウギ時代を切る。

昭和４８年７月１６日

①「御存知!!盛り場艶歌」　＃９４

②三波春夫、青江三奈、パープ佐竹、和田弘とマヒナスターズ、殿さまキングス

③

④　第一部は“ご存知！盛り場艶歌”の特集。

第二部は三波春夫を迎えての”藤原弘達歌謡放談”。

昭和４８年７月２３日

①「艶歌！花の饗宴」　＃９５

②橋幸夫、舟木一夫、三田明、市丸、神楽坂浮子、花村菊江

③「白虎隊」（橋・舟木・三田）

④　第一部は橋幸夫、舟木一夫、三田明が、揃いの白虎隊の扮装で登場、歌と見事な剣舞を披露する“嗚呼！白虎隊”。古賀政男作曲の「白虎隊」を歌う他、詩吟の部分は三田が剣舞とともに朗詠。

第二部は市丸、神楽坂浮子、花村菊江の“艶歌！花の競演”。

第三部は、市丸をメインにした“藤原弘達歌謡放談・演歌事始”。

昭和４８年７月３０日

①「ご存知！ふるさと艶歌」　＃９６

②森光子、三橋美智也、島倉千代子、江利チエミ、五木ひろし

③「東京下町あたり」（森）、「夕焼けとんび」（三橋）、「りんどう峠」（島倉）、「山は夕焼け」（五木）

④　歌に自信のある森光子が”歌手”として出演、三橋美智也の三味線伴奏で民謡を歌うほか、最近レコーディングした新曲「東京下町あたり」を聞かせる。

第一部“ご存知！ふるさと艶歌”では、三橋の「夕焼けとんび」、島倉千代子の「りんどう峠」、五木ひろしの「山は夕焼け」などを特集。

第二部”藤原弘達歌謡放談”では、藤原が最近”ふるさと”を安売りしている傾向に批判を加えた後、出演者たちがふるさとにちなんだ名曲を歌う。

昭和４８年８月６日
①「任侠艶歌十八番！」　＃９７
②北島三郎、フランク永井、都はるみ、ピンキー、山田太郎
③「東京下町あたり」（森）
④　歌い慣れぬ演歌に挑戦する、フランク永井とピンキーの熱演がみもの。
　夏休み中の山口淑子に代わって代理で司会を務めた森光子も、新曲「東京下町あたり」を歌う。

昭和４８年８月１３日
①「ああ軍歌！」　＃９８
②藤山一郎、アイ・ジョージ、春日八郎、青江三奈、ペギー葉山
③「若鷲の歌」（藤山）、「燃ゆる大空」（藤山）、「戦友」（ジョージ）、「暁に祈る」（春日）、
「可愛いスーチャン」（青江）、「空の神兵」（ペギー）
④　夏休み中の山口淑子に代わって、前司会者の高島忠夫が登場、藤原弘達とのコンビで軍歌特集を放送する。
　第一部は戦意高揚を目的に作られた軍歌を集めた”ああ軍歌”。曲は「若鷲の歌」「燃ゆる大空」を藤山一郎、「空の神兵」をペギー葉山、「暁に祈る」を春日八郎など。
　続く第二部“藤原弘達歌謡放談・名もなき兵士の唄”では、戦争の非情さ、兵士の悲しみ、戦争批判を歌に託した”反戦的軍歌”を集める。青江三奈の「可愛いスーチャン」やアイ・ジョージの「戦友」など。

昭和４８年８月２０日
①「100回記念特集「勢揃い！紅白歌まつり」（前編）」　＃９９
②加東大介、高島忠夫、霧島昇、渡辺はま子、近江俊郎、三橋美智也、岡本敦郎、五月みどり、
松山恵子、並木路子、菅原都々子、菊池章子
③「山小舎の灯」（近江）、「高原列車は行く」（岡本）、「未練の波止場」（松山）、「リンゴの唄」（並木）、
「星の流れに」（菊池）
④　放送百回記念特集として、これまでこの番組で活躍してきたベテラン歌手２８人が出演して”紅白歌まつり”を二週にわたり繰り広げる。
　また、初代と二代目の司会者、加東大介、高島忠夫もゲスト出演し、山口淑子、藤原弘達の現司会者と歌謡曲よもやま話をする。
　記念パーティー会場になったスタジオに、お祝いに駆け付けた歌手が次々に歌うという趣向で、岡本敦郎の「高原列車は行く」、松山恵子の「未練の波止場」などのヒット曲の他、敗戦直後を彩った並木路子の「リンゴの唄」、近江俊郎の「山小舎の灯」、菊池章子の「星の流れに」などで、戦後の思い出を綴る。

昭和４８年８月２７日
①「100 回記念特集「勢揃い！紅白歌まつり」（後編）」　＃１００
②加東大介、高島忠夫、天地聡子、宮尾たか志、ディック・ミネ、二葉あき子、市丸、フランク永井、奈良光枝、三浦洸一、黒沢明とロス・プリモス、藤島桓夫、松尾和子、若山彰
③「都々逸」（加東）、「PAPA LOVES MAMBO」（高島）、「赤い靴のタンゴ」（奈良）、「月の法善寺横町」（藤島）、「喜びも悲しみも幾歳月」（若山）
④　先週に引き続き、放送百回記念特集”紅白歌まつり”の後編。
戦後の歌謡史を紐解くという形式で、奈良光江の「赤い靴のタンゴ」、藤島桓夫の「月の法善寺横町」、若山彰の「喜びも悲しみも幾歳月」など、往年のヒット曲を綴りながら、その時々の時代背景を回顧する。
また、特別ゲストの加東大介は都々逸を、高島忠夫は「PAPA LOVES MAMBO」を、それぞれお祝いに歌う。

昭和４８年９月３日
①「東京の屋根の下、唄は流れる」　＃１０１
②灰田勝彦、天知茂、ちあきなおみ、ダーク・ダックス、灰田有紀彦
③「燦めく星座」（灰田）、「上海ブルース」（天知）、「赤いグラス」（天知）、「昭和ブルース」（天知・ちあき）「真白き富士の嶺」（ダーク）、「椰子の実」（ダーク）、「旅愁」（ダーク）、「北上夜曲」（ダーク）
④　天知茂が歌手として出演し「上海ブルース」「赤いグラス」などを歌い、ちあきなおみとは「昭和ブルース」を歌う。昔の歌しか知らぬという天知に調子を合わせ「若い時の歌ほどよく覚えてるもの」とやったちあき。あとから司会者に「ちあきさん、おいくつ？」とからかわれ、照れることしきり。
灰田勝彦は、実兄有紀彦のスチールギター演奏で「燦めく星座」を聞かせる。
“藤原弘達歌謡放談”は、昔の女学生と現在の女子中学・高校生の学生気質の変遷を語り、藤原らの世代のアコガレの的だったセーラー服の女学生たちが愛唱した歌をダーク・ダックスが歌う。曲は「真白き富士の嶺」「椰子の実」「旅愁」「北上夜曲」など。

昭和４８年９月１０日
①「対決！演歌三本勝負」　＃１０２
②坂本九、ぴんから兄弟、殿さまキングス、由紀さおり、三沢あけみ、三浦布美子、不明
③「酒落男」（坂本）、「うちの女房にゃ髭がある」（坂本・三沢）、「野崎小唄」（由紀）、「涙の渡り鳥」（三沢）、「お江戸日本橋」（三浦）、「十三夜」（三浦）、「ああそれなのに」（不明）
④　ぴんから兄弟と殿さまキングスの東西人気グループが演歌合戦を展開。また、坂本九、由紀さおり、三沢あけみらが「ああそれなのに」ほかのなつかしいコミックソングの数々を聴かせる。更に、特別ゲスト三浦布美子が日本情緒たっぷりの歌と艶姿を披露する。
また、坂本の「酒落男」、坂本・三沢の「うちの女房にゃ髭がある」など、なつかしのコミックソングの合間に、藤原弘達がコミックソングの本質と日本人の笑いの構造を分析してみせる。

昭和４８年９月１７日
①「演歌・マドロス人生」　＃１０３
②ディック・ミネ、水前寺清子、美川憲一、にしきのあきら、デューク・エイセス
③「奥様お手をどうぞ」（ディック）、「別れ船」（水前寺）、「港町十三番地」（美川）
④　第一部はマドロスものの演歌で、水前寺清子の「別れ船」、美川憲一「港町十三番地」など。
　第二部は終戦直後人気を博した三木鶏郎グループの冗談音楽をデューク・エイセスが歌う。
　「昭和２２年の冬から放送された歌で、当時の世相を皮肉った三木鶏郎の冗談音楽を知っていますか。」当番組出演の歌手に控室で聞いて回っていた司会の藤原弘達に水前寺清子は、「あら、おじさま、私、まだ生まれていませんでしたワ。」ところが、ディック・ミネの「あれから２０数年、いま冗談音楽を聞いても通用するね。政治は進歩していないということだね」に、二人は意気投合。
　第三部はディック・ミネ特集。司会の山口淑子をエスコートしながら「奥様お手をどうぞ」などを披露、青春時代の思い出を語る。

昭和４８年９月２４日
①「石原裕次郎ビッグヒットを唄う」　＃１０４
②森昌子、石原裕次郎、伊東ゆかり、佐良直美、藤圭子、
③「故郷」（藤原）
④　当番組で藤原弘達がはじめて渋いのど（？）を披露する。”絶対に私を歌わせない”という約束をとりつけての司会者出演であったが、”先生腰をあげて”と山口淑子からハッパをかけられたりして、一声あげねばならぬ羽目となったもの。伊東ゆかり、佐良直美、森昌子、藤圭子らにひっぱり出され”アイン・ツバイ・ドライ（一、二、三）ハイ”と「故郷」を歌ったが、これを見た山口、「先生の歌はみんな寮歌に聞こえますね」。

昭和４８年１０月１日
①「田端義夫・涙の絶唱」　＃１０５
②田端義夫、青江三奈、ちあきなおみ、西来路ひろみ、ミュージカル・アカデミー
③
④

昭和４８年１０月８日
①「競演！魅惑のロマン歌謡」　＃１０６
②藤山一郎、アイ・ジョージ、尾崎紀世彦、ペギー葉山、弘田三枝子
③「椰子の実」（藤山）、「紀元二千六百年」（藤山）、「三日月娘」（藤山）、「硝子のジョニー」（ジョージ）、「また逢う日まで」（尾崎）、「あいつ」（尾崎）、「爪」（ペギー）、「人形の家」（弘田）、「ベッドで煙草を吸わないで」（弘田）
④　第一部はポピュラー出身のペギー葉山、弘田三枝子、尾崎紀世彦、ラテン出身のアイ・ジョージらが、いわゆる演歌調とは対照的なロマンの香りのただよう歌謡曲を聞かせる「競演！魅惑のロマン歌

謡」。曲目はジョージが「硝子のジョニー」、弘田が「人形の家」と「ベッドで煙草を吸わないで」、尾崎が「また逢う日まで」と「あいつ」、ペギーが「爪」ほか。

第二部“藤原弘達歌謡放談・ああ国民歌謡”では、戦前から戦中にかけて流行し戦意高揚の手段にも使われた”なつかしの国民歌謡”「椰子の実」「紀元二千六百年」などを藤山一郎が歌い、その時代背景を藤原弘達が解説する。

昭和４８年１０月１５日

①「浩吉・美和父娘三度笠」　＃１０７

②高田浩吉、高田美和、春日八郎、渡辺はま子、松尾和子、八代亜紀

③「白鷺三味線」（浩吉）、「大江戸出世小唄」（浩吉）、「むらさき仁義」（浩吉）、「鴛鴦道中」（浩吉）、「むらさき仁義」（美和）、「裏町人生」（春日）、「あん時ゃどしゃ降り」（春日）、「愛国の花」（渡辺）、「ああモンテンルパの夜は更けて」（渡辺）

④　第一部は１０月にリサイタルをする春日八郎の”裏町もの”。

第二部は、高田浩吉、美和の親子が特別ゲストとして出演。娘を嫁がせる父親の心境を語りながら、浩吉がヒット曲を歌う。関西歌舞伎の片岡秀太郎と愛娘の挙式を前にした浩吉はいつになくソワソワと落ち着かぬ体だが、美和自身は「お父さまの声はいつ聞いても素敵」と親を冷やかすほど。司会の山口淑子から「おめでとうございます。お父さまのために何か歌って」と言われ「むらさき仁義」を披露、うるんだ目の浩吉と対照的なところを見せていた。

第三部”藤原弘達歌謡放談”は、”ウーマン・パワー事始”日本女性のシンの強さを示した歌を、１１月にリサイタルをする渡辺はま子が歌う。

昭和４８年１０月２２日

①「演歌・花の道中双六」　＃１０８

②春日八郎、橋幸夫、水前寺清子、ちあきなおみ、大川栄策、黒島健司

③「お富さん」（春日）、「別れの一本杉」（春日）、「浮草の宿」（春日）、「花の三度笠」（橘）、「勘太郎月夜唄」（ちあき）、「目ン無い千鳥」（大川）、「ここに幸あり」（黒島）

④　今回は、春日八郎、橘幸夫、水前寺清子、ちあきなおみらお馴染みのメンバーに加え、リバイバル曲を専門に歌って”かくれた人気歌手”と言われる大川栄策、黒島健司の二人が出演、「目ン無い千鳥」、「ここに幸あり」など往年の名曲を歌いまくる。

第一部は、いわゆる股旅ソングを集めた“演歌・花の道中双六”で、橘、ちあきらが「花の三度笠」「勘太郎月夜唄」などを歌う。

第二部は“藤原弘達歌謡放談・歌の風俗史”で、春日が「お富さん」「別れの一本杉」「浮草の宿」など、ヒット曲を年代順に披露する傍ら、その時代の世相を藤原弘達が解説する。

昭和４８年１０月２９日
①「ハモニカ・演歌大競演！！」　＃１０９
②春日八郎、島倉千代子、都はるみ、菅原洋一、宮田東峰、ミヤタ・ハーモニカバンド
③「この世の花」（島倉）、「涙の連絡船」（都）、「丘を越えて」（バンド）
④　春日八郎、島倉千代子、菅原洋一、都はるみらが懐かしの抒情歌謡と演歌を聞かせる。
　他にハーモニカ一筋に６０年の宮田東峰が出演、ハーモニカ・バンドを前になつメロを指揮する他、ハーモニカにまつわるエピソードを紹介する。
　宮田が自分の顔を商標登録した話、ハーモニカの発達史を語った後、バンドの演奏で「丘を越えて」の他、島倉千代子が「この世の花」、都はるみが「涙の連絡船」など、それぞれのヒット曲を歌う。
　久しぶりのスタジオで「昔にくらべライトが強くなりましたね」と汗をかきっぱなしの東峰だったが、司会の山口淑子を見ると「美女に会うと緊張してひや汗が……」と今度は別の表現。藤原弘達に「ライトじゃなかったの？」と半畳を入れられ、「女性は光、この年になっても美女は七色に見えます」。

昭和４８年１１月５日
①「饗宴！艶歌日本調」　＃１１０
②市丸、榎本美佐江、藤本二三代、三沢あけみ、笹みどり、英亜里、和田弘とマヒナスターズ
③「天国に結ぶ恋」（和田弘とマヒナスターズ）、「好きだった」（和田弘とマヒナスターズ）、「木遣りくずし」（不明）、「野崎小唄」（不明）、「湯島の白梅」（不明）、「明治一代女」（不明）
④　大ベテラン市丸を筆頭に、榎本美佐江、藤本二三代、三沢あけみ、笹みどり、英亜利、和田弘とマヒナスターズが揃い、懐かしの日本調歌謡曲ヒットパレードを繰り広げる。曲は「野崎小唄」「湯島の白梅」「明治一代女」ほか。
　また、“藤原弘達歌謡放談”は「天国に結ぶ恋」「好きだった」など、和田弘とマヒナスターズによる失恋の歌を特集する。

昭和４８年１１月１２日
①「軍歌・ああ同期の桜」　＃１１１
②霧島昇、近江俊郎、岡本敦郎、若山彰、織井茂子、ボニージャックス
③「愛国行進曲」（霧島）、「異国の丘」（不明）、「きけわだつみの声」（不明）
④　霧島昇、近江俊郎、若山彰らの出演で、軍歌を中心に戦中・戦後の歌を特集する。
　今回は、歌の合間に元水兵の霧島がもっぱら将兵慰問に明け暮れた戦争体験を語る他、学徒出陣三十年にちなみ、特攻隊に編入された学徒兵、空母に突入する特攻機のフィルムなども紹介し、歌と戦中・戦後の生活を振り返る。
　第一部は霧島の「愛国行進曲」など。
　第二部は「異国の丘」「きけわだつみの声」など戦争に関連した庶民の悲しみと怨念のこもった歌と、当時の話題を。

昭和４８年１１月１９日

①「挑戦！演歌・艶歌・怨歌」　＃１１２

②フランク永井、北島三郎、天知茂、ぴんから兄弟、藤圭子

③「兄弟仁義」（ぴんから兄弟）

④　今回は、フランク永井、天知茂、北島三郎、ぴんから兄弟といったつわ者たちに、紅一点の藤圭子を加えた異色顔合わせで送る。

第一部“挑戦！演歌・艶歌・怨歌”では、ぴんから兄弟の宮史郎が、北島の「兄弟仁義」に挑む。

第二部は、フランクと天知のコーナーで、互いの人生観や仕事への情熱を語り合う。

昭和４８年１１月２６日

①「あゝ、さすらい大演歌」　＃１１３

②三橋美智也、加藤登紀子、水前寺清子、三田明、渚ゆう子

③「石狩川悲歌」（三橋）、「知床旅情」（加藤）、「愛のくらし」（加藤）

④　出産で休養していた加藤登紀子を久しぶりにゲストに迎える。お得意のギターの弾き語りで「知床旅情」や新曲「愛のくらし」などを歌う。この曲は加藤が作詞し、アルフレッドハウゼが曲をつけたもので、今年の夏あたりから、北海道でヒットし始めた。

“藤原弘達歌謡放談”は「現代母親考」。「母さんの歌」「母恋吹雪」「悲しき子守唄」「九段の母」など母親をテーマにした曲を中心に、歌謡曲にあらわれた母の姿を探る。また、加藤登紀子が、母になった感想や体験を話す。

三橋美智也も「石狩川悲歌」などをたっぷり歌う。

昭和４８年１２月３日

①「高峰三枝子愛を唄う」　＃１１４

②高峰三枝子、石原裕次郎、ダーク・ダックス

③「宵待草」（高峰）、「湖畔の宿」（高峰）、「小雨の丘」（高峰）、「二人の世界」（高峰・石原）、「貴方なしでは」（高峰・石原）、「粋な別れ」（高峰・石原）、「夜霧よ今夜もありがとう」（不明）、「ペチカ」（不明）、「ともしび」（不明）、「旧友」（不明）

④　今回は戦前派、戦後派の違いこそあれ、ともに”歌う映画スター”の代表的存在として、数多くのヒット曲を持つ高峰三枝子と石原裕次郎を迎え、更に近頃ますます円熟味を増したダーク・ダックスを加えた豪華メンバーで送る。

第一部は高峰のヒット曲特集。久しぶりに会う山口淑子とのおしゃべりをはさみ「宵待草」「湖畔の宿」「小雨の丘」などを披露。

第二部は高峰と石原のデュエットで、「二人の世界」「貴方なしでは」「粋な別れ」などを歌う。

“藤原弘達放談”は竹久夢二と大正センチメンタリズム。

昭和４８年１２月１０日

①「絶唱・愛・涙・別れ」　＃１１５

②小林旭、島倉千代子、雪村いづみ、守屋浩、克美茂

③「船頭小唄」（小林）、「花はどこへいった」（雪村）、「約束」（雪村）

④　第一部は島倉千代子ほか出演歌手のヒット曲で綴る”絶唱・愛・涙・別れ”の歌。

この後、特別ゲスト小林旭が「船頭小唄」などナツメロを独特の”アキラぶし”でたっぷり聞かせるなつメロ・コーナー。

続いて、雪村いづみが反戦歌の傑作「花はどこへいった」「約束」を歌う反戦歌コーナー。雪村は、小川俊彦のピアノソロで「約束」を歌う。－－ママを失った子どもが、その翌年、戦争でパパをなくす。ママが死んだとき子どもはパパと約束した。”強くなる、決して泣かない”そして、今度も子どもは”約束”を守る――。雪村はこの歌を歌うと涙を浮かべる。

同年１２月２０日付毎日新聞東京版朝刊に、「“本当の歌”を感じる」とのタイトルで、視聴者からの感想が以下のとおり掲載された。

> ＮＥＴテレビ 10 日「にっぽんの歌」で、雪村いづみさんの歌った「約束」に“本当の歌”ともいえるものを感じた。ゼスチュアとカッコよさを売物にする最近の歌手たちに、あの情感たっぷりの歌が歌えるだろうか。

昭和４８年１２月１７日

①「鶴田浩二・男の哀愁」　＃１１６

②鶴田浩二、淡谷のり子、都はるみ、菅原洋一、克美茂

③「ハワイの夜」（鶴田）、「街のサンドイッチマン」（鶴田）、「赤と黒のブルース」（鶴田）、「夜霧のブルース」（鶴田）、「別れのブルース」（淡谷・鶴田）、「雨のブルース」（淡谷）

④　男の哀愁を歌い続けて二十年の鶴田浩二と、”ブルースの女王”淡谷のり子の大ベテラン二人を特別ゲストに迎え、ほかに都はるみ、菅原洋一らのメンバーで送る。

第一部は「ヒット曲集」、第二部は「鶴田浩二・男の哀愁」、第三部は「ブルース談義」を展開。

鶴田は「ハワイの夜」「街のサンドイッチマン」「赤と黒のブルース」を歌う。また、独特のポーズのいわれ、歌い始めた動機などについて話す。

淡谷は「雨のブルース」などを歌うほか、鶴田を交えてブルース談義を展開する。途中、鶴田に先輩ディック・ミネから「夜霧のブルース」を歌ってほしいとの突然の電話が入り、リクエストに感激しながら「夜霧のブルース」を哀愁をこめて披露。

最後は、「別れのブルース」を、一番を淡谷が、二番を鶴田がそれぞれ歌う。

昭和４８年１２月２４日

①「競演！おんなの流行歌」　＃１１７

②樫山文枝、朝丘雪路、伊東ゆかり、青江三奈、和田アキ子、曽根幸明、克美茂

③「五木の子守唄」（樫山）

④　朝丘雪路、伊東ゆかり、青江三奈、和田アキ子らの出演で、歌で綴る”戦後女性風俗史”を展開。

また、このほど「私の子守唄」というＬＰを出し歌手の仲間入り？とうわさされた民芸の樫山文枝

が”歌手”として初出演、熱のこもったナレーションを交えて「五木の子守唄」などを披露する。テレビで歌うのは初めてで、おまけにベテラン歌手に囲まれてあがりっぱなし。マイクの前に立ったとたん足はガクガク、体はブルブル。

昭和４８年１２月３１日

①「'73年ハイライト・栄光の歌声」　＃１１８

②ディック・ミネ、高峰三枝子、鶴田浩二、加藤登紀子、田端義夫、渡辺はま子、藤山一郎、都はるみ、富永一朗、戸川昌子、殿さまキングス、並木ひろしとタッグマッチ

③

④　マンガ家富永一朗、作家の戸川昌子を特別ゲストに迎える。
　第一部は“73年のハイライト特集”で、今年この番組で話題になった場面をビデオで再現、司会の山口淑子、藤原弘達、ゲストの富永、戸川が大いに歌を語り、人生を論じる。
　第二部は、殿さまキングス、並木ひろしとタッグマッチらの出演で“年忘れリクエスト合戦”。

昭和４９年１月７日

①「演歌の真髄！花の三人衆」　＃１１９

②三波春夫、北島三郎、水前寺清子

③

④　三波春夫、北島三郎、水前寺清子の演歌三エースが新年のあいさつ。
“サブちゃんとチータのまた旅演歌名曲集”と“三波春夫ヒット曲集”、その後、タキシード、マキシ姿でヒット曲パレード。

昭和４９年１月１４日

①「競演！なみだ唄別れ唄」　＃１２０

②水原弘、西郷輝彦、ちあきなおみ、八代亜紀、ディック・ミネ

③

④　八代亜紀らで、なみだ唄、別れ唄の競演。司会の藤原弘達が、新著「藤原弘達人生ルポ・失恋のすすめ」にちなんで、失恋の思い出を語る。

昭和４９年１月２１日

①「マドロス演歌決定版！」　＃１２１

②田端義夫、藤島桓夫、松山恵子、藤圭子、ぴんから兄弟

③「麦と兵隊」（田端）、「カタカナ忠義」（田端）、「玄海ブルース」（不明）

④　第一部はマドロス姿で登場した藤島桓夫、藤圭子、ぴんから兄弟らが繰り広げる“マドロス演歌決定版”。マドロスものがヒットした年には、海や船の大事故が起きているという因縁話も出る。
第二部は“田端義夫思い出の戦時歌謡”で「麦と兵隊」「カタカタ忠義」などを歌う。

昭和４９年１月２８日
①「望郷・ふるさと演歌」　＃１２２
②春日八郎、三橋美智也、島倉千代子、青江三奈、東京ロマンチカ
③「山の吊橋」（春日）、「雪国の女」（春日）、「おさげと花と地蔵さんと」（三橋）、「りんどう峠」（島倉）
④　「望郷・ふるさとの歌」の特集。昨年秋のリサイタル「演歌とは何だろう」で芸術祭大賞を受けた春日八郎を特別ゲストに迎える他、三橋美智也、島倉千代子、青江三奈、東京ロマンチカなどベテランを揃え、二部構成でそれぞれのヒット曲を送る。
　第一部“望郷・ふるさと演歌”では、島倉が「りんどう峠」、三橋が「おさげと花と地蔵さんと」、春日が「山の吊橋」などを歌い、故郷の思い出を語る。
　続く第二部”藤原弘達歌謡放談”は、春日、島倉らのデビュー曲紹介と当時の世相を解説。

昭和４９年２月４日
①「美空ひばり忘れじの歌」　＃１２３
②美空ひばり、ディック・ミネ
③「私は街の子」（美空）、「港町十三番地」（美空）、「柔」（美空）、「悲しい酒」（美空）、
「波止場だよお父つぁん」（美空）、「ある女の詩」（美空）、「旅姿三人男」（美空）、
「悲しき口笛」（美空）、「黒い微笑」（美空）、「旅姿三人男」（ディック）
④　美空ひばりのヒット曲で綴る戦後史。
　初共演のディック・ミネとのデュエットを交え、「悲しき口笛」から久々の新曲「黒い微笑」まで十三曲を歌い上げる。
　三部構成で、美空、ディックのヒット曲と、美空のヒット曲を年代順に聞きながら、時代背景を藤原弘達が分析してゆく。
　曲は「私は街の子」「港町十三番地」「柔」「悲しい酒」「波止場だよお父つぁん」「ある女の詩」ほか、デュエットで「旅姿三人男」。

昭和４９年２月１１日
①「サブちゃんはるみのおしどり道中」　＃１２４
②北島三郎、都はるみ、フランク永井、松尾和子、霧島昇
③「鶯鳥道中」（北島・都）、「名月赤城山」（北島）、「兄弟仁義」（北島）、「はるみの三度笠」（都）、
「君待てども」（フランク）、「涙の乾杯」（フランク）、「東京ナイトクラブ」（フランク・松尾）、
「ワン・レイニィナイト・イン・東京」（松尾）、「旅の夜風」（霧島昇）
④　演歌の人気者、北島三郎と都はるみ、ムード歌謡のベテラン、フランク永井と松尾和子、そして特別ゲストに霧島昇というバラエティーに富んだ顔ぶれで”歌うカップル”をテーマに戦前戦後のヒットメロディーを特集。
　第一部は、北島、都の出演で“サブちゃん、はるみのおしどり道中”。二人のデュエット「鶯鳥道中」をはじめ、北島が「名月赤城山」「兄弟仁義」、都が「はるみの三度笠」などを歌う。
　第二部は”藤原弘達歌謡放談”。特別ゲストに霧島を迎え、戦前大ヒットさせた「旅の夜風」などを聞きながら、当時の社会情勢などを藤原が解説する。

第三部は“フランク、松尾、都会の夜を歌う”。フランクが「君待てども」「涙の乾杯」を、松尾が「ワン・レイニィナイト・イン・東京」を歌う。また、デュエットで「東京ナイトクラブ」を。

昭和４９年２月１８日

①「大勝負・男の演歌」　＃１２５

②五木ひろし、春日八郎、村田英雄、畠山みどり、遠藤実

③「男なら」（五木）、「いっぽんどっこの唄」（春日）、「王将」（村田）、「出世街道」（畠山）、「星影のワルツ」（遠藤）、「浅草姉妹」（遠藤）

④　五木ひろし、春日八郎、病癒えてカムバックした村田英雄、畠山みどりらに加え、最近ＬＰを吹き込んだ作曲家遠藤実が新人歌手として出演、演歌の精神を語る。

まず、“大勝負・男の演歌”で村田が「王将」、畠山が「出世街道」、五木が「男なら」、春日が「いっぽんどっこの唄」などを歌う。

続いて”藤原弘達歌謡放談”で、遠藤が自作の「星影のワルツ」や「浅草姉妹」を歌う。

昭和４９年２月２５日

①「栄光のビッグヒット」　＃１２６

②島倉千代子、近江俊郎、小畑実、奈良光枝、三浦洸一、菅原都々子、大津美子

③「緑の地平線」（近江）、「勘太郎月夜唄」（小畑）、「赤い靴のタンゴ」（奈良）、「東京の人」（三浦）、「サーカスの唄」（三浦）、「マロニエの木陰」（大津）

④　昭和２０年代から３０年代にかけてのヒット曲を中心に、ベテラン歌手七人が競演する。

第一部は「栄光のビッグヒット」で、歌い終わった歌手が次の人の司会を務めるリレー司会が見もの。

第二部は昭和初期のヒット曲を集めた”藤原弘達歌謡放談”。三浦洸一が「サーカスの唄」、近江俊郎が「緑の地平線」、大津美子が「マロニエの木陰」を歌い、藤原が当時の時代背景を解説する。

昭和４９年３月４日

①「ああ青春に涙あり」　＃１２７

②橋幸夫、坂本九、佐良直美、ちあきなおみ、藤山一郎

③「いつでも夢を」（橋）、「丘を越えて」（佐良）、「青い山脈」（藤山）

④　橋幸夫、坂本九、佐良直美、ちあきなおみ、それに特別ゲストに藤山一郎を迎え、明治から現代までの青春ソングを特集する。

第一部は“ああ青春に涙あり”で、曲は橋の「いつでも夢を」、佐良の「丘を越えて」ほか。

第二部“歌謡放談”では藤山が「青い山脈」ほかの青春歌謡三部作を歌い、時代背景を藤原弘達が解説。

第三部は“明治の青春ソング”。

昭和４９年３月１１日

①「石原裕次郎・夜のロマンを歌う」　＃１２８

②石原裕次郎、青江三奈、和田弘とマヒナスターズ、黒沢明とロス・プリモス

③「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、「港町・涙町・別れ町」（石原）、「銀座の恋の物語」（石原・青江）、「酒は涙か溜息か」（石原）

④　石原裕次郎、青江三奈、マヒナスターズ、ロス・プリモスら”夜のムード派”歌手が、それぞれのヒット曲を披露する。

第一部“石原裕次郎夜のロマンを歌う”では、石原が「夜霧よ今夜も有難う」「港町、涙町、別れ町」や、青江とデュエットで「銀座の恋の物語」など、石原のヒット曲の数々。

第二部では、マヒナスターズとロス・プリモスが”夜のムード派”競演。また、石原が「酒は涙か溜息か」など古賀メロディーで締めくくるのも話題。

昭和４９年３月１８日

①「夜の盛り場流し唄」　＃１２９

②青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ、藤圭子、田端義夫、阿部徳二郎、渡辺栄三

③「盛り場ブルース」（不明）、「国境の町」（不明）、「島育ち」（田端）、「大利根月夜」（田端）

④　演歌のベテラン田端義夫を始め、青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ、藤圭子ら演歌歌手の顔合わせ。

第一部は青江、藤、クール・ファイブによる「夜の盛り場流し唄」で、曲は「盛り場ブルース」ほか。

第二部は”藤原弘達歌謡放談”で、ゲストに流し生活三十年の阿部徳二郎を招き、流しの生活あれこれやリクエストの変遷を聞く。曲は「国境の町」ほか。

第三部は“田端義夫ヒット曲コーナー”で、田端が「島育ち」「大利根月夜」などを歌う。

昭和４９年３月２５日

①「艶姿花の恋唄」　＃１３０

②三橋美智也、三浦布美子、市丸、榎本美佐江、笹みどり、大月みやこ

③「湯島の白梅」（三浦・市丸・榎本）、「お駒恋姿」（大月）、「お夏清十郎」（笹）、「十三夜」（三橋）

④　今夜は趣向を凝らして日本調歌絵巻を披露する。ベテラン市丸を筆頭にあでやかな和服姿の三浦布美子、榎本美佐江、大月みやこ、笹みどりが勢揃い。”黒一点”？の三橋美智也を交え、おなじみの曲を聞く。

まず“艶姿花の恋唄”と題し三浦、榎本、市丸が「湯島の白梅」、大月が「お駒恋姿」、笹が「お夏清十郎」、三橋が「十三夜」などを歌う。ほかに幕末にちなんだ歌を披露したり、「むらさき小唄」「祇園小唄」など”○○小唄”とつく歌を特集する。歌の合間に、日本髪の種類や衣装選びの苦心談が語られる。女性にとっては興味あるところ。

”藤原弘達歌謡放談”は、歌謡曲の原点とも言われる「トンヤレ節」の解説。

数人の美女に囲まれてご機嫌なのは司会の藤原弘達。「春宵一刻値千金。こんな番組なら毎日でもいいね」に、ゲストの三浦は「でも先生、肝心のものが抜けているんじゃありません？」。「いやあ、

よくわかって下さった。灘の生一本の味というところですかな。あなたの手でシャクを一つ……」と弘達先生、わるのり。

昭和４９年４月１日
①「演歌！旅…そして別れ」　＃１３１
②尾崎紀世彦、北島三郎、ペギー葉山、ダーク・ダックス
③
④

第132回～第182回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和49年4月　8日～ 昭和50年3月24日	月	21時00分～ 21時55分

司会：加東大介　（第132回～178回、182回）
　　池坊保子　（第132回～141回）
　　河内桃子　（第142回～143回、147回～182回）
　　松島トモ子（第144回～146回）

レギュラーゲスト：ディック・ミネ（第132回～182回）

ナレーター：芥川隆行（12月31日）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和４９年４月８日

①「唄祭り花の道中双六」　＃１３２

②高田浩吉、春日八郎、都はるみ、三沢あけみ

③「伊豆の佐太郎」（高田）、「春日八郎」（春日）、「人生の並木路」（ディック）

④　春日八郎、都はるみ、三沢あけみ、高田浩吉の出演で”花”にちなんだ歌を三部構成で送る。

今回から加東大介、池坊保子が司会を担当。池坊は華道家元・池坊専永夫人で、話題作「夫とつき合う法」の著者。また、ディック・ミネがレギュラーゲストとして豊富な体験に基づく歌謡談義を展開する。

なお、同年５月５日付読売新聞東京版朝刊には、「司会者選び慎重に」とのタイトルで、２８歳主婦の以下の投書が紹介されている。

ＮＥＴテレビ「にっぽんの歌」の月曜日の司会者、池坊保子さんは、どうも司会者には不適格だと思う。司会者選びは、単に有名人だから、というのではいただけない。

昭和４９年４月１５日

①「勝負！演歌対艶歌」　＃１３３

②水前寺清子、五木ひろし、八代亜紀、西来路ひろみ、桜井敏雄

③「忠治子守唄」（水前寺）、「名月赤城山」（五木）、「金色夜叉」（桜井）、「籠の鳥」（桜井）

④　水前寺清子、五木ひろし、八代亜紀、西来路ひろみと、いずれも演歌一筋の顔ぶれに加え、流し生活五十年という演歌師・桜井敏雄を迎え、演歌または艶歌を解剖する。

第一部は“勝負！演歌対艶歌”で、五木の「名月赤城山」、水前寺の「忠治子守唄」と演歌のスタンダードが聴ける。

第二部は“明治大正演歌特集”。バイオリン片手に流し生活五十年の桜井が登場。得意の曲「金色夜叉」「籠の鳥」を披露。

第三部は“ディック・ミネの歌謡こぼれ話”。

昭和４９年４月２２日

①「ああ思い出の抒情演歌」　＃１３４

②ちあきなおみ、菅原洋一、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎

③「誰か故郷を想わざる」（ちあき）、「湖畔の宿」（菅原）、「南の島に雪が降る（替え歌）」（加東）、「マノクワリ（「ラバウル小唄」の替え歌）」（加東）、「踊子」（不明）、「あざみの歌」（不明）

④　”紅一点”のちあきなおみを囲んで菅原洋一、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎らが出演、戦前戦後の抒情演歌を特集する。

第一部は“ああ思い出の抒情演歌”で、ちあきが「誰か故郷を想わざる」、菅原が「湖畔の宿」、岡本が「白い花の咲く頃」など日本人特有のセンチメンタリズムを歌い、これらのメロディーについて出演者一同が思い出や感想を語り合う。

第二部“ディック・ミネ歌謡談義”は、昭和初期に隆盛をきわめたダンスホールの思い出話や現在のファッションとそっくりの当時のモボ・モガ風俗などが紹介される。

他にレギュラーのディック・ミネのデビュー秘話や、司会の加東大介が「南の島に雪が降る」の替

え歌や、「ラバウル小唄」の替え歌で「マノクワリ」を歌い、兵隊時代にいた南の島マノクワリを偲ぶ。

昭和４９年４月２９日
①「演歌・男の花道」　＃１３５
②三橋美智也、村田英雄、都はるみ、三善英史、鶴岡雅義と東京ロマンチカ
③「ああ田原坂」（三橋）、「侍ニッポン」（村田）、「白虎隊」（三善）
④　演歌のベテラン三橋美智也、村田英雄、都はるみに加え、モダン演歌とも言うべき三善英史、鶴岡雅義と東京ロマンチカらが演歌の数々を披露する。
　第一部では、三橋が「ああ田原坂」、村田が「侍ニッポン」、三善が「白虎隊」などを歌う。

昭和４９年５月６日
①「競演！夜の恋唄なみだ唄」　＃１３６
②霧島昇、天知茂、松尾和子、青江三奈、渚ゆう子
③
④　大ベテラン霧島昇を特別ゲストに、戦前の映画主題歌と、それにまつわるエピソードを紹介する。
　また、この番組三回目の出演になる天知茂が、ディック・ミネ、松尾和子、青江三奈と、それぞれデュエットを披露するのが見もの。

昭和４９年５月１３日
①「慕情・ふるさとの詩」　＃１３７
②倍賞千恵子、春日八郎、フランク永井、由紀さおり、克美茂
③「下町の太陽」（倍賞）、「あん時ゃどしゃ降り」（春日）、「大阪ぐらし」（フランク）
④　倍賞千恵子、由紀さおり、春日八郎、フランク永井、克美茂らを迎え、ふるさとにちなんだ歌とブルースを特集する。
　第一部“慕情・ふるさとの詩”では、倍賞が「下町の太陽」、フランクが「大阪ぐらし」、春日が「あん時ゃどしゃ振り」などを歌い、合間にそれぞれ故郷の思い出を語る。
　第二部では、ディック・ミネがブルースについて話し、フランクや由紀がブルースのヒット曲を披露する。

昭和４９年５月２０日
①「艶歌・盛り場仁義」　＃１３８
②森進一、北島三郎、ちあきなおみ、藤圭子
③「旅姿三人男」（森・北島・ディック）
④　森進一、北島三郎、ディック・ミネが競演する「旅姿三人男」を始め、戦前・戦後の演歌のヒット曲を特集する。

ディック・ミネは「いい歌はすぐれた歌手が次々に歌いついで行ってこそ生き続けるのだ」と歌謡哲学を披露。

昭和４９年５月２７日

①「石原裕次郎ビッグヒットに挑戦！」　＃１３９

②淡谷のり子、菊池章子、二葉あき子、八代亜紀、石原裕次郎

③「小さな竹の橋の下で」（石原・ディック）、「雨のブルース」（不明）、「星の流れに」（不明）、「フランチェスカの鐘」（不明）、「赤いハンカチ」（不明）

④　石原裕次郎、菊池章子、二葉あき子、八代亜紀、それに特別ゲストの淡谷のり子を加えたメンバーの出演で、戦前戦後の名曲といわれた歌を歌う。

第一部は“石原裕次郎ビッグヒットに挑戦！”で、石原が昭和２２、２３年ごろのヒット曲を菊池、二葉らと競演する。

第二部“ディック・ミネ歌謡談義”は、”ブルースの女王”淡谷の歌と恋と人生を分析する。

他に、淡谷、菊池、二葉らが、昭和４０年代のヒット曲を歌ったり、菊池らが戦争中の苦労話を披露する。

昭和４９年６月３日

①「ああ、想い出のロマン歌謡」　＃１４０

②灰田勝彦、青江三奈、菅原洋一、ペギー葉山、森山良子

③「燦めく星座」（灰田）、「新雪」（灰田）、「紫のタンゴ」（青江・菅原）、「鈴懸の径」（ペギー）、「森の小径」（森山良子）

④　“ああ、思い出のロマン歌謡”と題して、暗い戦争の谷間で若者たちに愛唱されたロマンチックな名曲の数々を特集する。出演は戦前派の大ベテラン灰田勝彦を始め、ペギー葉山、菅原洋一、青江三奈、森山良子ほか。

灰田が「燦めく星座」と映画主題歌「新雪」を、森山が「森の小径」、青江・菅原が「紫のタンゴ」、ペギーが「鈴懸の径」を歌う。

他に灰田が軍歌を披露する。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、昭和９年頃から盛んに日本に入ってきた外国の曲について解説する。

昭和４９年６月１０日

①「これが演歌だ！！」　＃１４１

②北島三郎、水前寺清子、田端義夫、島倉千代子

③「男の純情」（北島・水前寺・田端）、「妻恋道中」（北島）、「盃」（不明）、「どうどうどっこの唄」（不明）、「大利根月夜」（不明）、「哀愁のからまつ林」（不明）

④　北島三郎、水前寺清子、島倉千代子、それに戦前派のベテラン田端義夫を加えたメンバーで、昭和１０年代からの演歌を特集する。

芥川隆行のナレーションをはじめ、三味線、尺八、影絵とさまざまな趣向を凝らして演歌のムードを盛り上げる。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、ディック・ミネが演歌とは何か、演歌の魅力はどこにあるのか、など独自の演歌論を展開する。

曲目は「男の純情」を、北島、水前寺、田端の順で一番から三番まで競演するほか、「どうどうどっこの唄」「大利根月夜」ほか。

昭和４９年６月１７日

①「哀調切々…波止場旅情」　＃１４２

②都はるみ、三橋美智也、三沢あけみ、山田太郎、松山恵子

③「津軽じょんがら節」（三橋）、「涙の連絡船」（不明）、「あの娘が泣いてる波止場」（不明）、「港シャンソン」（不明）、「未練の波止場」（不明）

④　三橋美智也、都はるみ、三沢あけみ、山田太郎、松山恵子の顔ぶれで、波止場や船にちなんだ歌を送る。

三橋が三味線修行当時の苦労話を語った後、マンボ風にアレンジした青森民謡「津軽じょんがら節」をバンドと合奏するのがみもの。

なお、この回から女性司会者が河内桃子に交代した。同年６月１５日付読売新聞東京版夕刊では以下のように紹介されている。

> ＮＥＴテレビ系「にっぽんの歌」では、十七日から女性司会者が池坊保子から河内桃子に交代する。
>
> 河内の歌番組司会はこれが初めて。収録のスタジオで「ナマの歌を聞けるなんて感激です」という。服装は黒地に白の水玉模様のあっさりとしたワンピース。これは「歌手の方が主役の番組。ステージ衣装がひきたつように」とベテランらしい配慮だ。
>
> 河内は「芝居の時とちがって、作らないナマの人間の部分を出していくところが司会者にとって大切なのでしょうね。私も素顔を出します」と語っている。

また、同年６月１７日付毎日新聞東京版夕刊においても、「歌はむかしから大好き。芝居と違い、つくらない自然のままの私でやっていきます」との意気込みが紹介されている。

昭和４９年６月２４日

①「演歌！男の涙・女の涙」　＃１４３

②村田英雄、扇ひろ子、いしだあゆみ、由紀さおり、大月みやこ

③「無法松の一生」（村田）、「新宿ブルース」（扇）、「緋牡丹ブルース」（扇）

④　今夜は、村田英雄、いしだあゆみ、由紀さおり、扇ひろ子、大月みやこの顔ぶれで送る。

“演歌！男の涙・女の涙”で、まず村田がおなじみ「王将」の魅力について司会の加東大介と語り合う。次いで、村田が５月に新宿コマ劇場で演じた”無法松の一生”の舞台を再現、主題曲「無法松の一生」をセリフと勇壮な祇園太鼓を打ち鳴らしながら歌うのがみどころ。辰巳柳太郎から伝授されたという、あざやかなバチさばきである。

そのあと、ハワイ永住をとりやめ２年ぶりに歌謡界にカムバックした扇ひろ子が登場。ハワイでの苦しい体験談や復帰の心境などを語り、新曲「緋牡丹ブルース」を披露する。

昭和４９年７月１日
①「競演！艶歌の祭典」　＃１４４
②春日八郎、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、ぴんから兄弟
③「赤いランプの終列車」（春日）、「女のみち船頭唄」（三橋）、「アンコ椿は恋の花」（都）、「恍惚のブルース」（青江）、「女のみち」（ぴんから兄弟）、「ダイナ」（ディック）
④　初めてスタジオを離れ、愛知県勤労会館から録画中継で。また、舞台公演のため司会を休む河内桃子の代役として、松島トモ子が登場。出演は春日八郎、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、ぴんから兄弟。
　第一部は出演歌手のデビュー曲と、ふるさとを歌った曲を特集する。曲は「アンコ椿は恋の花」「女のみち」「恍惚のブルース」「おんな船頭唄」「赤いランプの終列車」。当時の思い出も語る。
　続く“ミネ・コーナー”は、ディック・ミネが４０年前のデビュー曲「ダイナ」を歌い、吹き込み風景など珍しい話を披露。

昭和４９年７月８日
①「あの日あの歌光のステージ」　＃１４５
②水原弘、水前寺清子、美川憲一、伊東ゆかり、藤山一郎
③**（出演順）**「黒い花びら」（水原）、「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）、「柳ヶ瀬ブルース」（美川）、「小指の思い出」（伊東）、「なつかしの歌声」（藤山）、「上海ブルース」（水前寺・ディック）、「上海の街角で」（水原）、「上海の花売娘」（水前寺）、「上海リル」（ディック・水原）、「長崎の鐘」（藤山）、「酒は涙か溜息か」（伊東、美川、藤山）、「東京ラプソディ」（藤山）、「人生ブルース」（水前寺）、「ナナという女」（美川）、「季節風」（伊東）、「港はまだ遠い」（水原）
④　水原弘、水前寺清子、美川憲一、伊東ゆかり、それに特別ゲストの藤山一郎を加えたメンバーで、戦前戦後のヒット曲を特集する。
　”ディック・ミネ歌謡談義”は、歌謡曲のひとつのジャンルにもなった”上海もの”の特集。曲目は、水前寺、ディック・ミネが「上海ブルース」、水原が「上海の街角で」、水前寺が「上海の花売娘」、ディック、水原で「上海リル」。
　ゲストの藤山の東京銀座の回顧話もある。
　また、藤山とディックが、古き良き時代の思い出話をする。
　司会は先週に引き続き松島トモ子が務める。

昭和４９年７月１５日
①「歌絵巻花の競艶」　＃１４６
②三波春夫、朝丘雪路、ちあきなおみ、藤圭子
③**（出演順）**「チャンチキおけさ」（三波）、「祇園小唄」（ちあき）、「明治一代女」（藤）、「すみだ川」（朝丘）、「雪の渡り鳥」（三波）、「名月赤城山」（三波）、「忠太郎月夜」（三波）、「二人は若い」（ディック・朝丘・ちあき）、「忘れちゃいやよ」（ちあき）、「ああそれなのに」（朝丘）、「望郷の唄」（ディック）、「私は京都へ帰ります」（藤）、「円舞曲」（ちあき）、「ごめんなさい」（朝丘）、「笠飛び峠」（三波）
④　司会は先々週、先週に引き続き松島トモ子が務める。

昭和４９年７月２２日
①「郷愁のうた愛の詩集」　＃１４７
②石原裕次郎、青江三奈、松尾和子、淡谷のり子、不明
③「ボエマ」（淡谷）、「雨の夜は」（淡谷）、「港が見える丘」（不明）、「グッド・ナイト」（不明）、「別れのブルース」（不明）、「俺は待ってるぜ」（不明）、「人の気も知らないで」（不明）
④　石原裕次郎をメインゲストに迎え、松尾和子、青江三奈、淡谷のり子とのデュエットで、戦前戦後のヒット曲を送る。クラブ出身の松尾、青江が石原とからんで大人のムードで送る。
　他に、淡谷が昔なつかしいシャンソン・メドレーを披露し、故藤田嗣治画伯の思い出や、シャンソン草創期のエピソードを語る。
　曲は「グッド・ナイト」「別れのブルース」「俺は待ってるぜ」の他、故藤田嗣治画伯が淡谷のために訳詞したという「雨の夜は」も登場。淡谷は「雨の夜は」をしみじみと歌う。

昭和４９年７月２９日
①「真髄！演歌の心」　＃１４８
②五木ひろし、田端義夫、島倉千代子、フランク永井
③
④

昭和４９年８月５日
①「演歌！望郷の詩男の唄」　＃１４９
②春日八郎、村田英雄、都はるみ、倍賞千恵子、三田明
③「誰か故郷を想わざる」（都）、「お月さん今晩は」（春日）、「山の吊り橋」（春日）、「あざみの歌」（倍賞）、「湖底の故郷」（三田）、「人生劇場」（春日・村田・ディック）、
④　今夜は、春日八郎、村田英雄、都はるみ、倍賞千恵子、三田明の顔ぶれでふるさと演歌、任侠演歌の数々を送る。また、曲の合間にはふるさとの思い出や、曲のエピソードを語る。倍賞は、ＬＰ「日本の歌」の第四集を出したところ。
　春日、村田、ディック・ミネの豪華トリオによる「人生劇場」などが見もの。
　第一部は“演歌！望郷の詩男の唄”で、旧盆帰省のシーズンにちなんでふるさとをしのぶ歌を特集。曲目は、都が「誰か故郷を想わざる」、春日が「お月さん今晩は」と「山の吊り橋」、倍賞が「あざみの歌」、三田が「湖底の故郷」など。
　なお、同年８月１２日付読売新聞東京版朝刊に、「ほめ合うのも程々に」とのタイトルで、４７歳の男性視聴者からの以下の投書が掲載されている。

> 先日のＮＥＴ「にっぽんの歌」（月曜後９・００）で、ディック・ミネと村田英雄が、盛んに相手をほめ合っていた。これは美しいことであるはずなのに、度が過ぎると耳ざわりになる。最近、古い人と中堅が組むとよくみられる情景である。

昭和４９年８月１２日
①「１５０回記念特集・勢揃い！紅白歌祭り（前編）」　＃１５０
②霧島昇、渡辺はま子、藤山一郎、市丸、近江俊郎、織井茂子、岡本敦郎、菊池章子、三浦洸一、
奈良光枝、菅原洋一、ぴんから兄弟、ちあきなおみ、由紀さおり、高島忠夫
③
④　今週と来週の２回にわたり、本番組１５０回を記念して、豪華メンバーによる紅白歌祭りを送る。
番組はパーティー形式で進行、男女１４人ずつ計２８人が紅白に分かれてヒット曲を歌い、思い出話や近況を語り合う。また、前司会者の高島忠夫が特別ゲストとして本職歌手に混じって歌を披露するのが話題。

昭和４９年８月１９日
①「１５０回記念特集・勢揃い！紅白歌祭り（後編）」　＃１５１
②渡辺はま子、藤山一郎、奈良光枝、岡本敦郎、菅原洋一、ペギー葉山、菊池章子、榎本美佐江、
ぴんから兄弟、由紀さおり、高島忠夫
③
④　先週に引き続いて、紅白に分かれた出演者３０人が、それぞれの代表的ヒット曲を歌う。
今回は、交通事故で入院していた菊池章子が事故以来はじめて歌声を聴かせるほか、特別ゲストの高島忠夫がディック・ミネのものまねを軽妙に演じる。

昭和４９年８月２６日
①「こまどり姉妹涙のカムバック！」　＃１５２
②こまどり姉妹、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、遠藤実
③
④　こまどり姉妹、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、それに特別ゲストの作曲家遠藤実を迎えて、数々のヒット曲を特集する。
妹葉子の重病を乗り越えて、４年ぶりにカムバックしたこまどり姉妹の苦難や、再起の抱負を伝える。また、そのこまどり姉妹の歌や、”大正演歌”特集で松井須磨子の「ゴンドラの唄」のレコード紹介など、庶民の悲しみをこめた演歌を披露する。
また、こまどり姉妹の再起を祝福して遠藤が自作の詩を朗読。

昭和４９年９月２日
①「艶くらべ夜の花街ネオン街」　＃１５３
②高田浩吉、三浦布美子、由紀さおり、バーブ佐竹、伊東ゆかり、黒沢明とロス・プリモス
③「大江戸出世小唄」（高田）
④　ディック・ミネが戦前の花街と戦後のネオン街の違いにガクを示せば、高田浩吉も４０年前の「大江戸出世小唄」を艶やかに歌う。

昭和４９年９月９日
①「望郷・我が心のうた」　＃１５４
②霧島昇、春日八郎、島倉千代子、内山田洋とクール・ファイブ、西来路ひろみ
③「アイルランドの娘」（ディック）、「月光価千金」（ディック）
④　霧島昇、春日八郎、島倉千代子のベテラン３人に、内山田洋とクール・ファイブ、西来路ひろみを加え、ふるさとを偲ぶ歌を特集。
　また、ディック・ミネが、昭和１０年前後に大ヒットした「アイルランドの娘」「月光価千金」などを披露する。ディックは、今夜は”若き日のジャズ”をたっぷり聴かせるとあって大ハッスル。ところが、この本当の秘密は、同番組が３か月遅れでアメリカで放送されており、在米の子どもたちや孫が楽しみにしているため。先日も「子どもが、おじいちゃん出ているよ、と大はしゃぎだったワ」と長女から国際電話があったそうで、”青年歌手”を自負する彼も、孫には弱い、とはスタッフの声。

昭和４９年９月１６日
①「花の演歌大競演！」　＃１５５
②美空ひばり、北島三郎、五木ひろし
③
④

昭和４９年９月２３日
①「再起！舟木一夫我が心の歌」　＃１５６
②舟木一夫、ちあきなおみ、都はるみ、三沢あけみ、丘灯至夫、市川昭介
③「高校三年生」（舟木）、「学園広場」（舟木）
④　このほどカムバックした舟木一夫が登場、デビュー曲「高校三年生」「学園広場」などのヒット曲を歌うほか、都はるみ、ちあきなおみ、三沢あけみが”さすらい”をテーマにした曲を歌う。
　また、舟木の歌を数多く手がけている作詞家丘灯至夫、作曲家市川昭介の両氏が特別出演、舟木にはなむけの言葉を贈る。

昭和４９年９月３０日
①「高峰三枝子郷愁の詩愛の詩」　＃１５７
②高峰三枝子、春日八郎、由紀さおり、ダーク・ダックス
③「湖畔の宿」（不明）、「高原の旅愁」（不明）、「懐しのブルース」（不明）、「別れのタンゴ」（不明）
④　高峰三枝子を特別ゲストに、「郷愁の詩・愛の詩」「戦後の映画主題歌集」を特集する。
　曲は、「湖畔の宿」「高原の旅愁」「懐しのブルース」「別れのタンゴ」ほか。

昭和４９年１０月７日
①「真髄・ど根性演歌」　＃１５８
②村田英雄、こまどり姉妹、一節太郎、びんから兄弟、畠山みどり
③「夢がふたたびもどるまで」（こまどり）
④　村田英雄、こまどり姉妹、びんから兄弟、畠山みどりらが出演、”ど根性演歌”を歌いまくる。
　先日この番組でカムバック第一声を放ったこまどり姉妹が、妹が作詞、姉が作曲した新曲「夢がふたたびもどるまで」を初公開する。

昭和４９年１０月１４日
①「競演！不滅の歌謡名作集」　＃１５９
②石原裕次郎、水前寺清子、ちあきなおみ、島倉千代子
③「裏町人生」（石原・水前寺）、「恋の曼珠沙華」（石原）・ちあき、「胸の振子」（石原・島倉）
④　石原裕次郎を囲む三人の女性歌手という趣向で、島倉千代子、水前寺清子、ちあきなおみが出演、それぞれが石原と絡んで歌謡曲の名曲を歌う。水前寺とは「裏町人生」、ちあきとは「恋の曼珠沙華」、島倉とは「胸の振子」。
　他に東海林太郎メロディー特集。

昭和４９年１０月２１日
①「恋と涙のロマン艶歌」　＃１６０
②天知茂、藤山一郎、中条きよし、松尾和子、八代亜紀
③「東京行進曲」（松尾・中条・八代・天知）、「銀座ブルース」（天知・松尾）「夢淡き東京」（不明）、「新宿ブルース」（不明）
④　特別ゲストの藤山一郎を中心に、最近ＬＰを出して本格的に”歌うスター”の仲間入りをした天知茂、今年の当たり屋・中条きよし、八代亜紀、そして高校生・大学生に人気のある夜のムード歌手松尾和子を迎えて、都会調演歌を特集する。
　第一部は、松尾、中条、八代、天知が一番から四番まで歌う「東京行進曲」をはじめとして、赤坂、新宿、銀座など盛り場を歌ったヒット曲を紹介する。
　第二部は“藤山一郎コーナー”。デビュー時代を歌う。

昭和４９年１０月２８日
①「熱唱！バタヤン涙の人生」　＃１６１
②田端義夫、都はるみ、青江三奈、フランク永井
③「無情の夢」（田端）、「山は夕焼」（田端）、「浜千鳥」（田端）、「夢のゆりかご」（田端）
④　田端義夫、都はるみ、青江三奈、フランク永井の顔ぶれで、なつかしいヒット曲を歌う。
　第二部“田端義夫コーナー”では、田端が母や兄弟の思い出を語るとともに、幼時に父を亡くし、十人兄弟の苦しい生活の中、歌った愛唱歌を絶唱する。曲は、「無情の夢」「山は夕焼」「浜千鳥」「夢のゆりかご」。特に、一番かわいがってくれた姉が芸者に売られてゆく時、二人で歌ったという「浜千

鳥」には、本人はもとより司会の加東大介、河内桃子も思わず涙した。

昭和４９年１１月４日
①「大勝負！花の武士道」　＃１６２
②水前寺清子、五木ひろし、藤圭子、村田英雄、西川峰子
③「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）、「雪の渡り鳥」（五木）、「お島千太郎旅唄」（村田）
④　五木ひろし、水前寺清子、村田英雄、藤圭子、それに、このほど新宿音楽祭で金賞を獲得した西川峰子を迎える。
　第一部は”渡り鳥人生”を歌った「演歌の特集」。水前寺が「涙を抱いた渡り鳥」、五木が「雪の渡り鳥」、村田が「お島千太郎旅唄」ほかを歌う。
　第二部は、村田と水前寺の顔合わせ。九州出身の二人が、九州男児、九州おんなの特質を語り合う。
　“ディック・ミネ歌謡談義”は、家庭や母親を歌った曲の特集。

昭和４９年１１月１１日
①「忘れじの歌・女の哀愁」　＃１６３
②淡谷のり子、二葉あき子、菊池章子、松山恵子、菅原都々子、藤本二三代、不明
③「星の流れに」（菊池）、「月がとっても青いから」（菅原）、「十九の浮草」（松山）、「祇園小唄」（藤本）、「カスバの女」（不明）、「別れのブルース」（淡谷・ディック）、「古き花園」（二葉）、「君忘れじのブルース」（淡谷）
④　戦前から戦後にかけて活躍し、なお健在な女性歌手により、思い出の名曲を聞く。
　第一部は、菊池章子が「星の流れに」を、菅原都々子が「月がとっても青いから」を、藤本二三代が「祇園小唄」、松山恵子が「十九の浮草」を歌う。
　“ディック・ミネ歌謡談義”は、ディック・ミネと淡谷のり子が一緒に「別れのブルース」を歌った後、二葉あき子を交え、古き良き時代の歌手生活を偲ぶ。
　さらに二葉が「古き花園」を、淡谷が「君忘れじのブルース」を歌うなど、思い出の曲が披露される。

昭和４９年１１月１８日
①「忘れじの歌・男の涙」　＃１６４
②小畑実、藤島桓夫、三浦洸一、三船浩、若山彰、城卓矢、北原謙二
③「勘太郎月夜唄」（小畑）、「月の法善寺横町」（藤島）、「落葉しぐれ」（三浦）、「男のブルース」（三船）、「喜びも悲しみも幾歳月」（若山）、「骨まで愛して」（城）、「旅姿三人男」（ディック・城・北原）
④　先週の「忘れじの歌・女性歌手編」に続き、「男性編」を。出演は小畑実、藤島桓夫、三浦洸一、三船浩、若山彰、城卓矢、北原謙二。それぞれなつかしいヒット曲の他、持ち歌以外の好きな歌を歌うのが見どころ。
　小畑の「勘太郎月夜唄」で幕開け、藤島の「月の法善寺横町」。三浦の「落葉しぐれ」と続く。また、低音ブームのはしりともいえる三船は「男のブルース」を、若山は映画主題歌「喜びも悲しみも幾年

月」。

“歌謡談義”に城、北原が登場する。城は元ウエスタン歌手、北原は元ロカビリー歌手だっただけに、ジャズ畑の大先輩のディック・ミネの提案で、ポップス調に編曲した「旅姿三人男」を三人で楽しく歌う。

同年１２月７日付読売新聞東京版朝刊に「態度疑う城卓也」と題する以下の視聴者からの投書が掲載されているが、同様の投書が３通届いたとのこと。

> ＮＥＴテレビ「にっぽんの歌」（月曜後９・００）に出た城卓也の態度はなんですか。彼の唯一のヒット曲「骨まで愛して」を、レコードを流して口をぱくぱくさせるとは――。しかも口と歌詞が合わず、何のためにテレビに出たのでしょうか。

昭和４９年１１月２５日

①「演歌！愛と涙の遠藤メロディー」　＃１６５

②舟木一夫、こまどり姉妹、三田明、ペギー葉山、遠藤実

③「未練ごころ」（こまどり）、「花咲く乙女たち」（舟木）、「上海ブルース」（三田）

④　舟木一夫、こまどり姉妹、三田明、ペギー葉山、それに特別ゲストとして作曲家の遠藤実を迎える。

第二部は「演歌！愛と涙の遠藤メロディー」。遠藤の指揮で、こまどりが「未練ごころ」、舟木が「花咲く乙女たち」を歌った後、遠藤の門下生でもある舟木とこまどりから見た遠藤のプロフィールや、師から見たこまどり、舟木の素顔、流しから今日の地位を築いた遠藤の人生観、ヒット曲作りの秘密、下積み時代の苦労などを話す。また、舟木とこまどりは、歌手としての遠藤とデュエットする。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、三田がディックのヒット曲「上海ブルース」を物まねで披露、”本家”をびっくりさせる。

ほかに”別れ”をテーマにした曲を特集する。

昭和４９年１２月２日

①「艶歌！港、マドロス、なみだ唄」　＃１６６

②植木等、都はるみ、春日八郎、ちあきなおみ、野村真樹、阿部徳二郎

③「スーダラ節」（植木）、「ハイそれまでよ」（植木）

④　すっかりドラマづいて歌にご無沙汰している植木等が久しぶりの歌番組出演。昭和３６年に爆発的な人気を呼んだ「スーダラ節」の名調子を身振り手振りで聞かせる。

昭和４９年１２月９日

①「男なみだのアキラ節」　＃１６７

②小林旭、水前寺清子、伊東ゆかり、園まり、灰田勝彦

③「ギターを持った渡り鳥」（小林）、「男なら」（小林）、「唐獅子牡丹」（小林）、「北帰行」（小林）、「恋すすき」（小林）、「男でよいしょ」（水前寺）、「島原地方の子守唄」（水前寺）、「琵琶湖周航の歌」（伊東）、「面影のワルツ」（園）、「新雪」（全員）

④　小林旭、水前寺清子、伊東ゆかり、園まり、灰田勝彦の顔ぶれで。

小林が、かつて大ヒットした日活映画「渡り鳥シリーズ」のテーマ曲「ギターを持った渡り鳥」ほかの”アキラ節”を高音で披露。

また、水前寺が「島原地方の子守唄」、伊東が「琵琶湖周航の歌」など、”ふるさとの歌”を特集。

同日付朝日新聞東京版朝刊には、「今夜の『男なみだのアキラ節』の構成はまとまりが不足。灰田と小林をどう結びつけるか、といった配慮があっていいはず。時間のある歌手を集めてつなげるだけでは能がない。」との記者からの番組に対する意見が掲載されている。

昭和４９年１２月１６日

①「艶歌！わが故郷に涙して」　＃１６８

②五木ひろし、小柳ルミ子、青江三奈、東京ロマンチカ、田端義夫

③「瀬戸の花嫁」（不明）、「知床旅情」（小柳）、「長崎ブルース」（青江）、「かえり船」（田端）、「誰か故郷を想わざる」（五木）、「湖畔の宿」（青江）

④　五木ひろし、青江三奈、東京ロマンチカに、初出演の小柳ルミ子、特別ゲストの田端義夫を迎えた顔ぶれで、ご当地ソング、ふるさとの歌を特集する。

第一部はご当地ソングの特集。曲目は「瀬戸の花嫁」「知床旅情」「長崎ブルース」ほか。

第二部は、先日この番組で、貧しかった少年時代を語り、優しかった姉にまつわる悲しい思い出とともに、少年時代の愛唱歌を絶唱した田端義夫が登場。「あの放送をみて感動しました」という投書が殺到したが、その中から、小樽に住む主婦・渡辺恒子さんの引き揚げ者の苦しさをつづった手紙を紹介。渡辺さんのリクエストにこたえて、田端が歌う「かえり船」が涙を誘う。他に五木が「誰か故郷を想わざる」、青江が「湖畔の宿」をそれぞれ熱唱する。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、古賀政男メロディーを特集。

昭和４９年１２月２３日

①「宴歌・夜の恋街なさけ街」　＃１６９

②都はるみ、ちあきなおみ、三条正人、三橋美智也、江利チエミ

③「船頭可愛や」（江利）、「ひえつき節」（江利・三橋）、「さのさ」（江利・三橋）、「私の青空」（江利・ディック）「ゲイシャ・ワルツ」（都）、「まつの木小唄」（三条）、「お座敷小唄」（ちあき）

④　忘年会の季節だが、久しぶりに江利チエミ、三橋美智也、都はるみ、ちあきなおみ、三条正人の顔ぶれで、お座敷やバーなど宴席での愛唱歌を特集する。

江利は「船頭可愛や」などの独唱の他、三橋と民謡「ひえつき節」や得意の「さのさ」を、レギュラーのディック・ミネと「私の青空」をデュエットで歌うなど、活躍する。都は「ゲイシャ・ワルツ」ほかを、三条が「まつの木小唄」、それに、ちあきが「お座敷小唄」を歌う。

昭和４９年１２月３０日
①「夢の紅白大合戦！」　＃１７０
②春日八郎、都はるみ、村田英雄、青江三奈、舟木一夫、松尾和子、美川憲一、こまどり姉妹、
三橋美智也、畠山みどり
③「王将」（村田）、「三味線姉妹」（こまどり）、「柳ヶ瀬ブルース」（美川）、「恋は神代の昔から」（畠山）、
「好きになった人」（都）
④　スタジオからの生放送で、ベテラン歌手のなつかしのヒット曲を味わう。男性五人と一組、女性七人が紅白に分かれ、パーティー形式で交互に歌い、合間に司会の加東大介、河内桃子、ディック・ミネが軽妙なやりとりを見せる。

昭和４９年１２月３１日
①「さよなら'74 にっぽんの歌大全集・美空ひばりオン・ステージ」
②美空ひばり、北島三郎、都はるみ、金田正一、長門裕之
③
④　美空ひばりのヒット曲を中心に、美空が戦前戦後の”にっぽんの歌”のベスト曲３４曲を歌いまくる。新宿コマ劇場からの生中継。
　ナレーターは芥川隆行。
　なお、ＮＥＴテレビ（昭和５２年からはテレビ朝日）系列局では、昭和５２年まで大晦日の夜に美空ひばりのワンマンショーを放送していたが、タイトルに「にっぽんの歌」を冠したのはこの回のみである。
　この回を放送回にカウントすると、昭和５０年１２月２９日放送分「特集！２００回記念・歌まつり花の饗宴」が＃２００にならないため、カウントしないのが正しいものと推測した。

昭和５０年１月６日
①「競演！晴れ姿・花の三人衆」　＃１７１
②三波春夫、北島三郎、都はるみ
③「紀伊国屋文左衛門」（三波）
④　三波春夫、北島三郎、都はるみの顔ぶれで、演歌を特集する。
第一部は、股旅もの特集。
第二部は、三波がお得意の長編歌謡曲「紀伊国屋文左衛門」を浪曲入りで熱演する。
第三部はふるさと特集。

昭和５０年１月１３日
①「遠藤実・涙の人生演歌」　＃１７２
②田端義夫、春日八郎、ちあきなおみ、遠藤実
③「ふるさとの丘」（田端）、「出世船」（田端）、「お月さん今晩は」（春日）、「別れの一本杉」（春日）、
「星影のワルツ」（ちあき）、「カスバの女」（ちあき）、「別れ船」（遠藤）、「裏町人生」（遠藤）

④　田端義夫、春日八郎、ちあきなおみと、スペシャル・ゲストの作曲家・遠藤実を迎えて送る。
　遠藤が、流しの演歌師から売れっ子作曲家になるまでの苦闘の半生を、ヒット曲を交えてつづるのが話題。また、同氏の流し時代の同僚をはじめ、現役の流しなど十数人が登場する。

昭和５０年１月２０日
①「艶歌！哀愁の恋唄」　＃１７３
②水前寺清子、水原弘、島倉千代子、笹みどり、近江俊郎
③「艶歌」（水前寺）、「男の純情」（水前寺）、「ゴンドラの唄」（水原弘）、「天国に結ぶ恋」（笹みどり）、「愛のさざ波」（島倉千代子）、「別れの磯千鳥」（近江俊郎）、「誰か夢なき」（近江・水前寺）、「愛の灯影」（近江・笹）、「悲しき竹笛」（近江・島倉）、「或る雨の午後」（ディック・水原）
④　島倉千代子、水前寺清子、水原弘、笹みどりらベテラン歌手を迎え、演歌ならぬ”艶歌”の数々を歌う。
　水前寺が「艶歌」（昭和４３年）と「男の純情」（昭和１１年）、水原が「ゴンドラの唄」（大正５年）、笹が「天国に結ぶ恋」（昭和７年）、島倉が「愛のさざ波」（昭和４３年）、特別ゲストの近江俊郎が「別れの磯千鳥」（昭和２７年）。
　また、近江が終戦直後に大ヒットしたメロドラマ映画の主題歌から、水前寺と「誰か夢なき」（昭和２２年）、笹と「愛の灯影」（昭和２３年）、島倉と「悲しき竹笛」（昭和２１年）をそれぞれデュエットするのも見もの。
　”ディック・ミネ歌謡談義”は水原弘に近況を語ってもらう。ディックと水原は「或る雨の午後」をしみじみとデュエットする。

昭和５０年１月２７日
①「決定版！盛り場艶歌」　＃１７４
②森進一、都はるみ、水前寺清子
③「盛り場ブルース」（不明）、「銀座カンカン娘」（不明）、「流転」（不明）、「妻恋道中」（不明）、「一本刀土俵入り」（不明）
④　森進一、都はるみ、水前寺清子と、今やアブラの乗り切った演歌の実力派三人が登場、戦前・戦後のヒット曲を歌いまくる。
　特に、昨年、歌謡大賞、レコード大賞の”二冠王”となった森が、珍しい着流し姿で、股旅演歌を歌うのが見もの。
　第一部は、戦後の盛り場風俗を盛り込んだ曲の特集。「盛り場ブルース」「銀座カンカン娘」ほか。
　第二部は、股旅演歌の特集。「流転」「妻恋道中」ほか。
　第三部“ディック・ミネ歌謡談義”では、都と水前寺の結婚談義。ディックが二人の結婚問題を追及。

昭和５０年２月３日

①「美空ひばり激動の昭和 50 年！・その１・戦前戦中編」　＃１７５

②美空ひばり

③「波浮の港」（美空）、「祇園小唄」（美空）、「酒は涙か溜息か」（美空）、「国境の町」（美空）、「明治一代女」（美空）、「上海ブルース」（美空）、「同期の桜」（美空）

④　今週と来週の２回にわたり、美空ひばりの豪華なワンマンショーを送る。”昭和歌謡史五十年”をテーマに、昭和初期から現在までのヒット曲を、そのときどきの世相を写真やニュースフィルムで振り返りながら紹介していく。

今夜は”戦前戦中編”で、軍歌などをまじえて、１７曲を美空が熱唱する。まず「波浮の港」（昭和３年）、「祇園小唄」（昭和５年）、「国境の町」（昭和９年）と、世相を反映した曲。続いて映画主題歌特集。

同年２月８日付読売新聞東京版朝刊に、「軍歌にむせび泣く」とのタイトルで視聴者（５５歳会社員・女性）からの以下の投書が載っている。

> ＮＥＴ三日夜「にっぽんの歌」を聞き、日本の歌のすばらしさを今さらのように感じました。美空ひばりの歌には心があり、最後の軍歌を聞きながら、むせび泣きました。歌のひとつひとつに思い出があり、ともすると忘れがちな時代のこと、戦死した友人のことなどが思い出されました。次回が楽しみです。

昭和５０年２月１０日

①「美空ひばり激動の昭和 50 年！・その２・戦後編」　＃１７６

②美空ひばり

③「異国の丘」（美空）、「リンゴ追分」（美空）

④　先週に引き続き、美空ひばりの歌で”昭和歌謡史五十年”を振り返る。今回は”戦後編”で、昭和２１年から現在までのヒット曲を、当時の世相を写真やフィルムなどで紹介する。

「リンゴ追分」は、美空の代表作の一つ。昭和２７年４月、東京・歌舞伎座での流行歌手初のワンマンショー用の新曲だったという。

昭和５０年２月１７日

①「艶歌！恋と涙の別れ唄」　＃１７７

②フランク永井、青江三奈、野村真樹、ちあきなおみ、和田弘とマヒナスターズ

③「夜霧に消えたチャコ」（フランク）、「池袋の夜」（青江三奈）、「喝采」（ちあき）、「無情の夢」（野村・ちあき）、「君恋し」（青江・ちあき・フランク）、「泣かないで」（マヒナ）、「上海帰りのリル」（不明）、「花吹雪」（ちあき）、「神戸北ホテル」（青江）、「こんど逢えたら」（野村）

④　フランク永井、青江三奈、ちあきなおみ、野村真樹、和田弘とマヒナスターズといった”都会派”を集めて、男女の切ない別れをテーマにしたモダン演歌の数々を送る。

まず、フランクが「夜霧に消えたチャコ」（昭和３４年）、青江が「池袋の夜」（昭和４４年）、ちあきが「喝采」（昭和４７年）とヒット曲を歌う。

続いて昭和初期の悲恋の歌を特集。野村とちあきで「無情の夢」（昭和１０年）、青江、ちあき、フ

ランクで「君恋し」（昭和４年）など。曲にまつわるエピソードや時代背景などをディック・ミネが中心になって解説する。また、昭和３０年代の歌を特集する。

新曲コーナーは、ちあきが「花吹雪」、青江が「神戸北ホテル」、野村が「こんど逢えたら」。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、フランクのレパートリーの”大阪もの”を集める。

昭和５０年２月２４日

①「小野田寛郎こころの歌」　＃１７８

②小野田寛郎、山口淑子、橋幸夫、舟木一夫、藤圭子、笹みどり

③「上海ブルース」（ディック）

④　ブラジル在住のため、一時日本に帰国している小野田寛郎と山口淑子を特別ゲストに迎える。

小野田が青春時代に愛唱したヒット曲の数々を、思い出話を交えながら送る。

中でも、小野田はディック・ミネの大ファンで、戦前のヒット曲は全部歌えるという。ディックが歌う「上海ブルース」のリズムに乗って、青春時代のあこがれの人だった”李香蘭”こと山口淑子をパートナーに、鮮やかなダンスを披露するのは見もの。

最後に、小野田がブラジル在住を前に、お別れのあいさつをする。

『週刊明星』昭和５０年３月１６日号にこの回の詳細なトークの模様が取り上げられている。

また、同年３月１日付読売新聞東京版朝刊に「印象的、こころの歌」と題する視聴者からの以下の投書が載っているが、同様の投書が５通届いたとのこと。

> ＮＥＴテレビ二十四日の「にっぽんの歌」（後９・００）の“小野田寛郎こころの歌”は大変楽しく見ることができた。青春時代の流行歌などなつかしい歌に聞きいる姿が印象的。司会の加東大介・河内桃子のさわやかムードがよくもりたてた。

昭和５０年３月３日

①「大競演！任侠演歌決定版」　＃１７９

②北島三郎、水前寺清子、五木ひろし

③「仁義」（北島三郎）、「東京流れ者」（水前寺清子）、「唐獅子牡丹」（五木ひろし）、「兄弟仁義」（北島三郎）、「流転」（ディック）

④　北島三郎、水前寺清子、五木ひろしの”演歌３エース”をゲストに迎え、男の歌、任侠の歌をたっぷり楽しませる趣向。病気休演の加東大介に代わり、レギュラーゲストのディック・ミネが河内桃子とともに司会を担当する。

北島の「仁義」を皮切りに、三人がそれぞれの生まれ故郷を織り込んだ自己紹介の”仁義”を切る。ついで水前寺が「東京流れ者」を、五木が「唐獅子牡丹」、北島が「兄弟仁義」と”任侠もの”を歌い、合間に”任侠もの”に対する考え方や歌う時の心境などを語り合う。このあと男の世界や心情を歌ったヒット曲を特集。

”ディック・ミネ歌謡談義”は、ディックが珍しく着流し姿で登場、三人の後輩に冷やかされながら、「流転」を歌う。

昭和５０年３月１０日

①「特集にっぽんの歌アメリカ公演（前）」　＃１８０

②田端義夫、青江三奈、村田英雄、舟木一夫、春日八郎、松山恵子

③「ふるさとの灯台」（不明）、「別れの一本杉」（不明）、「二人は若い」（ディック・青江）

④　今週と来週の二回にわたり、アメリカ・ロサンゼルスのシュライン・オーディトリアムで行われた”にっぽんの歌アメリカ公演”の模様を録画中継する。

このアメリカ公演は、この番組がロサンゼルスやサンフランシスコなどでレギュラー番組として放送され、日系人の間で好評なので企画された。6500 人収容の巨大な会場も満員の盛況さ。故国のメロディーを懐かしむ一世、二世たちが大部分。二、三時間離れたサンディエゴあたりから、バスを仕立てて繰り込んできた団体もある。本番が始まると「バタやん！」「ハッちゃん」などの声援が飛び交い、「ふるさとの灯台」や「別れの一本杉」などでは、懐かしさのあまり、ハンカチを目に当てる一世のお年寄りの姿も見られるほど。

ディック・ミネと青江三奈は、お熱いムードで「二人は若い」をデュエットして会場の日系人をわかせる。

なお、昭和４９年１１月１１日付中日新聞夕刊に、この公開録画で歌手らと一緒にツアーするファンの募集記事が掲載されている。参加費用は２０万６千円、定員は１４０人で、応募期限は同年１２月３１日となっている。『週刊明星』昭和５０年３月１６日号によると、同年２月２３日に公開録画が行われた。

加東大介が司会から外れているが、その理由が病気によるものなのか、もともと計画時点から外れていたのかは不明。

昭和５０年３月１７日

①「特集にっぽんの歌アメリカ公演（後）」　＃１８１

②田端義夫、青江三奈、村田英雄、舟木一夫、春日八郎、松山恵子、榎本美佐江、大月みやこ

③「十三夜」（榎本美佐江）、「明治一代女」（榎本美佐江）、「黒田武士」（村田英雄）、
「夜霧のブルース」（ディック）、「池袋の夜」（青江三奈）、「絶唱」（舟木一夫）、
「お富さん」（春日八郎）、「王将」（村田英雄）、「大利根月夜」（田端義夫）、「旅姿三人男」（ディック）、
「東京音頭」（全員）

④　先週に引き続き、アメリカ公演の後編を、ロサンゼルス・シュライン・オーディトリアムからの中継録画で送る。

第一部は、サンフランシスコの「金門公園」内にある日本庭園の模様をフィルムで紹介しながら、艶やかな着物姿の榎本美佐江が「十三夜」「明治一代女」、村田英雄が「黒田武士」など日本情緒いっぱいのステージを展開する。

第二部は、哀愁をたたえた盛り場の歌を特集。ディック・ミネ「夜霧のブルース」、青江三奈「池袋の夜」など。

出演者のヒット曲集では、舟木一夫「絶唱」、春日八郎「お富さん」。最後に村田が「王将」、田端義夫が「大利根月夜」、ディックが「旅姿三人男」。会場の熱気も最高潮というところで、出演者全員の「東京音頭」で華やかにフィナーレとなる。

昭和５０年３月２４日

①「歌祭り！花の饗宴」　＃１８２

②春日八郎、水前寺清子、舟木一夫、青江三奈、都はるみ、ちあきなおみ、こまどり姉妹

③「名月赤城山」（不明）、「裏町人生」（不明）、「涙の渡り鳥」（不明）、「二人は若い」（ディック・河内）、「ラバウル小唄」（全員）

④　三年半続いたこの番組も、今回でひとまず終わる。春日八郎、水前寺清子、都はるみ、青江三奈、ちあきなおみ、舟木一夫、こまどり姉妹を迎え、パーティー形式で進行する。過労から肝炎にかかり入院中の加東大介も病院からかけつけ司会を務めた。出演者から「早く元気になって！」と励まされ感激。

曲は、まず、これまで視聴者からのリクエストが多かった演歌を中心にジャンル別に紹介する。レギュラー・ゲストのディック・ミネは河内桃子とデュエットで「二人は若い」を歌う。

春日が「こういう番組がなくなるのは、ボクたちにとって寂しいことだなア」と、グラスを傾けながらつぶやいていたのは印象的。

フィナーレは、加東の全快を祈り、彼が戦争中、南の島で愛唱したという「ラバウル小唄」を全員で合唱。

第183回～第213回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和50年9月　1日～ 昭和50年9月29日	月	21時00分～ 21時55分
昭和50年10月6日～ 昭和51年3月29日	月	21時00分～ 21時54分

司会：神山繁　　（第183回～213回）
　　三ツ矢歌子（第183回～213回）

レギュラーゲスト：遠藤実（第183回～203回）

語り：奈良岡朋子（第183回～213回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和５０年９月１日

①「熱唱！こころの演歌」　＃１８３

②美空ひばり、五木ひろし、ディック・ミネ

③「港町十三番地」（美空・五木）、「三味線マドロス」（美空）、「ひばりのマドロスさん」（美空）、「哀愁波止場」（美空）、「リンゴ追分」（美空）、「夜霧のブルース」（五木・ディック）、「或る雨の午後」（ディック・美空）、「人生の並木路」（ディック・美空・五木）

④　“日本人の心にしみる歌”をキャッチフレーズに大人の歌謡番組として好評を博してきた「にっぽんの歌」が半年ぶりに再登場する。新司会者は、アットホームな雰囲気を持つ神山繁、三ツ矢歌子のコンビ。新しい趣向としては、作曲家の遠藤実がレギュラーゲストとして毎回登場し、メインゲストとの対談を通して、貴重な人生体験や、忘れ得ぬ心の歌を引き出す。

新シリーズ再開第一回は、美空ひばり、五木ひろし、ディック・ミネという各世代の大物が出演、おなじみのヒット曲を披露する。

第一部は“ひばりのマドロスもの特集”で港がテーマ。美空と五木の「港町十三番地」、美空の「三味線マドロス」、「ひばりのマドロスさん」などのマドロスもののメドレー。３８度以上もある高熱を押して出演した美空は、「港町十三番地」を五木とワンコーラスずつ歌い、「ひろしは、私の歌をみんな私よりうまくまねしちゃう」と大笑い。

続いてディック・ミネが登場。この番組の司会者として親しまれた故・加東大介を偲んだ後、五木と”長崎もの”を競演する。後半は五木とミネ「夜霧のブルース」、ディックと美空「或る雨の午後」、三人で「人生の並木路」を一番ずつと三人三様の味を聞かす構成は面白い。

遠藤は“遠藤実こころの歌”のコーナーを受け持ち、豊富な経験、人情味のある熱っぽい語り口で、ゲストの歌手とのやりとりを中心に、ヒット曲にまつわるエピソードを加えながら心の歌を探っていく。今夜は美空、五木を相手に、どん底の生活体験から得た彼自身の”演歌の哲学”を語る。

他に視聴者の”思い出の歌”コーナーがあり、奈良岡朋子がナレーションを担当する。

同日付の読売新聞東京版朝刊では、「三人三様の味に興味　見せ聞かせるひばり」と題して、記者が番組の感想を以下の通り綴っている。

> ひばりはやはり感心させる。歌の意味と感情を顔と体全体で表現し、声を細く太く、時には巻き舌も使う。千変万化の技巧は、マユの動き一つでもちゃんと見せて、聞かせる。五木は名手だが、ひばりとはまだ距離がある。歌に感情こめるのに熱心なのはいいが、それが歌うよりも「語る」ように聞こえる時がある。ディックの方にもっと”歌”を感じる。
>
> 総じて、ほめ合いが多すぎるのが気になった。

なお、関西では第一期はサンテレビ・近畿テレビが放送していたが、第二期は朝日テレビが放送。

昭和５０年９月８日

①「競演・花の演歌ぶし」　＃１８４

②村田英雄、舟木一夫、三沢あけみ、八代亜紀、ちあきなおみ

③「皆の衆」（村田）、「人生劇場」（村田）、「無法松の一生」（村田）、「三百六十五夜」（舟木・ちあき）、「湯島の白梅」（舟木）、「むかえ火」（舟木）、「すみだ川」（三沢）、「船着場」（三沢）、「悲しき子守唄」（三沢）、「ともしび」（八代）、「明治一代女」（八代）、「十三夜」（ちあき）、「さだめ川」（ちあき）

④　日本の歌の心をもっともよく表していると言われる”演歌”。時代が変わっても、すたれない人気はこんな所にあるようだ。演歌を中心に、日本調のヒット曲を特集する。

番組は、演歌の大御所、村田英雄、八代亜紀、三沢あけみ、ちあきなおみ、舟木一夫をゲストに、その真髄を探っていく。５人は着物姿で日本情緒をたっぷり聞かせる。

“遠藤実コーナー”は、村田英雄が「人生劇場」を歌い、演歌のこころ、根性とは何かを語り合う。デビュー当時の苦労話、エピソードなども語る。

“思い出の歌コーナー”は、東京都・練馬区に住む主婦・村岡千鶴子さん（49）のリクエストで「悲しき子守唄」。苦しかった戦争中の生活を振り返り、三沢がしんみりと歌い上げる。

昭和５０年９月１５日

①「大演歌！日本縦断」　＃１８５

②北島三郎、水前寺清子、都はるみ、青江三奈

③「函館の女」（北島・水前寺・青江・都）、「長崎ブルース」（不明）、「東京でだめなら」（不明）、「祇園小唄」（都はるみ）、「おてもやん」（水前寺清子）、「上海帰りのリル」（不明）

④　演歌の代表選手とも言うべき北島三郎、水前寺清子、都はるみ、それに都会調ムード演歌の青江三奈を加えたメンバーで、日本各地の地名を盛り込んだ演歌を特集。

出演者がそれぞれ幼年時代の写真を持ち寄り、思い出を語った後、生まれ故郷にちなんだ曲を歌う。オープニングは北島の大ヒット「函館の女」。一番を水前寺と、二番を青江と、三番を都と、北島がデュエットする。続いて「長崎ブルース」「東京でだめなら」とご当地ソング。京都生まれの都は、「祇園小唄」、熊本生まれの水前寺は「おてもやん」ほか。

“遠藤実・心の歌コーナー”は、遠藤が苦しかった工員時代に愛唱した”オカッパルぶし（岡晴夫の歌）”の特集。水前寺が岡晴夫のリバイバル曲を熱唱する。

“思い出の歌”は三鷹市の主婦・京極林子さんのリクエストで「上海帰りのリル」。

昭和５０年９月２２日

①「バタヤン涙の絶唱！港・盛り場・なみだ唄」　＃１８６

②田端義夫、青江三奈、ちあきなおみ、三条正人、森昌子

③「玄海ブルース」（田端）、「別れのブルース」（青江）、「港が見える丘」（ちあき）、「池袋の夜」（青江）、「熱海ブルース」（ちあき）、「柳ヶ瀬ブルース」（三条）「真白き富士の嶺」（田端）、

④　田端義夫、青江三奈、ちあきなおみ、三条正人、森昌子という顔ぶれで、港や盛り場にちなんだヒット曲を特集。

第一部は、”波止場もの”” マドロスもの”の中から、田端が「玄海ブルース」、青江が「別れのブルース」、ちあきが「港が見える丘」ほかを歌う。

第二部は”盛り場もの”特集。青江が持ち歌の「池袋の夜」、ちあきが「熱海ブルース」、三条が「柳ヶ瀬ブルース」を披露。

“遠藤実・こころの歌”は、昔、盛り場で流していた遠藤が作曲家を志したのは、田端の「ふるさとの灯台」を聞いて感動したのがきっかけだったというエピソードを披露。そして、田端が登場、父親のいない貧困の中で育った田端の少年時代の思い出や、母の追憶を語る。おかあさんをテーマに遠

藤が田端に色々と話を聞くが、人情家の田端は、「真白き富士の嶺」を歌う段になると声が詰まった。「泣くまいと思ってたんだけど、オレはああいう話に弱いよ」と大テレ。

昭和５０年９月２９日

①「哀愁演歌十八番」　＃１８７

②春日八郎、水前寺清子、フランク永井、三橋美智也

③「別れの一本杉」（春日・三橋）、「有楽町で逢いましょう」（フランク）、「古城」（三橋）、「長崎の女」（春日）、「いっぽんどっこの唄」（水前寺）、「君恋し」（フランク）、「涙の渡り鳥」（水前寺）、「無情の夢」（春日）、「国境の町」（フランク・水前寺）、「男の純情」（水前寺）、「緑の地平線」（春日）、「おんな船頭唄」（三橋）

④　春日八郎、フランク永井、三橋美智也に、”紅一点”の水前寺清子を加えて、”日本のスタンダード・ナンバー”ともいうべきヒット曲の数々を紹介する。

第一部は各自のヒット曲集。春日と三橋は「別れの一本杉」をデュエットする。

第二部「昭和初期のヒット曲特集」では、曲にまつわるエピソードや当時の世相などを振り返りながら、フランクが「君恋し」、水前寺が「涙の渡り鳥」、春日が「無情の夢」、フランクと水前寺で「国境の町」を歌う。

“遠藤実・こころの歌”は、古賀政男メロディーの特集。遠藤が「影を慕いて」をギターの弾き語りで歌い、古賀メロディーが人々に愛される秘密、古賀メロディーと日本人の情念とのかかわりなどを分析する。また、作曲家としての遠藤が古賀メロディーから受けた影響を語る。

そのあと、水前寺が「男の純情」、春日が「緑の地平線」を歌う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌コーナー”は、仙台市に住む主婦、狩野むつ子さんのリクエストで、三橋の「おんな船頭唄」。昭和３１年、３９歳で亡くなった狩野さんの叔父さんの愛唱歌。叔父さんの思い出をつづった手紙を奈良岡朋子が朗読した後、三橋が切々とこの曲を歌う。

昭和５０年１０月６日

①「ひばり・北島・森、演歌の神髄！」　＃１８８

②美空ひばり、北島三郎、森進一

③「ひばり仁義」（不明）、「兄弟仁義」（不明）、「出船」（不明）、「哀愁出船」（不明）、「襟裳岬」（不明）、「悲しい酒」（美空）、「ギター仁義」（北島）、「星影のワルツ」（森）、「ひとりぼっち」（美空）

④　美空ひばり、北島三郎、森進一の実力派ビッグスリーの顔合わせで、演歌の神髄を心ゆくまで味わってもらおうという趣向。

第一部は、美空と北島の”仁義もの”特集で、「ひばり仁義」「兄弟仁義」など。

第二部は、美空と森の”港もの”特集。曲は「出船」「哀愁出船」「襟裳岬」。

“思い出の歌”コーナーは、美空の「悲しい酒」。

“遠藤実・心の歌”は、北島が「ギター仁義」、森が「星影のワルツ」、美空が「ひとりぼっち」を歌い、遠藤が、歌における”こころ”の大切さを話す。

昭和５０年１０月１３日
①「慕情！恋と涙の人生演歌」　＃１８９
②島倉千代子、春日八郎、こまどり姉妹、殿さまキングス、加橋かつみ、真木ひでと
③「からたち日記」（島倉千代子）、「あん時やどしゃ降り」（春日八郎）、「哀哭」（加橋かつみ）、「夢よもう一度」（真木ひでと）、「人生の並木路」（加橋・真木）
④　島倉千代子、春日八郎、こまどり姉妹、殿さまキングスに、異色演歌歌手、元タイガースのトッポこと加橋かつみと、元オックスの野口ヒデトこと真木ひでとの二人が出演する。
第一部は”初恋の歌”特集で、島倉が「からたち日記」、春日が「あん時やどしゃ降り」など。
第二部は、こまどり姉妹が歌う遠藤実のヒット曲特集。
かつてはグループサウンズの星としてヤングを熱狂させた加橋と真木は演歌歌手として再登場し、演歌歌手としてのそれぞれのデビュー曲「哀哭」「夢よもう一度」を披露する他、二人で「人生の並木路」を歌い大人のムードで迫る。

昭和５０年１０月２０日
①「競演！夜と酒場と流し唄」　＃１９０
②田端義夫、都はるみ、ちあきなおみ、藤圭子、中条きよし
③「ズンドコ節」（全員）、「新宿の女」（藤）、「雨の屋台」（田端）、「かりそめの恋」（都）、「君待てども」（中条）、「恋の曼珠沙華」（藤圭子）、「別れ船」（田端）、「涙の連絡船」（都）、「銀座カンカン娘」（ちあき）
④　田端義夫、都はるみ、ちあきなおみ、藤圭子、中条きよしをゲストに迎え、飲み屋スタイルのセットをバックに夜の盛り場をテーマにした曲を特集。
「ズンドコ節」を皮切りに、藤が「新宿の女」、田端が「雨の屋台」と続き、終戦直後のヒット曲特集では都が「かりそめの恋」、中条が「君待てども」、藤が「恋の曼珠沙華」を歌う。
また、”田端ブシ”” はるみブシ”と独特のフシまわしを持つ二人が「別れ船」「涙の連絡船」を披露し、それぞれのフシまわしが完成するまでの苦心談も語られる。
“思い出の歌・心の歌”コーナーは、埼玉県の主婦・柿沼英美さんのリクエスト「銀座カンカン娘」を、ちあきが歌う。

昭和５０年１０月２７日
①「絶唱！鶴田浩二、男の世界」　＃１９１
②鶴田浩二、松尾和子、青江三奈、村田英雄、甲飛 13 期会メンバー
③「赤と黒のブルース」（鶴田）、「誰よりも君を愛す」（松尾）、「伊勢佐木町ブルース」（青江）、「王将」（村田）、「傷だらけの人生」（村田）、「あゝ紅の血は燃ゆる」（不明）、「同期の桜」（不明）、「あゝ戦友」（不明）
④　映画スターとして、また歌手として大きな足跡を残してきた鶴田浩二をメインゲストに迎え、二枚目だった初期のヒット曲から最近のヒット曲までを特集、鶴田の持つ独特の男の世界を探る。特別ゲストに村田英雄と、旧海軍甲種飛行予科練習生十三期生の集まり「甲飛 13 期会」のメンバーが登場。
第一部は、甘い二枚目だった初期のヒット曲集。鶴田が「赤と黒のブルース」、松尾和子が「誰より

も君を愛す」、青江三奈が「伊勢佐木町ブルース」などを歌う。

第二部は、厳しい男を演じる俳優に変貌した人間鶴田の魅力を。村田英雄の出演で、「王将」「傷だらけの人生」など男の歌を特集。

そして第三部は、鶴田と切り離しては考えられない戦争体験、戦没者への想いを託した曲の特集。「あゝ紅の血は燃ゆる」「同期の桜」「あゝ戦友」など、戦没者への鎮魂歌を披露。歌の合間に、鶴田を中心に、戦友とは何かなどについて語り合う。

昭和５０年１１月３日

①「あの想い出のゴールデンヒット」　＃１９２

②ディック・ミネ、近江俊郎、菊池章子、織井茂子、三浦洸一、大津美子、藤島桓夫、一節太郎、北原謙二

③「山小舎の灯」（近江）、「星の流れに」（菊池）

④　ディック・ミネ、近江俊郎、菊池章子らベテラン歌手９人の出演で、戦前、戦後から昭和３０年代にかけてのゴールデンヒットの特集を送る。

なお、当日の中日新聞ではサブタイトルが「ああ想い出のゴールデンヒット」となっている。

第一部は、近江が「山小舎の灯」、菊池が「星の流れに」などを、終戦直後の体験談を交えて披露。“遠藤実・心の歌”では、遠藤学校一期生の藤島桓夫、一節太郎、北原謙二が、デビュー曲を歌う。

昭和５０年１１月１０日

①「競演！女ごころ・男ごころ」　＃１９３

②田端義夫、水前寺清子、三田明、由紀さおり、和田弘とマヒナスターズ

③「お座敷小唄」（水前寺・三田・由紀・マヒナ）、「島育ち」（田端）、「裏町人生」（水前寺）、「カスバの女」（三田）、「女の意地」（由紀）、「大利根月夜」（田端）、「旅笠道中」（田端）、「妻恋道中」（水前寺）、「北上夜曲」（マヒナ）

④　田端義夫、水前寺清子、由紀さおり、三田明、和田弘とマヒナスターズの出演で、歌謡曲にあらわれた”女ごころ””男ごころ”を分析しながらヒット曲でつづる。

第一部は女ごころの歌の特集。田端を除く全員で「お座敷小唄」、田端が「島育ち」、水前寺が「裏町人生」、三田が「カスバの女」、由紀が「女の意地」を歌う。

第二部は男ごころの歌の特集。田端が「大利根月夜」「旅笠道中」で男のつらさカッコよさを、水前寺が「妻恋道中」を披露、股旅ものの特徴などを語り合う。また、イキな遊び方について、田端が出演者一同に講義する。

読者のリクエストによる“想い出の歌、心の歌”は「北上夜曲」。マヒナスターズが歌う。

昭和５０年１１月１７日

①「ああ！郷愁のふるさと艶歌」　＃１９４

②島倉千代子、美輪明宏、菅原洋一、あべ静江

③「りんどう峠」（島倉）、「琵琶湖周航の歌」（菅原）、「荒城の月」（菅原）、「知床旅情」（あべ）、

「惜別の歌」（美輪）、「東京の人よさようなら」（島倉）、「逢いたいなァあの人に」（島倉）、
「哀愁のからまつ林」（島倉）、「ヨイトマケの唄」（美輪）

④　島倉千代子、美輪明宏、菅原洋一、あべ静江という異色の顔合わせで、”ふるさと”をテーマにした曲を特集。

美輪が視聴者からのリクエストにこたえ、昭和４０年のヒット曲、長編「ヨイトマケの唄」を、全曲ノーカットで絶唱するのが話題。

第一部の”ふるさとの歌”特集は、島倉が「りんどう峠」、菅原が「琵琶湖周航の歌」と「荒城の月」、あべが「知床旅情」、美輪が「惜別の歌」。

第二部“遠藤実心の歌”コーナーは、島倉千代子特集。「東京の人よさようなら」「逢いたいなァあの人に」「哀愁のからまつ林」など、”島倉ブシ”をたっぷりと披露し、その特徴や魅力を分析する。

昭和５０年１１月２４日

①「慕情！東京恋唄・なさけ唄」　＃１９５

②藤山一郎、朝丘雪路、青江三奈、尾崎紀世彦、ちあきなおみ

③「東京ラプソディー」（全員）、「東京の屋根の下」（尾崎）、「東京ブギウギ」（朝丘）、
「夢淡き東京」（藤山）、「東京ブルース」（ちあき）、「赤坂の夜は更けて」（青江）

④　ベテラン藤山一郎をはじめ、朝丘雪路、青江三奈、尾崎紀世彦、ちあきなおみらの出演で、都会、特に東京を歌ったヒット曲、ムード演歌を特集。

第一部は、全員で「東京ラプソディー」を皮切りに尾崎が「東京の屋根の下」、朝丘が「東京ブギウギ」、藤山が「夢淡き東京」など、終戦直後のヒット曲を歌う。

第二部は夜の東京を歌ったムード演歌。ちあきが「東京ブルース」、青江が「赤坂の夜は更けて」ほか。

つづく“遠藤実心の歌”は、古賀政男・藤山一郎コンビの特集。

昭和５０年１２月１日

①「任侠！男の花道」　＃１９６

②北島三郎、水前寺清子、五木ひろし、三橋美智也

③「名月赤城山」（五木・水前寺・北島）、「一本刀土俵入り」（三橋）、「旅鴉」（五木）、
「赤城の子守唄」（水前寺）、「流転」（北島）、「唐獅子牡丹」（水前寺・五木）、
「おさげと花と地蔵さんと」（三橋）、「郷愁」（三橋）「誰か故郷を想わざる」（五木）

④　北島三郎、水前寺清子、五木ひろし、三橋美智也の出演で、”男の世界”や”ふるさと”をテーマにした曲を中心に送る。

第一部は、任侠股旅ソング特集。五木、水前寺、北島の三人で「名月赤城山」、三橋が「一本刀土俵入り」、五木が「旅鴉」、水前寺が「赤城の子守唄」、北島が「流転」を歌い、股旅ものを歌っている時の気持ちや、股旅ものの変遷などを、出演者が語り合う。

第二部は根性もの特集。水前寺と五木で歌う「唐獅子牡丹」ほか。

第三部は、三橋を中心に、ふるさともの特集を送る。三橋で「おさげと花と地蔵さんと」と新曲「郷愁」。五木が、愛知県の主婦菅原すみ子さんのリクエスト「誰か故郷を想わざる」を歌う。

昭和５０年１２月８日
①「艶歌！恋・涙・別れ」　＃１９７
②森進一、都はるみ、春日八郎、野川明美
③「花と蝶」（森）、「ひとり盛り場で」（森）、「年上の女」（森）、「命かれても」（森）、
「盛り場ブルース」（森）、「雨降る街角」（春日）、「別れの波止場」（春日）、
「赤いランプの終列車」（都）、「女の海峡」（都）、「好きになった人」（都・野川）、「恋の雪舞」（野川）、
「北の宿から」（都）、「お富さん」（全員）
④　ベテラン春日八郎、森進一、都はるみの実力派三人に、今年デビューした都の妹、野川明美を加えた顔ぶれで送る。
　第一部は森のヒット曲特集。「花と蝶」「ひとり盛り場で」「年上の女」「命かれても」「盛り場ブルース」ほか。
　第二部は、「雨降る街角」「別れの波止場」「赤いランプの終列車」など、”別れ”をテーマにした春日のヒット曲。歌の合間に、出演者がそれぞれ体験した最も悲しい別れの思い出を披露する。
　続く“思い出の歌”は、福井県の公務員土肥隆さんが亡き母を偲んだ詩を奈良岡朋子が朗読。
　第三部は、都・野川姉妹の出演で「おんなの海峡」「好きになった人」を歌い、姉から見た妹、妹から見た姉のプロフィールを語り合う。

昭和５０年１２月１５日
①「夜の艶歌！酒・涙・ブルース」　＃１９８
②ディック・ミネ、フランク永井、坂本スミ子、黒沢明とロス・プリモス、藤圭子
③「上海ブルース」（ディック・フランク）、「圭子の夢は夜ひらく」（藤）、
「ラブユー東京」（ロス・プリモス）、「赤いグラス」（坂本）、「哀愁の街に霧が降る」（フランク・藤）
④　都会の夜のムードを盛り込んだモダン演歌やブルースを、ディック・ミネ、フランク永井、坂本スミ子、黒沢明とロス・プリモス、藤圭子らの出演で特集する。
　第一部は、ディックとフランクの「上海ブルース」、藤の「圭子の夢は夜ひらく」、ロス・プリモスの「ラブユー東京」ほか。
　第二部は、ナイトクラブ風のセットで坂本が「赤いグラス」、フランクと藤が「哀愁の街に霧が降る」ほかを歌う。

昭和５０年１２月２２日
①「初共演！石原裕次郎・北島三郎男の詩」　＃１９９
②石原裕次郎、北島三郎、和田弘とマヒナスターズ
③「俺は待ってるぜ」（石原・北島）、「なみだ船」（北島三郎）、「錆びたナイフ」（石原裕次郎）、
「泣かないで」（不明）、「北帰行」（不明）、「俺はお前に弱いんだ」（不明）、「赤いハンカチ」（石原）、
「酒は涙か溜息か」（石原・北島・遠藤）、「船頭小唄」（石原）、「無情の夢」（北島）、
「兄弟仁義」（石原・北島）
④　共演は初めてという石原裕次郎と北島三郎に、和田弘とマヒナスターズを加えたメンバーで、男の哀愁をたっぷり味わってもらおうという趣向。

第一部は、海、波止場、船などをテーマにしたヒット曲特集。石原と北島のデュエットで「俺は待ってるぜ」を皮切りに北島が「なみだ船」ほかを、石原が「錆びたナイフ」ほかを歌い、息の合ったところを見せた。また、デビュー当時の印象などを語り合う。

第二部は、マヒナとの共演で「泣かないで」「北帰行」「俺はお前に弱いんだ」、そして石原が視聴者のリクエスト「赤いハンカチ」を歌う。

第三部は、なつメロ特集。木村好夫のギター演奏で石原、北島、遠藤実の三人で「酒は涙か溜息か」、石原が「船頭小唄」、北島が「無情の夢」、最後は、石原と北島で「兄弟仁義」をじっくりと歌い上げる。石原は「初共演が決まってから、車の中でも”兄弟仁義”練習をしたけど、この歌は難しいヨ！」。

昭和５０年１２月２９日

①「特集！２００回記念・歌まつり花の饗宴」　＃２００

②美空ひばり、春日八郎、ディック・ミネ、三橋美智也、北島三郎、水前寺清子、都はるみ、青江三奈

③

④　放送二百回を記念して、美空ひばり、ディック・ミネをはじめ、おなじみの実力派歌手たちが勢揃いする。番組はパーティー形式で進められ、出演歌手たちがそれぞれ得意の曲を歌い、歌にまつわるエピソード、今年の回顧、来年への抱負などを語る。

昭和５１年１月５日

①「新春歌絵巻！ひばり艶姿」　＃２０１

②美空ひばり、橋幸夫

③「黒田節」（不明）、「明治一代女」（不明）、「島の娘」（不明）、「湯島の白梅」（不明）、「雨の中の二人」（不明）、「霧氷」（不明）、「港町十三番地」（不明）、「ある女の詩」（不明）

④　今年、芸能生活三十周年を迎える美空ひばりと、橋幸夫の顔合わせ。

第一部は、芸者姿のひばり、羽織袴姿の橋で、日本調の特集。曲は、「黒田節」「明治一代女」「島の娘」「湯島の白梅」ほか。

第二部は、それぞれドレス、スーツに着替えてのモダン演歌特集で、「雨の中の二人」「霧氷」「港町十三番地」「ある女の詩」ほか。

昭和５１年１月１２日

①「競演！愛の演歌十八番」　＃２０２

②北島三郎、島倉千代子、都はるみ、八代亜紀

③「新妻鏡」（島倉千代子）、「白い椿の歌」（八代亜紀）

④　北島三郎、島倉千代子、都はるみ、八代亜紀の出演で送る。

第一部は、愛をテーマにした演歌の特集。曲は、「新妻鏡」（島倉）、「白い椿の歌」（八代）ほか。

第二部は、島倉が歌手生活二十年の思い出を語りながら、ヒット曲を披露。

第三部は、酒場風のセットで、出演者が持ち歌を交換したり、しりとり歌合戦を展開したりする。

昭和５１年１月１９日
①「泣き笑い演歌一代！」　＃２０３
②小林旭、五月みどり、こまどり姉妹、笹みどり、田端義夫、遠藤実、遠藤実夫人
③「純子」（小林）、「おひまなら来てね」（五月）、「浅草姉妹」（こまどり）、
「星影のワルツ」（遠藤（ＶＴＲ））、「流転」（遠藤（ＶＴＲ））、「妻に捧げる歌」（遠藤）
④　昨年９月からレギュラーゲストとして出演してきた作曲家の遠藤実が今回を最後にレギュラーを降りる。そこで、遠藤のヒット曲を、小林旭、こまどり姉妹、五月みどりらの出演で特集、その作品をあらゆる角度から分析する。
　また、流しの歌手出身の遠藤が二十年ぶりに昔にかえって、当時愛用したギターを抱え、夜の町を流し、客の求めに応じて「星影のワルツ」「流転」などを歌う様子もＶＴＲで紹介する。
　作曲家遠藤を生むきっかけになったのは田端義夫が歌った「ふるさとの灯台」（昭和２８年）を初めて聞いた時だという。そこでこの曲を田端が遠藤のためにプレゼントする。
　また、普通は決して表へ出ないことで有名な遠藤夫人を横にして、遠藤自ら自作の「妻に捧げる歌」を歌う。これに夫人は感極まって大粒の涙。

昭和５１年１月２６日
①「哀愁艶歌！吉田正の世界」　＃２０４
②フランク永井、松尾和子、三浦洸一、和田弘とマヒナスターズ、吉田正、増田幸治
③「東京ナイトクラブ」（フランク・松尾）、「東京の人」（三浦）、「好きだった」（マヒナ）、
「異国の丘」（フランク・神山・吉田・増田・三ツ矢）
④　作曲家吉田正を迎え、”吉田学校”の優等生、フランク永井、松尾和子、三浦洸一、和田弘とマヒナスターズらの出演で、吉田メロディーを特集する。
　工業学校出身の吉田が、なぜ作曲家を志したかをインタビューするほか、出演者から見た吉田のプロフィールなどを紹介。また、「異国の丘」の作詞者増田幸治が登場、吉田と苦しかった捕虜収容所時代の思い出を語り合う。
　曲は、フランク、松尾のデュエットで「東京ナイトクラブ」、三浦の「東京の人」、マヒナの「好きだった」ほか。

昭和５１年２月２日
①「熱唱ああ浪漫の大演歌」　＃２０５
②五木ひろし、島倉千代子、水前寺清子、青江三奈、麻生良方
③「カチューシャの唄」（不明）、「さすらいの唄」（不明）、「船頭小唄」（不明）、「君恋し」（不明）、
「無情の夢」（不明）、「湖畔の宿」（不明）、「亡き母に捧ぐ詩」（島倉）
④　五木ひろし、島倉千代子、水前寺清子、青江三奈の出演で、大正から昭和初期にかけての浪漫演歌を特集する。
　第一部は”大正演歌”特集で、「カチューシャの唄」「さすらいの唄」「船頭小唄」ほかを、第二部”昭和初期の浪漫演歌”特集では、「君恋し」「無情の夢」「湖畔の宿」ほかを、出演者が歌う。
　また、ゲストの政治評論家麻生良方が、かつて大恋愛で結ばれた夫人に捧げた自作の詩を朗読。

”思い出の歌”コーナーは、ロサンゼルス在住の日本人主婦から寄せられた母をしのぶ便りを奈良岡朋子が朗読、この手紙についていた詩に遠藤実が曲をつけた「亡き母に捧ぐ詩」を島倉が歌う。

昭和５１年２月９日

①「慕情！港町艶歌」　＃２０６

②ディック・ミネ、森進一、都はるみ、由紀さおり、前田武彦

③「港町ブルース」（森・都・由紀）、「長崎エレジー」（ディック）、「星の流れに」（森）、「或る雨の午後」（ディック・都）、「二人は若い」（ディック・由紀）

④　ベテラン、ディック・ミネを、戦後派の森進一、都はるみ、由紀さおりが囲むという形で、波止場ものを中心としたヒット曲を特集。

第一部は波止場もの特集。森、都、由紀の「港町ブルース」、ディックの「長崎エレジー」ほか。

第二部は、前田武彦をゲストに迎えて歌謡曲談義。終戦直後の焼け跡闇市時代の思い出の歌の中から、森の「星の流れに」ほか。

第三部は、ディック・ミネ・コーナーで、ディックが都と組み「或る雨の午後」、由紀と組んで「二人は若い」を歌う。

昭和５１年２月１６日

①「決定版！花の股旅三度笠」　＃２０７

②三波春夫、春日八郎、水前寺清子、藤田まさと

③「旅笠道中」（春日・水前寺・三波）、「鴛鴦道中」（春日）、「お駒恋姿」（水前寺）、「流転」（三波）、「お富さん」（春日）、「ちゃんちきおけさ」（三波・水前寺）、「雪の渡り鳥」（三波）

④　三波春夫、春日八郎、水前寺清子の顔合わせで、股旅歌謡作詞の藤田まさとをゲストに迎え、彼のヒット曲を特集、歌謡曲談義などを送る。

第一部は藤田まさとヒット曲特集。春日、水前寺、三波の三人で「旅笠道中」、春日の「鴛鴦道中」、水前寺の「お駒恋姿」、三波の「流転」など。

第二部は陽気な手拍子もの特集。春日の「お富さん」、三波、水前寺の「ちゃんちきおけさ」など。

視聴者のリクエストコーナーは、三波の「雪の渡り鳥」など。

昭和５１年２月２３日

①「あゝ戦友！涙で綴る軍国歌謡」　＃２０８

②田端義夫、三橋美智也、村田英雄、細川潤一、鎌多俊与、日本合唱協会

③「麦と兵隊」（田端・三橋・村田）、「上海だより」（田端）、「軍国子守唄」（三橋）、「流砂の護り」（村田）、「戦友」（日本合唱協会）、「あゝわが戦友」（鎌多・村田）、「母と兵隊」（田端）

④　演歌のベテラン、田端義夫、三橋美智也、村田英雄の三人を迎えて、昭和１２年から１６年頃にかけてヒットした軍歌、特に妻子、望郷の思いをうたい上げた曲を特集。

三人による「麦と兵隊」を皮切りに、田端が「上海だより」、三橋が「軍国子守唄」、村田が「流砂の護り」ほかを歌う。軍歌の”古典”とも言うべき「戦友」を日本合唱協会が歌った後、ゲストの作

曲家細川潤一、鎌多俊与の両氏が登場、戦没した兵士たちへの祈りを込めて細川作曲の「あゝわが戦友」を鎌多と村田が披露する。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端の歌で「母と兵隊」。田端が「母と兵隊」のとりもつ縁で知った老婦人と三十年ぶりに感激の対面もする。

昭和５１年３月１日

①「競演！夜とムードの酒場艶歌」　＃２０９

②石原裕次郎、江利チエミ、橋幸夫

③「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、「銀座の恋の物語」（石原・江利）、「俺はお前に弱いんだ」（石原・橋）、「粋な別れ」（石原）、「泪の乾杯」（橋）、「赤いグラス」（橋）、「雨の酒場で」（石原）、「ウナ・セラ・ディ東京」（江利）、「酒は涙か溜息か」（石原・江利・橋）、「雨のブルース」（石原）、「小雨の丘」（江利）

④　石原裕次郎、江利チエミ、橋幸夫の顔合わせで都会の夜のムード曲を特集する。

第一部は「裕次郎のヒット曲特集」で、「夜霧よ今夜も有難う」、石原と江利で「銀座の恋の物語」、石原と橋で「俺はお前に弱いんだ」と続き、ラストは再び石原の「粋な別れ」。

第二部は「酒場にちなんだナツメロ特集」。橋が「泪の乾杯」「赤いグラス」、石原が「雨の酒場で」、江利が「ウナ・セラ・ディ東京」、三人で「酒は涙か溜息か」ほか。歌の合間に、それぞれの歌にちなんだエピソードやお酒についての失敗談などを語り合う。

第三部は戦前のヒット曲の中から好きな歌を選んで、石原が「雨のブルース」、江利が「小雨の丘」を歌う。

また、語り手を担当してきた奈良岡朋子が引っ張り出されて初めて顔を出して一曲。「歌番組には出たことがないのよ。それに裕ちゃんたら突然歌わせるんですもの」と言いながらも、この日のゲストの三人に囲まれてとてもうれしそうだった。

昭和５１年３月８日

①「山口淑子想い出の愛唱歌集」　＃２１０

②山口淑子、砂原美智子、灰田勝彦、青江三奈、伊東ゆかり、しばたはつみ

③**（出演順）**「蘇州夜曲」（青江）、「何日君再来」（伊東）、「蘇州の夜」（しばた）、「いとしあの星」（伊東・しばた・青江）、「荒城の月」（砂原）、「新雪」（灰田）、「東京夜曲」（青江）、「夜来香」（山口（朗読）・しばた）、「私の鶯」（砂原）、「バタビヤの夜は更けて」（灰田）、「わかれ雪」（伊東）、「ショウガール」（しばた）、「霧の港・神戸」（青江）、「燦めく星座」（灰田）、「森の小径」（全員）

④　山口淑子を特別ゲストに迎え、砂原美智子、灰田勝彦、青江三奈、伊東ゆかり、しばたはつみらが、山口のヒット曲や懐かしの名曲を歌う。

第一部は、一世を風靡した大スター”李香蘭”時代の山口のヒット曲特集で、青江の「蘇州夜曲」、伊東「何日君再来」ほか。歌の合間に山口を中心に、それぞれの歌にちなむエピソードを語り合う。

第二部は戦後、山口淑子になってからのヒット曲「東京夜曲」ほか。「夜来香」の冒頭の美しい中国語の詩を山口が朗読する。また、昭和１９年、李香蘭主演で制作されながら「時局向きでない」とい

う理由で上映されなかった幻の映画「私の鶯」の主題歌を砂原が歌う。また、灰田の歌で山口が一番好きだという「新雪」を灰田が歌う。

「思い出の歌★心の歌」は、旭川市の古角たかしさんのリクエストによる「バタビヤの夜は更けて」を灰田が歌う。

第三部は、灰田勝彦ヒット曲集で、「燦めく星座」ほか。

昭和５１年３月１５日

①「熱唱！五木ひろし・涙と栄光の蔭に」　＃２１１

②五木ひろし、菅原都々子、若原一郎、青木光一、財津一郎、上原愛子、前田利明

③「千曲川」（五木）、「リンゴの唄」（五木）、「かえり船」（五木）、「おーい中村君」（五木）、「愛の始発」（五木）、「新宿駅から」（五木）、「流浪の旅」（財津）

④　五木ひろしが大正時代の名曲、終戦直後のヒット曲、１２年前のデビュー曲、そして最新曲まで十数曲を歌いまくる。五木の「千曲川」で始まり、ついで、”のど自慢巡業”までしたという五木の少年時代の愛唱歌集をメドレーで披露する。また、五木があこがれていた菅原都々子、若原一郎、青木光一が登場、それぞれのヒット曲を歌い、一曲ずつ五木と共演する。

また、最近、美声を買われて「財津一郎・流浪のうた」と題するＬＰを最近出した財津が歌謡番組に初出演。五木と一緒に”歌の心”や、貧乏時代のエピソードを語り合う他、大正時代の名曲「流浪の旅」ほかを歌う。

”思い出の歌”コーナーは、五木が昭和３９年、１６歳でデビューした時の曲「新宿駅から」を、恩師である故上原げんと夫人・愛子を前に歌う。愛子の他、愛子の弟で作曲家の前田利明がゲスト出演し、五木のデビュー当時の思い出を語る。

昭和５１年３月２２日

①「大演歌！男一匹お控えなすって」　＃２１２

②北島三郎、都はるみ、こまどり姉妹、杉良太郎、ガッツ石松

③「唐獅子牡丹」（杉・都・北島）、「仁義」（北島）、「緋牡丹博徒」（都）、「東京流れ者」（杉）、「三味線姉妹」（こまどり）、「裏町人生」（都・杉）、「男なら」（ガッツ・都・杉）、「ギター仁義」（北島）、「旅姿三人男」（ガッツ）、「未練ごころ」（こまどり）

④　北島三郎、都はるみ、こまどり姉妹に杉良太郎、それにボクシング・ライト級世界チャンピオンのガッツ石松を加えたメンバーで、”男”の演歌を特集。ガッツ石松は旅人姿で仁義をきってみせる。また、杉良太郎とガッツ石松が、北島三郎らとともに渋いノドをきかせる。

杉、都、北島が歌う「唐獅子牡丹」で始まり、北島の「仁義」、都の「緋牡丹博徒」、杉の「東京流れ者」と続き、飲み屋風にしつらえたセットで、こまどり姉妹と北島が流し時代の思い出話を披露し、こまどり姉妹が「三味線姉妹」、都と杉が「裏町人生」などを歌う。更にガッツ石松が都、杉との競演で「男なら」を歌い、北島の「ギター仁義」で締めくくる。

「旅姿三人男」の一節で“森の石松”の部分を“ガッツ石松”と替えて歌って大好評。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌心の歌”は、こまどり姉妹の「未練ごころ」。

昭和５１年３月２９日

①「慕情演歌・宮地おさむ涙の告白！」　＃２１３

②春日八郎、水前寺清子、殿さまキングス、八代亜紀、水の江滝子

③「別れの一本杉」（春日）、「湖底の故郷」（八代）、「中国地方の子守唄」（水前寺）、
「誰か故郷を想わざる」（殿さま）、「花言葉の唄」（水前寺）、「涙の渡り鳥」（八代）、
「なみだの操」（殿さま）、「母恋吹雪」（宮地）、

④　春日八郎、水前寺清子、殿さまキングス、八代亜紀、それに水の江滝子をまじえて、”ふるさと演歌”を中心に、なつかしい名曲の数々を送る。

第一部は、春日の「別れの一本杉」を皮切りに、八代が「湖底の故郷」、水前寺が「中国地方の子守唄」、殿さまキングスが「誰か故郷を想わざる」ほかを歌い、それぞれ故郷の思い出を語り合う。

第二部は、水の江滝子がＳＫＤ時代の思い出を語り、当時、地方巡業などに行くとよく歌ったという「花言葉の唄」を水前寺が、「涙の渡り鳥」を八代が歌う。

第三部は殿さまキングス特集で、下積み時代の思い出話を語りながら、「なみだの操」を歌い、宮地おさむが亡き祖母をしのんで「母恋吹雪」を披露する。

第214回～第239回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和51年4月　5日～ 昭和51年9月27日	月	21時00分～ 21時54分

司会：曽我廼家明蝶（第214回～239回）
　　三ツ矢歌子　（第214回～239回）

語り：奈良岡朋子（第214回～239回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和５１年４月５日
①「ひばり、五木、ちあき艶歌決定版！！」　＃２１４
②美空ひばり、五木ひろし、ちあきなおみ
③「道頓堀行進曲」（不明）
④　美空ひばり、五木ひろし、ちあきなおみの顔合わせで、大正から現在までの名曲の数々を特集。
今夜から神山繁に代わって曽我廼家明蝶が司会を務める。芸歴５０年の明蝶だが、司会業はこれが三度目。同じ司会の三ツ矢歌子とは、もちろん初顔合わせ。ひと味違ったオトナの歌謡番組を狙うそうだが、明蝶は「私は私なりの特色を出したいですなあ。たまには酒でも飲んで脱線するかも……地でやらせてもらいます」と、抱負を語る。
第一部は、司会の明蝶と三ツ矢がともに大阪出身ということから、「道頓堀行進曲」など大阪にちなんだ曲を特集。
また、大正から昭和のヒット曲の特集。

昭和５１年４月１２日
①「魅惑の夜！石原裕次郎男ごころ女ごころを歌う！」　＃２１５
②石原裕次郎、内山田洋とクール・ファイブ、青江三奈、弘田三枝子、北村英治
③「東京ラプソディー」（石原）、「嵐を呼ぶ男」（石原）、「紅の翼」（石原）、「鷲と鷹」（石原）、「二人でお酒を」（青江）、「ベッドで煙草を吸わないで」（石原）、「爪」（弘田）
④　石原裕次郎をメインに内山田洋とクール・ファイブ、弘田三枝子、青江三奈らが出演。石原が戦前、戦後のヒット曲や、日活時代の映画主題歌を歌いまくる。
第一部は、石原の「東京ラプソディー」ほか、昭和１０年代初期のヒット曲を特集。石原が自分の波乱に富んだ青春時代を語る。
第二部は、石原の日活時代のヒット曲特集。「嵐を呼ぶ男」「紅の翼」「鷲と鷹」などを披露、それぞれの歌にちなんだエピソードを紹介。
第三部は、クラリネットの北村英治を加えたムード歌謡の特集で、曲は、青江が「二人でお酒を」、石原が「ベッドで煙草を吸わないで」、弘田が「爪」ほか。

昭和５１年４月１９日
①「涙の演歌！ああ母なればこそ」　＃２１６
②二葉百合子、八代亜紀、中条きよし、ちあきなおみ
③「悲しき子守唄」（二葉）、「岸壁の母」（二葉）、「雨に咲く花」（八代・ちあき）、「無情の夢」（不明）
④　浪曲歌謡の二葉百合子をはじめ、ちあきなおみ、中条きよし、八代亜紀の顔ぶれで、”母もの歌謡”ヒット曲特集。
第一部は、母もの歌謡特集で、二葉が映画”愛染かつら”の主題歌「悲しき子守唄」を歌い、合間に出演者一同が母のことや”おふくろの味”などを語り合う。
第二部は、二葉が「岸壁の母」をセリフ、フシ入りで熱演。
第三部は”女ごころ”を歌った曲を特集。曲は、八代とちあきで「雨に咲く花」ほか。
視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、「無情の夢」。

昭和５１年４月２６日

①「港恋唄なみだ唄演歌一筋！」　＃２１７

②田端義夫、春日八郎、フランク永井、人見静一郎、吉村捨男

③「玄海ブルース」（田端）、「波止場気質」（田端・春日・フランク）、「君恋し」（春日）、「別れの一本杉」（フランク）、「片瀬波」（春日・フランク）、「ふるさとの灯台」（田端）、「かえり船」（田端）、

④　田畑義夫、春日八郎、フランク永井の競演で、マドロス演歌特集や、珍しい持ち歌交換、バタやん特集などを繰り広げる。

第一部は、マドロス、波止場もの特集。田端の「玄海ブルース」や、三人共演の「波止場気質」ほか。歌の合間に、マドロスものに関するエピソードなどを一同が語り合う。

第二部は、春日とフランクのコーナー。持ち歌を交換して歌うのが面白い。春日がフランクのレコード大賞受賞曲の「君恋し」を歌えば、フランクは春日の不朽の名曲「別れの一本杉」をそれぞれ歌う。ラストは二人で戦前の名曲「片瀬波」をじっくりと聞かせる。

第三部は、バタやんコーナー。田端の司会を勤めてきた人見静一郎、旧大阪松竹歌劇団支配人吉村捨男の両氏が出演、大阪・千日前の”大劇”にまつわるエピソードを語り合いながら、田端が「ふるさとの灯台」ほかを歌う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端の「かえり船」。

同年５月２日付読売新聞東京版朝刊に、「石井、里見氏はどこ」と題する６５歳男性視聴者からの以下の投書が載っている。

> ＮＥＴテレビ二十六日「にっぽんの歌」（後９・００）で懐かしや人見静一郎氏が名調子を聞かせてくれた。無声映画はなやかなりしころの大阪・松竹座の名弁士であった。若かったころ毎週通ったものだが、人見氏と同じく弁士をしていた石井春瞳、里見義郎氏らの消息も知りたいものだ。

昭和５１年５月３日

①「絶唱！恋と別れの慕情艶歌」　＃２１８

②森進一、青江三奈、森昌子、淡谷のり子

③「女のためいき」（森進一）、「女の階段」（青江）、「別れのブルース」（淡谷）、「白樺の小径」（淡谷・森昌子）、「襟裳岬」（森進一）、「ポエマ」（淡谷）

④　森進一、青江三奈、森昌子、それにベテランの淡谷のり子を迎えて、恋する女の悲しみ、嘆きなど”女ごころ”をうたった曲を特集する。

第一部は”女ごころ”の特集。森進一が「女のためいき」、青江が「女の階段」ほか。合間に森進一、青江がデビュー時代の思い出などを淡谷を交えて語り合う。

第二部は”ブルース特集”。淡谷が「別れのブルース」、淡谷と森昌子が「白樺の小径」ほか。

第三部は、森進一の”旅情の歌”特集。「襟裳岬」など４曲を情熱をこめて歌う。

リクエストによる”思い出の歌”は淡谷の「ポエマ」。

昭和５１年５月１０日
①「鶴田浩二・着流し艶歌！思い出の歌！」　＃２１９
②鶴田浩二、島倉千代子、都はるみ
③「流転」（鶴田）、「むらさき小唄」（島倉）、「お島千太郎旅唄」（都）、「明治一代女」（鶴田・島倉・都）、「りんどう峠」（島倉）、「好きになった人」（都）「アイルランドの娘」（鶴田）
④　着流し姿の鶴田浩二を中心に、島倉千代子、都はるみの顔合わせで、艶歌を特集する。
第一部は、芸道もの時代劇の主題歌特集。鶴田が「流転」、島倉が「むらさき小唄」、都が「お島千太郎旅唄」ほか。合間にそれぞれの映画にちなむエピソードなどを語り合い、三人で「明治一代女」を歌う。
第二部は、島倉と都のコーナー。島倉が「りんどう峠」、都が「好きになった人」ほかを披露。
第三部は、若き日の鶴田の愛唱歌集。ディック・ミネの「アイルランドの娘」ほかを歌い、バタくさい歌が好きだったという、多感な少年時代の思い出を語る。

昭和５１年５月１７日
①「熱唱！美空ひばり昭和歌謡30年！（前）」　＃２２０
②美空ひばり、ミュージカル・アカデミー
③「悲しき口笛」（美空）、「東京キッド」（美空）、「私は街の子」（美空）、「港町十三番地」（美空）、「あの日の船はもう来ない」（美空）、「真赤な太陽」（美空）、「風」（美空）、「リンゴ追分」（美空）
④　今週と来週の二回にわたって、美空ひばりのワンマンショーを送る。芸能生活三十周年にちなんで、１５曲ずつ合計３０曲を歌うが、持ち歌の他にフォーク、ポップス調もミックスして幅の広さを披露する。
第一部は、デビュー当時のヒット曲特集。「悲しき口笛」「東京キッド」「私は街の子」ほか。歌の合間に、司会の曽我廼家明蝶、三ツ矢歌子と当時の世相やデビュー当時の思い出などを語り合う。
第二部は、”波止場もの”特集。「港町十三番地」「あの日の船はもう来ない」ほかを歌い、港町横浜に生まれ育った美空が、波止場や海に寄せるあこがれなどを語る。
第三部は、フォーク、ポピュラー調のヒット曲特集。「真赤な太陽」「風」ほかを披露。
視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は「リンゴ追分」。

昭和５１年５月２４日
①「熱唱！美空ひばり昭和歌謡30年！（後）」　＃２２１
②美空ひばり、西村小楽天
③「花笠道中」（美空）、「越後獅子の唄」（美空）、「浪曲子守唄」（美空）、「女の花道」（美空）、「柔」（美空）、「星の流れに」（美空）、「骨まで愛して」（美空）、「悲しい酒」（美空）、「ある女の詩」（美空）、「雑草の歌」（美空）
④　美空ひばりの歌でつづる戦後歌謡史の後編。長年にわたってひばりのステージの司会を務めてきた西村小楽天がゲスト出演。
第一部は、なつかしい時代劇映画主題歌特集。曲は、「花笠道中」「越後獅子の唄」など４曲。美空が、嵐寛寿郎と共演した時の思い出や時代劇の楽しさなどを語った後、「大好きな曲のひとつ」とい

う一節太郎の「浪曲子守唄」をセリフ入りで”初公開”する。

第二部は、美空得意のレパートリーの一つ、人生ひとすじ演歌の特集。「女の花道」「柔」を、司会者西村小楽天の名調子に乗せて歌う。

第三部は、女の悲しみ、女の愛を歌うヒット曲特集。菊池章子の「星の流れに」、城卓矢の「骨まで愛して」など、それぞれの歌手のイメージが強い曲を歌い、持ち歌の「悲しい酒」で締めくくる。

視聴者のリクエストよる”思い出の歌」は、「ある女の詩」。

最後に、美空が芸能生活３０周年にかける決意を語り、新曲「雑草の歌」を歌う。

昭和５１年５月３１日

①「競艶！花のお座敷日本調！」　＃２２２

②島倉千代子、北島三郎、水前寺清子、八代亜紀

③「お座敷小唄」（水前寺・八代・北島）、「野崎小唄」（島倉）、「お駒恋姿」（八代・北島）、「船頭可愛いや」（北島・水前寺）、「奴さん」（水前寺）、「さのさ」（八代）、「五木の子守唄」（八代）、「田原坂」（水前寺）、「ソーラン節」（北島）、「思い出さん今日は」（島倉）

④　島倉千代子、北島三郎、水前寺清子、八代亜紀の顔合わせで、おなじみのお座敷ソング、民謡の数々を披露する。

オープニングは水前寺、八代、北島の共演で「お座敷小唄」。

第一部は、戦前の日本調ヒット曲特集。島倉が「野崎小唄」、八代と北島が「お駒恋姿」、北島と水前寺が「船頭可愛いや」ほか。

第二部は、俗謡、民謡特集。水前寺が「奴さん」、八代が「さのさ」を歌った後、それぞれ出身地にちなんだ民謡を競演、八代が「五木の子守唄」、水前寺が「田原坂」、北島が「ソーラン節」。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は島倉の「思い出さん今日は」。

昭和５１年６月７日

①「決定版！艶歌の真髄！！」　＃２２３

②ディック・ミネ、藤山一郎、五木ひろし、都はるみ、森進一

③「よこはまたそがれ」（五木）、「アンコ椿は恋の花」（都）、「港町ブルース」（森）、「影を慕いて」（藤山）、「青春日記」（藤山）、「旅姿三人男」（ディック）、「長崎の鐘」（藤山）

④　都はるみ、森進一、五木ひろしの三人の若手組に、特別ゲストのベテラン・藤山一郎、それにけがが治り元気になったディック・ミネを加えて”演歌”” 艶歌”の神髄を披露する。

第一部は若手の三人がそれぞれの持ち歌と、”別れ”をテーマにしたヒット曲を歌う。曲は五木が「よこはまたそがれ」、都が「アンコ椿は恋の花」、森が「港町ブルース」ほか。また三人がそれぞれ歌手を志した動機などを語る。

第二部は藤山のコーナー。昭和の初期、モダンボーイのハシリとして評判になった藤山が、クルマやゴルフの話をした後、若手の三人と組んで当時のヒット曲「影を慕いて」「青春日記」などを披露。

第三部は、ディックのコーナー。「旅姿三人男」を歌い、司会の曾我廼家明蝶と”オールドプレーボーイ”同士でユーモラスな浮気談議に花を咲かせる。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、藤山の「長崎の鐘」。

三か月前、愛人宅で倒れ、重傷を負ったディックは、今夜の番組でカムバックする。一時は歌手生活も危ぶまれていたが、先月１８日のＶＴＲ撮りには薄いブルーのスーツにステッチの入った若々しい姿でスタジオ入り。検査のため病院に缶詰めになっていたが、お医者さんの許可をもらって慎重に再起をはかった。「倒れた所が悪かった。もう少し考えて倒れればよかったよ……」と、さすがの豪傑も本番では大いに照れていた。なお、完全に回復はしておらず、収録後また病院へ逆もどり。それでも「まだまだ歌はすてられません。がんばります」と元気なディック。

昭和５１年６月１４日

①「歌まつり！花の紅白大合戦」　＃２２４

②エト邦枝、青木光一、榎本美佐江、霧島昇、織井茂子、白根一男、灰田勝彦、菅原都々子、三浦洸一、藤島桓夫、若山彰、奈良光枝、市丸

③「燦めく星座」（灰田）、「十三夜」（榎本）、「柿の木坂の家」（青木）、「江の島エレジー」（菅原）、「カスバの女」（エト）、「東京の人」（三浦）、「潮来花嫁さん」（花村）、「お月さん今晩は」（藤島）、「はたちの詩集」（白根）、「夜がわらってる」（織井）、「喜びも悲しみも幾歳月」（若山）、「雨の夜汽車」（奈良）、「誰か故郷を想わざる」（霧島）、「天竜下れば」（市丸）、「木曽節」（全員）

④　東京・芝の郵便貯金ホールから男女七人ずつ十四人のベテラン歌手が紅白に分かれ、交互におなじみのヒット曲を競演する。

灰田勝彦の「燦めく星座」で始まり、榎本美佐江が「十三夜」、青木光一が「柿の木坂の家」、菅原都々子が「江の島エレジー」、エト邦枝が「カスバの女」、三浦洸一が「東京の人」、花村菊江が「潮来花嫁さん」、そして藤島桓夫が「お月さん今晩は」と続く。

次いで視聴者のリクエストによる”思い出の歌”コーナーに入り、白根一男と織井茂子が「はたちの詩集」「夜がわらってる」をそれぞれ歌う。

再び歌合戦に戻って、若山彰が「喜びも悲しみも幾歳月」、奈良光江が「雨の夜汽車」、霧島昇が「誰か故郷を想わざる」、市丸が「天竜下れば」を歌い、最後に全員で「木曽節」をにぎやかに歌い踊る。

昭和５１年６月２１日

①「ああ演歌！バタやん橋の下の演歌教室／森進一・故郷！仲間！おふくろさん！／帰って来たトリオこいさんず」　＃２２５

②田端義夫、森進一、若い根っ子の会、トリオこいさんず

③「急げ幌馬車」（田端）、「男の純情」（田端）、「ふるさと」（森・根っ子）、「おふくろさん」（森）、「イヤーかなわんわ」（こいさんず）、「親子船唄」（田端義夫）

④　田端義夫、森進一、トリオこいさんずの出演で、懐かしいヒット曲を特集。

第一部は、田端が修業時代の秘話や田端ぶしを完成させるまでのエピソードを語り、「急げ幌馬車」「男の純情」などを歌う。

第二部は、集団就職で故郷鹿児島から都会に出てきた森が「若い根っ子の会」の仲間たちと語り合い、「ふるさと」などを合唱し、森は「おふくろさん」を歌う。

第三部は、ハワイから十年ぶりの里帰り津村アイ子を迎え、カスリの着物にげたばきスタイルのトリオこいさんずが昔のままに「イヤーかなわんわ」ほかを披露。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端の「親子船唄」。

昭和５１年６月２８日

①「大一番！花の演歌場所！」　＃２２６

②井筒親方（元横綱北の富士）、松山恵子、春日八郎、藤圭子、細川たかし

③「男の土俵」（井筒）、「赤いランプの終列車」（春日）、「お別れ公衆電話」（松山）、「新宿の女」（藤）、「心のこり」（細川）、「銀座の恋の物語」（井筒・藤）、「お富さん」（井筒・春日）、「ネオン無情」（井筒）、「裏町人生」（松山）、「リンゴ追分」（松山）、「未練の波止場」（松山）

④　春日八郎、松山恵子、藤圭子、細川たかしらの実力派に加えて、元横綱北の富士の井筒親方が特別出演、プロ級といわれる美声を披露する。

井筒親方が歌う「男の土俵」でオープニング。

第一部は、春日が「赤いランプの終列車」、松山が「お別れ公衆電話」、藤が「新宿の女」、細川が「心のこり」を歌うヒット曲特集。

第二部は、井筒親方を中心にしたコーナー。同郷（北海道）のよしみで「銀座の恋の物語」を藤と、中学生時代に愛唱したという「お富さん」を春日とそれぞれデュエット、新弟子時代のエピソードなどを披露した後「ネオン無情」を歌う。

第三部は奈良岡朋子の語りでつづる松山の汗と涙の半世紀。曲は、「裏町人生」「リンゴ追分」「未練の波止場」など。

昭和５１年７月５日

①「激突！村田、二葉の浪曲歌謡名勝負！無法松対九段の母／股旅演歌決定版！／艶姿！三浦布美子の江戸情緒」　＃２２７

②村田英雄、三浦布美子、二葉百合子

③「旅笠道中」（村田）、「妻恋道中」（三浦）、「鴛鴦道中」（二葉）、「かっぽれ」（三浦）、「明治一代女」（三浦）、「岸壁の母」（二葉）、「無法松の一生」（村田）、「九段の母」（二葉）、「名月赤城山」（不明）

④　村田英雄、三浦布美子、二葉百合子の出演で、おなじみの演歌やヒット曲を披露する。

第一部は”道中もの”特集。村田が「旅笠道中」、三浦が「妻恋道中」、二葉が「鴛鴦道中」ほかを歌う。

第二部は、三浦の歌と踊りのコーナー。芸者姿の三浦が「かっぽれ」「明治一代女」ほかを歌い、踊る。歌の合間に、初夏の浅草情緒を司会の曾我廼家明蝶、三ツ矢歌子と語り合う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”コーナーは、二葉の「岸壁の母」。戦争で二人の弟を失った兵庫県姫路市の長谷川初子さんが78歳の老母とともに登場する。

最後は、村田と二葉の浪曲歌謡競演で、村田が「無法松の一生」、二葉が「九段の母」をそれぞれフシ入りで演じる。

昭和５１年７月１２日

①「北から南から！日本縦断・郷愁のふるさと演歌大特集！」　＃２２８

②田端義夫、島倉千代子、三橋美智也、西川峰子

③「逢いたいなアあの人に」（島倉）、「リンゴ村から」（三橋）、「達者でナ」（三橋）、「かえり船」（田端）、「ふるさとの灯台」（田端）、「りんどう峠」（西川）、「ねんねん船唄」（西川）、「島育ち」（田端）

④　お盆、やぶ入り、帰省、ふるさと、といったさまざまなイメージの歌を中心に、三橋美智也の津軽三味線などを交え、ヒット曲の数々を送る。

オープニングは、島倉千代子の「逢いたいなアあの人に」、続いて三橋が「リンゴ村から」「達者でナ」、田端義夫が「かえり船」「ふるさとの灯台」ほかを歌い、合間にそれぞれのふるさとの夏の思い出を語る。三橋が津軽三味線をたっぷりきかせた後、若手の西川峰子が島倉と田端の歌に挑戦、「りんどう峠」「ねんねん船唄」を披露、島倉、田端と共演する。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端の「島育ち」。

昭和５１年７月１９日

①「対決！裕次郎・五木・ほろ酔い唄合戦ビッグヒット！夜の慕情」　＃２２９

②石原裕次郎、五木ひろし、青江三奈、ちあきなおみ

③「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、「夜空」（五木ひろし）、「夜間飛行」（ちあき）、「池袋の夜」（青江）、「よこはまたそがれ」（石原）、「錆びたナイフ」（五木）、「くちなしの花」（石原・五木）、「懐しのブルース」（青江）、「水色のワルツ」（ちあき）、「君待てども」（石原・青江・ちあき）

④　石原裕次郎、五木ひろし、青江三奈、ちあきなおみの出演で都会の夜のムードの歌を特集。

第一部は、夜のムード曲特集。石原が「夜霧よ今夜も有難う」、五木が「夜空」、ちあきが「夜間飛行」、青江が「池袋の夜」を歌い、合間にいちばん夜にツヨイのはだれかなど、それぞれの”夜の生活”ぶりなどを語り合う。

第二部は、石原と五木の歌合戦。石原が五木の「よこはまたそがれ」、五木が石原の「錆びたナイフ」ほかを披露する。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は「くちなしの花」で、石原と五木が二人で歌う。

第三部は“石原裕次郎思い出の歌”と題して石原が青春時代に愛唱した昭和２０年代のヒット曲を特集。青江が「懐しのブルース」、ちあきが「水色のワルツ」、石原・青江・ちあきの三人で「君待てども」ほか。

昭和５１年７月２６日

①「天知茂、橋幸夫、浅香光代の演歌殺法名場面！／唄くらべ三度笠だよ大勝負！」　＃２３０

②橋幸夫、水前寺清子、藤圭子、天知茂、浅香光代

③「潮来笠」（天知・橋）、「雪の渡り鳥」（水前寺）、「旅笠道中」（天知）、「吉良の仁吉」（藤）、「花の三度笠」（橋）、「大利根月夜」（天知）、「一本刀土俵入り」（橋）、「流転」（水前寺）、「星の流れに」（浅香・藤）

④　おなじみの橋幸夫、水前寺清子、藤圭子に加えて、このほどＬＰも出して本格的な歌手の仲間入りをした天知茂、更に浅香光代と、にぎやかなメンバーで送る。

第一部は股旅演歌名曲集。天知と橋が「潮来笠」、水前寺が「雪の渡り鳥」、天知が「旅笠道中」、藤が「吉良の仁吉」、橋が「花の三度笠」ほかを歌い、合間に股旅時代劇の楽しさなどを語り合う。

第二部は“天知茂、橋幸夫、浅香光代の演歌殺法名場面”と題して、天知の「大利根月夜」、橋の「一本刀土俵入り」をバックに浅香がそれぞれのサワリを、胸のすくようなタンカとあざやかな殺陣で披露する。次いで浅香が修業時代の思い出を語り、当時、劇中でよく歌ったという曲の中から「流転」を水前寺が、「星の流れに」を浅香と藤が歌う。

昭和５１年８月２日

①「ジャンボ尾崎夜の艶歌に挑戦！／公開！都はるみの秘密！？／競演！ご当地盛り場演歌旅」
＃２３１

②都はるみ、内山田洋とクール・ファイブ、八代亜紀、フランク永井、尾崎将司

③「恋の町札幌」（尾崎）、「アンコ椿は恋の花」（都）、「長崎は今日も雨だった」（クール）、「なみだ恋」（八代）、「有楽町で逢いましょう」（フランク）、「君恋し」（尾崎）、「雨の酒場」（尾崎）、「好きになった人」（都）、「北の宿から」（都）

④　都はるみ、内山田洋とクール・ファイブ、八代亜紀、フランク永井に加えて、ノドの方もプロ級と定評のあるプロゴルファーの尾崎将司をゲストに迎え、ヒット曲の数々を送る。

第一部は尾崎の「恋の町札幌」をオープニングに、都が「アンコ椿は恋の花」、クール・ファイブが「長崎は今日も雨だった」、八代が「なみだ恋」、フランクが「有楽町で逢いましょう」とヒット曲を披露。

第二部は、“ジャンボ尾崎夜の艶歌に挑戦！”と題して、尾崎が「君恋し」と新曲「雨の酒場」を歌い、尾崎のリクエストに応えてフランク、八代、クール・ファイブが一曲ずつ披露する。そのあと、尾崎を囲んでゴルフ談議に花を咲かせる。

第三部は“公開！都はるみの秘密！？”で、「好きになった人」「北の宿から」などを熱唱する彼女の魅力の秘密を一同が語り合う。

わが家にマイクやスピーカーの本格的設備を作り、歌のうまさでは定評のある尾崎は大変なテレ方で「きょうは皆さんの引立役ですから……」。

昭和５１年８月９日

①「特集！ああ軍歌！ああ戦友！なつかしの戦時歌謡30曲（前）」　＃２３２

②春日八郎、ペギー葉山、近江俊郎、藤山一郎、灰田勝彦、田端義夫

③**（出演順）**「暁に祈る」（全員）、「麦と兵隊」（春日）、「父よあなたは強かった」（ペギー）、「月月火水木金金」（近江）、「燃ゆる大空」（藤山）、「愛国行進曲」（灰田）、「流砂の護り」（田端）、「露営の歌」（近江）、「愛馬行進曲」（春日）、「梅と兵隊」（田端）、「空の勇士」（藤山）、「空の神兵」（ペギー）、「加藤隼戦闘隊」（灰田）、「九段の母」（田端）、「海ゆかば」（藤山）

④　終戦記念日を間近に控え、祖国のために散った幾百万の若人の鎮魂の意味も込めて、今週と来週の二回にわたり、戦前、戦中に愛唱された軍歌を特集する。

出演者全員による「暁に祈る」でオープニング。続いてそれぞれの歌手たちが終戦の時、どこで何をしていたか、敗戦を聞いた時の心境などを語り合う。そして再び歌、春日八郎が「麦と兵隊」、ペ

ギー葉山が「父よあなたは強かった」、近江俊郎が「月月火水木金金」、藤山一郎が「燃ゆる大空」、灰田勝彦が「愛国行進曲」を歌う。灰田はこの曲の吹き込み当日に召集令状を受け、直ちに近衛師団工兵連隊に入営した思い出を語る。

続いてそれぞれの歌手たちから軍隊生活・慰問の思い出を聞いた後、当時の兵士たちの生活、行軍、戦闘などを映したフィルムをバックに、田端義夫が「流砂の護り」、近江が「露営の歌」、春日が「愛馬行進曲」を披露。

続く”空”をテーマにした特集では藤山が「空の勇士」、ペギーが「空の神兵」、灰田が「加藤隼戦闘隊」を歌う。

田端が「九段の母」を歌った後、藤山の「海ゆかば」で幕。

昭和５１年８月１６日

①「特集！ああ軍歌！ああ戦友！なつかしの戦時歌謡30曲（後）」　＃２３３

②藤山一郎、灰田勝彦、近江俊郎、春日八郎、田端義夫、ペギー葉山、鯨部隊の出身者

③**（出演順）**「同期の桜」（全員）、「若鷲の歌」（藤山）、「ラバウル海軍航空隊」（灰田）、「轟沈」（近江）、「あゝ紅の血は燃ゆる」（春日）、「別れ船」（田端）、「バタビヤの夜は更けて」（灰田）、「南国土佐を後にして」（ペギー・鯨部隊出身者）、「可愛いスーチャン」（春日）、「ダンチョネ節」（ペギー）、「母と兵隊」（田端）、「戦友の遺骨を抱いて」（春日）、「勝利の日まで」（近江）、「ブンガワン・ソロ」（藤山）、「ラバウル小唄」（全員）

④　先週に引き続き”軍歌特集”を放送。

全員のコーラスによる「同期の桜」を皮切りに、第一部は連戦連勝に国中が沸き立っていた頃の軍歌を特集。藤山一郎が「若鷲の歌」、灰田勝彦が「ラバウル海軍航空隊」、近江俊郎が「轟沈」、春日八郎が”勤労動員”の歌「あゝ紅の血は燃ゆる」を歌う。

第二部は、出征兵士が望郷の思いを込めて歌った曲を特集。田端義夫が「別れ船」、灰田が「バタビヤの夜は更けて」、ペギー葉山が「南国土佐を後にして」を披露。通称”鯨部隊”の出身者がゲストとして登場し、「南国土佐を後にして」のできたいきさつなどを語る。

第三部は”兵隊ソング”特集。春日が「可愛いスーチャン」、ペギーが「ダンチョネ節」など。

近江は自身の思い出に残っている軍歌「勝利の日まで」を歌う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、藤山の「ブンガワン・ソロ」。

フィナーレは全員合唱の「ラバウル小唄」。

なお、同年８月３０日付中日新聞夕刊では、記者による以下のコラムが載っている。

> 「にっぽんの歌」をいつも見ているが、二週続けてあった軍歌・戦時歌謡の特集で、歌の合間に戦時中の実写フィルムを映してくれ非常に感慨深かった。今後も折にふれ、ああいう記録写真を紹介してほしい。若い人たちに戦争の実態を正しく伝え二度と過ちを繰り返さないためにも――という手紙が、津市に住む知人から来た

昭和５１年８月２３日

①「熱唱！小林旭・帰ってきた渡り鳥／あれから30年…懐かしのスクリーンヒット曲」　＃２３４

②小林旭、舟木一夫、青江三奈、ディック・ミネ

③「夜霧のブルース」（小林・ディック）、「誰か夢なき」（青江）、「三百六十五夜」（舟木）、
「ギターを持った渡り鳥」（小林）、「さすらい」（小林）、「上海ブルース」（舟木）、
「或る雨の午後」（青江）、「北帰行」（小林）、「ダイナ」（全員）

④　小林旭、舟木一夫、青江三奈、ディック・ミネの出演で、終戦直後から昭和３０年代半ばにかけての映画主題歌ヒット曲を特集。

第一部は、終戦直後のヒット曲特集で、小林とディックが「夜霧のブルース」、青江が「誰か夢なき」、舟木が「三百六十五夜」ほかを歌う。合間に、当時の世相と映画主題歌との結びつきなどについて一同が語り合う。

第二部は、”渡り鳥シリーズ”で大ヒットを飛ばした小林の主題歌特集。浅丘ルリ子とのコンビのスチール写真をはさんで「ギターを持った渡り鳥」から「さすらい」まで、得意の”アキラ節”を披露。

第三部はディックを中心としたコーナーで舟木が「上海ブルース」、青江が「或る雨の午後」などを歌う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、小林の「北帰行」。

昭和５１年８月３０日

①「異色トリオ初競演！森光子・都はるみ・森進一慕情艶歌・なみだ唄」　＃２３５

②都はるみ、森進一、森光子

③「港町ブルース」（全員）、「別れのブルース」（森光子）、「上海帰りのリル」（都）、
「波浮の港」（森進一）、「ひとり酒場で」（森進一）、「赤坂の夜は更けて」（森光子）、
「湯の町エレジー」（都）、「酒は涙か溜息か」（全員）、「叱られて」（森光子）、

④　都はるみ、森進一というトップ歌手に、最近歌の方でも活躍の森光子を加えた異色トリオで、おなじみのヒット曲からナツメロ、童謡を特集する。

第一部は波止場もののヒット曲集。三人で歌う「港町ブルース」を皮切りに森光子が「別れのブルース」、都が「上海帰りのリル」、森進一が「波浮の港」ほか。歌の合間に森光子が、戦争中、慰問団の一員として外地の港へ行った時の思い出を語る。

第二部は、酒場のムード演歌集。森進一が「ひとり酒場で」、森光子が「赤坂の夜は更けて」、都が「湯の町エレジー」、三人で「酒は涙か溜息か」ほか。

第三部は”森光子我が心の唄”。生まれ育った京都の町の思い出を語りながら、幼いころの愛唱歌「叱られて」ほかを披露。

昭和５１年９月６日

①「特集あの日あの頃思い出のゴールデンヒット大行進！！」　＃２３６

②青木光一、藤島桓夫、松山恵子、若原一郎、織井茂子、三浦洸一、大津美子、林伊佐緒、岡本敦郎、富永一朗

③「小島通いの郵便船」（青木）、「月の法善寺横町」（藤島）、「だから言ったじゃないの」（松山）、
「吹けば飛ぶよな」（若原・富永）、「君の名は」（織井）、「東京の人」（三浦）、「ここに幸あり」（大津）、
「高原の宿」（林）、「白い花の咲く頃」（岡本）

④　今回はいつもと趣向を変え、スタジオ公開で客席との交流を交えながら、昭和２０年代から３０年

代前半にかけてのヒット曲をつづっていく。
歌の合間に歌手自身の当時の思い出やそれぞれの歌にまつわる客席の反応などを聞く。
視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は岡本敦郎の「白い花の咲く頃」。
若原一郎はゲストの漫画家・富永一朗とデュエットで「吹けば飛ぶよな」。

昭和５１年９月１３日
①「初挑戦！内藤九段対三橋、春日／絶唱！榎本美佐江涙で綴るおんな道」　＃２３７
②春日八郎、三橋美智也、榎本美佐江、内藤国雄
③「天竜下れば」（春日・三橋・榎本）、「古城」（三橋）、「別れの一本杉」（春日）、「十三夜」（榎本）、「おんな船頭唄」（内藤・三橋）、「赤いランプの終列車」（内藤・春日）、「リンゴ村から」（内藤）、「お俊恋唄」（榎本）、「後追い三味線」（榎本）、「東京見物」（三橋）、「おゆき」（内藤）
④　春日八郎、三橋美智也、榎本美佐江の三ベテランが、ふるさと演歌を中心にヒット曲を披露する。また、歌手としても活躍中の将棋の内藤国雄九段がゲスト出演、デビュー曲「おゆき」を歌う他、三橋、春日のヒット曲に挑戦する。
第一部は三ベテランのヒット曲特集。三人で歌う「天竜下れば」を皮切りに三橋が「古城」、春日が「別れの一本杉」、榎本が「十三夜」。歌の合間にそれぞれが幼い頃の秋の思い出を語り合う。
第二部は内藤九段が三橋、春日とそれぞれ「おんな船頭唄」「赤いランプの終列車」をデュエット、次いで三橋の「リンゴ村から」を歌った後、「民謡三橋流」の入門許可証を手渡される。
第三部は榎本のヒット曲特集で「お俊恋唄」「後追い三味線」ほか。
視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、三橋の「東京見物」。

昭和５１年９月２０日
①「お手を拝借！花のお座敷ソング大競演！／坂上二郎懐かしの歌大作戦／マヒナをめぐる二人の女」　＃２３８
②水前寺清子、八代亜紀、和田弘とマヒナスターズ、若山彰、坂上二郎
③「お座敷小唄」（水前寺・八代・マヒナ）、「野崎小唄」（八代）、「大江戸出世小唄」（水前寺）、「まつの木小唄」（マヒナ）、「船頭小唄」（マヒナ・坂上）、「流転」（坂上）、「大利根月夜」（坂上）、「喜びも悲しみも幾歳月」（若山）、
④　水前寺清子、八代亜紀、和田弘とマヒナスターズ、若山彰、それに坂上二郎という顔合わせで、おなじみのお座敷ソングを特集。
第一部はいわゆる”小唄もの”の特集。水前寺、八代、マヒナの「お座敷小唄」を皮切りに八代が「野崎小唄」、水前寺が「大江戸出世小唄」、マヒナが「まつの木小唄」、マヒナと坂上で「船頭小唄」など。
第二部は坂上のコーナー。のど自慢荒らしで食いつないだ苦闘時代などを振り返りながら自ら司会をして「流転」「大利根月夜」などの演歌や童謡などを歌いまくる。
第三部は”マヒナをめぐる二人の女”と題してマヒナが水前寺、八代と共演。
”思い出の歌”は、若山の「喜びも悲しみも幾歳月」。

昭和５１年９月２７日

①「決定版！これが男の大演歌／激突！北島・五木・あの歌この歌大合戦」　＃２３９

②五木ひろし、北島三郎、田端義夫、青江三奈

③「男の純情」（北島・五木・田端）、「名月赤城山」（五木）、「兄弟仁義」（北島）、「流転」（青江三奈）、「大利根月夜」（田端）、「女のみち」（青江）、「島育ち」（田端）

④　五木ひろし、北島三郎、田端義夫の演歌三人男に、紅一点青江三奈を交えて、戦前、戦後の演歌の名曲を特集する。

第一部は、演歌の名曲特集。北島、五木、田端の三人による「男の純情」を皮切りに、五木が「名月赤城山」、北島が「兄弟仁義」、青江が「流転」、田端が「大利根月夜」を歌う。歌の合間に、演歌に歌われた男ごころなどについて語り合う。

第二部は、五木と北島が岡晴夫ら先輩の曲を競演。

第三部は青江と田端のコーナー。青江が「女のみち」、田端が「島育ち」ほかを披露、”女ごころ”について語り合う。

第240回～第265回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和51年10月4日～ 昭和52年3月28日	月	21時00分～ 21時54分

司会：有島一郎（第240回～265回）
　　河内桃子（第240回～265回）

語り：奈良岡朋子（第240回～265回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和５１年１０月４日
①「初競演！おお懐しの愛唱歌」　＃２４０
②高峰三枝子、江利チエミ、中条きよし
③「南の花嫁さん」（高峰）、「南から南から」（江利）、「新雪」（中条）、「しのび泣くブルース」（高峰）、「別れのタンゴ」（高峰）、「おかあさん」（高峰）、「湖畔の宿」（高峰）、「酒場にて」（江利）、「知りすぎたのね」（江利・中条）
④　今回から有島一郎と河内桃子が司会を担当。
　ゲストに高峰三枝子、江利チエミ、中条きよしを迎え、なつかしい名曲、ヒット曲を特集する。高峰、江利が初のデュエット。
　第一部は、戦時色濃い中で人々の心を明るくした昭和１７年のヒット曲特集。高峰が「南の花嫁さん」、江利が「南から南から」、中条が「新雪」など。
　第二部は、高峰のヒット曲コーナーで、「しのび泣くブルース」「別れのタンゴ」「おかあさん」を披露。歌の合間に視聴者が高峰に宛てた亡き母をしのぶ手紙を高峰自身が朗読。
　第三部は江利と中条のコーナー。江利が「酒場にて」、二人で「知りすぎたのね」ほか。

昭和５１年１０月１１日
①「絶唱！美空ひばり古賀メロディーを歌う！」　＃２４１
②美空ひばり
③「柔」（美空）、「お島千太郎」（美空）、「江戸の闇太郎」（美空）、「遊侠街道」（美空）、「真実一路」（美空）、「白虎隊」（美空）、「影を慕いて」（美空）、「湯の町エレジー」（美空）、「悲しい酒」（美空）、「恋の曼珠沙華」（美空）、「娘船頭さん」（美空）、「あざみの歌」（美空）
④　美空ひばりが、おなじみの古賀メロディーをじっくり歌う。
　オープニングの「柔」についで第一部は、映画、舞台の主題歌特集。「お島千太郎」「江戸の闇太郎」「遊侠街道」「真実一路」など。歌の合間に時代劇の楽しさ、むずかしさなどを、司会の有島一郎、河内桃子と話し合い、詩吟入り「白虎隊」を披露する。
　第二部は木村好夫のギター伴奏で「影を慕いて」「湯の町エレジー」「悲しい酒」。
　第三部は古賀政男の生い立ちを語りで綴りながら「恋の曼珠沙華」「娘船頭さん」「あざみの歌」ほかを歌う。

昭和５１年１０月１８日
①「決定版！これが艶歌だ名調子！／こまどり・チータの夜の裏町流し唄」　＃２４２
②ディック・ミネ、水前寺清子、フランク永井、こまどり姉妹、小柳ルミ子
③「いっぽんどっこの唄」（水前寺）、「浅草姉妹」（こまどり）、「わたしの城下町」（小柳）、「西銀座駅前」（フランク）、「旅姿三人男」（ディック）、「君恋し」（ディック・フランク・小柳）、「三味線姉妹」（こまどり）、「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）、「昭和枯れすすき」（水前寺）、「緑の地平線」（フランク・小柳）、「ゆかりの歌」（ディック）
④　ディック・ミネ、水前寺清子、フランク永井、こまどり姉妹、小柳ルミ子の出演で、ヒット曲やおなじみの名曲を歌う。

第一部は、各人の持ち歌コーナー。水前寺が「いっぽんどっこの唄」、こまどりが「浅草姉妹」、小柳が「わたしの城下町」、フランクが「西銀座駅前」、ディックが「旅姿三人男」、ディック・フランク・小柳の三人で「君恋し」など。

第二部は“こまどり、チータの夜の裏町流し唄”と題して、こまどりが「三味線姉妹」、水前寺が「涙を抱いた渡り鳥」「昭和枯れすすき」など。歌の合間にそれぞれの無名時代の苦労話などを語り合う。

第三部はディック、フランク、小柳のコーナー。フランクと小柳がデュエットで「緑の地平線」、ディックが「ゆかりの歌」。

昭和５１年１０月２５日

①「ああ涙で綴るわが心の母！にっぽんの母」　＃２４３

②二葉百合子、森進一、田端義夫

③「岸壁の母」（二葉）、「おふくろさん」（森）、「里恋峠」（田端）、「九段の母」（二葉・森・田端）、「夢のゆりかご」（田端）、「赤とんぼ」（田端）、「ふるさとの丘」（田端）、「小雨の丘」（森）、「母恋吹雪」（二葉）

④　それぞれ母ものでヒットを飛ばした二葉百合子、森進一、田端義夫を迎えて”おかあさん”をテーマにした曲を特集。

第一部は三人の持ち歌競演。二葉が「岸壁の母」、森が「おふくろさん」、田端が「里恋峠」。さらに戦時中の代表的母もの歌謡「九段の母」を三人で歌う。

第二部は田端のコーナー。田端が、女の細腕ひとつで子どもたちを育てたという母の思い出を語りながら、母が大好きだったという「夢のゆりかご」「赤とんぼ」を歌い、亡き母にささげる「ふるさとの丘」を披露する。

第三部はかつての宝塚のスター小夜福子が昭和１５年に歌ってヒットした「小雨の丘」を森が歌い、続いて本番組のために特に作った浪曲入りの「母恋吹雪」を二葉が歌う。

昭和５１年１１月１日

①「競演！夜の銀座の恋物語／石原裕次郎・女の演歌に挑戦！」　＃２４４

②石原裕次郎、都はるみ、青江三奈、八代亜紀

③「銀座の恋の物語」（全員）、「東京ブルース」（八代）、「東京夜曲」（青江）、「かりそめの恋」（都）、「赤いグラス」（石原）、「星の流れに」（石原・青江）、「再会」（石原・八代）、「裏町人生」（石原・都）、「二人の世界」（石原）、「雨に咲く花」（青江）、「別れの磯千鳥」（都）

④　石原裕次郎を中心に都はるみ、青江三奈、八代亜紀の女性演歌トリオの出演でムード歌謡を特集。

第一部は東京の夜をテーマにしたヒット曲特集。四人そろって歌う「銀座の恋の物語」を皮切りに八代が「東京ブルース」、青江が「東京夜曲」、都が「かりそめの恋」、石原が「赤いグラス」。歌の合間に昭和２０年代から３０年代にかけての銀座風俗などを一同が語り合う。

第二部は”裕次郎・女の演歌に挑戦”というテーマで石原が青江と「星の流れに」、八代と「再会」、都と「裏町人生」をデュエットする。

第三部はラテンムードの伴奏で石原が「二人の世界」、青江が「雨に咲く花」、都が「別れの磯千鳥」を歌う。

昭和５１年１１月８日

①「歌まつり！想い出のビッグヒット大競演！！」　＃２４５

②舟木一夫、いしだあゆみ、ぴんから兄弟、ちあきなおみ、伊東ゆかり、弘田三枝子、堺正章、
黒沢年男、細川たかし、石川さゆり、新沼謙治、内藤やす子、都はるみ、霧島昇

③**（出演順）**「高校三年生」（舟木）、「ブルーライト・ヨコハマ」（いしだ）、「女のみち」（ぴんから）、
「喝采」（ちあき）、「小指の思い出」（伊東）、「人形の家」（弘田）、「街の灯り」（堺）、
「旅の夜風」（霧島・都）、「目ン無い千鳥」（霧島・ちあき）、「誰か故郷を想わざる」（霧島）、
「やすらぎ」（黒沢）、「心のこり」（細川）、「あなたの私」（石川）、「おもいで岬」（新沼）、
「弟よ」（内藤）、「涙の連絡船」（都）

④　川崎市体育館からの録画中継で、霧島昇や今年デビューの新人・新沼謙治ら１４人の歌手がそれぞれのヒット曲を披露する。有島一郎の代わりに男性司会者を高島忠夫が務める。

第一部はヒット曲特集。舟木一夫「高校三年生」、いしだあゆみ「ブルーライト・ヨコハマ」、ぴんから兄弟「女のみち」、ちあきなおみ「喝采」、伊東ゆかり「小指の思い出」、弘田三枝子「人形の家」、堺正章「街の灯り」。歌の合間にその曲を歌った頃のエピソードを語り合う。

第二部は霧島昇のコーナー。都はるみと「旅の夜風」、ちあきと「目ン無い千鳥」をデュエットしたり、高峰三枝子、渡辺はま子、二葉あき子、そして愛妻松原操らとの共演の思い出を語ったりする。視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、岐阜県大野郡の平野しづえさんのリクエストで、霧島の「誰か故郷を想わざる」。

第三部は再びヒット曲特集で、黒沢年男「やすらぎ」、細川たかし「心のこり」、石川さゆり「あなたの私」、新沼謙治「おもいで岬」、内藤やす子「弟よ」、都「涙の連絡船」。

昭和５１年１１月１５日

①「唄競べ！花の股旅草紙／芸道 50 年！高田浩吉道中演歌」　＃２４６

②高田浩吉、水前寺清子、ちあきなおみ、三沢あけみ、大川栄策

③「大江戸出世小唄」（高田・水前寺・ちあき・三沢）、「名月赤城山」（水前寺）、
「勘太郎月夜唄」（ちあき）、「妻恋道中」（三沢）、「鴛鴦道中」（高田）、「伊豆の佐太郎」（高田）、
「五十三次待ったなし」（高田）、「新妻鏡」（大川・水前寺）、「人妻椿」（大川・三沢・ちあき）

④　芸能生活５０周年を迎えた高田浩吉をはじめ、水前寺清子、ちあきなおみ、三沢あけみ、大川栄策が戦前、戦後のヒット曲を歌う。

第一部は、股旅演歌特集で、高田が水前寺、ちあき、三沢らと歌う「大江戸出世小唄」を皮切りに、水前寺が「名月赤城山」、ちあきが「勘太郎月夜唄」、三沢が「妻恋道中」、高田が「鴛鴦道中」。

第二部は高田のコーナー。高田が彼の映画主題歌などを歌いながら、”歌うスター第一号”だった昔をしのぶ。デビュー当時からの主な作品のスチール写真を並べ奈良岡朋子の語りで高田の歩みを紹介。高田が「伊豆の佐太郎」「五十三次待ったなし」などを歌う。

第三部は演歌一筋の大川のコーナーで、大川が水前寺と「新妻鏡」、三沢・ちあきと「人妻椿」を披露。

昭和５１年１１月２２日

①「決定版・港の艶歌！裏街怨歌！ふるさと演歌！」　＃２４７

②北島三郎、青江三奈、藤圭子、森昌子

③「あこがれのハワイ航路」（全員）、「あの娘が泣いている波止場」（森）、「連絡船の唄」（藤）、「港シャンソン」（青江）、「波止場気質」（北島）、「ギター仁義」（北島）、「東京流れ者」（藤）、「なみだの操」（青江）、「女心の唄」（青江・藤・北島）、「お月さん今晩は」（森）、「北上夜曲」（青江）、「湖底の故郷」（北島）

④　北島三郎、青江三奈、藤圭子、森昌子の出演で、港、裏街、ふるさとをテーマにしたヒット曲を送る。

第一部は”港の艶歌”特集。全員イキなマドロス・スタイルに身を固め、四人で歌う「あこがれのハワイ航路」を皮切りに森が「あの娘が泣いている波止場」、藤が「連絡船の唄」、青江が「港シャンソン」、北島が「波止場気質」。

第二部はスナック風のセットで”裏街怨歌”特集。北島が「ギター仁義」、藤が「東京流れ者」、青江が「なみだの操」、青江、藤、北島の三人で「女心の唄」など。北島や藤が”流し”時代の思い出を披露し、演歌の心を語り合う。

第三部は”ふるさと演歌”特集で、森が「お月さん今晩は」、青江が「北上夜曲」、北島が視聴者リクエストの”思い出の歌”で「湖底の故郷」を歌う。

昭和５１年１１月２９日

①「決定版！村田、こまどり、田端、演歌三番勝負！／こまどり姉妹涙の放浪記」　＃２４８

②田端義夫、村田英雄、こまどり姉妹、牧田栄

③「皆の衆」（村田）、「浅草姉妹」（こまどり）、「海のジプシー」（田端）、「王将」（村田）、「柔道一代」（村田）、「姿三四郎」（村田）、「ソーラン渡り鳥」（こまどり）、「ふたりぼっち」（こまどり）、「幸せになりたい」（こまどり）、「玄海ブルース」（田端）、「別れ船」（田端）、「島の船唄」（田端）、

④　田端義夫、村田英雄、こまどり姉妹が、それぞれのワンマンショー形式で演歌を歌いまくる。

オープニングはそれぞれのヒット曲競演で、村田が「皆の衆」、こまどりが「浅草姉妹」、田端が「海のジプシー」。

第一部は村田のショーで「王将」「柔道一代」「姿三四郎」を歌い、合間に人生の”勝負どき”について村田と司会の有島一郎、河内桃子らが語り合う。

第二部は、こまどりのショー。姉妹の風雪の人生を振り返る奈良岡朋子の語りをバックに「ソーラン渡り鳥」「ふたりぼっち」「幸せになりたい」などを披露。

第三部は田端のショー。「玄海ブルース」「別れ船」など、おなじみのヒット曲を歌う。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端が戦死した親友の義姉・牧田栄さんと対面、亡き友に心を込めてデビュー曲「島の船唄」を捧げる。

昭和５１年１２月６日

①「２５０回記念特集！歌まつり・花の紅白大合戦！（前）」　＃２４９

②ディック・ミネ、曽根史郎、三浦洸一、バーブ佐竹、一節太郎、黒沢明とロス・プリモス、黒木憲、菅原都々子、扇ひろ子、日吉ミミ、小川知子、花村菊江、三沢あけみ、美ち奴、都家かつ江、月の家円鏡

③

④　今週と来週の二回にわたり、放送２５０回を記念して、男女１４人ずつ合計２８人の歌手が紅白に分かれ、一世を風靡したヒット曲を競演する。応援団長は、都家かつ江、月の家円鏡。

今回の出演は、白組＝ディック・ミネ、曽根史郎、三浦洸一、バーブ佐竹、一節太郎、黒沢明とロス・プリモス、黒木憲。紅組＝菅原都々子、扇ひろ子、日吉ミミ、小川知子、花村菊江、三沢あけみ、美ち奴。

昭和５１年１２月１３日

①「２５０回記念特集！歌まつり・花の紅白大合戦！（後）」　＃２５０

②青木光一、藤島桓夫、北原謙二、三船浩、若原一郎、大下八郎、藤山一郎、榎本美佐江、松山恵子、豆千代、並木路子、池真理子、大津美子、松島詩子

③「十三夜」（不明）、「リンゴの唄」（不明）、「柿の木坂の家」（不明）、「おんなの宿」（不明）、「若いふたり」（不明）

④　先週に引き続き、放送２５０回記念「歌まつり・花の紅白大合戦！」の後編を放送。実力歌手１４人が紅白に分かれて一世を風靡したヒット曲を競演する。

出演は、白組＝青木光一、藤島桓夫、北原謙二、三船浩、若原一郎、大下八郎、藤山一郎。紅組＝榎本美佐江、松山恵子、豆千代、並木路子、池真理子、大津美子、松島詩子。

昭和５１年１２月２０日

①「演歌で勝負！森、五木、水前寺女ごころを歌う／熱唱！島倉千代子愛の二重唱」　＃２５１

②森進一、五木ひろし、水前寺清子、島倉千代子

③「花と蝶」（森）、「夜空」（五木）、「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）、「待っている女」（五木）、「年上の女」（森）、「夢は夜ひらく」（森・五木・水前寺）、「この世の花」（島倉）、「愛のさざなみ」（島倉・五木）、「新妻鏡」（島倉・森）、「恋しているんだもン」（島倉）

④　森進一、五木ひろし、水前寺清子、島倉千代子の顔合わせで”女ごころ”をテーマにしたヒット曲や新曲の数々を特集。

オープニングはヒット曲競演で森「花と蝶」、五木「夜空」、水前寺「涙を抱いた渡り鳥」。

第一部は”女ごころ”をうたった演歌特集。五木「待っている女」、森「年上の女」、水前寺を加えた三人で「夢は夜ひらく」。歌の合間に独身の三人が”結婚”について語る。

第二部は島倉の特集。「この世の花」のあと、五木と「愛のさざなみ」、森と「新妻鏡」を共演、「恋しているんだもン」で締めくくる。司会の有島一郎が男性の立場から見た島倉の印象を語り、島倉が現在の心境や結婚観などを語る。

昭和５１年１２月２７日

①「さよなら昭和51年・年忘れ夢の紅白歌合戦」　＃２５２

②島倉千代子、二葉百合子、ちあきなおみ、水前寺清子、青江三奈、藤圭子、こまどり姉妹、田端義夫、三橋美智也、村田英雄、春日八郎、舟木一夫、北島三郎、殿さまキングス

③「函館の女」（北島）、「ソーラン渡り鳥」（こまどり）、「はしご酒」（藤）、「なみだの操」（殿さま）、「伊勢佐木町ブルース」（青江）、「三百六十五歩のマーチ」（水前寺）、「四つのお願い」（ちあき）、「高校三年生」（舟木）、「別れの一本杉」（春日・三橋）、「おさげと花と地蔵さんと」（春日・三橋）、「星空に両手を」（不明）、「岸壁の母」（不明）、「大利根月夜」（不明）

④　歌謡界を支える実力歌手男女１４人（組）が紅白７人（組）ずつに分かれ、パーティー形式できわめつけヒット曲を競演する。

出演は紅組＝島倉千代子、二葉百合子、ちあきなおみ、水前寺清子、青江三奈、藤圭子、こまどり姉妹。白組＝田端義夫、三橋美智也、村田英雄、春日八郎、舟木一夫、北島三郎、殿さまキングス。

昭和５２年１月３日

①「新春特集「熱唱！美空ひばり私が選んだ”にっぽんの歌”ベスト10！」　＃２５３

②美空ひばり

③「花笠道中」（美空）、「三味線マドロス」（美空）、「ひばりの佐渡情話」（美空）、「リンゴ追分」（美空）、「別れのブルース」（美空）、「無情の夢」（美空）、「くちなしの花」（美空）、「二人でお酒を」（美空）

④　美空ひばりが持ち歌にこだわらず、自分で選んだ愛唱歌ベスト・テンを歌う。

第一部は美空自身の往年のヒット曲メドレーで、「花笠道中」「三味線マドロス」「ひばりの佐渡情話」「リンゴ追分」。

第二部は美空が選んだ愛唱歌ベスト・テン。「別れのブルース」「無情の夢」「くちなしの花」「二人でお酒を」ほかを歌い、それぞれの歌にちなむ思い出や好きな理由を司会の有島一郎、河内桃子と語り合う。

昭和５２年１月１０日

①「父子競演！三波春夫・豊和歌と踊りの新春絵巻！」　＃２５４

②三波春夫、三波豊和、朝丘雪路、宮川泰

③「雪の渡り鳥」（春夫・豊和）、「鷲鵞道中」（朝丘・春夫）、「花笠道中」（朝丘・豊和）、「大利根無情」（春夫）、「連獅子」（春夫・豊和）、「明治一代女」（朝丘）、「黒田の武士」（春夫・豊和）、「豪商一代紀伊国屋文左衛門」（春夫）

④　三波春夫と新進歌手の長男豊和が、テレビで初めて歌い踊る。親子の熱演ぶりが見どころ。また、朝丘雪路がからむ異色の顔合わせで送る。

オープニングは三波親子の「雪の渡り鳥」。続いて朝丘が春夫と「鷲鵞道中」、豊和と「花笠道中」を競演。次は、豊和の司会で春夫が「大利根無情」を歌う。

第二部は三波親子の日本舞踊「連獅子」。さらに朝丘の歌と踊りで「明治一代女」、春夫の歌、豊和の素踊りで「黒田の武士」。

第三部は、春夫の浪曲入り長編歌謡曲「豪商一代紀伊国屋文左衛門」。

昭和５２年１月１７日
①「任侠演歌！鶴田、北島、水前寺男の花道」　＃２５５
②鶴田浩二、北島三郎、水前寺清子
③「人生劇場」（鶴田・北島・水前寺）、「男の純情」（鶴田）、「傷だらけの人生」（鶴田）、「東京流れ者」（水前寺）、「どうどうどっこの唄」（水前寺）、「唐獅子牡丹」（北島）、「仁義」（北島）、「赤と黒のブルース」（鶴田）、「好きだった」（鶴田・北島）、「街のサンドイッチマン」（水前寺）、「ハワイの夜」（北島）
④　鶴田浩二を中心に、北島三郎、水前寺清子が任侠演歌の数々を披露する。鶴田はリクエストで軍歌も歌う。
　第一部は”男の演歌”特集。三人共演の「人生劇場」を皮切りに鶴田が「男の純情」「傷だらけの人生」、水前寺が「東京流れ者」「どうどうどっこの唄」、北島が「唐獅子牡丹」「仁義」を歌う。歌の合間に鶴田が学生時代の思い出などを語る。
　第二部は鶴田のヒット曲コーナー。鶴田が「赤と黒のブルース」、鶴田と北島が「好きだった」、水前寺が「街のサンドイッチマン」、北島が「ハワイの夜」を歌う。それぞれの歌にちなむエピソードや思い出を鶴田が語る。

昭和５２年１月２４日
①「お手を拝借！お座敷ソングで今晩は！」　＃２５６
②都はるみ、春日八郎、橋幸夫、小柳ルミ子、久保幸江
③「お富さん」（春日・橋・都・小柳）、「ゲイシャワルツ」（都）、「真室川音頭」（橋）、「まつの木小唄」（小柳）、「トンコ節」（久保・春日）、「ヤットン節」（久保・春日）、「瀬戸の花嫁」（小柳）、「潮来笠」（橋）、「北の宿から」（都）
④　春日八郎、橋幸夫、都はるみ、小柳ルミ子、それに昭和２６年「トンコ節」で一世を風靡した久保幸江という顔ぶれでにぎやかなお座敷ソングを中心に送る。
　第一部はお座敷ソング特集。春日、橋、都、小柳の四人共演による「お富さん」を皮切りに、都が「ゲイシャワルツ」、橋が「真室川音頭」、小柳が「まつの木小唄」、久保が春日と共演で「トンコ節」「ヤットン節」などを歌い、当時のエピソードや近況などを語る。
　第二部は小柳が「瀬戸の花嫁」、橋が「潮来笠」を歌い、都がヒット曲「北の宿から」を歌う。

昭和５２年１月３１日
①「絶唱！母の詩母の涙！／三橋美智也汗と涙の青春時代／島倉千代子ただいま特訓中」　＃２５７
②島倉千代子、三橋美智也、二葉百合子、二葉の長男
③「岸壁の母」（二葉）、「東京だヨおっ母さん」（島倉）、「母恋吹雪」（三橋）、「母の便り」（二葉）、「ソーラン節」（三橋）、「津軽じょんがら節」（三橋）、「酒の苦さよ」（三橋）、「おんな船頭唄」（三橋）、「名月赤城山」（島倉）、「裏町人生」（島倉）、「わたしの城下町」（島倉）
④　島倉千代子、三橋美智也、二葉百合子の顔合わせで、母をうたったヒット曲を中心に送る。
　第一部は”母のうた”特集で、二葉が「岸壁の母」、島倉が「東京だヨおっ母さん」、三橋が「母恋吹雪」を歌い、それぞれ母についての思い出や、エピソードを語る。続いて二葉の長男が”母親二葉

百合子”をつづった作文を朗読し、二葉がこれにこたえて「母の便り」を歌う。

第二部は”三橋美智也汗と涙の青春時代”と題して三橋の生い立ちから苦闘時代を紹介。曲は「ソーラン節」「津軽じょんがら節」「酒の苦さよ」「おんな船頭唄」ほか。三橋の津軽三味線が聞きもの。

第三部は”島倉千代子ただいま特訓中”と題し二月のロングリサイタルに備えてスケートの特訓をする島倉の姿をスチール写真などで紹介する。曲は島倉の持ち歌以外の「名月赤城山」「裏町人生」「わたしの城下町」ほか。

昭和５２年２月７日

①「絶唱！美空ひばりわたしが選んだ”にっぽんの歌”ベストテンパートⅡ」　＃２５８

②美空ひばり

③「昭和枯れすすき」（美空）、「あこがれのハワイ航路」（美空）、「北の宿から」（美空）、「おふくろさん」（美空）、「おんなの朝」（美空）、「九段の母」（美空）、「さすらい」（美空）、「ここに幸あり」（美空）、「なみだ船」（美空）、「ひとり旅」（美空）、「港町十三番地」（美空）、「リンゴ追分」（美空）、「悲しい酒」（美空）

④　一月三日に、美空ひばりが”私がえらんだにっぽんの歌ベストテン”で持ち歌以外の愛唱歌を特集したが、これはその続編。演歌からフォーク調までこなすひばりの歌唱力がみもの。

曲は、「昭和枯れすすき」「あこがれのハワイ航路」「北の宿から」「おふくろさん」「おんなの朝」「九段の母」「さすらい」「ここに幸あり」「なみだ船」「ひとり旅」。それぞれの曲について、ひばりがどうして好きなのか、いつどこで歌うのかなどを司会の有島一郎、河内桃子らと語り合う。

他に持ち歌の「港町十三番地」「リンゴ追分」「悲しい酒」などを歌う。

昭和５２年２月１４日

①「あれから 30 年！思い出の歌謡ベストテン！！昭和 22 年度ヒットパレード」　＃２５９

②都はるみ、水前寺清子、春日八郎、内山田洋とクール・ファイブ、青江三奈

③「啼くな小鳩よ」（都）、「誰か夢なき」（都）、「雨のオランダ坂」（水前寺）、「とんがり帽子」（水前寺）、「夜のプラットホーム」（春日）、「夢淡き東京」（春日）、「夜霧のブルース」（クール）、「山小舎の灯」（クール）、「港が見える丘」（青江）

④　三十年前の昭和２２年のヒット曲ベスト・テンを特集する。

都はるみが「啼くな小鳩よ」「誰か夢なき」、水前寺清子が「雨のオランダ坂」「とんがり帽子」、春日八郎が「夜のプラットホーム」「夢淡き東京」、内山田洋とクール・ファイブが「夜霧のブルース」「山小舎の灯」、青江三奈が「港が見える丘」などを歌い、歌にちなむエピソードや、この年の事件（ゼネスト中止命令、六・三制教育施行、第一回参議院選挙、憲法施行、フジヤマのトビウオ古橋選手大活躍）などを語り合う。

昭和５２年２月２１日

①「競演・波止場演歌！夜の霧笛もむせびなく港の恋の物語」　＃２６０

②田端義夫、橋幸夫、森昌子、五木ひろし、芥川隆行

③「長崎から船に乗って」（五木）、「玄海ブルース」（田端）、「連絡船の唄」（森）、
「アメリカ通いの白い船」（橋）、「別れのブルース」（五木）、「上海帰りのリル」（森）、
「女のみち」（田端）、「北の宿から」（田端）、「ふるさとの灯台」（田端）

④　田端義夫、橋幸夫、森昌子、五木ひろしを迎え、波止場もの、マドロス演歌の数々を、その歌にちなむエピソードなどを織り込んで送る。

第一部は五木の「長崎から船に乗って」を始め、田端が「玄海ブルース」、森が「連絡船の唄」、橋が「アメリカ通いの白い船」などを歌う。

第二部は芥川隆行の語りを入れたヒット曲特集で、五木が「別れのブルース」、森が「上海帰りのリル」。

第三部では田端が独特の田端ブシで「女のみち」と「北の宿から」を披露。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、田端の「ふるさとの灯台」。

昭和５２年２月２８日

①「艶歌大競演！さすらいの旅情を歌う」　＃２６１

②ディック・ミネ、森進一、フランク永井、ちあきなおみ、舟木一夫

③「襟裳岬」（森）、「羽田発７時５０分」（フランク）、「北国の街」（舟木）、「北帰行」（不明）、
「長崎エレジー」（ちあき）、「雨の酒場で」（フランク）、「アイルランドの娘」（ディック）、
「港町ブルース」（森）

④　ディック・ミネ、森進一、フランク永井、ちあきなおみ、舟木一夫を迎え、旅情や別れをテーマにした歌を特集する。

第一部は旅情演歌特集で、森が「襟裳岬」、フランクが「羽田発７時５０分」、舟木が「北国の街」などを歌う。

第二部は”ディックの歌うスナック”で、ディックが酒場のマスター、フランク、ちあきらが客にふんしてディックのヒット曲を歌う。曲はちあきが「長崎エレジー」、フランクがディックのものまねで「雨の酒場で」など。最後に、ディックがギターを抱えて「アイルランドの娘」を披露する。

視聴者のリクエストによる”思い出の歌”は、森の「港町ブルース」。

昭和５２年３月７日

①「笹みどり涙のカムバック！！／根性演歌！花の人生男ぶし／初公開！村田・二葉夫婦浪曲」
＃２６２

②村田英雄、二葉百合子、畠山みどり、殿さまキングス、笹みどり

③「人生劇場」（村田・二葉・畠山）、「いっぽんどっこの唄」（殿さま）、「出世街道」（畠山）、
「ソーラン節」（畠山）、「ちゃっきり節」（二葉）、「鹿児島小原節」（村田）、「下町育ち」（笹）、
「足摺岬」（笹）、「壺坂霊験記」（二葉・村田）

④　村田英雄、二葉百合子、畠山みどり、殿さまキングス、笹みどりを迎え、”根性演歌”、”民謡大会”を送る。

第一部は根性演歌特集。村田、二葉、畠山の「人生劇場」、殿さまキングスの「いっぽんどっこの唄」、畠山の「出世街道」など。

第二部は民謡特集で、畠山の「ソーラン節」、二葉の「ちゃっきり節」、村田の「鹿児島小原節」など。

第三部は、クモ膜下出血という重病で、長い間闘病生活を送っていた笹がすっかり回復、カムバック後、テレビの歌番組に母親と一緒に初登場、入院中の心境や今後の抱負などを語る。また、視聴者のリクエストによる「下町育ち」と新曲「足摺岬」を披露する。同じ病気で倒れ、最近カムバックした千秋実からの回復祝いのメッセージフィルムをじっとこらえて聞いていた彼女だが、新曲「足摺岬」を歌うところではたまらず泣き出してしまう一幕もあった。

続いて二葉と村田が、お里・沢市夫婦を演じる掛け合い浪曲「壺坂霊験記」のサワリの部分を熱演。

昭和５２年３月１４日

①「北島、五木、ふるさと慕情！／青江、八代おんな未練ぶし！／本日開店サブちゃんの包丁一本！！」　＃２６３

②北島三郎、五木ひろし、青江三奈、八代亜紀、西川峰子

③「帰ろかな」（北島）、「ふるさと」（五木）、「アカシヤの雨がやむとき」（青江）、「雨がやんだら」（八代）、「わたし祈ってます」（青江・八代・西川）、「月の法善寺横町」（北島）、「母の手」（五木）

④　北島三郎、五木ひろし、青江三奈、八代亜紀、西川峰子を迎え、”ふるさと慕情”や”男に去られた女の心情”を歌ったヒット曲を特集。

第一部は”北島、五木ふるさと慕情”で、北島が「帰ろかな」、五木が「ふるさと」などを、故郷の思い出話を交えて歌う。

第二部は”青江、八代おんな未練ぶし”。青江が「アカシヤの雨がやむとき」、八代が「雨がやんだら」、西川を加えた三人で「わたし祈ってます」など。

第三部は”本日開店！サブちゃんの包丁一本”で、北島が寿司屋の板前、青江と五木が客などに扮し、ユーモラスなやりとりを交わしながら、北島が「月の法善寺横町」などを披露する。北島は「さぶちゃん寿司」を開店、「映画などでちょっとやったことはあるが、こんなに本格的にやるのは初めて」とうれしそう。スタイルは本物以上だが、肝心の寿司の方は、おにぎりに近い出来栄え。仕方なくマイクを握り、得意の演歌……。一日板前が至極気に入ったご本人「歌うより楽しい。毎回やろう」と、しきりにスタッフに訴えていたが、残念ながら、おあとの計画はまだないという。

視聴者による思い出のリクエストは、五木の「母の手」。

昭和５２年３月２１日

①「歌まつり！特集・春だ！艶歌だ！大行進」　＃２６４

②伊東ゆかり、松尾和子、五月みどり、青山和子、ぴんから兄弟、三条正人、美川憲一

③「恋のしずく」（伊東）、「君は心の妻だから」（三条）、「釧路の夜」（美川）「誰よりも君を愛す」（松尾）、「おひまなら来てね」（五月）、

④　伊東ゆかり、五月みどり、松尾和子、ぴんから兄弟、三条正人らが登場、ヒット曲の数々と”しりとり歌合戦”を披露する。

伊東が「恋のしずく」、三条が「君は心の妻だから」、美川憲一が「釧路の夜」、松尾が「誰よりも君

を愛す」を歌った後、近くアメリカに移住する五月が「おひまなら来てね」を披露する。

続いて”しりとり歌合戦”に移り、男性軍、女性軍にわかれ、どちらがたくさん歌えるかを競う。

昭和５２年３月２８日

①「歌の饗宴！春一番・演歌花ざかり」　＃２６５

②藤圭子、都はるみ、春日八郎、内山田洋とクール・ファイブ、こまどり姉妹、三遊亭小圓遊

③「惚れちゃったんだョ」（都）、「アリューシャン小唄」（こまどり）、「赤いランプの終列車」（春日）、「朧月夜」（春日）、「あの子はだあれ」（クール）、「バラが咲いた」（藤）

④　都はるみ、内山田洋とクール・ファイブ、藤圭子、こまどり姉妹、春日八郎を迎え、スタジオの満開の桜の下で、華やかな歌の饗宴を繰り広げる。

第一部は持ち歌コーナーで、都の「惚れちゃったんだョ」、こまどりの「アリューシャン小唄」、春日の「赤いランプの終列車」など。

第二部は花にちなんだ曲のメドレーで、春日が「朧月夜」、クール・ファイブが「あの子はだあれ」、藤が「バラが咲いた」などを歌う。

第三部はゲストの三遊亭小圓遊が、花見をテーマにした落語の話題や、小噺などを披露した後、思い出に残る花の歌をリクエストする。

第266回～第291回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和52年4月　4日～ 昭和52年9月26日	月	21時00分～ 21時54分

司会：森光子　　（第266回～291回）
　　松山英太郎（第278回～279回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）（※）　　**④放送概要**

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で（**出演順**）と記入）

昭和５２年４月４日
①「はじめまして森光子です」　＃２６６
②美空ひばり、森進一、森昌子
③「柔」（美空）、「リンゴ追分」（美空）、「悲しい酒」（美空）、「人生一路」（美空）、
「女のためいき」（森進一）、「せんせい」（森昌子）、「おふくろさん」（森進一）、
「おかあさん」（森昌子）、「母」（美空ひばり）
④　今回から森光子が司会を担当、その一回目を祝って美空ひばりが特別ゲストとして出演する他、森進一、森昌子と、森と同姓の歌手が登場する。
　第一部は美空のヒット曲コーナーで「柔」「リンゴ追分」「悲しい酒」「人生一路」などヒット曲の数々を披露。
　第二部では森進一が「女のためいき」、森昌子が「せんせい」などを歌い、デビュー当時の思い出話や近況を語る。
　第三部は”母の詩・愛の譜”と題して母にちなんだ曲を特集。森進一が「おふくろさん」、森昌子が「おかあさん」、美空が「母」を歌う。

昭和５２年４月１１日
①「演歌のいろは決定版！」　＃２６７
②伴淳三郎、春日八郎、二葉百合子、水前寺清子、青江三奈、新沼謙治
③「岸壁の母」（二葉）、「あン時ゃどしゃ降り」（春日）、「どうどうどっこの唄」（水前寺）、
「恍惚のブルース」（青江）、「異国の丘」（森）、「嫁に来ないか」（新沼）、
「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）
④　春日八郎、二葉百合子、水前寺清子、青江三奈のベテランに若手の新沼謙治を加え、演歌の数々を披露。特別ゲストは伴淳三郎。
　第一部は演歌オンパレード。二葉が「岸壁の母」、春日が「あン時ゃどしゃ降り」、水前寺が「どうどうどっこの唄」、青江が「恍惚のブルース」を歌う。
　第二部は伴のコーナーで、昨年１０月に開いた芸能生活五十周年リサイタルの思い出や役者の世界と歌の世界の共通点を司会の森光子と語り合った後、森に「異国の丘」をリクエスト。また新沼が「嫁に来ないか」を伴にプレゼントする。
　第三部は水前寺のコーナーで、殺陣入りの「涙を抱いた渡り鳥」ほかを披露する。

昭和５２年４月１８日
①「競演・おとなの恋はにがい味？／森光子・西田敏行がっぷり四つ」　＃２６８
②北島三郎、ちあきなおみ、由紀さおり、小柳ルミ子、美川憲一、西田敏行
③「函館の女」（全員）、「ベッドで煙草を吸わないで」（由紀）、「夜と朝のあいだに」（美川）、
「ハートブレイクホテル」（西田）、「昭和枯れすすき」（西田・森）、「加賀の女」（森）、
「薩摩の女」（森）、「星の砂」（不明）
④　北島三郎、ちあきなおみ、由紀さおり、小柳ルミ子、美川憲一のほか西田敏行がゲスト出演。
　全員で歌う「函館の女」でオープニング。

第一部は森光子と西田の恋人同士がマンションの一室で一夜を明かすというコント。西田が迫ろうとするたびに水を差すような歌が入り、とうとう夜が明けてしまう。歌は由紀の「ベッドで煙草を吸わないで」、美川の「夜と朝のあいだに」ほか。

第二部は西田のコーナーで、お得意のプレスリーの物まね「ハートブレイクホテル」の後、森と「昭和枯れすすき」をデュエット、歌の合間に無名時代の苦労話などを森と語り合う。また、デビュー曲を披露する。

第三部は北島のコーナー。北島の開店したおでん屋を訪ねた森が「加賀の女」「薩摩の女」の女シリーズを歌う。

他に「星の砂」をはじめ新曲コーナーが秀逸。

昭和５２年４月２５日

①「競演・歌のあわせ味」　＃２６９

②島倉千代子、都はるみ、伊東ゆかり、八代亜紀、殿さまキングス

③「小指の思い出」（伊東・八代）、「涙の連絡船」（都・八代）、「情熱の花」（伊東・都）、「朧月夜」（森・殿さま）、「からたち日記」（島倉）、「この世の花」（島倉）

④　島倉千代子、都はるみ、伊東ゆかり、八代亜紀、殿さまキングスをゲストに、ヒット曲交換、花の歌特集などを送る。

第一部はおなじみのヒット曲を他の歌手が歌ったらどんな味が出るか本人との共演で味わう。曲は伊東と八代の「小指の想い出」、都と八代の「涙の連絡船」ほか。

第二部は花の歌特集で伊東と都の「情熱の花」、司会の森光子と殿さまキングスの「朧月夜」。

第三部は島倉のコーナーで、「からたち日記」「この世の花」ほかを歌う。また、二十年来の交際のある司会の森光子が友情にあふれた賛辞をささげる。

他に、新曲コーナー。

昭和５２年５月２日

①「十年選手競演！あの人があの歌を！／小畑実・艶歌人生ど根性」　＃２７０

②水前寺清子、森進一、千昌夫、細川たかし、小畑実、渡久地政信

③「君といつまでも」（千・水前寺）、「骨まで愛して」（森進一）、「高原の駅よさようなら」（小畑）

④　水前寺清子、森進一、千昌夫、細川たかしに、大ベテラン小畑実を加えた顔ぶれでヒット曲競演や持ち歌交換などを繰り広げる。

第一部は千と水前寺が「君といつまでも」、森が「骨まで愛して」などを披露、歌の合間にデビュー当時の思い出などを語り合う。

第二部は昨年カムバックした小畑が登場、ヒット曲「高原の駅よさようなら」など、ヒット曲と新曲を歌い、カムバックのきっかけとなった作曲家渡久地政信との再会のエピソードを披露する。

第三部は持ち歌交換。

昭和５２年５月９日

①「港演歌決定版！／バタヤン・ふるさとの詩」　＃２７１

②内山田洋とクール・ファイブ、朝丘雪路、田端義夫、杉良太郎、内藤やす子、若山富三郎

③「よこはまたそがれ」（クール）、「他人船」（杉）、「かえり船」（田端）、「ダンチョネ節」（不明）、「サマータイム」（若山）、「或る雨の午後」（若山・森）、「慕情」（若山・朝丘）、「島育ち」（田端）、「十九の春」（田端）

④　田端義夫、朝丘雪路、内山田洋とクール・ファイブ、杉良太郎、内藤やす子の他、若山富三郎を特別ゲストに加えてヒット曲の数々を楽しむ。

第一部は哀愁に満ちた波止場ソングを特集。曲はクール・ファイブの「よこはまたそがれ」、杉の「他人船」、田端の「かえり船」など。

第二部は若山のコーナー。「サマータイム」を原語で歌いながら登場した若山は、司会の森光子や朝丘と近況や趣味の話を披露し、森と「或る雨の午後」、朝丘と「慕情」をデュエットする。

第三部は田端のふるさとソング特集。曲は「島育ち」「十九の春」ほか。

昭和５２年５月１６日

①「特集！！勢揃い16人衆」　＃２７２

②欧陽菲菲、森山加代子、泉ピン子、にしきのあきら、ザ・キング・トーンズ、千賀かほる、中村晃子、ディック・ミネ

③「空に太陽がある限り」（にしきの）、「白い蝶のサンバ」（森山）、「男と女のお話」（泉）、「真夜中のギター」（千賀）、「恋の追跡」（欧陽）、「虹色の湖」（中村）、「夜霧のブルース」（ディック）

④　にしきのあきら、森山加代子ら昭和４０年代に大ヒットした歌手男女十数人に泉ピン子が加わり、ディック・ミネを特別ゲストに、当時の世相などを語りながらヒット曲の数々を楽しむ。

第一部は、にしきのの「空に太陽がある限り」、森山の「白い蝶のサンバ」に続いて、泉が日吉ミミの「男と女のお話」を歌う。

第二部はディックが司会の森光子のおしゃべり相手に登場、千賀かほるが「真夜中のギター」、欧陽菲菲が「恋の追跡」を歌い、その時々の世相や風俗の変遷を語り合う。

第三部は森と泉のコーナー。泉がキャバレー回り時代の苦労話をユーモラスに語る。曲は中村晃子の「虹色の湖」の他、ディックが「夜霧のブルース」を披露。

昭和５２年５月２３日

①「アロハ！！アグネスです」　＃２７３

②アグネス・ラム、石原裕次郎、森進一、小柳ルミ子、アロハ・ハワイアンズ

③「赤いハンカチ」（石原）、「胸の振子」（石原）、「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、「銀座の恋の物語」（石原・小柳）、「別れの磯千鳥」（森光子・森進一・小柳）、「ハワイアン・ウェディングソング」（石原・ラム）、「赤とんぼ」（石原）、「城ヶ島の雨」（小柳）

④　石原裕次郎、森進一、小柳ルミ子に、来日中のアグネス・ラムを特別ゲストに加え、ヒット曲の数々を送る。

第一部は石原のヒット曲コーナー。曲は「赤いハンカチ」「胸の振子」「夜霧よ今夜も有難う」の他、

小柳とのデュエットで「銀座の恋の物語」など。

第二部はハワイアンコーナーで、全員がアロハ、ムームーのハワイアンスタイルで登場。司会の森光子がラムにハワイでの生活をインタビューする。曲は森光子、森進一、小柳の「別れの磯千鳥」、石原とラムの「ハワイアン・ウェディングソング」ほか。石原のハワイアンに合わせラムがフラを踊るのも見もの。

第三部はラムに石原が「赤とんぼ」、小柳が「城ヶ島の雨」など日本の歌をプレゼントする。

昭和５２年５月３０日

①「素晴しき季節の詩」　＃２７４

②美空ひばり

③「カチューシャの唄」（美空）、「波浮の港」（美空）、「君恋し」（美空）、「旅笠道中」（美空）、「津軽のふるさと」（美空）、「恋のパープル・レイン」（美空）、「リンゴ追分」（美空）、「悲しい酒」（美空）、「人生一路」（美空）、「芸道一代」（美空）

④　美空ひばりのワンマンショー。テーマは母の愛、母への愛情で、歌の合間に司会の森光子とさまざまなエピソードを語り合う。

第一部は、大正から昭和初期にかけて、美空の母の年代の人々が愛唱した歌を特集。曲は「カチューシャの唄」「君恋し」「旅笠道中」ほか。

第二部は“隠れたる名曲四点”と題して、膨大なヒット曲の陰に埋もれているが、美空が大好きという「津軽のふるさと」「恋のパープル・レイン」などを披露。

第三部はミリオンヒット曲を歌う。曲は、「リンゴ追分」「悲しい酒」「人生一路」「芸道一代」など。

昭和５２年６月６日

①「北島、都、五木・演歌三番勝負！」　＃２７５

②水原弘、北島三郎、都はるみ、五木ひろし

③「好きになった人」（都）、「ふるさと」（五木）、「仁義」（北島）、「銀座カンカン娘」（都・五木・北島）、「バラが咲いた」（五木・北島）、「想い出まくら」（都）、「四季の歌」（都・五木・北島・森）、「黒い花びら」（水原）、「君こそわが命」（水原）、

④　北島三郎、都はるみ、五木ひろしに、このほど病床から再起した水原弘をゲストに迎えて送る。

第一部は、それぞれの思い出深い歌、ヒット曲、好きな歌の特集。都が「好きになった人」、五木が「ふるさと」、北島が「仁義」を歌う他、三人で「銀座カンカン娘」他を披露。

第二部はフォーク挑戦コーナーで、五木と北島が「バラが咲いた」、都が「想い出まくら」、司会の森光子を加えた全員で「四季の歌」を歌う。

第三部は水原のコーナー。森が闘病中の心境や今後の計画をインタビュー、水原は「黒い花びら」「君こそわが命」を歌う。

他に新曲コーナー。

昭和５２年６月１３日

①「女心の名言集」　＃２７６

②ちあきなおみ、八代亜紀、石川さゆり、ダーク・ダックス、春日八郎、フランク永井、朝田のぼる

③「おひまなら来てね」（八代・ちあき・石川）、「初恋のひと」（石川）、「夏は来ぬ」（森）、「琵琶湖周航の歌」（フランク・ダーク）、「チンチン」（ダーク）、「赤いランプの終列車」（春日・朝田）、「山の吊橋」（春日・森）、「別れの一本杉」（春日）

④　春日八郎、フランク永井、ダーク・ダックス、ちあきなおみ、八代亜紀、石川さゆり、朝田のぼるの出演でヒット曲の数々を綴る。

第一部は恋に命をかけた女心を歌ったヒット曲特集。曲は八代、ちあき、石川の三人で「おひまなら来てね」、石川の「初恋のひと」ほか。歌の合間に司会の森光子が女心を表現した古今の名言、金言を紹介。

第二部は”ああ青春の愛唱歌”。森が「夏は来ぬ」、フランクとダークが「琵琶湖周航の歌」を歌う他、近く海外演奏旅行に出発するダークが新曲「チンチン」を披露。

第三部は春日のコーナーで、朝田と「赤いランプの終列車」、森と「山の吊橋」をデュエットした後、大阪の主婦からのリクエストで「別れの一本杉」を歌う。

他に新曲コーナー。

昭和５２年６月２０日

①「*サブタイトル不明*」　＃２７７

②森繁久弥、森昌子、青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ、佐良直美、前川清、松山英太郎

③「長崎は今日も雨だった」（クール）、「雨がやんだら」（青江）、「雨に唄えば」（佐良）、「並木の雨」（森光子・前川）、「ゴンドラの唄」（森昌子）、「さすらいの唄」（森昌子）、「浜をかける少年」（森繁）、「浜辺の唄」（森繁）

④　芸能生活４０年を綴った四部作ＬＰを出した俳優森繁久弥が特別ゲスト。森繁ブシを披露する他に、クール・ファイブ、佐良直美、青江三奈、森昌子らがおなじみのヒット曲を競演する。

第一部は梅雨どきにちなんだ雨の歌特集。曲目はクール「長崎は今日も雨だった」、青江「雨がやんだら」、佐良「雨に唄えば」、司会の森光子と前川清のデュエットで「並木の雨」ほか。

第二部は”森昌子大正ロマンを歌う”で、曲目は「ゴンドラの唄」「さすらいの唄」ほか。歌の合間にクールのメンバーがコントで森昌子にからむ。

第三部は森繁のコーナー。曲目は「浜をかける少年」「浜辺の唄」ほか。曲の合間に佐藤春夫の詩「海辺の恋」の朗読が入る。また、松山英太郎が森繁像を語る。

昭和５２年６月２７日

①「アメリカ公演（前編）」　＃２７８

②藤山一郎、江利チエミ、今陽子、水原弘、五月みどり、由紀さおり、黒沢明とロス・プリモス、内藤やす子

③「東京ラプソディ」（藤山）、「東京ブギウギ」（今）、「テネシー・ワルツ」（江利）、「黒い花びら」（水原）、「おひまなら来てね」（五月）、「手紙」（由紀）、「ヘッドライト」（ロス）

④　今週と来週の二回にわたり、サンフランシスコ・オペラハウスからの録画中継で送る。ゲスト・藤山一郎、江利チエミほか。司会・松山英太郎、森光子。

第一部は”東京の歌特集”。曲目は藤山「東京ラプソディ」、今陽子「東京ブギウギ」ほか。

第二部は”デビュー特集”。曲目は江利「テネシー・ワルツ」、水原弘「黒い花びら」ほか。また、特別ゲストで出演した在米の五月みどりが「おひまなら来てね」ほかを歌う。

第三部は”ビッグヒット特集”。曲目は由紀さおり「手紙」、ロス・プリモス「ヘッドライト」ほか。

『週刊明星』昭和５２年７月１０日号では、「サンフランシスコのファミリー・タイム」と題し、藤山一郎・いく子夫妻と由紀さおり・ふさ親子が仕事の合間に観光を楽しむ姿がカラー写真で紹介されている。

昭和５２年７月４日

①「アメリカ公演（後編）」　＃２７９

②藤山一郎、江利チエミ、北島三郎、森昌子、由紀さおり、今陽子、五月みどり、内藤やす子、黒沢明とロス・プリモス、水原弘

③「希望」（由紀）、「あざみの歌」（今）、「さのさ」（江利）、「明治一代女」（五月）、「なつかしの歌声」（藤山）、「想い出ぼろぼろ」（内藤）、「たそがれの銀座」（ロス）

④　先週に引き続きサンフランシスコ・オペラハウスから録画中継で送る。ゲスト・藤山一郎、江利チエミほか。司会・松山英太郎、森光子。

第一部は”思い出の青春の歌特集”。曲目は由紀さおり「希望」、今陽子「あざみの歌」ほか。

第二部は”日本調特集”。曲目は江利チエミ「さのさ」、五月みどり「明治一代女」ほか。

第三部は藤山一郎のゴールデンヒット四曲で「なつかしの歌声」ほかを歌い、アメリカの印象や健康法などを語る。続いて内藤やす子「想い出ぼろぼろ」、ロス・プリモス「たそがれの銀座」などが披露される。

昭和５２年７月１１日

①「花の昭和９年会・オレたちが選んだ思い出の歌ベスト９！」　＃２８０

②浅丘ルリ子、和田アキ子、中条きよし、三波豊和、殿さまキングス、桂五郎、児玉清、長門裕之、牧伸二、月の家円鏡、藤村有弘

③「とんがり帽子」（昭和９年会メンバー）、「東京ブギウギ」（不明）、「山小舎の灯」（不明）、「湯の町エレジー」（不明）、「愛の化石」（浅丘）

④　浅丘ルリ子、和田アキ子、中条きよし、三波豊和、殿さまキングス、桂五郎のほか、３月に旗揚げした昭和９年生まれの芸能人グループ「昭和９年会」から児玉清、長門裕之、牧伸二、月の家円鏡ほかが参加、思い出の歌、心の歌を歌いまくる。

第一部は「昭和９年会」のメンバーが登場、会のテーマソング「とんがり帽子」を全員で歌った後、メンバーが選んだベスト９をゲスト歌手と一緒に歌う。曲は「東京ブギウギ」「山小舎の灯」「湯の町エレジー」ほか。

第二部は浅丘のコーナーで「愛の化石」ほかを披露。

他に新曲コーナーなど。

昭和５２年７月１８日
①「*サブタイトル不明*」　＃２８１
②田宮二郎、北島三郎、ピンクレディー、内山田洋とクール・ファイブ、水前寺清子、青江三奈
③「星はなんでも知っている」（水前寺）、「星屑の街」（北島）、「小雨の丘」（田宮）、「麦と兵隊」（田宮）、「カルメン’77」（田宮・ピンク）、「赤坂の夜は更けて」（田宮・青江）、「函館の女」（田宮・北島）
④　北島三郎、水前寺清子、青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ、ピンクレディーの他、田宮二郎が特別ゲストで出演する。
　第一部は星の歌を特集。曲は水前寺「星はなんでも知っている」、北島「星屑の街」ほか。歌の合間に司会の森光子が星占いをする。
　第二部は田宮のコーナー。同じ京都出身の森と、京都の思い出を語りながら「小雨の丘」「麦と兵隊」など少年時代に印象の深かった曲を歌う他、ピンクレディーと「カルメン’77」、青江と「赤坂の夜は更けて」、北島と「函館の女」を披露。
　他に新曲コーナー。

昭和５２年７月２５日
①「*サブタイトル不明*」　＃２８２
②小林旭、宍戸錠、都はるみ、八代亜紀、西川峰子、藤圭子
③「花笠道中」（都）、「函館の女」（藤）、「ダイナマイトが百五十屯」（小林）、「ギターを持った渡り鳥」（小林）、「旅笠道中」（小林・宍戸）
④　都はるみ、藤圭子、八代亜紀、西川峰子の”演歌四人女”と”帰って来た渡り鳥”の小林旭が出演。更に日活アクションで活躍した宍戸錠がゲスト。
　第一部は演歌四人女が、一番思い出に残る演歌を一曲ずつ歌う。曲は都が「花笠道中」、藤が「函館の女」ほか。歌の合間に曲にまつわる思い出や演歌を志した動機などを語る。
　第二部は小林のコーナー。初期の「ダイナマイトが百五十屯」やヒット曲「ギターを持った渡り鳥」などを歌い、司会の森光子の質問に答え、文芸映画の新人スターからアクションスターに転向した理由、歌い始めたきっかけなどを語る。続いて宍戸が登場し、小林と日活時代の思い出を語り合った後「旅笠道中」をデュエットする。

昭和５２年８月１日
①「必見！！”爆笑歌謡ドラマ”」　＃２８３
②森進一、五木ひろし、ちあきなおみ、森昌子、小柳ルミ子、新沼謙治、渡真介
③「純情派」（渡）、「村祭りの前に」（新沼）、「女のためいき」（森進一）、「長崎から船にのって」（五木）、「千曲川」（森進一・五木）
④　森進一、五木ひろし、ちあきなみ、小柳ルミ子、森昌子、新沼謙治、新人渡真介が出演、演歌の競演や歌謡ドラマを繰り広げる。
　第一部は、女性三人の話題曲競演。
　第二部“お楽しみ歌謡ドラマ”は、スタジオに作った夜汽車を舞台に、五木の老ヌード劇場主、ちあきの下積み歌手などがメイ優ぶりを披露する。

第三部は新人コーナーで、渡がデビュー曲「純情派」、新沼が「村祭りの前に」を歌う。

第四部は森進一が「女のためいき」、五木が「長崎から船にのって」などを歌った後、二人で「千曲川」をデュエット。

昭和５２年８月８日

①「わが青春の高峰三枝子」　＃２８４

②西田敏行、あおい輝彦、野口五郎、石川さゆり、真木ひでと、高峰三枝子

③「センチメンタル・カーニバル」（あおい）、「能登半島」（石川）、「季節風」（野口）、「通行人」（西田）、「懐しのブルース」（高峰）、「別れのタンゴ」（高峰）、「湖畔の宿」（高峰）

④　特別ゲストに高峰三枝子を迎えてヒット曲の数々を聞く他、西田敏行、あおい輝彦、野口五郎、石川さゆり、真木ひでととの出演で送る。

第一部は出演者がそれぞれ近況を語った後、あおいが「センチメンタル・カーニバル」、石川が「能登半島」、野口が「季節風」を歌う。

第二部は西田の「歌でつづる自叙伝」といった趣向で、通行人ばかりを演じた下積み時代を歌った「通行人」ほかを歌う。

第三部は、森のナレーションでつづる高峰のワンマンショー。曲は、「懐しのブルース」「別れのタンゴ」「湖畔の宿」ほか。

昭和５２年８月１５日

①「演歌で残暑御見舞申し候」　＃２８５

②橋幸夫、舟木一夫、左とん平、梓みちよ、尾崎紀世彦、北原ミレイ

③「また逢う日まで」（尾崎）、「ざんげの値打ちもない」（北原）、「とん平のヘイ・ユウ・ブルース」（左）、「秋田から来た先生」（左）、「雨の哀歌」（森）、「高校三年生」（舟木）、「潮来笠」（橋）

④　橋幸夫、舟木一夫、梓みちよ、尾崎紀世彦らに左とん平を加えたにぎやかな顔ぶれが、ヒット曲を歌う。

第一部はヒット曲特集で、曲は尾崎「また逢う日まで」、北原ミレイ「ざんげの値打ちもない」ほか。

第二部は、左が「とん平のヘイ・ユウ・ブルース」で出演者一同とユーモラスに絡んだ後「秋田から来た先生」を歌う。

第三部は、司会の森光子が最近吹き込んだ初のＬＰの中から「雨の哀歌」ほかを歌う。

第四部は橋と舟木のコーナーで、それぞれ現在の心境などを語る。曲は舟木「高校三年生」、橋「潮来笠」ほか。

昭和５２年８月２２日

①「必見！！大爆笑ドラマ”屁たれ嫁っこ”」　＃２８６

②都はるみ、和田アキ子、黒沢年男、森昌子、あいざき進也、高田みづえ

③「二杯目のお酒」（和田）、「やめなよ」（黒沢）、「涙の連絡船」（都・森昌子）、「なみだの桟橋」（森昌子）「北の宿から」（都）

④　都はるみ、和田アキ子、あいざき進也、森昌子、高田みづえの他、黒沢年男が歌手として出演、ヒット曲の競演や歌謡ドラマを繰り広げる。

第一部はヒット曲競演で、曲は和田「二杯目のお酒」、黒沢「やめなよ」ほか。

第二部は「お楽しみ歌謡ドラマ」。出し物は日本の民話「屁たれ嫁っこ」。若い嫁に和田、その母に森光子、婿にあいざきが扮し、ものすごい屁をするのが原因で追い出されそうになった花嫁が、けがの功名でピンチを逃れるのをユーモラスに描く。

第三部は民謡特集。

第四部は都と森昌子のジョイント・コーナー。「涙の連絡船」をデュエットした後、森昌子が「なみだの桟橋」、都が「北の宿から」などを披露。

昭和５２年８月２９日

①「秀樹只今参上！！／九チャン・かよ子、パラキンと大合唱！！」　＃２８７

②ペギー葉山、朝丘雪路、西城秀樹、坂本九、森山加代子、ダニー飯田とパラダイス・キング

③「上を向いて歩こう」(坂本)、「南国土佐を後にして」(ペギー)、「ミスター・ベースマン」(パラキン)、「ヘイポーラ」(森山・西城)

④　西城秀樹、坂本九、朝丘雪路、ペギー葉山、森山加代子、ダニー飯田とパラダイス・キングをゲストに迎えて送る。

第一部はヒット曲競演で、曲は坂本の「上を向いて歩こう」、ペギーが「南国土佐を後にして」ほか。

第二部はパラダイス・キングが登場して「ミスター・ベースマン」を歌い、坂本九、森山加代子がパラダイス・キングとともに”パラキン”時代のヒット曲を歌いまくる。また、森山と西城が掛け合いで「ヘイポーラ」を披露。

第三部はペギーと朝丘のコーナー。

昭和５２年９月５日

①「森光子が綴る思い出のうた」　＃２８８

②森進一、西城秀樹、新沼謙治、いしだあゆみ、石川さゆり、大津美子、ちあきなおみ、石原圭子

③**（出演順）**「あたし」(石原)、「若き日の詩」(大津)、「影を慕いて」(森進一)、「悲しき子守唄」(森光子)、「ここに幸あり」(大津)、「有楽町で逢いましょう」(ちあき)、「ブルー・ライト・ヨコハマ」(いしだ)、「激しい恋」(西城)、「傷だらけのローラ」(西城)、「ボタンを外せ」(西城)、「ダンシング」(いしだ)、「夜へ急ぐ人」(ちあき)、「夜行列車」(森進一)、「涙をひろって」(全員)

④　森進一、いしだあゆみ、ちあきなおみ、西城秀樹、新沼謙治、石川さゆり、石原圭子にベテラン大津美子を加えた顔ぶれで送る。

第一部は新人石原のデビュー曲「あたし」に続き、大津が久々の新曲「若き日の詩」を歌う。

第二部は”森光子が綴る思い出のうた”。司会の森光子の語りで、その時代のヒット曲を紹介。曲は森進一「影を慕いて」、森光子「悲しき子守唄」、大津「ここに幸あり」、ちあき「有楽町で逢いましょう」、いしだ「ブルー・ライト・ヨコハマ」。

第三部は“西城秀樹激唱！”で西城のワンマンショー。曲は「激しい恋」「傷だらけのローラ」「ボ

タンを外せ」。

第四部は新曲コーナーで、いしだ「ダンシング」、ちあき「夜へ急ぐ人」、森進一「夜行列車」。エンディングは全員で「涙をひろって」。

昭和５２年９月１２日

①「森光子クレーンカメラに挑戦！！」　＃２８９

②都はるみ、鰐淵晴子、細川たかし、南沙織、内山田洋とクール・ファイブ、小畑実、佐藤蛾次郎、荻島真一、荒木由美子

③「潮来花嫁さん」（都）、「らしゃめん馬車」（鰐淵）、「ほろ酔い」（森）

④　都はるみ、内山田洋とクール・ファイブ、小畑実、細川たかしの他、佐藤蛾次郎、鰐淵晴子、荻島真一の異色メンバーで送る。

第一部は“都はるみの嫁入り演歌”と題して、結婚シーズンに先駆け森光子や都はるみらが”嫁入り演歌”を歌う。クール・ファイブとの寸劇があり、都は「潮来花嫁さん」を歌う。「人気番組の舞台裏」と題する『週刊サンケイ』昭和５２年９月８日号の記事によると、「ポスター大の大きなカンニングペーパーに歌詞がマジックで書かれてあり、これをはるみが“見ながら”歌うという寸法」だったようである。

第二部は先ごろ、夫君タッド若松演出の東映映画「らしゃめん」で久方ぶりに主役を演じた鰐淵が特別ゲストとして出演する。鰐淵は、赤いズボンに赤地に花模様のショールを腰に巻いた例の“らしゃめんルック”で登場。映画の撮影中の苦労話を共演の荻島と語ったり夫のことなどを話した後、映画の主題曲として流れる「らしゃめん馬車」をナレーション入りで歌う。司会の森光子も、先ごろＬＰ「昭和女の放浪歌」を出したことから“うたうスター”として話が弾み、森の方もＬＰの中の一曲である「ほろ酔い」を披露する。

第三部はクール・ファイブ・ショー。

他に新曲コーナー。

なお、森がクレーンカメラに載って、細川の歌の部分を“収録”するという試みが行われた。『週刊平凡』昭和５２年９月１日号には、「高い所が大好きな彼女、恐い様子をちっともみせずに、ごきげん。」との添え書きで森がクレーンカメラを操作する写真が載っているが、前掲『週刊サンケイ』昭和５２年９月８日号の記事によると、初めは意欲満々だったものの本番ではオロオロしていたとのことである。

昭和５２年９月１９日

①「嵐寛天狗と三人娘！？昌子　淳子　百恵」　＃２９０

②森昌子、桜田淳子、山口百恵、五木ひろし、竹脇無我、高瀬殺陣会、嵐寛寿郎

③「初恋時代」（森昌子・桜田・山口）、「もう戻れない」（桜田）、「イミテイション・ゴールド」（山口）、「なみだの桟橋」（森昌子）、「錆びたナイフ」（五木）、「灯りが欲しい」（五木）

④　森昌子、桜田淳子、山口百恵の三人娘の他、五木ひろし、竹脇無我、嵐寛寿郎という異色の顔ぶれで送る。

第一部は“再会！三人娘”で、３月の東京・日本武道館の公演以来、半年ぶりに共演する森昌子、

桜田、山口が、「初恋時代」を一緒に歌う他、桜田が「もう戻れない」、山口が「イミテイション・ゴールド」、森昌子が「なみだの桟橋」を披露。

第二部は嵐のコーナー。森光子と親類筋にあたる嵐が、少女時代からデビュー当時の”光ちゃん”のエピソードを語る。

第三部は竹脇の語りで五木が「錆びたナイフ」「灯りが欲しい」などを歌い上げる。

昭和５２年９月２６日

①「森光子さん涙の最終回！！」　＃２９１

②布施明、水前寺清子、ぴんから兄弟、桂五郎、清水由貴子

③「ひとり芝居」（布施）、「シクラメンのかほり」（布施）、「湯の町ブルース」（ぴんから）、「明日草」（清水）、「心のきず」（桂）、「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）、「花染め音次郎」（水前寺）、「また逢う日まで」（全員）

④　布施明、水前寺清子、ぴんから兄弟に新人桂五郎、清水由貴子らの出演でヒット曲の数々を披露。

第一部は“布施明、初秋に唄う！”で、曲は布施が自ら作詞・作曲した「ひとり芝居」のほか「シクラメンのかほり」など。

第二部は、ぴんから兄弟と新人二人のコーナー。ぴんから兄弟が「湯の町ブルース」、清水が「明日草」、桂が「心のきず」を歌う。

第三部は水前寺のコーナーで、曲は「涙を抱いた渡り鳥」「花染め音次郎」ほか。

また、全員で「また逢う日まで」を合唱する。

第292回～第317回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和52年10月3日～ 昭和53年3月27日	月	21時00分～ 21時54分

司会：小野寺昭（第292回～317回）
　　今陽子　（第292回～317回）
　　宍戸錠　（第292回～317回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者
③曲目（歌唱者）　④放送概要

昭和５２年１０月３日

①「前夜祭Ｉ！！」　＃２９２

②小林旭、石原裕次郎(VTR)、菅原洋一、ちあきなおみ、小柳ルミ子(VTR)、森光子

③「愛の讃歌」(菅原)、「今日でお別れ」(菅原)、「夜へ急ぐ人」(ちあき)、「四つのお願い」(ちあき)、「粋な別れ」(石原(VTR))、「銀座の恋の物語」(石原・小柳(VTR))、「ラストダンスは私に」(今)、「涙を拾って」(森)

④　小野寺昭、今陽子、宍戸錠の司会で、歌謡曲の”スタンダード・ナンバー”を中心に、スター歌手の魅力を披露し、幅広いナツメロ愛好視聴者に送る歌謡番組。

一回目は、菅原洋一、ちあきなおみ、小林旭らが出演。曲は菅原が「愛の讃歌」「今日でお別れ」、ちあきが「夜へ急ぐ人」「四つのお願い」など。

思い出の名場面として石原裕次郎の「粋な別れ」、石原と小柳ルミ子の「銀座の恋の物語」などがビデオで再現される他、今が「ラストダンスは私に」、森光子が「涙を拾って」ほか。

昭和５２年１０月１０日

①「前夜祭Ⅱ！！」　＃２９３

②布施明、五木ひろし、西城秀樹、小柳ルミ子、ちあきなおみ、岩崎宏美、赤木圭一郎(ﾌｨﾙﾑ)

③「湖の祈り」(小柳)、「思秋期」(岩崎)、「ボタンを外せ」(西城)、「霧笛が俺を呼んでいる」(赤木(ﾌｨﾙﾑ))

④　布施明、五木ひろし、小柳ルミ子、西城秀樹、ちあきなおみ、岩崎宏美らの出演で送る。

まず小柳が「湖の祈り」、岩崎が「思秋期」を歌った後、”ラブ・スポット・コーナー”は西城が登場、ゲストの女性と初公開の秘密を語り合い、「ボタンを外せ」を歌う。

”今週のとっておき”は故赤木圭一郎が歌った「霧笛が俺を呼んでいる」の１６年前のフィルム紹介。

昭和５２年１０月１７日

①「昌子命の恩人に…！？御対面」　＃２９４

②水前寺清子、森進一、榊原郁恵、殿さまキングス、森昌子

③「女のまごころ」(殿さま)、「おかあさん」(森昌子)、「三百六十五歩のマーチ」(水前寺)、「カチューシャの唄」(森昌子)、「船頭小唄」(森昌子)、「虚空太鼓」(水前寺)

④　森進一、水前寺清子、殿さまキングス、森昌子、榊原郁恵の出演で送る。

オープニングは殿さまキングスの「女のまごころ」。

スターの秘められた愛を紹介するコーナー”ラブ・スポット”は、森昌子がラーメン屋の山下さんと感動の対面をした後「おかあさん」を歌う。

”想い出のうた”は昭和４２年にヒットした水前寺の「三百六十五歩のマーチ」ほか。

”錠さんのヒット曲狙いうち”は、森進一の新曲「東京物語」について司会の宍戸錠が質問する。

”花のリサイタル”は森昌子のワンマンショーで、曲は「カチューシャの唄」「船頭小唄」など。

ラストは水前寺の「虚空太鼓」。

昭和５２年１０月２４日
①「アッ！さゆり初恋の人に御対面！！」　＃２９５
②山口百恵、山下敬二郎、森進一、渡真介、石川さゆり、キャッツアイ
③「エルビスは永遠に」（山下）、「横須賀ストーリー」（山口）、「夢先案内人」（山口）、「めっきり冷たくなりました」（キャッツ）、「東京物語」（森）、「純情派」（渡）
④　森進一、山口百恵、渡真介、石川さゆり、キャッツアイに、往年のロカビリースター山下敬二郎の出演で送る。
”ラブ・スポット”は、石川が中学時代の初恋の人と感激の対面をする。
”今週のとっておき”は山下が亡きエルビス・プレスリーをしのび自作の新曲「エルビスは永遠に」を歌った後、プレスリーからペンダントを贈られたエピソードを語る。
”花のリサイタル”は山口のワンマンショー。曲は「横須賀ストーリー」「夢先案内人」ほか。
”錠さんのヒット曲狙いうち”は、キャッツアイの「めっきり冷たくなりました」。
曲は他に森の「東京物語」、渡の「純情派」など。

昭和５２年１０月３１日
①「季節風の秘密を握る女」　＃２９６
②野口五郎、勝新太郎、和田アキ子、八代亜紀、野村真樹、中条きよし、李成愛
③「グッドナイト・ベイビー」（八代）、「なみだ恋」（李）、「座頭市子守唄」（勝）、「いつかどこかで」（勝）
④　勝新太郎、和田アキ子、八代亜紀、野口五郎、李成愛らの出演で送る。
”ラブ・スポット”は、野口が一緒に旅行して同じホテルに泊まり、髪を溶かしてくれた女性と対面する。
”思い出の歌”は、八代の「グッドナイト・ベイビー」ほか。
”錠さんヒット曲狙いうち”は、司会の宍戸錠が和田の新曲「夜更けのレストラン」を分析する。
”今週のとっておき”は、李が八代のヒット曲「なみだ恋」を韓国語で歌う。
”ミニ・リサイタル”は勝が登場、「座頭市子守唄」「いつかどこかで」ほかを披露する。

昭和５２年１１月７日
①「ジュリー絶好調！チヨまつたけに興奮！！」　＃２９７
②水前寺清子、坂上二郎、増位山、井上堯之、奥村チヨ、沢田研二、麻生よう子、森光子
③「そんな女のひとりごと」（増位山）、「走馬燈」（奥村）、「友達の唄」（水前寺）、「春子」（坂上）、「ふたりの方がいい」（小野寺）、「時の過ぎゆくままに」（沢田）、「勝手にしやがれ」（沢田）
④　関取衆の中でも評判の美声の持ち主、増位山のほか坂上二郎をゲストに迎え、水前寺清子、沢田研二、奥村チヨ、麻生よう子らがヒット曲を披露する。
増位山の「そんな女のひとりごと」、奥村の「走馬燈」に続く、”想い出の歌”は水前寺の「友達の唄」ほか。
”錠さんのヒット曲狙いうち”は坂上の新曲「春子」を取り上げる。
”今週のとっておき”は司会の小野寺昭が、自分のＬＰ曲「ふたりの方がいい」などをテレビで初めて披露。同年１２月４日付読売新聞東京版朝刊に小野寺の特集記事が載っているが、この時のこと

と思われる以下の文章が掲載されている。

> 先だってもテレビの歌番組で、ついに歌わされた。専門のオーケストラをバックにして――
> 「ナマ本番だったら必死で断ったでしょうね。ＶＴＲならミスしても撮り直しがきく、と歌の最中、しきりに自分に言い聞かせていました」
> あとで気になって、ビデオのカセットにとり、自宅でこっそり自分だけで見た。
> 「もうちょっとマシに歌えないかって、グチばっかりでした」

”花のリサイタル”は沢田のミニ・コンサートで、森光子の語りをバックに「時の過ぎゆくままに」「勝手にしやがれ」などを歌う。

昭和５２年１１月１４日

①「３００回記念第１弾！」　＃２９８

②森進一、あおい輝彦、和田アキ子、都はるみ、内山田洋とクール・ファイブ、由紀さおり、森光子、ディック・ミネ、前川清、石川さゆり

③「旅姿三人男」（ディック・あおい・前川）、「裏町人生」（森進一）、「旅の夜風」（前川・都）、「組曲・りんご」（女性歌手連）、「リンゴ追分」（石川）、「リンゴ村から」（都）、「夜更けのレストラン」（和田）、「幸せへの道」（都）

④　「にっぽんの歌」通算三百回を記念して、今週から四回にわたり歌の供宴を送る。

森光子の音頭で出演者一同の乾杯の後、三度笠片手のディック・ミネ、あおい輝彦、前川清による「旅姿三人男」で幕開き。

視聴者リクエストによる”にっぽんの歌ベスト 30”は、森進一の「裏町人生」、前川と都はるみの「旅の夜風」。

”思い出のうた”は曽根幸明編曲の「組曲・りんご」を女性歌手連が特集。石川さゆりが「リンゴ追分」、都が「リンゴ村から」などを歌う。

”ラブ・スポット”は和田アキ子の交友ぶりを披露、和田が「夜更けのレストラン」を歌う。

”今週のオリジナル”は杉紀彦作詞、曽根作曲の「幸せへの道」を都が披露。

昭和５２年１１月２１日

①「３００回記念第２弾！」　＃２９９

②森進一、和田アキ子、都はるみ、石川さゆり、内山田洋とクール・ファイブ、由紀さおり、朝田のぼる、中条きよし

③「長崎物語」（森）、「別れのブルース」（クール）、「港町ブルース」（森）、「涙の連絡船」（都・石川）、「旅人よ」（朝田）、「酒ごころ」（中条）、「旅愁」（全員）

④　先週に引き続いて、三百回記念月間シリーズの第二弾を送る。

視聴者リクエストによる”にっぽんの歌ベスト 30”の中から、森進一の「長崎物語」、内山田洋とクール・ファイブの「別れのブルース」で幕開け。

続く”競艶・港の演歌ベストスリー”は、森の「港町ブルース」、都はるみ、石川さゆりの「涙の連絡船」ほか。

このあと朝田のぼるの「旅人よ」、中条きよしの「酒ごころ」ほかの新曲が続き、フィナーレは全員で合唱する「旅愁」。

昭和５２年１１月２８日
①「３００回記念第３弾！」　＃３００
②五木ひろし、八代亜紀、森田公一、新沼謙治、アイ・ジョージ、殿さまキングス、朝丘雪路、中尾ミエ
③「よこはまたそがれ」（五木）、「なみだ恋」（八代）、「なみだの操」（殿さま）、
「可愛いベイビー」（中尾）
④　三百回記念月間シリーズの第三弾は、五木ひろし、八代亜紀、殿さまキングス、朝丘雪路、アイ・ジョージらを迎えて送る。
　第一部はデビュー曲特集で、五木、八代らがデビューの思い出を語る。曲は五木が「よこはまたそがれ」、八代が「なみだ恋」、殿さまキングスが「なみだの操」。
　”今週のとっておき”は昭和３３年２月１日、テレビ朝日（当時NETテレビ）が開局した当日に出演した朝丘に花束を贈り、司会者・宍戸錠らが思い出を聞く。
　”思い出のポップスメロディー”は中尾ミエの「可愛いベイビー」ほか。

昭和５２年１２月５日
①「３００回記念！突如ものまね大会に…！？」　＃３０１
②八代亜紀、細川たかし、森田公一とトップギャラン、新沼謙治、殿さまキングス、アイ・ジョージ、小野ヤスシ、中尾ミエ
③「おもいで岬」（新沼）、「硝子のジョニー」（細川・小野・新沼）、
「青春時代」（トップ・細川・新沼・八代・中尾）、「過ぎてしまえば」（トップ）
④　三百回記念月間シリーズの最終回は、殿さまキングス、森田公一とトップギャラン、八代亜紀、アイ・ジョージらの出演で送る。
　”デビュー曲特集”は新沼謙治の「おもいで岬」ほか。
　”今週のラブスポット”は、新沼にゆかりの深い人が登場、秘められた愛情と友情を語る。
　”思い出の歌”はアイ・ジョージが登場、細川たかし、小野ヤスシ、新沼が競演する「硝子のジョニー」のものまねを審査する。続いてトップギャランが「青春時代」を細川、新沼、八代、中尾ミエと共演する。フィナーレはトップギャランの新曲「過ぎてしまえば」。

昭和５２年１２月１２日
①「御対面続々！裕次郎マッサオ！！」　＃３０２
②森昌子、南田洋子、浅野ゆう子、青江三奈、小野ヤスシ、桂五郎、石原裕次郎
③「東京ナイトクラブ」（石原・青江）、「出船」（石原・森）、「誰もいない海」（石原・小野寺）、
「俺は待ってるぜ」（石原）、「赤いハンカチ」（石原）、「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、
「北から南から」（桂）、「春の岬」（森）、「みなとブルース」（青江）、「霧の波止場」（石原）
④　特別ゲストに石原裕次郎を迎え、青江三奈、森昌子、小野ヤスシほかの出演で送る。
　第一部は石原と女性歌手との共演コーナーで、曲は青江と「東京ナイトクラブ」、森と「出船」。
　”ラブ・スポット”は、石原のヨット仲間たちが石原のプロフィールを語り、女性共演者が秘話を披露。続いて”思い出の映画主題歌集”では、石原が「俺は待ってるぜ」「赤いハンカチ」「夜霧よ今

夜も有難う」などを披露。

新曲コーナーは、桂五郎が「北から南から」、森が「春の岬」、青江が「みなとブルース」、石原が「霧の波止場」を歌う。

同月１４日付読売新聞東京版朝刊に「裕次郎に円熟した男の味」との見出しによる記者のコラムが載っている。

> テレビ朝日の「新にっぽんの歌・花のスタジオセブン」（月曜＝後９・00）は、スタート以来、どうもいま一つ魅力に乏しいうらみがあったが、石原裕次郎を特別ゲストに迎えた十二日は、出色の楽しさだった。
>
> 構成としては、特に凝った趣向があったわけではなく、“御対面”、昔の思い出、ヨットレースの話、歌などでつづっただけのものだが、随所に石原裕次郎の“素”の魅力が感じられて、飽きなかった。
>
> （中略）
>
> もっともこの種の番組にはよくあることだが、石原裕次郎の部分が楽しく出来ていた分だけ、ほかの歌手たちの出演場面は、いかにもつけ足しの感じになってしまった。いっそ終始ひとりの歌手に焦点を合わせる作り方にすればいいものをと、またしても思わされた。

昭和５２年１２月１９日

①「バンマス豊岡、大混乱！！」　＃３０３

②北島三郎、八代亜紀、細川俊之、西川きよし、前川清、雪村いづみ、内山田洋とクール・ファイブ、アローナイツ

③「終着駅」（八代）、「バナナボート」（北島）、「北の宿から」（雪村）、「雪が降る」（クール）、「昭和枯れすすき」（細川・雪村）、「風まくら」（細川）、「献身」（アロー）、「娘よ君の生まれた日」（今）

④　細川俊之、西川きよしをゲストに迎え、雪村いづみ、北島三郎、内山田洋とクール・ファイブ、八代亜紀らの出演で送る。

オープニングは、八代の「終着駅」ほか。

続く”全員チャレンジ歌合戦”では、出演者全員が持ち歌以外の歌に挑戦する。曲は北島が英語で歌う「バナナボート」、雪村の「北の宿から」、クール・ファイブの「雪が降る」ほか。

また最近、歌の方でも活躍中の細川が雪村と「昭和枯れすすき」をデュエットし、新曲「風まくら」を披露する。

曲は他に「献身」（アローナイツ）、「娘よ君の生まれた日」（今陽子）など。

昭和５２年１２月２６日

①「西川きよし夫妻に全員ホロリ！でも…！？」　＃３０４

②八代亜紀、野口五郎、前川清、森昌子、ちあきなおみ、西川きよし、西川ヘレン

③「風の岬」（野口）、「春の岬」（森）、「愛妻物語」（西川きよし）、「銀座の恋の物語」（西川きよし・ヘレン）、「勝手にしやがれ」（野口）、「津軽海峡冬景色」（八代）、「ペッパー警部」（ちあき）、「昔の名前で出ています」（森）、「お正月」（全員）

④　ゲストにコメディアン西川きよし、ヘレン夫妻を迎え、ちあきなおみ、野口五郎、森昌子、八代亜

紀らが今年のヒット曲を披露。歌の合間に西川きよしがインチキ音楽評論家に扮し怪しげな評論を。

第一部は野口が「風の岬」、森が「春の岬」とそれぞれ新曲を歌った後、西川きよしが「愛妻物語」を歌い、「銀座の恋の物語」をヘレン夫人とデュエットする。

第二部は今年のヒット曲特集で、野口の「勝手にしやがれ」、八代の「津軽海峡冬景色」、今陽子、ちあきなおみの「ペッパー警部」、森の「昔の名前で出ています」ほか。

フィナーレは、全員で「もういくつ寝ると」を合唱。

昭和５３年１月２日

①「爆笑！民謡の祭典バカ受け福笑い大会」　＃３０５

②五木ひろし、森進一、前川清、桜田淳子、森昌子、泉ピン子、内山田洋とクール・ファイブ

③「花笠音頭」（五木・森昌子）、「秋田音頭」（桜田）、「おてもやん」（泉）、
「長崎は今日も雨だった」（クール）、「ハッピーニューイヤー」（不明）

④　新春第一回は五木ひろし、森進一、内山田洋とクール・ファイブ、森昌子、桜田淳子、泉ピン子らの出演で送る。

まず新春民謡合戦でスタート。曲は五木、森昌子の「花笠音頭」、桜田の「秋田音頭」、泉の「おてもやん」ほか。

続いて内山田洋とクール・ファイブが視聴者のリクエスト曲「長崎は今日も雨だった」を披露。

更に男女二組に分かれ正月らしく福笑いに挑む。

”今日だけのオリジナル”は曽根幸明作曲「ハッピーニューイヤー」。

昭和５３年１月９日

①「ピン子涙の対面！！昌子淳子物まね対決！！」　＃３０６

②五木ひろし、森進一、前川清、小野ヤスシ、森昌子、桜田淳子、泉ピン子、
内山田洋とクール・ファイブ

③「恋する夏の日」（森昌子）、「赤い風船」（桜田）、「せんせい」（桜田）、「わたしの青い鳥」（森昌子）、
「千曲川」（五木）、「港町ブルース」（森進一）、「灯りが欲しい」（五木）

④　五木ひろし、森進一、森昌子、桜田淳子、泉ピン子、内山田洋とクール・ファイブ、小野ヤスシらの出演で送る。

第一部は”昌子・淳子おんなの対決！”。森昌子と桜田がものまねや持ち歌交換などで勝敗を競う。ものまねは森昌子が天地真理の「恋する夏の日」、桜田が浅田美代子の「赤い風船」。持ち歌交換は桜田が「せんせい」、森昌子が「わたしの青い鳥」。

視聴者のリクエスト曲は五木の「千曲川」、森進一の「港町ブルース」。

”ラブ・スポット”は泉の巻。泉が下積み時代に通った東京・五反田のパチンコ屋店員奥田さん夫妻が不遇時代の泉のエピソードや人柄を語る。

フィナーレは五木の「灯りが欲しい」。

昭和５３年１月１６日
①「御対面特集！ジュリーの爆笑浪曲大会」　＃３０７
②小林旭、都はるみ、布施明、和田アキ子、沢田研二、服部克久、前田勝之助夫妻、中田喜子
③「憎みきれないろくでなし」（沢田）、「夜更けのレストラン」（和田）、
「もう一度一から出なおします」（小林）
④　小林旭、都はるみ、布施明、沢田研二、和田アキ子らの出演で送る。
沢田が「憎みきれないろくでなし」、和田が「夜更けのレストラン」を歌った後、”ラブ・スポット”を特集。まず、小林の友情やエピソードなどを作曲家服部克久が語る。続いて都に浪曲を特訓したことのある前田勝之助夫妻が登場、特訓のエピソードや、「北の宿から」のヒットの秘話を紹介する。
また、司会の小野寺昭のプロフィールや魅力を、「太陽にほえろ！」で小野寺の妹役を演じている女優中田喜子が語る。
フィナーレは小林の「もう一度一から出なおします」。

昭和５３年１月２３日
①「新沼感激の初段！森も対決！！」　＃３０８
②水前寺清子、松崎しげる、内藤国雄、アン・ルイス、森進一、新沼謙治、曽根幸明
③「北挽歌」（新沼）、「偽りのバラード」（松崎）、「雪の渡り鳥」（水前寺）、「スキー」（松崎・アン）、
「雪の降る町を」（森）、「トロイカ」（水前寺清子ら五人）、「娘よ、君の誕生日だ」（今・曽根）
④　水前寺清子、森進一、アン・ルイス、新沼謙治、松崎しげるの出演で”雪のうた”を特集。
新沼の「北挽歌」、松崎の「偽りのバラード」に続く”ラブ・スポット”は、新沼が内藤国雄九段と将棋対局をした時の棋譜係、時間係の二人の青年が登場、当時の思い出を語る。
シーズンにちなんだ”雪のうた”特集は、水前寺の「雪の渡り鳥」、松崎とアンの「スキー」ほか。
”今日だけのオリジナル”は、杉紀彦作詞、曽根幸明作曲の「娘よ、君の誕生日だ」を今陽子と曽根が、かけあいで歌う。

昭和５３年１月３０日
①「御対面金やんソワソワ郷、村田ＫＯか？」　＃３０９
②野村克也、松本ちえこ、ガッツ石松、南田洋子、アイ・ジョージ、殿さまキングス、郷ひろみ、
松本ちえこ、金田正一、有藤通世、村田兆治、金田留広、南田洋子、曽根幸明
③「津軽海峡冬景色」（金田留広）、「金田正一に捧げる歌」（曽根幸明）、「ビバ・オリオンズ」（全員）
④　アイ・ジョージ、殿さまキングス、郷ひろみ、松本ちえこ、ガッツ石松の他、プロ野球ロッテ球団の金田監督はじめ野村、有藤、村田らのスタープレーヤーがゲスト出演し、得意ののどを披露したり、しりとり合戦を繰り広げる。
オープニングは、金田留広、村田一野村のバッテリー、有藤、山崎らが守る布陣で、郷、松本らがバッティングを披露する”野球大会”。元気になった松本は、金田監督を相手にバッティングを披露する。
”ラブ・スポット”は女優南田洋子が登場、金田監督が慰問に行った重度障害児施設のお礼の手紙を朗読する。そのあと金田留広の「津軽海峡冬景色」、曽根幸明の「金田正一に捧げる歌」などが続き、ラストは全員で合唱するロッテ球団の応援歌「ビバ・オリオンズ」。

昭和５３年２月６日

①「涙！感激！ピンクレディー大量御対面！！昔のラブレターも出現」　＃３１０

②ちあきなおみ、南沙織、ピンクレディー、渡真介、平野雅昭

③「ペッパー警部」（ピンク）、「渚のシンドバッド」（ピンク）、「ウォンテッド」（ピンク）、「ＵＦＯ」（ピンク）、「あまぐも」（ちあき）、「春の予感」（南）、「青葉茂れる」（渡）

④　ピンクレディー、南沙織、ちあきなおみ、渡真介、平野雅昭らの出演で送る。

まず、ピンクレディーのヒットメドレーで幕開き。曲は、「ペッパー警部」「渚のシンドバッド」「ウォンテッド」。

”ラブ・スポット”は、ピンクレディーの中学の同級生たちが、ミーとケイの勉強ぶりやエピソードを語り、中学三年生の時のそれぞれの担任の先生と二人が感激の対面をする。

曲は他に「ＵＦＯ」（ピンクレディー）、「あまぐも」（ちあき）、「春の予感」（南）、「青葉茂れる」（渡）など。

昭和５３年２月１３日

①「真剣！！森と五木の結婚は？占い師集合／爆笑！角川珍演」　＃３１１

②都はるみ、石川さゆり、森進一、五木ひろし、角川博、遠藤良春、マリー・オリギン、横井伯典、竜豊道人

③「沈丁花」（石川）、「旅姿三人男」（都）、「「人間の証明」のテーマ」（五木）、「東京キッド」（森）、「津軽海峡冬景色」（石川）、「旅の終りに」（遠藤）、「道づれ」（角川）、「潮どき」（五木）

④　都はるみ、森進一、五木ひろしの三人に石川さゆり、角川博、遠藤良春を加えた顔ぶれで送る。

第一部は石川が新曲「沈丁花」を歌い、続く”ラブ・スポット”で、森の主治医渡部先生が森の健康状態や病気にまつわるエピソードを披露、マリー・オリギン、横井伯典、竜豊道人の三人の占い師が森の金銭運、恋愛、結婚運などを占う。

第二部は”ボーシで勝負”をテーマに、出演者がさまざまな帽子をかぶって登場、帽子のムードに合わせた曲を１８曲メドレーで歌う。曲は都が「旅姿三人男」、五木が「人間の証明」のテーマ、森が「東京キッド」、石川が「津軽海峡冬景色」ほか。

新曲コーナーは遠藤の「旅の終りに」、角川の「道づれ」、五木の「潮どき」。

昭和５３年２月２０日

①「八代、五郎、ゆかりものまねチャンチャカ節！！」　＃３１２

②チェリッシュ、布施明、平尾昌晃、野口五郎、八代亜紀、平野雅昭、春日三球・照代、前田武彦、伊東ゆかり、中条きよし

③「愛よ甦れ」（野口）、「行ったり来たり」（チェリッシュ）、「演歌チャンチャカチャン」（八代）、「ロマンチスト」（伊東）、「今夜は気取って」（布施）

④　布施明、野口五郎、八代亜紀らの他、「演歌チャンチャカチャン」の平野雅昭、「地下鉄漫才」で売り出した春日三球・照代の出演で送る。

三球・照代の漫才に続いて、野口が「愛よ甦れ」、チェリッシュが「行ったり来たり」の新曲を歌う。

”ラブ・スポット”は、先ごろ”坊主アタマ宣言”で話題をまいた前田武彦がチェリッシュのエピ

ソードなどを語る。

”スター爆笑大賞”では「演歌チャンチャカチャン」を歌う八代、漫才をやるチェリッシュらが、平野や三球・照代に助けられながらの熱演。

曲は他に「ロマンチスト」（伊東ゆかり）、「今夜は気取って」（布施）など。

昭和５３年２月２７日

①「涙！涙！由貴子感激の御対面」　＃３１３

②森進一、小柳ルミ子、森昌子、和田アキ子、橋幸夫、天馬ルミ子、清水由貴子

③「甘ったれ」（森進一）、「父娘草」（森昌子）、「真っ赤な太陽」（和田）、「月がとっても青いから」（森昌子）、「カラーに口紅」（清水・天馬）、「泥んこ」（橋）

④　歌手生活１８年の橋幸夫から一年生の天馬ルミ子まで、ベテランや中堅、新人が登場、今年にかけるヒット曲の数々を披露する。

森進一が「甘ったれ」、森昌子が「父娘草」とそれぞれ新曲を歌い、次の”ラブ・スポット”では清水由貴子が東京・蔵前中学校時代の恩師や同級生と対面、当時のエピソードなどを語る。

”イロイロ音楽会”では色に関係ある曲を披露。曲は、和田アキ子の「真っ赤な太陽」、森昌子の「月がとっても青いから」、清水と天馬の「カラーに口紅」など。更に橋が登場し、「泥んこ」を歌う。

昭和５３年３月６日

①「秀樹汗ダク！郁恵恥ズカシ謙治飛んでけ！挑戦！人形浄ルリ／花の狂騒曲」　＃３１４

②水前寺清子、細川たかし、西城秀樹、新沼謙治、高田みづえ、榊原郁恵、麻生よう子

③「あなたと愛のために」（西城）、「花しぐれ」（高田）、「花と蝶」（西城）、「ひなげしの歌」（高田）、「バラが咲いた」（麻生）、「愛の音」（麻生）、「遠い灯り」（細川）、「虚空太鼓」（水前寺）

④　水前寺清子、西城秀樹、新沼謙治、高田みづえ、榊原郁恵らの出演で送る。

西城が「あなたと愛のために」、高田が「花しぐれ」の新曲を歌った後、”ラブ・スポット”は、榊原が在学中に入っていた神奈川県・厚木東高校の浄瑠璃同好会が登場、当時の思い出を語り合い、榊原、水前寺、西城らが人形浄瑠璃を演ずる。

続いて花の歌特集。西城ら６人が、花を題名にした歌や花を歌詞によみ込んだ歌１５曲の競演。曲は西城の「花と蝶」、高田の「ひなげしの歌」、麻生よう子の「バラが咲いた」他。

ラストコーナーは麻生の「愛の音」と細川たかしの「遠い灯り」、水前寺の「虚空太鼓」。

昭和５３年３月１３日

①「ダンスにキスに甘いデュエット！ひばり、狩人、初顔合わせ！！」　＃３１５

②美空ひばり、狩人、黒田征太郎

③「乗りかえ駅の夜は更けて」（美空）、「流れのギター姉妹」（美空）、「風の恋人たち」（美空・狩人）、「素敵なランデブー」（美空・狩人）、「初恋マドロス」（美空）、「青春物語」（狩人）、「悲しい酒」（美空）

④　美空ひばりをメイングストに迎え、ヒット曲の数々と新曲を披露する他、狩人が美空と共演し、デュ

エットする。

まず美空が「乗りかえ駅の夜は更けて」と「流れのギター姉妹」の二曲を歌い、狩人が加わって「風の恋人たち」「素敵なランデブー」をデュエット。狩人が初共演の感想を語る。

また、美空のファンだというイラストレーター黒田征太郎さんがひばりメロディーの魅力の源泉、美空との出会いのエピソードなどを語る。

その後、美空が「初恋マドロス」など三曲をメドレーで、狩人が新曲「青春物語」を歌い、ラストは美空の「悲しい酒」ほか。

昭和５３年３月２０日

①「驚異７つの顔登場！！爆笑ハキモノ音楽会」　＃３１６

②小林旭、五木ひろし、岩崎宏美、石川さゆり、森田公一とトップギャラン、高田みづえ

③「二十才前」（岩崎）、「沈丁花」（石川）、「花しぐれ」（高田）、「夢ん中」（小林）、「伊豆の佐太郎」（五木）、「絹の靴下」（岩崎）、「日和下駄」（石川）

④　五木ひろし、小林旭、石川さゆり、岩崎宏美、高田みづえらの出演で、懐かしい歌、新しい歌の数々を送る。

まず岩崎が「二十才前」、石川が「沈丁花」と新曲を歌い、続く”ラブ・スポット”コーナーでは高田、小林がそれぞれゆかりの人たちと対面し、その合間に高田が「花しぐれ」、小林が「夢ん中」を披露する。

特集は、くつ、げた、わらじなど履物に関係ある歌１４曲で、曲は五木の「伊豆の佐太郎」、岩崎の「絹の靴下」、石川の「日和下駄」ほか。

昭和５３年３月２７日

①「最終回！ものまね決定版・挑戦！体力限界歌合戦」　＃３１７

②西城秀樹、八代亜紀、黒沢年男、和田アキ子、高松しげお、宮尾すすむ、荒木由美子、樋口夏

③「あなたと愛のために」（西城）、「コーラスガール」（和田）、「硝子のジョニー」（高松）、「ＵＦＯ」（宮尾）、「フラストレーション」（荒木）、「マドンナの城下町」（樋口）、「時には娼婦のように」（黒沢）、「愛の条件」（八代）

④　和田アキ子、八代亜紀、西城秀樹、黒沢年男らと新人歌手八人を加えた顔ぶれで、ものまね、体力テストつき”ウタソン”などを送る。

まず西城が「あなたと愛のために」、和田が「コーラスガール」を歌う。

続いての”ものまね”コーナーでは高松しげおがアイ・ジョージの「硝子のジョニー」、宮尾すすむがピンクレディーの「ＵＦＯ」などを歌う。

新人歌手の体力テストつき”ウタソン”コーナーでは、風船自転車をこぎながら荒木由美子が「フラストレーション」、腹筋運動をしながら樋口夏が「マドンナの城下町」ほかを歌う。

さらに黒沢が「時には娼婦のように」、八代が「愛の条件」を披露する。

第318回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和54年1月3日	月	19時00分～ 21時51分

司会：高峰三枝子（第318回）

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回　②出演者 ③曲目（歌唱者）　④放送概要

昭和５４年１月３日

①「懐かしの東海林太郎」　＃３１８

②春日八郎、三橋美智也、青江三奈、都はるみ、渡辺マリ、城卓矢、五月みどり、一節太郎、黛ジュン、千賀かほる、新谷のり子、佐川満男、東海林太郎（VTR）、水原弘（VTR）、加東大介（VTR）、小林旭、渡哲也、尾崎将司、こまどり姉妹、小畑実、北原謙二、若山彰、三船浩、笹みどり

③

④　新春水曜スペシャルとして、単発で企画された”にっぽんの歌”の特集。

三か月単位で消えていく現在の歌謡界のヒット路線に対して、今でも人々の記憶に鮮明に残っているビッグ・ヒットの数々を高峰三枝子の司会で披露する。

小林旭、渡哲也をはじめ、テレビでは見ることはなくても、記憶に残っている懐かしいスターたちを一堂に集め、今は亡き人たちの思い出のＶＴＲを交えながら”にっぽんの歌”で綴っていく。

『週刊ＴＶガイド』の番組表は、以下の記載となっている。

	サブタイトル	出演者
第一部	極めつけ演歌四天王	春日八郎、三橋美智也、青江三奈、都はるみ
第二部	おたのしみベスト10	渡辺マリ、城卓矢、五月みどり、一節太郎、黛ジュン、千賀かほる、新谷のり子、佐川満男
第三部	今甦る懐かしい顔	東海林太郎、水原弘、加東大介ほか
第四部	初春に唄うビッグ３プラスジャンボ	小林旭、渡哲也、高峰三枝子、尾崎将司

上記の他、同日付の新聞紙面にはこまどり姉妹、小畑実、北原謙二、若山彰、三船浩、笹みどりの記載もあるが、第何部での出演だったのかは不明である。

3　番組解説

1　放送局

「1　はじめに」で引用した『週刊ＴＶガイド』昭和４６年１０月１日号の記事によると、ＮＥＴテレビ（関東広域圏）、毎日テレビ（近畿広域圏）、中京テレビ（中京広域圏）、ＫＢＣテレビ（福岡県）にて放送を開始する旨が書かれている。しかしながら、実際に関西地区で放送を行っていたのは、昭和５０年３月までは毎日テレビではなくサンテレビ（兵庫県・大阪府等で視聴可能）と近畿テレビ（京都府・大阪府等で視聴可能）であった。また、前掲記事での言及はないが、広島ホームテレビ（広島県）、瀬戸内海放送（香川県・岡山県）、北海道テレビ（北海道）でも放送初回から放送を行っていた。おそらく、ＮＥＴ（後にテレビ朝日）ネット局にて全国同時放送を行っていたものと思われる。

なお、関西地区での放送は、半年ぶりの再開となった昭和５０年９月より毎日テレビが担うようになった。中京広域圏での放送は、昭和４８年４月より名古屋テレビが担うようになったが、これは同月より中京テレビが日本テレビ系列のフルネット局となり、名古屋テレビがＮＥＴとの単独ネットとなったことが起因していると思われる。

また、「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」にはない特徴として、アメリカ・ロサンゼルスでも毎週放送されていた点が特筆すべきである。昭和４７年２月１４日放送分の第２０回の台本には、司会の加東大介がハワイ出身の灰田勝彦に対し、「灰田さん、この番組はね、ハワイやロスアンゼルスでも放送されていて、むこうの日系人のかたがたのあいだでたいへんな人気なんだそうですよ。アメリカの有名な作家のヘンリー・ミラー氏もこの番組のファンなんですって」と話した後、司会の山東昭子がロサンゼルス在住の視聴者からのリクエストの手紙を灰田に渡すというシーンが描かれている。実際に、昭和４７年１月２７日付読売新聞東京版朝刊には、「ロスで大もて　ＮＥＴのビデオ」と題する以下の記事が載っている。

> 昭和のベスト・セラー曲を集めたＮＥＴ系「にっぽんの歌」（月曜午後９・00）は、構成のよさと加東大介の親しみのある司会ぶりで好評だが、国内ばかりでなく、海外でも人気を呼んでいるそうだ。
>
> ロサンゼルスを中心にしているＫＷＨＹ（22チャンネル）で、日曜夜八時から十時十五分まで二時間余り日系人向けに放送中の「日本語アワー」。このＫＷＨＹの放送圏内には、在留邦人、日系人など約十万人がいる。
>
> この時間には、日本から「宮本武蔵」はじめ、ローカルニュースなどが、ＶＴＲのパッケージにして送られているが、この時間だけは、いつもにぎわう映画館のすし屋も閑散となり、各種のパーティーも八時前に必ず終了する慣例になっているそうだ。
>
> こういうファン層にとって「にっぽんの歌」は、まさに望郷の思いを満たす番組らしい。
>
> 番組の“心の歌”コーナーに対するたどたどしい日本語や洗練された英文のリクエスト・カードが、五十通余りもＮＥＴに送られてきている。
>
> ヘンリー・ミラーとホキ徳田夫妻もロサンゼルス在住で、熱心なファン。ホキの解説でミラー氏もすっかり日本の歌をおぼえたそうで、そんなウワサも人気を助長、このテレビ局がＵＨＦ式なので、Ｕ波のはいるテレビ受像機に買い替える家庭も多いそうだ。

また、昭和４８年６月２６日付朝日新聞西部版夕刊にも、「ロスでも好評『にっぽんの歌』」と題し、以下のように紹介されている。

> この「にっぽんの歌」は日系アメリカ人の多いロサンゼルスで大好評、同市の日系人家庭の八五%がこの番組を放映しているＫＷＨＹテレビにチャンネルを合わせているということだ。

昭和４７年２月２１日放送分・同年１１月２０日放送分・昭和５１年２月２日放送分では、それぞれロサンゼルスの視聴者からの手紙や反響が取り上げられ、昭和５０年３月１０日・１７日放送分ではロサンゼルス公演も行っている。

２　放送期間ごとの詳細

（１）第１回～３９回（昭和４６年１０月～４７年６月）

①放送開始当日の新聞紙面

昭和４６年１０月４日からスタートしたこの番組であるが、同日付の新聞紙面では以下のように紹介されている。

> 昭和の名曲、愛唱歌で構成する歌謡番組。（朝日新聞東京版／西部版／名古屋版朝刊）
>
> 昭和のベストセラー曲を中心に、口ずさんだ歌、ヒットした歌や時の流れを越えた名曲を戦前、戦中、戦後、現在の人気歌手とともにふりかえる歌謡番組。（朝日新聞大阪版朝刊）
>
> 昭和のヒット曲を中心に名曲、愛唱歌をさまざまな趣向で構成する歌謡番組。（朝日新聞北海道版朝刊）
>
> “なつかしのヒット・パレード”“今週のハイライト”“リクエスト・コーナー”の三部構成で、主として、昭和のベスト・セラー曲の再登場となる。（読売新聞東京版朝刊）
>
> ヒットした歌、一般に親しまれた歌や名曲など、昭和のベスト・セラー曲で構成する。（毎日新聞東京版朝刊）
>
> 懐しい歌、ヒット曲、愛唱歌などをいろいろな趣向をこらして構成する歌謡新番組。（毎日新聞東京版夕刊）
>
> 日本における愛唱歌、ヒット曲、名曲をいろいろな角度から取り上げる歌謡番組。主として、昭和の歌を対象としている。（中日新聞朝刊）

「１　はじめに」（本書２ページ）で引用した『週刊ＴＶガイド』昭和４６年１０月１日号の紹介記事では「第３の“なつメロ”番組」と紹介されているのに対し、新聞紙面では「なつメロ」（または「ナツメロ」「懐メロ」）という表現が用いられていないことに気がつく。遡ること一年半前の昭和４５年４月にスタートした「帰ってきた歌謡曲」の放送

開始時には、「最近全盛の”なつメロ“の良さを若い人たちに紹介する番組」（昭和４５年４月２日付読売新聞東京版朝刊）などと紹介されていたこととの差異が印象的である。

②司会者

男性司会者は加東大介、女性司会者は第２６回までが山東昭子、第２７回以降が松任谷国子であった（山東から松任谷に司会交代した経緯は不明）。

放送初回の昭和４６年１０月４日付朝日新聞北海道版朝刊及び毎日新聞東京版朝刊には、加東・山東とも「歌謡番組初登場」であることが紹介されている。昭和４６年１１月８日付朝日新聞北海道版朝刊に、加東が司会者を引き受けた経緯が「“心の歌”は『戦友』」と題する記事で載っているため紹介したい。

> HTBテレビの「にっぽんの歌」（月曜、夜９時）で司会者をつとめている加東大介。歌謡曲番組の司会を……という交渉を受けたときは「先天的オンチ」と自認していただけにびっくりしたそうだ。話をよく聞いてみると、曲にまつわるエピソードなどを歌手やゲストに語ってもらう聞出し役、いわば「よき話し相手」になればいいということがわかり、それなら、と引受けたという。
>
> 「歌謡界のことはなんにも知らない。いつでも即席の下調べ。これは役づくりと同じで習慣になっているので、それほど苦にはならないし、自分を広げるという楽しみがある」という加東の「心の歌」は「戦友」だそうだ。

加東は歌謡界のことをほとんど知らなかったため、下調べを丹念に行って司会に臨んでいた。

> 小川知子、クールファイブもほとんど知らない。それで、司会の前には下調べを懸命にやる。
>
> 「クールファイブは、長崎でボーカルグループを結成して有線放送で人気が出たとある。有線放送って何か？でまた調べる。まあ下調べは役づくりと同じで習慣になってますし、まるで違う世界の人と会えて自分を広げられるという楽しみがありますなあ」。熱心に調べて、楽しんで人に会う。こんな気持ちが彼の司会態度に、ういういしさとなって出るから、茶の間に好評なのだろう。（「加東大介　音痴でも楽しんで熱心に」，昭和４６年１１月７日付読売新聞東京版朝刊）

こうした勉強熱心で誠実な加東の司会ぶりは、以下の記事が示すように好評であった。

> 思い出の曲に託してさまざまなゲストの半生を紹介するＮＥＴテレビの「にっぽんの歌」（月曜夜９時）は、いわゆる“なつメロ番組”の一つの典型だが、司会者加東大介の、決してうまくはないが誠実な司会によって、しみじみとした味わいを出すことに成功している。（「感慨催させるなつメロ番組」，昭和４７年６月２９日付朝日新聞西部版朝刊／「なつメロ番組が伝える感慨」，同日付朝日新聞名古屋版朝刊）
>
> 司会の加東大介が歌には素人なのに、非常に善戦してた。“演歌とは何ぞや”なんてことまで調べたメモを持参したり、さすがだったけど…（『週刊明星』昭和４７年７月１６日号）

③番組構成

国立国会図書館所蔵の台本は、第６６回を除き、残りの２４回分はすべて第３９回までの放送初期のものであった。これらの台本によると、初期の頃は以下のような構成であった。

①オープニングテーマに続き、「歌は生きている　人の命のある限り　歌は生きつづけ燃えつづける　心に輝く太陽のように」のナレーション。
②司会の二人のオープニング口上
　加東：加東大介です。
　山東：山東昭子です。
　加東：老いも若きも、すべての人の心の歌を集めた「にっぽんの歌」です。
　山東：今日うたって下さるのは、この方々です。
③オープニング・メドレーで出演者が順番に登場し、本日の放送内容の紹介。（オープニング・メドレーは演奏のみの回もあれば、第一部の出演者がワンコーラスずつ歌う回もあった。）
④第一部は、幅広く様々な出演者が思い出のヒット曲を歌う“思い出のヒットパレード”。順番に出演者が登場しトークの後、一曲ずつ歌う。
⑤第二部は、日本の歌の長い歴史の中に、大きな足跡をしるしている歌手を毎週一人ずつ迎える“今週のハイライト”。思い出話を聞いたり、ヒット・メドレーを歌ってもらう。
⑥第三部は、各界の有名人や視聴者の”心の歌”を紹介する“私の心の歌”。視聴者からのリクエストを紹介する回では、「視聴者代表が出演→視聴者が書いた手紙を女性司会者が朗読→歌手が登場し視聴者代表を交えておしゃべりした後、“心の歌”を歌ってもらう」という構成であった。
⑦エンディングでは、誰もがよく知っている懐かしい歌を出演者全員で合唱。

④番組への反響

第２回放送後の昭和４６年１０月１４日付読売新聞東京版朝刊に、「演出の巧みさに引かれた」との見出しによる記者の感想が載っており、番組構成を褒める内容となっている。

> 十一日のＮＥＴ系「にっぽんの歌」が楽しかった。菊池章子の「星の流れに」、池真理子の「愛のスイング」……第一部の「思い出のヒット・パレード」でナツメロを聞かせ、その間を司会の加東大介と山東昭子がつづる。まったくスレていない加東のおだやかな司会ぶりがまたいい。（中略）
>
> こうなると、歌のうまいまずいではない。三部構成の巧みな演出にいつしか引き込まれてしまう。ナツメロといってもあながち古い歌ばかりではない。一節太郎の「浪曲子守唄」を聞くと、もうあれから八年もたったのかと別の感慨が胸に迫ってくる。歌の流行は早く、忘れ去られるのも早い。しかし歌はいつも生きている。（後略）

また、翌１０月１５日付読売新聞東京版夕刊に、秋の新番組の視聴率の行方を紹介す

る記事が載っているが、「新形式のなつメロ『にっぽんの歌』が、前番組の『ヒットで勝負』が六、七％と低迷していたのに比べ、なつメロのブームに乗って一〇％と二ケタをとった。」と紹介されており、好調な出だしであったことが伺える。

放送開始から５か月が経過した昭和４７年２月１７日付読売新聞東京版朝刊には、「潤いある歌が聞ける番組」との見出しで、記者による番組評が載っており、番組が軌道に乗った後も高評価を得ていたことが伺える。

> （前略）歌謡曲のファンの一人としては、たまには一年前二年前にはやった、まだ“なつメロ”になり切っていない新しさがある歌を、もう一度その歌手で聞きたいのだ。そんな思いを、ＮＥＴの「にっぽんの歌」がときどき満たしてくれる。（中略）この番組、いうならば“なつメロ”とヒットパレードの中間を行く趣向。まだ古びていない歌を、歌手に一種のなつかしさをこめて歌わせるところに、落ち着いた潤いが出るのだろう。
>
> （中略）ヒットパレードの番組では、笑って仲よくしているようでも、底にライバル意識を秘めた白々しさを感じるが、ここにはそれがない。各人が持ち歌を落ち着いて歌える、この番組の構成とふん囲気は珍重すべきものがある。

一方で、同年１０月２５日付毎日新聞東京版朝刊に、「『にっぽんの歌』に望む」と題する以下の視聴者からの意見が載っており、番組名と内容のミスマッチを不満に感じる視聴者も存在していたことが伺える。

> ＮＥＴテレビ毎月曜「にっぽんの歌」をたのしみに見ているが、今までのところ、なつメロ歌謡曲などが主で少々がっかり。こういう歌が悪いとはいわないが、タイトルからすると、日本の民謡やわらべ歌など伝統的、純日本的な歌も登場していいのではなかろうか。

「にっぽんの歌」は「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」同様に歌謡曲（流行歌）を取り上げることが多かったが、第１３回・第１９回放送分において、「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」に一度も出演していない奥田良三を出演に迎えたことは、「にっぽんの歌」の番組名に恥じない、真骨頂が発揮された内容であると評価したい。

（２）第４０回～７８回（昭和４７年７月～４８年３月）

①司会者

男性司会者は高島忠夫、女性司会者は第６５回までが松尾ジーナ、第６７回以降が磯野洋子で、切り替わりの狭間の第６６回は高島一人で司会を務めている。

高島は歌手もこなす俳優であったが、「ショー番組の司会をずいぶんやっているが、意外にも歌番組のレギュラーは初めてなんだ。」（『週刊明星』昭和４７年７月１６日号）と紹介されており、前任の加東同様に歌番組の司会者はこれが初めてだったようである。

松尾は前年昭和４６年に「気ままなジーナ」というレコードを出したことで知られていた当時１９歳の若年タレントであったが、当時の雑誌記事・新聞記事では以下のように紹介されている。

これまでは、ナツメロがおおく取りあげられていたけれど、ジーナというフレッシュ・アイドルの登場を機に、尾崎紀世彦、西郷輝彦など、いま売りだしの歌手を登場させる予定。

そのほか、ジーナの担当で「気ままなインタビュー・コーナー」がもうけられ、番組にバラエティをもたせる。

だから、ジーナも体当たりでやると、がんばっている。見てネ!!（『セブンティーン』昭和４７年７月１８日号）

「なつメロ？　ほとんど知らないわね。わかんないものはわかりません。でも、あえて勉強はせず、私も楽しく聞かせてもらうつもり」

というジーナ。まさに“気ままな姿でゴメンナサイ”スタイルで登場だ。

このため、出演歌手が新曲をひろうするコーナーに＜気ままなジーナのインタビュー＞が設けられる。（『週刊平凡』昭和４７年７月２０日号）

“気ままな姿でゴメンナサイ”の松尾ジーナ、『にっぽんの歌』の司会に抜擢されて１か月たったが、「意外に日本語がうまい」の投書殺到に本人は目をシロクロ。（『週刊平凡』昭和４７年８月３・１０日合併号）

司会をするのは初めて。古い歌のことからインタビューのコツ、タイミングなど、いま体当りで勉強中。（昭和４７年８月２８日付朝日新聞北海道版朝刊）

目下ナツメロや古い歌を猛勉強中ということだが、まだまだ“気まま”にやるまでは時間がかかりそう。（『近代映画』昭和４７年１１月号）

冒頭で取り上げた『セブンティーン』昭和４７年７月１８日号の記事には、松尾の写真の下に「初の司会役。ガンバルワ～！」とのコメントがついており、高島同様に松尾も歌番組の司会は初めてであった。

果たしてなつメロを勉強したかどうかは定かではないが、なつメロ番組の司会者として非常に違和感を感じるこの松尾は、他局の生放送番組への出演をすっぽかした影響で芸能界を活動休止となり、途中で司会を降りることとなった。

ＴＢＳテレビ系毎週水曜の「歌と笑いでつっぱしれ！」は公開による生放送の番組だが、さる十三日の放送にレギュラーの松尾ジーナ＝写真＝が会場に現われず、ＴＢＳの担当者は、もう絶対ジーナは使わないとカンカン。（中略）

翌日になってやっと友達の家にいたことがわかったが、その弁明によると、急に胃が痛くなり寝ていたという。連絡は友達に頼んだのだが、それが不徹底だったとのこと。

「ヤング企画」ではジーナを半年間、芸能界の活動を休止させるから、とＴＢＳに謝ったが、このためＮＥＴ系「にっぽんの歌」も年内（収録ずみ）でジーナの出番は終わりとなってしまった。（中略）

関係者は「近ごろの若いタレントの職業意識の欠如」を言うが、彼女のヒット曲「気

ままなジーナ」を地で行かれたのでは困るというわけだ。（後略）（昭和４７年１２月１８日付読売新聞東京版朝刊）

②番組構成

第４０回～７８回に関しては、国立国会図書館所蔵の台本が第６６回分のみである他、新聞のテレビ欄で取り上げられる頻度も少なく、全体区分の中で一番情報量が少ない。数少ない新聞テレビ欄での紹介記事から判断するに、第１回～３９回の時と同様に三部構成あるいは四部構成で進行していたようである。前ページの記事によると、松尾による「気ままなインタビュー・コーナー」が設けられたようであるが、詳細は不明。

また、前掲『セブンティーン』昭和４７年７月１８日号の記事からは出演歌手の若返りが図られたかのように読み取れるが、実際は第１回～３９回の時期と比べて大幅に若返りが図られたわけではない。詳細は裏表紙裏のグラフを参照。

（３）第７９回～１３１回（昭和４８年４月～４９年４月）

①司会者

女性司会者は、戦前から李香蘭の名で女優・歌手として広く知られ、昭和４０年代当時、フジテレビのワイドショー「３時のあなた」の司会者として活躍していた山口淑子が務めた。なお、第９７回と第９８回においては山口が夏休みを取得したため、代役を森光子（第９７回）と高島忠夫（第９８回）が務めた。

『週刊平凡』昭和４８年４月５日号に、山口が司会を務めることになった経緯が触れられているため紹介したい。

山口淑子が『にっぽんの歌』（ＮＥＴ）で歌番組をはじめて司会する。『３時のあなた』の名司会ぶりと彼女のはなやかな経歴、スター性が買われての起用となったもの。毎回さまざまな中国服のファッションを見せてくれるのも楽しみのひとつ。

最近発声練習をはじめた彼女のこと、番組のなかでもおおいに美声を期待できる。

「得意の中国語と紫の中国服」と題した昭和４８年６月２６日付朝日新聞西部版夕刊の記事によると、山口の艶やかさがＮＥＴテレビの若いスタッフたちの憧れの的になっており、ラメ入りの紫の中国服に身を包んで現れた時は、スタジオ中の目を奪ったとのことである。

山口は一年間司会者を務めた後、「３時のあなた」とともに司会を降り、参議院議員選挙に立候補、当選し転身した（「山口淑子が、ついに参院選出馬を表明！＝初めて語ったその胸中＝」,『週刊平凡』昭和４９年４月１１日号）。

男性司会者は、政治評論家の藤原弘達が務めた。

②番組構成

主に三部構成で、司会の藤原による“藤原弘達歌謡放談”が第二部または第三部にて毎週組まれたようである。その具体的な内容は、「２　放送記録」を参照されたい。

（4）第１３２回～１８２回（昭和４９年４月～５０年３月）

①司会者

男性司会者に加東大介が返り咲き、女性司会者が池坊保子、またレギュラーゲストとしてディック・ミネが加わった。『週刊明星』昭和４９年４月２１日号に詳しく紹介されているため引用したい。

> ＮＥＴテレビの歌謡番組『にっぽんの歌』では、現在の司会者を４月８日から交代。
> 山口淑子、藤原弘達から、加東大介、池坊保子、レギュラー・ゲストのディック・ミネの新メンバーに変更し、新しいスタートを切ることになった。
> 加藤大介は、すでにこの番組の初代司会者として、46年10月から９カ月間、司会を担当しており、その手腕のほどは定評のあるところ。
> 池坊保子は、華道池坊専永・家元の夫人で、ベストセラーの『夫とつきあう法』などを書いた才女タレントだ。
> またまためぐってきた司会の役に加藤大介は、
> 「なにしろ、２年半ぶりのことですからね、どうやって前と違う味を出そうかと苦心しています。ただ、この番組は大好きなので、古巣にもどった気分で楽しくやっていきたい」
> と、いかにもベテランらしい抱負を語る。
> この加東とコンビを組む池坊は、これが初めての司会。
> 「まったく白紙の状態です。歌は好き、なんですが、いつも二人の娘にバカにされるくらいオンチなんですよ。専門知識もゼロですから、とにかく男性お二人の足手まといにならぬよう頑張るつもりです」
> ういういしい感想をのべれば超ベテランの万年青年、ディック・ミネは、
> 「まあ、やわらかいほうの話は得意なんでね……何が飛び出すか分らんよ」
> と、ニコニコ顔。
> 個性の異る３人で組むこの司会、歌謡番組のファンには、結構なプレゼントになりそうだ。

初の歌番組司会を務めることとなった池坊は、夫の専永もＴＢＳテレビの「娘とおやじ」というトーク番組の司会を同じ昭和４９年４月から引き受けており、同時にテレビ番組の司会を始めたことが当時話題となった（「“異色素人タレント”はこうしてスカウトされた！」,『週刊平凡』昭和４９年５月９日号）。この記事の中で、池坊の司会ぶりが紹介されているため、引用したい。

> 保子さんのほうは、前任者・山口淑子のあとを継いだのだが、
> 「私って、とても音痴なの。娘にも“ママがうたうと節が違う”ってバカにされてる。それが歌番組の司会をやるんですから、ずうずうしいでしょ」
> と口に手をやって、ほがらかに笑う。
> ただし歌を聞くのとおしゃべりは大好きで、上流夫人だととりすましたところはない。たとえば、五木ひろしをスタジオで見かけると、「ああ、あの人が五木さんなの！」。あどけないファンのように、まじまじとみつめたりしている。
> 硬派の加東大介、軟派のディック・ミネという男性司会者にはさまれ、“素人っぽい

視聴者代表”といった司会ぶりが好評である。
　１週に１度、録画撮りのため京都から上京してくるのだが、だれもお供を連れず、ひとりでボストンバッグをぶらさげて現れる。
「スタジオに来るのがうれしくて、いそいそと出てくるんですのよ、ホホホ」
　和服への着替えも、手をかりずひとりでキュッキュッ。
　気さくで美しい奥さんであるが、テレビ局のほうでは、「女性視聴者にどう見られているか」をちょっぴり心配している。（引用中のルビは原文のとおり）

「異色司会者」（『映画情報』昭和４９年６月号）と評された池坊の司会ぶりに関しては、「司会者選び慎重に」との見出しによる視聴者からの手厳しいコメントが昭和４９年５月５日付読売新聞東京版朝刊に掲載されている（本書５６ページ参照）。
　また、週刊誌にも酷評される始末であった。

　視聴率を見ても“山口時代”は二ケタあったのが、四月以降は一ケタもしばしばと、不人気がはっきり。コンビの加東は、実はこの番組の初代司会者として大好評だった実績もあるだけに、原因はやはり彼女か・・・・。
　新司会者といえば、夫君の家元、池坊専永氏の方も、ＴＢＳテレビ日曜早朝の『娘とおやじ』で四月から司会を受け持っており、“華麗なる夫婦競演”と大評判だったのだが、こちらも同じく、四月以降視聴率が下がっている。お気の毒な夫婦である。（『週刊サンケイ』昭和４９年６月１４日号）

かくして池坊はわずか１０回で司会を降りることとなった。その経緯が２つの週刊誌で取り上げられているため紹介したい。

　ＮＥＴ『にっぽんの歌』（月曜午後９時～10時）のホステス池坊保子（いけのぼうやすこ）さんが、６月17日から河内桃子に替わった。その理由を
「池坊さんは池坊流宗家（そうけ）夫人として華道界のトップレディーの地位を占めるかたわら、家庭では２児の母親でもあり、同時にタレントとして活躍するなど、いろいろと忙しすぎました。京都に住んでいて、この番組のため週２日上京してみえましたが往復のしんどさもあって、１クール（３か月）の区切りを待たず、彼女のほうから司会をやめたいと申し出がありました」
　と、ＮＥＴ側は説明している。（「トップレディーも司会者落第？」，『週刊平凡』昭和４９年７月１１日号）（引用中のルビは原文のとおり）

　彼女、この四月からＮＥＴの『にっぽんの歌』という、ナツメロ番組の司会者として登場したが、わずか二カ月あまりで、早くも“降板”。担当プロデューサーによると、「何しろ多忙な方で、あらかじめ、いつでもおやめになって結構です、と申し上げてありましたから・・・・」
　ところが、ある関係者は、「とにかく視聴率が上らない。視聴者からの投書や批判はヤイノヤイノと来るし、結局“お引取り”願うことになったんだよ。」と、だいぶニュアンスが違う。
「庶民派の加東大介がナツメロを紹介しても、あの人はニッコリと“私、存じません

わ”っていってのけるんですからね」「彼女の着物、いいものなんでしょうけど、趣味が悪いわ」――と、茶の間の主婦も手厳しい。

半分は上流夫人への嫉妬としても、どうやら“司会者失格”は間違いないところ。局内には、「他流派のイヤガラセじゃないか」なんて声も出たそうだが、じゃあ、今度は各流派の家元夫人を順に登場させたら？（「ＮＥＴから降ろされた？　池坊保子」,『週刊新潮』昭和４９年６月１３日号）（引用中のルビは原文のとおり）

池坊の後任には河内桃子が抜擢された。前掲『週刊平凡』昭和４９年７月１１日号に経緯が書かれているため紹介したい。

後任に河内桃子が選ばれたのは、
「番組の内容が落ち着いたものだし、“なつメロ”的な歌も多いので、世代感のある生活経験の豊富な人ということで彼女を起用しました。いやみがなく、適度に庶民的で、適度にエレガントで、加東大介さんとのコンビネーションもいいですよ」（土屋順二プロデューサー）

当の河内桃子は、「歌の司会は初めてですが、ゲストの歌手のかたに楽しくうたっていただける雰囲気をつくるようにしたいと思います」と、抱負を語っているが、くれぐれも２度と「誤算だった」などといわれぬようお願いしたいものだ。

後任の河内は無難に司会を務め上げたようである。

女優、声優、ワイドショーの司会と多才な河内桃子も歌番組の司会は初めて。が、昔馴染みの加東大介とコンビを組むとあって、「初めっから大船に乗ったつもりで」気負わず、マイペースでやれたとか。

二カ月前、初めての録画撮りの日「芝居とちがって、つくらない私がだされば……」と抱負を語っていたが「今は楽しくてしようがない。番組柄、出演なさる歌手のみなさん、大人でしょ。会話に苦労しませんね」と明るい表情だ。（『週刊ＴＶガイド昭和４９年８月９日号』

毎週月曜日夜九時、ＮＥＴにダイヤルを合わせると“にっぽんの歌”という真面目番組をやっている。河内さんは加東大介さんと二人で、その司会役。おっとりした持味をただよわせている
「舞台のあるときは松島トモ子さんが代わって下さるの。そういうお約束になってまして……」とすまなそうな顔になる。ことし、河内さんは女優さんになってはじめて年三本も舞台に出ることになった。この秋はチェホフの『かもめ』がある。“にっぽんの歌”をときどきお休みするのは、舞台優先の建前から。でも、歌は好きである。一番耳にこころよいのは、子守唄。小さいとき、お母さんにうたってもらった子守唄の歌声をハッキリ記憶にとどめている、という。（『サンデー毎日』昭和４９年８月１８日号）

実際、第１４４回～１４６回は舞台公演のため、河内の代役として松島トモ子が司会を務めている。

３０年間病気知らずであったという加東は、第１７８回の「小野田寛郎こころの歌」を昭和５０年２月１７日に収録した直後の同月２１日、体調不良により入院することとなった。そのため、3月放送分の第１７９回より休むこととなったが、いったんの最終回となった第１８２回「歌祭り！花の饗宴」には病院からかけつけ司会を務めた。

『にっぽんの歌』は、メーン司会者の加東と河内桃子のほかに、ゲストのレギュラーに歌手のディック・ミネを迎えている。そのため、「加東さんが休演されるからといって別の司会者を立てることは考えていません。河内さんとディック・ミネさんのふたりに、全面的にカバーしてもらうことにしました」（ＮＥＴ制作担当スタッフ）。（「加東大介がゲッソリやつれて緊急入院！」,『週刊平凡』昭和５０年３月２０日号）

この時期には過労による肝炎と報道されていた加東であったが、実際には結腸癌であり、回復叶わず同年７月３１日に６４歳で死去した。

②番組構成

第７９回～１３１回の時期と同様に主に三部構成で、メインゲストのディック・ミネによる“ディック・ミネ歌謡談義”が第二部または第三部にて毎週組まれていたようである。その具体的な内容は、「２　放送記録」を参照されたい。

③番組への反響

本書１５０ページで引用した『週刊サンケイ』昭和４９年６月１４日号の記事からは、池坊の司会時期に視聴率で苦境に立たされていたことが分かるが、司会が河内に代わってからは立て直したようである。朝日新聞記者による記事と、京都新聞に寄せられた視聴者からの投書をそれぞれ紹介したい。

「ジャリ・タレントの下手な歌なんか聞いちゃおれん」という不平派には、この歌謡番組がぴったりだ。山口百恵や郷ひろみは登場せず、今夜の場合なら、ディック・ミネや灰田勝彦、小林旭や伊東ゆかり、若くても水前寺清子や園まり、という具合だ。「年寄りばかりじゃないか」という皮肉派もいるかもしれないが、放送局のふれ込みは「歌唱力のある本格派ばかり」だ。

「東京の屋根の下」や「ギターを持った渡り鳥」のように、のんびりしたテンポの歌が多い。カメラワークがそれに合わせて、ゆっくり。その技術がいい。奇抜な構図や急激なズームアップを避けている。この時代にこうした地味な番組を作ることは、意外に勇気がいるのかもしれない。加東大介と河内桃子の司会も、お祭り騒ぎにならないよう控え目だ。（「珍しいゆったり番組」, 昭和４９年１２月９日付朝日新聞東京版朝刊）

近畿テレビ「にっぽんの歌」（月曜夜）に登場する一流歌手の歌はわれわれにはなんとしても魅力がある。時代の変化もさることながらノド一筋に生きてきた昔からの生まじめな動作、容姿には好感が持てる。

戦前の歌手たちもいつまでも健やかに元気で活躍してほしいものだ。そしてこの時間も長くつづけて歌謡界の歴史を深く刻みつけてくれることを祈っている一人である。（「魅力ある『にっぽんの歌』, 昭和５０年１月２８日付京都新聞朝刊」

（5）第１８３回～２１３回（昭和５０年９月～５１年３月）

①5か月ぶりの番組復活

「にっぽんの歌」は、加東大介の病気回復を願う昭和５０年３月２４日放送分をもって終了した。しかしながら、わずか5か月後に番組が復活した。そのあたりの事情が昭和５０年８月４日付朝日新聞東京版夕刊に「『にっぽんの歌』復活」との見出しで取り上げられているため紹介したい。

> 数少ないなつメロ番組で好評だった「にっぽんの歌」（ＮＥＴ系）が、九月から復活する。
>
> 実は、いま放送されている朝日―ＮＥＴ系ドラマ「霧の感情飛行」（月曜よる９・０）が、関西では十四、五％（ビデオ・リサーチ調べ）と高い視聴率をかせいでいるが、関東では四～五％とさっぱり。そこで、ドラマを八月いっぱいで打ち切ったあと、九月からこの時間帯で放送しようというわけ。
>
> さきの司会は、故加東大介と河内桃子のイキの合ったコンビだったが、こんどは神山繁、三ツ矢歌子に代わる。レギュラーに作曲家の遠藤実を迎えるので、演歌調がより強まるようだ。

また、『週刊明星』昭和５０年８月１０日号にも、「ファンの要望にこたえ『にっぽんの歌』再登場　大人の歌謡番組が復活」との見出しにより、番組復活の経緯が詳細に記されている。

> 昭和 46 年 10 月スタート以来、３年半にわたり大人の歌番組として人気を集めて来たＮＥＴ『にっぽんの歌』が視聴者の要望にこたえて再スタートすることになった。
>
> この番組は、かつて好調なときには 20％という視聴率をかせぎ、低迷している歌番組の中ではかなり健闘していた。また、ヤング一本槍の最近の傾向の中で大人を意識した番組づくりも好評でファンも多く、４月の編成がえのあおりをくって打ち切られたときには視聴者からの抗議もよせられたほどだった。
>
> 局の方でもこの番組の中止は心のこりだったようで、この９月からファンの要望にこたえて異例の再スタートとなったわけ。
>
> （中略）
>
> もともとこの番組は歌手の方からも積極的に出演を希望する例が多く、春日八郎、北島三郎、三橋美智也などは常連。都はるみ、青江三奈、水前寺清子、ちあきなおみらもしばしば登場していた。
>
> 秋からの再スタートで、またこういう歌手たちの歌う“大人の歌”がたっぷり聞かれると、たのしみにするファンも多いことだろう。

『週刊ＴＶガイド』昭和５０年９月５日号においても、「“日本人の心にしみる歌”をキャッチフレーズに、一時休んでいた『にっぽんの歌』が再スタート。」と紹介されている。

なお、番組放送直前の昭和５０年８月２０日付読売新聞東京版朝刊には、「“小学唱歌”の特集も」との見出しによる視聴者からの投書が掲載されている。

> ＮＥＴテレビで九月から復活する「にっぽんの歌」について希望をひとつ。歌謡曲ばかりでなく数か月に一度は季節感あふれる小学唱歌・抒情歌の特集を切望します。

②司会者

男性司会者が神山繁、女性司会者が三ツ矢歌子、またレギュラーゲストとして遠藤実が加わった（遠藤は第２０３回放送分でレギュラーゲストを降りている。）。そして、視聴者からのリクエストの手紙を読み上げる“思い出の歌”コーナーでは奈良岡朋子がナレーターを担当することとなった。

前ページで取り上げた『週刊明星』昭和５０年８月１０日号では以下のように紹介されている。

> 司会グループには、進行役として神山繁、三ッ矢歌子という異色のコンビを起用し、作曲家遠藤実氏をレギュラー・ゲストに迎えて、貧困から身を起した豊富な人生経験を生かす、“心の歌”のコーナーを設けた。また視聴者からよせられた“思い出の歌”のコーナーでは新劇のベテラン奈良岡朋子が感動的なナレーションを担当する。

三ツ矢が司会を引き受けた経緯は、「他の番組にも司会の話がかかったが『歌だけにしぼったオトナの番組なので、こちらをお引き受けしたんです』」（昭和５０年１２月１日付朝日新聞大阪版夕刊）とのことである。

③番組構成

引き続き主に三部構成で、メインゲストの遠藤が、ゲストの歌手とのやりとりを中心に、ヒット曲にまつわるエピソードを加えながら心の歌を探っていく“遠藤実こころの歌”コーナーを受け持った。また、奈良岡朋子がナレーションで視聴者からのリクエストの手紙を読み上げ、ゲストの歌手に思い出の歌を歌ってもらう“思い出の歌”コーナーがあった。

④その他

第１８３回～２１３回の時期に自身が出演することはなかったが、昭和１０年代から歌手として活躍していた霧島昇が、東京１２チャンネルの「心で歌う５０年」とともにこの番組を毎週録画していたことが、『週刊ＴＶガイド』昭和５０年９月２６日号に、夫人の松原操による証言として記載されている。

（６）第２１４回～２３９回（昭和５１年４月～５１年９月）

①司会者

女性司会者は引き続き三ツ矢が、ナレーションも引き続き奈良岡が担当したが、男性司会者が曽我廼家明蝶に交代した。昭和５１年４月５日付朝日新聞大阪版夕刊には、以下のように紹介されている。

> 芸歴50年の明蝶だが、司会業はこれが三度目。同じ司会の三ツ矢歌子とは、もちろん初顔合わせ。ひと味違ったオトナの歌謡番組をねらうそうだが、明蝶は「私は私なりの特色を出したいですなあ。たまには酒でも飲んで脱線するかも……地でやらせてもらいます」と、抱負を語る。

②番組構成

引き続き主に三部構成で、視聴者からのリクエストによる“思い出の歌”コーナーも継続していた。

（7）第２４０回～２６５回（昭和５１年１０月～５２年３月）

①司会者

男性司会者が有島一郎、女性司会者は第１４２回～１８２回の時期にも司会を務めていた河内桃子に交代した。ナレーションは引き続き奈良岡が担当した。

②番組構成

引き続き主に三部構成で、視聴者からのリクエストによる“思い出の歌”コーナーも継続していた。

（8）第２６６回～２９１回（昭和５２年４月～５２年９月）

当番組の制作局は、この前月まで「株式会社日本教育テレビ」（略称：ＮＥＴテレビ）であったが、４月より社名変更し「全国朝日放送株式会社」（略称：テレビ朝日）となった。

①司会者

第９７回で山口淑子の代理で司会を務めた経験のある森光子が単独司会者となった。「『ときには私もマイクを持って、演歌からロックまで歌いますよ』とノッている。」（『週刊明星』昭和５２年４月１０日号）との記事が示すように、他の司会者と比べ、番組内で自ら歌を歌う頻度が多かったことが特徴と言える。

また、サンフランシスコ・オペラハウスからのアメリカ公演（第２７８～２７９回）の際には、森とともに松山英太郎が司会を務めた。

②番組構成

主に三部～四部構成で、新曲コーナーもあった。

（9）第２９２回～３１７回（昭和５２年１０月～５３年３月）

①新番組としてのスタート

第２９１回が放送された昭和５２年９月２６日の新聞紙面には、「にっぽんの歌」が“最終回”とクレジットされている。実際、『テレビ朝日社史　ファミリー視聴の 25 年』の年表において「にっぽんの歌」は「46. 10. 4～50. 3. 24，50. 9. 1～52. 9. 26」と記述されており、この日が最終回であったというのが公式見解でもあることが分かる。

一方で、その翌週の同年１０月３日の紙面には、以下のように紹介されている。

> 小野寺昭、今陽子、宍戸錠の司会で、歌謡曲の“スタンダード・ナンバー”を中心に、スター歌手の魅力を披露し、幅広いナツメロ愛好視聴者におくる歌謡番組。（「花のスタジオセブン『前夜祭Ｉ!!』」，読売新聞東京版朝刊／毎日新聞東京版朝刊／朝日新聞大阪版朝刊※／中日新聞朝刊）
>
> ※朝日新聞大阪版朝刊の見出しは「花のスタジオセブン」

小野寺昭、今陽子、宍戸錠の司会で、歌謡曲の“スタンダード・ナンバー”を中心に、スター歌手の魅力を披露する歌謡番組。（「新にっぽんの歌・花のスタジオセブン『前夜祭Ｉ!!』」，朝日新聞名古屋版朝刊）

読売新聞東京版・毎日新聞東京版・朝日新聞大阪版・中日新聞においては番組名が「花のスタジオセブン」となっている一方、朝日新聞名古屋版においては「新にっぽんの歌・花のスタジオセブン」という番組名となっており、実質的には「にっぽんの歌」が継続されていたことが伺える。このことは、昭和５２年１１月１４日～１２月５日放送回が、「にっぽんの歌」通算三百回を記念した特集となっていることからも明らかである。

番組名変更の経緯は、昭和５２年１０月２１日付読売新聞東京版夕刊の記事に「森光子が司会を降り、ピンキー・小野寺昭・宍戸錠のトリオ司会で若返りをはかって『花のスタジオセブン』を出した」とあり、若返りを図った結果と思われる。なお、国立国会図書館所蔵の放送初期の台本には、収録場所が「ＮＥＴ　第七スタジオ」と表記されているが、「花のスタジオセブン」の番組名は、当番組の収録を第七スタジオで行っていたことからきているものと推察できる。

②司会者

小野寺昭、今陽子、宍戸錠の３人が司会を務めた。小野寺は当時「太陽にほえろ！」にレギュラー出演していた俳優、今陽子はピンキーとキラーズからソロに転向していた歌手であり、司会陣の若返りが図られた。

当時の雑誌記事において以下のように紹介されている。

内容も司会者もガラリ一変。司会は、前回の森光子から小野寺昭、今陽子、宍戸錠にバトンタッチ。中でも初めて司会にチャレンジする小野寺は、「話があって半月ぐらい悩みました。で“太陽にほえろ！”のボス（石原裕次郎）に相談したら、“ぜひ、やったら”とすすめられ、決心しました」。小野寺は、レコードも出しているし、コンサートも年十回くらい経験している。

「ラジオのＤ・Ｊもやってますので、ある程度の自信はあったのですが……。番組でボクも歌うことになってますが、これも初めて。オリジナルの“旅でもしようか”を歌うつもりです」。

内容の目玉は①わが青春の歌――新時代のナツメロ、昭和三十年代後半～四十年代の歌。②今週のとっておき――めったに見られないＶＴＲ、フィルム紹介。第一回では五年前の王選手が歌うフィルムも登場。（『週刊ＴＶガイド』昭和５２年９月３０日号）

うちではほかに『新にっぽんの歌・花のスタジオセブン』で司会に小野寺昭を起用したんです。出演交渉したとき、「しゃべるのが苦手だから」といちどは彼は断わったらしい。それを無理に口説いて出演してもらったんですが、彼はレコードも出しているでしょう。プロデューサーが彼にうたわせようとしたら「うたうなら司会しているほうがいい」って。今陽子も司会してますが、彼女はいまどこのレコード会社にも所属してないので司会はやりやすいみたい。自分のレコードが出ているときに、他人の

歌を紹介したり持ち上げなければならないときって、やりにくいそうですね、歌手で司会する人は。(『週刊平凡』昭和５２年１１月１０日号)

③番組構成

番組構成は前掲『週刊ＴＶガイド』昭和５２年９月３０日号の記事において言及されているが、実際に新聞のテレビ欄を追っていくと、出演者がゆかりの深い人物と対面する“ラブ・スポット”コーナー、司会の宍戸が新曲を分析する“錠さんのヒット曲狙いうち”コーナー、出演者のミニワンマンショーの“花のリサイタル”コーナー、“今週のオリジナル”コーナー、“思い出の歌”コーナー、“今日だけのオリジナル”コーナー、新曲コーナーなど、各回ごとに多彩なラインナップを送っていたようである。

④番組への反響

昭和５２年１０月２１日付読売新聞東京版夕刊の記事によると、若返りをはかったものの「考えすぎがたたってか、客を逃して第一回は４．２％だった」と、視聴率が芳しくないスタートであったことが示されている。また、番組開始２か月後の昭和５２年１２月１４日付読売新聞東京版朝刊に掲載された記者によるコラムにも、「スタート以来、どうもいま一つ魅力に乏しいうらみがあったが」とあり（本書１３２ページ参照）、苦戦していたことが伺える。

（７）第３１８回（昭和５４年１月）

①放送の概要

「水曜スペシャル」は、当時テレビ朝日系列が概ね毎週水曜日１９時３０分～２０時５１分まで放送していた単発特別番組枠であり、各種バラエティー番組やドキュメンタリー番組などが放送されていたが、昭和５４年１月３日は、３０分拡大して１９時から「にっぽんの歌」の特集を放送した。

なお本書においては便宜上“第３１８回”と表記したが、実際に放送回としてカウントされたかどうかは不明である。

②司会者

高峰三枝子が一人で司会を務めた。

4　番組の特徴

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
加東大介	90回	1位	3回	120位	×	×
奈良岡朋子	83回	2位	0回	—	×	×
ディック・ミネ	76回	3位	25回	12位	○	○
河内桃子	64回	4位	0回	—	×	×
都はるみ	58回	5位	58回	1位	×	○
三ツ矢歌子	57回	6位	0回	—	×	×
青江三奈	54回	7位	54回	2位	×	×
山口淑子	53回	8位	2回	156位	×	×
藤原弘達	53回	8位	0回	—	×	×
春日八郎	49回	10位	49回	3位	○	○
ちあきなおみ	48回	11位	48回	4位	×	○
高島忠夫	45回	12位	4回	102位	×	×
水前寺清子	44回	13位	44回	5位	×	×
北島三郎	35回	14位	35回	6位	×	×
森光子	35回	14位	8回	61位	×	×
田端義夫	33回	16位	33回	7位	○	○
五木ひろし	32回	17位	32回	8位	×	×
今陽子	31回	18位	5回	91位	×	×
神山繁	31回	18位	0回	—	×	×
島倉千代子	30回	20位	30回	9位	○	○
三橋美智也	27回	21位	27回	10位	○	○
遠藤実	27回	21位	6回	80位	×	×
森進一	27回	21位	27回	10位	×	○
宍戸錠	27回	21位	1回	226位	×	×
山東昭子	26回	25位	0回	—	×	×
松尾ジーナ	26回	25位	0回	—	×	×
曽我廼家明蝶	26回	25位	0回	—	×	×
有島一郎	26回	25位	0回	—	×	×
小野寺昭	26回	25位	0回	—	×	×
藤山一郎	24回	30位	24回	13位	○	○
八代亜紀	24回	30位	24回	13位	×	×
フランク永井	23回	32位	23回	15位	×	○
石原裕次郎	22回	33位	22回	16位	×	○
藤圭子	21回	34位	21回	17位	×	○
美空ひばり	21回	34位	21回	17位	×	×
村田英雄	20回	36位	20回	19位	○	○
内山田洋とクール・ファイブ	19回	37位	19回	20位	×	○

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
舟木一夫	18回	38位	18回	21位	×	○
由紀さおり	18回	38位	18回	21位	×	○
松尾和子	17回	40位	17回	23位	×	○
三浦洸一	17回	40位	17回	23位	○	○
ペギー葉山	17回	40位	17回	23位	○	○
森昌子	17回	40位	17回	23位	×	×
松山恵子	16回	44位	16回	27位	○	○
橋幸夫	15回	45位	15回	28位	×	○
菅原洋一	15回	45位	15回	28位	×	○
藤島桓夫	14回	47位	14回	30位	○	○
和田弘とマヒナスターズ	14回	47位	14回	30位	○	○
近江俊郎	13回	49位	13回	32位	○	○
灰田勝彦	13回	49位	13回	32位	○	○
美川憲一	13回	49位	13回	32位	×	×
水原弘	13回	49位	13回	32位	○	○
松任谷国子	13回	49位	0回	—	×	×
伊東ゆかり	13回	49位	13回	32位	×	×
殿さまキングス	13回	49位	13回	32位	×	×
こまどり姉妹	13回	49位	13回	32位	×	×
菊池章子	12回	57位	12回	39位	○	○
岡本敦郎	12回	57位	12回	39位	○	○
小林旭	12回	57位	12回	39位	×	○
磯野洋子	12回	57位	0回	—	×	×
小畑実	11回	61位	11回	42位	○	○
奈良光枝	11回	61位	11回	42位	○	○
笹みどり	11回	61位	11回	42位	×	○
渡辺はま子	11回	61位	11回	42位	○	○
菅原都々子	11回	61位	11回	42位	○	○
和田アキ子	11回	61位	11回	42位	×	○
霧島昇	11回	61位	11回	42位	○	○
黒沢明とロス・プリモス	10回	68位	10回	49位	×	×
ダーク・ダックス	10回	68位	10回	49位	×	○
大津美子	10回	68位	10回	49位	○	○
三沢あけみ	10回	68位	10回	49位	○	○
榎本美佐江	10回	68位	10回	49位	○	○
三田明	10回	68位	10回	49位	×	×
びんから兄弟	10回	68位	10回	49位	×	×

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
池坊保子	10回	68位	0回	—	×	×
織井茂子	9回	76位	9回	56位	○	○
三波春夫	9回	76位	9回	56位	×	×
朝丘雪路	9回	76位	9回	56位	○	○
江利チエミ	9回	76位	9回	56位	○	○
石川さゆり	9回	76位	9回	56位	×	×
坂本九	8回	81位	8回	61位	×	×
高峰三枝子	8回	81位	7回	67位	○	○
若山彰	8回	81位	8回	61位	○	○
五月みどり	8回	81位	8回	61位	○	×
中条きよし	8回	81位	8回	61位	×	×
小柳ルミ子	8回	81位	8回	61位	×	×
バーブ佐竹	7回	87位	7回	67位	×	○
鶴岡雅義と東京ロマンチカ	7回	87位	7回	67位	×	×
二葉あき子	7回	87位	7回	67位	○	○
淡谷のり子	7回	87位	7回	67位	○	○
畠山みどり	7回	87位	7回	67位	×	○
若原一郎	7回	87位	7回	67位	○	○
西来路ひろみ	7回	87位	7回	67位	×	○
佐良直美	7回	87位	7回	67位	×	×
渚ゆう子	7回	87位	7回	67位	×	×
市丸	7回	87位	7回	67位	○	○
二葉百合子	7回	87位	7回	67位	×	×
新沼謙治	7回	87位	7回	67位	×	×
鶴田浩二	6回	99位	6回	80位	×	○
三船浩	6回	99位	6回	80位	○	○
アイ・ジョージ	6回	99位	6回	80位	×	○
布施明	6回	99位	6回	80位	×	×
高田浩吉	6回	99位	6回	80位	○	○
ミュージカル・アカデミー	6回	99位	6回	80位	×	×
尾崎紀世彦	6回	99位	6回	80位	×	×
青木光一	6回	99位	6回	80位	○	○
細川たかし	6回	99位	6回	80位	×	×
前川清	6回	99位	6回	80位	×	×
一節太郎	5回	109位	5回	91位	×	×
にしきのあきら	5回	109位	5回	91位	×	×
西村小楽天	5回	109位	5回	91位	○	○

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
音羽ゆりかご会	5回	109位	5回	91位	○	×
加山雄三	5回	109位	5回	91位	×	×
北原謙二	5回	109位	5回	91位	×	○
大月みやこ	5回	109位	5回	91位	×	○
野口五郎	5回	109位	5回	91位	×	×
天知茂	5回	109位	5回	91位	×	×
西城秀樹	5回	109位	5回	91位	×	×
初代コロムビア・ローズ	4回	119位	4回	102位	○	○
並木路子	4回	119位	4回	102位	○	○
千昌夫	4回	119位	4回	102位	×	○
川田正子	4回	119位	4回	102位	○	×
弘田三枝子	4回	119位	4回	102位	×	○
ヒデとロザンナ	4回	119位	4回	102位	×	×
林伊佐緒	4回	119位	4回	102位	○	○
倍賞千恵子	4回	119位	4回	102位	×	×
西郷輝彦	4回	119位	4回	102位	×	×
野村真樹	4回	119位	4回	102位	×	×
坂本スミ子	4回	119位	4回	102位	×	×
花村菊江	4回	119位	4回	102位	○	○
いしだあゆみ	4回	119位	4回	102位	×	×
三浦布美子	4回	119位	4回	102位	○	○
克美茂	4回	119位	4回	102位	×	×
西川峰子	4回	119位	4回	102位	×	×
内藤やす子	4回	119位	4回	102位	×	×
ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	3回	136位	3回	120位	×	×
池真理子	3回	136位	3回	120位	○	○
佐川満男	3回	136位	3回	120位	○	○
渡辺マリ	3回	136位	3回	120位	○	○
小川知子	3回	136位	3回	120位	×	×
守屋浩	3回	136位	3回	120位	○	○
城卓矢	3回	136位	3回	120位	×	×
曽根史郎	3回	136位	3回	120位	○	○
中村晃子	3回	136位	3回	120位	×	×
三條町子	3回	136位	3回	120位	○	○
デューク・エイセス	3回	136位	3回	120位	×	○
藤本二三代	3回	136位	3回	120位	○	○
森山加代子	3回	136位	3回	120位	○	○

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
松島詩子	3回	136位	3回	120位	○	○
小唄勝太郎	3回	136位	3回	120位	○	○
三島敏夫	3回	136位	3回	120位	×	○
日吉ミミ	3回	136位	3回	120位	×	×
扇ひろ子	3回	136位	3回	120位	×	×
雪村いづみ	3回	136位	3回	120位	×	○
加藤登紀子	3回	136位	3回	120位	×	×
園まり	3回	136位	3回	120位	×	×
欧陽菲菲	3回	136位	3回	120位	×	×
南沙織	3回	136位	3回	120位	×	×
大川栄策	3回	136位	3回	120位	×	×
森繁久弥	3回	136位	3回	120位	×	×
曽根幸明	3回	136位	3回	120位	×	×
松島トモ子	3回	136位	0回	—	○	○
三条正人	3回	136位	3回	120位	×	×
黒沢年男	3回	136位	3回	120位	×	×
泉ピン子	3回	136位	3回	120位	×	×
松山英太郎	3回	136位	1回	226位	×	×
桂五郎	3回	136位	3回	120位	×	×
渡真介	3回	136位	3回	120位	×	×
高田みづえ	3回	136位	3回	120位	×	×
桜田淳子	3回	136位	3回	120位	×	×
小野ヤスシ	3回	136位	3回	120位	×	×
南田洋子	3回	136位	3回	120位	×	×
上原謙	2回	173位	2回	156位	×	×
平尾昌晃	2回	173位	2回	156位	○	×
日野てる子	2回	173位	2回	156位	×	×
青山和子	2回	173位	2回	156位	○	○
服部良一	2回	173位	2回	156位	○	○
宮城まり子	2回	173位	2回	156位	×	×
山田真二	2回	173位	2回	156位	○	○
神戸一郎	2回	173位	2回	156位	○	○
松島アキラ	2回	173位	2回	156位	○	○
井沢八郎	2回	173位	2回	156位	×	○
ロス・インディオス	2回	173位	2回	156位	×	○
黛ジュン	2回	173位	2回	156位	×	×
高英男	2回	173位	2回	156位	×	×

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
奥田良三	2回	173位	2回	156位	×	×
ベッツイ＆クリス	2回	173位	2回	156位	×	×
古関裕而	2回	173位	2回	156位	○	○
田谷力三	2回	173位	2回	156位	○	○
久保幸江	2回	173位	2回	156位	○	○
ダニー飯田とパラダイス・キング	2回	173位	2回	156位	×	×
黒木憲	2回	173位	2回	156位	×	×
ザ・キング・トーンズ	2回	173位	2回	156位	×	×
矢吹健	2回	173位	2回	156位	×	×
森田克子とザ・プリティーズ	2回	173位	2回	156位	×	×
ピンキーとキラーズ	2回	173位	2回	156位	×	×
砂原美智子	2回	173位	2回	156位	×	×
灰田有紀彦	2回	173位	2回	156位	○	○
神楽坂はん子	2回	173位	2回	156位	○	○
神楽坂浮子	2回	173位	2回	156位	○	○
東海林太郎（VTR）	2回	173位	2回	156位	○	×
美ち奴	2回	173位	2回	156位	○	○
藤田まさと	2回	173位	2回	156位	○	×
渡哲也	2回	173位	2回	156位	×	×
梓みちよ	2回	173位	2回	156位	×	○
伊藤久男	2回	173位	2回	156位	○	○
堺正章	2回	173位	2回	156位	×	×
三善英史	2回	173位	2回	156位	×	×
美輪明宏	2回	173位	2回	156位	×	×
英亜里	2回	173位	2回	156位	×	○
山田太郎	2回	173位	2回	156位	×	×
富永一朗	2回	173位	2回	156位	×	○
阿部徳二郎	2回	173位	2回	156位	×	×
長門裕之	2回	173位	2回	156位	×	×
金田正一	2回	173位	2回	156位	×	×
真木ひでと	2回	173位	2回	156位	×	×
前田武彦	2回	173位	2回	156位	×	×
杉良太郎	2回	173位	2回	156位	×	×
ガッツ石松	2回	173位	2回	156位	×	×
尾崎将司	2回	173位	2回	156位	×	×
内藤国雄	2回	173位	2回	156位	×	×
坂上二郎	2回	173位	2回	156位	×	×

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
月の家円鏡	2回	173位	2回	156位	×	×
三波豊和	2回	173位	2回	156位	×	×
芥川隆行	2回	173位	1回	226位	×	×
西田敏行	2回	173位	2回	156位	×	×
千賀かほる	2回	173位	2回	156位	×	×
朝田のぼる	2回	173位	2回	156位	×	×
ピンクレディー	2回	173位	2回	156位	×	×
あおい輝彦	2回	173位	2回	156位	×	×
荒木由美子	2回	173位	2回	156位	×	×
山口百恵	2回	173位	2回	156位	×	×
清水由貴子	2回	173位	2回	156位	×	×
岩崎宏美	2回	173位	2回	156位	×	×
榊原郁恵	2回	173位	2回	156位	×	×
沢田研二	2回	173位	2回	156位	×	×
麻生よう子	2回	173位	2回	156位	×	×
中尾ミエ	2回	173位	2回	156位	×	×
森田公一とトップギャラン	2回	173位	2回	156位	×	×
西川きよし	2回	173位	2回	156位	×	×
松本ちえこ	2回	173位	2回	156位	×	×
平野雅昭	2回	173位	2回	156位	×	×
仲宗根美樹	1回	243位	1回	226位	○	×
池部良	1回	243位	1回	226位	×	×
伊豆肇	1回	243位	1回	226位	×	×
杉葉子	1回	243位	1回	226位	×	×
若山セツ子	1回	243位	1回	226位	×	×
木暮実千代	1回	243位	1回	226位	×	×
望月優子	1回	243位	1回	226位	×	×
中村是好	1回	243位	1回	226位	×	×
竹越ひろ子	1回	243位	1回	226位	○	×
寺内タケシとブルージーンズ	1回	243位	1回	226位	×	×
克美しげる	1回	243位	1回	226位	×	×
吉村朝子	1回	243位	1回	226位	×	×
葦原邦子	1回	243位	1回	226位	○	○
加藤峯次	1回	243位	1回	226位	×	×
ジョージ・ルイカー	1回	243位	1回	226位	×	×
杉狂児	1回	243位	1回	226位	○	○
平野愛子	1回	243位	1回	226位	○	○

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
二宮ゆき子	1回	243位	1回	226位	○	○
ジャネス田端	1回	243位	1回	226位	×	×
井上ひろし	1回	243位	1回	226位	○	○
東千代之介	1回	243位	1回	226位	×	○
小林さち子	1回	243位	1回	226位	○	×
ジェリー藤尾	1回	243位	1回	226位	×	×
三木鶏郎	1回	243位	1回	226位	×	×
美樹克彦	1回	243位	1回	226位	×	×
宝田明	1回	243位	1回	226位	×	×
九重佑三子	1回	243位	1回	226位	×	○
ビリー・バンバン	1回	243位	1回	226位	×	×
小森和子	1回	243位	1回	226位	×	×
鹿島密夫	1回	243位	1回	226位	×	×
笈田敏夫	1回	243位	1回	226位	○	○
旗照夫	1回	243位	1回	226位	×	×
ウイリー沖山	1回	243位	1回	226位	×	×
武井義明	1回	243位	1回	226位	×	○
東海林太郎	1回	243位	1回	226位	○	○
ピーター	1回	243位	1回	226位	×	×
玉木千恵子	1回	243位	1回	226位	×	×
新川二郎	1回	243位	1回	226位	×	○
鈴木三重子	1回	243位	1回	226位	○	○
松本めぐみ（加山雄三夫人）	1回	243位	1回	226位	×	×
吉崎法夫	1回	243位	1回	226位	×	×
松崎葉子	1回	243位	1回	226位	×	×
北田悦子	1回	243位	1回	226位	×	×
竹山逸郎	1回	243位	1回	226位	○	○
小野由紀子	1回	243位	1回	226位	×	×
津山洋子	1回	243位	1回	226位	×	×
大木英夫	1回	243位	1回	226位	×	×
山本リンダ	1回	243位	1回	226位	×	○
京山船太郎	1回	243位	1回	226位	×	×
船村徹	1回	243位	1回	226位	×	×
薗田憲一とデキシーキングス	1回	243位	1回	226位	×	×
藤島信人	1回	243位	1回	226位	×	×
金子三雄	1回	243位	1回	226位	×	×
渡邊浦人	1回	243位	1回	226位	×	×

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
河野ヨシユキ	1回	243位	1回	226位	×	×
城北合唱団	1回	243位	1回	226位	×	×
相川芳郎	1回	243位	1回	226位	×	×
高木東六	1回	243位	1回	226位	○	×
岸洋子	1回	243位	1回	226位	×	×
中井あきら	1回	243位	1回	226位	×	×
山田真梨子	1回	243位	1回	226位	×	×
丸山明宏	1回	243位	1回	226位	×	○
ザ・ピーナッツ	1回	243位	1回	226位	×	×
坂本博士	1回	243位	1回	226位	×	×
演芸分隊の戦友たち	1回	243位	1回	226位	×	×
遺骨収拾団	1回	243位	1回	226位	×	×
鹿内孝	1回	243位	1回	226位	×	×
安倍律子	1回	243位	1回	226位	×	×
小松みどり	1回	243位	1回	226位	×	○
野路由紀子	1回	243位	1回	226位	×	×
セルスターズ	1回	243位	1回	226位	×	×
白川奈美	1回	243位	1回	226位	×	×
杵屋定之丞	1回	243位	1回	226位	○	○
杵屋定二	1回	243位	1回	226位	×	×
中村邦雄	1回	243位	1回	226位	×	○
石本美由起	1回	243位	1回	226位	○	×
星野哲郎	1回	243位	1回	226位	×	×
荒井恵子	1回	243位	1回	226位	○	×
天池真佐雄	1回	243位	1回	226位	×	×
熊倉一雄	1回	243位	1回	226位	×	×
ひばり合唱団	1回	243位	1回	226位	×	×
真理ヨシコ	1回	243位	1回	226位	×	×
浜村美智子	1回	243位	1回	226位	○	○
長津義司	1回	243位	1回	226位	×	×
アントニオ古賀	1回	243位	1回	226位	×	×
川田孝子	1回	243位	1回	226位	○	×
石橋正次	1回	243位	1回	226位	×	×
松平直樹とブルーロマン	1回	243位	1回	226位	×	○
宮史郎とぴんからトリオ	1回	243位	1回	226位	×	×
天地聡子	1回	243位	1回	226位	×	×
宮尾たか志	1回	243位	1回	226位	×	○

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
高田美和	1回	243位	1回	226位	○	○
黒島健司	1回	243位	1回	226位	×	×
宮田東峰	1回	243位	1回	226位	○	×
ミヤタ・ハーモニカバンド	1回	243位	1回	226位	×	×
ボニージャックス	1回	243位	1回	226位	○	○
樫山文枝	1回	243位	1回	226位	×	×
並木ひろしとタッグマッチ	1回	243位	1回	226位	×	×
戸川昌子	1回	243位	1回	226位	×	○
渡辺栄三	1回	243位	1回	226位	×	×
桜井敏雄	1回	243位	1回	226位	×	○
森山良子	1回	243位	1回	226位	×	×
丘灯至夫	1回	243位	1回	226位	×	×
市川昭介	1回	243位	1回	226位	×	×
植木等	1回	243位	1回	226位	×	×
小野田寛郎	1回	243位	1回	226位	×	×
加橋かつみ	1回	243位	1回	226位	×	×
甲飛13期会メンバー	1回	243位	1回	226位	×	×
あべ静江	1回	243位	1回	226位	×	×
野川明美	1回	243位	1回	226位	×	×
遠藤実夫人	1回	243位	1回	226位	×	×
吉田正	1回	243位	1回	226位	×	×
増田幸治	1回	243位	1回	226位	×	×
麻生良方	1回	243位	1回	226位	×	×
細川潤一	1回	243位	1回	226位	×	×
鎌多俊与	1回	243位	1回	226位	×	×
しばたはつみ	1回	243位	1回	226位	×	×
財津一郎	1回	243位	1回	226位	×	×
上原愛子（故上原げんと夫人）	1回	243位	1回	226位	×	×
前田利明	1回	243位	1回	226位	×	×
水の江滝子	1回	243位	1回	226位	×	×
北村英治	1回	243位	1回	226位	×	×
人見静一郎	1回	243位	1回	226位	×	×
吉村捨男	1回	243位	1回	226位	×	×
エト邦枝	1回	243位	1回	226位	○	○
白根一男	1回	243位	1回	226位	○	○
トリオ・こいさんず	1回	243位	1回	226位	×	×
若い根っ子の会	1回	243位	1回	226位	×	×

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
井筒親方（元横綱北の富士）	1回	243位	1回	226位	×	×
浅香光代	1回	243位	1回	226位	×	×
鯨部隊の出身者	1回	243位	1回	226位	×	×
新沼譲治	1回	243位	1回	226位	×	×
牧田栄	1回	243位	1回	226位	×	×
都家かつ江	1回	243位	1回	226位	×	×
豆千代	1回	243位	1回	226位	○	×
大下八郎	1回	243位	1回	226位	×	×
宮川泰	1回	243位	1回	226位	×	×
二葉の長男	1回	243位	1回	226位	×	×
三遊亭小圓遊	1回	243位	1回	226位	×	×
伴淳三郎	1回	243位	1回	226位	×	×
渡久地政信	1回	243位	1回	226位	×	×
若山富三郎	1回	243位	1回	226位	×	×
アグネス・ラム	1回	243位	1回	226位	×	×
アロハ・ハワイアンズ	1回	243位	1回	226位	×	×
浅丘ルリ子	1回	243位	1回	226位	×	○
児玉清	1回	243位	1回	226位	×	×
牧伸二	1回	243位	1回	226位	×	×
藤村有弘	1回	243位	1回	226位	×	×
田宮二郎	1回	243位	1回	226位	×	×
北原ミレイ	1回	243位	1回	226位	×	×
左とん平	1回	243位	1回	226位	×	×
あいざき進也	1回	243位	1回	226位	×	×
石原圭子	1回	243位	1回	226位	×	×
鱒澗晴子	1回	243位	1回	226位	×	×
佐藤蛾次郎	1回	243位	1回	226位	×	×
荻島真一	1回	243位	1回	226位	×	×
嵐寛寿郎	1回	243位	1回	226位	×	×
竹脇無我	1回	243位	1回	226位	×	×
高瀬殺陣会	1回	243位	1回	226位	×	×
石原裕次郎(VTR)	1回	243位	1回	226位	×	×
小柳ルミ子(VTR)	1回	243位	1回	226位	×	×
赤木圭一郎(VTR)	1回	243位	1回	226位	×	×
山下敬二郎	1回	243位	1回	226位	×	×
キャッツ・アイ	1回	243位	1回	226位	×	×
勝新太郎	1回	243位	1回	226位	×	×

「にっぽんの歌」出演回数ランキング

出演者	総出演		ゲスト出演		出演有無	
	回数	順位	回数	順位	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
李成愛	1回	243位	1回	226位	×	×
井上堯之	1回	243位	1回	226位	×	×
奥村チヨ	1回	243位	1回	226位	×	×
増位山	1回	243位	1回	226位	×	×
森田公一	1回	243位	1回	226位	×	×
浅野ゆう子	1回	243位	1回	226位	×	×
細川俊之	1回	243位	1回	226位	×	×
アローナイツ	1回	243位	1回	226位	×	×
西川ヘレン	1回	243位	1回	226位	×	×
服部克久	1回	243位	1回	226位	×	×
中田喜子	1回	243位	1回	226位	×	×
前田勝之助夫妻	1回	243位	1回	226位	×	×
松崎しげる	1回	243位	1回	226位	×	×
アン・ルイス	1回	243位	1回	226位	×	×
郷ひろみ	1回	243位	1回	226位	×	×
野村克也	1回	243位	1回	226位	×	×
有藤通世	1回	243位	1回	226位	×	×
村田兆治	1回	243位	1回	226位	×	×
金田留広	1回	243位	1回	226位	×	×
角川博	1回	243位	1回	226位	×	×
遠藤良春	1回	243位	1回	226位	×	×
マリー・オリギン	1回	243位	1回	226位	×	×
横井伯典	1回	243位	1回	226位	×	×
竜豊道人	1回	243位	1回	226位	×	×
チェリッシュ	1回	243位	1回	226位	×	×
春日三球・照代	1回	243位	1回	226位	×	×
天馬ルミ子	1回	243位	1回	226位	×	×
狩人	1回	243位	1回	226位	×	×
黒田征太郎	1回	243位	1回	226位	×	×
樋口夏	1回	243位	1回	226位	×	×
高松しげお	1回	243位	1回	226位	×	×
宮尾すすむ	1回	243位	1回	226位	×	×
加東大介(VTR)	1回	243位	0回	—	×	×
水原弘(VTR)	1回	243位	1回	226位	×	×
新谷のり子	1回	243位	1回	226位	×	×

色付は司会者またはレギュラーゲスト等での出演がある人物

３番組出演回数上位３０名比較

「にっぽんの歌」		
出演者	回数	順位
都はるみ	58回	1位
青江三奈	54回	2位
春日八郎	49回	3位
ちあきなおみ	48回	4位
水前寺清子	44回	5位
北島三郎	35回	6位
田端義夫	33回	7位
五木ひろし	32回	8位
島倉千代子	30回	9位
森進一	27回	10位
三橋美智也	27回	10位
ディック・ミネ	25回	12位
八代亜紀	24回	13位
藤山一郎	24回	13位
フランク永井	23回	15位
石原裕次郎	22回	16位
藤圭子	21回	17位
美空ひばり	21回	17位
村田英雄	20回	19位
内山田洋とクール・ファイブ	19回	20位
舟木一夫	18回	21位
由紀さおり	18回	21位
ペギー葉山	17回	23位
三浦洸一	17回	23位
松尾和子	17回	23位
森昌子	17回	23位
松山恵子	16回	27位
橋幸夫	15回	28位
菅原洋一	15回	28位
藤島桓夫	14回	30位
和田弘とマヒナスターズ	14回	30位

「なつかしの歌声」		
出演者	回数	順位
藤山一郎	81回	1位
霧島昇	71回	2位
伊藤久男	70回	3位
灰田勝彦	54回	4位
渡辺はま子	52回	5位
東海林太郎	51回	6位
林伊佐緒	48回	7位
小唄勝太郎	41回	8位
ディック・ミネ	41回	8位
二葉あき子	41回	8位
近江俊郎	40回	11位
小畑実	39回	12位
菊池章子	37回	13位
淡谷のり子	36回	14位
田端義夫	36回	14位
岡本敦郎	36回	14位
織井茂子	36回	14位
市丸	35回	18位
若原一郎	34回	19位
神楽坂はん子	34回	19位
榎本美佐江	33回	21位
菅原都々子	28回	22位
奈良光枝	27回	23位
松島詩子	27回	23位
美ち奴	26回	25位
三浦洸一	26回	25位
並木路子	25回	27位
藤島桓夫	24回	28位
平野愛子	23回	29位
松山恵子	23回	29位

「帰ってきた歌謡曲」		
出演者	回数	順位
近江俊郎	28回	1位
藤山一郎	27回	2位
霧島昇	23回	3位
渡辺はま子	21回	4位
岡本敦郎	21回	4位
ディック・ミネ	18回	6位
若原一郎	18回	6位
灰田勝彦	16回	8位
小畑実	15回	9位
松山恵子	15回	9位
二葉あき子	14回	11位
青木光一	14回	11位
三浦洸一	14回	11位
藤島桓夫	13回	14位
淡谷のり子	12回	15位
織井茂子	12回	15位
奈良光枝	11回	17位
菅原都々子	11回	17位
東海林太郎	10回	19位
市丸	10回	19位
松島詩子	10回	19位
神楽坂浮子	10回	19位
藤本二三代	10回	19位
三沢あけみ	10回	19位
菊池章子	9回	25位
並木路子	9回	25位
榎本美佐江	9回	25位
若山彰	9回	25位
大津美子	9回	25位
松尾和子	9回	25位

濃い網掛け：戦前デビュー／薄い網掛け：昭和２０年代デビュー／色なし：昭和３０年代以降デビュー

※日本合唱協会（「にっぽんの歌」）、東京混声合唱団（「なつかしの歌声」）、クール・ボナール（「帰ってきた歌謡曲」）を除く。

本章では、「にっぽんの歌」が、先行するなつメロ番組である「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」と比較してどのような特徴を持っていたのかを分析する。

具体的には、「出演者比較」「放送期間中の出演歌手の年代変遷」「サブタイトルにおける『演歌』の使用頻度」の３つの観点から、番組の特徴を明らかにしたい。

なお、本章における「なつかしの歌声」は、林田雄一氏著『東京１２チャンネル（現：テレビ東京）「なつかしの歌声」放送全記録《増補改訂版》』第３章に掲載されている番組すべてを、「帰ってきた歌謡曲」は、筆者著『よみうりテレビ（読売テレビ）「帰ってきた歌謡曲」放送全記録《増補改訂版》』第２章に掲載した番組すべてをそれぞれ指すものとした。

１　出演者比較

まずは、本書１６０ページから１７１ページにかけて、以下の構成で「にっぽんの歌」の出演回数ランキングを表に示した。

・「２　放送記録」で示した全放送回について、司会者やレギュラーゲスト、ナレーターとしての出演も含めた出演回数が多い順に記載。出演回数が同じ場合は、初登場が早い順に並べた。
・ゲスト出演の「回数」「順位」では、司会者やレギュラーゲスト、ナレーターとしての出演を除いた出演回数と順位を示した。
・「なつかしの歌声」「帰ってきた歌謡曲」の出演回数有無は、各番組に１回でも出演している場合は「○」、１回も出演していない場合は「×」で示した。

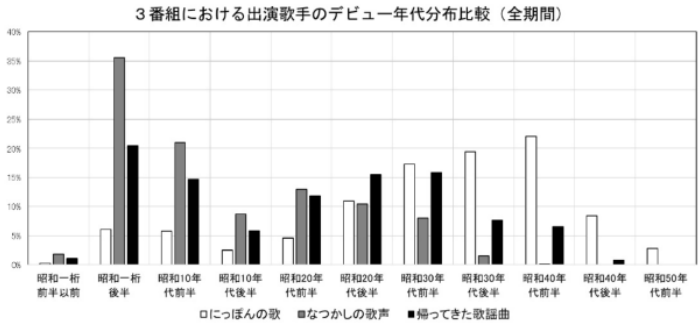
続いて、出演回数上位３０名（グループを含む）の「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」との比較表を本書１７２ページに示した。この比較表の「回数」と「順位」は、司会者やレギュラーゲスト、ナレーターとしての出演を除いたものである。なお、表の下部に示したように、各番組の専属としてレギュラーに近い形で出演していたと思われる各合唱団は除いている。また、過去の放送をＶＴＲで流した場合、ＶＴＲ中の出演は回数としてカウントしていない。

では、出演回数から伺える考察を以下に行っていきたい。

まず、「にっぽんの歌」は「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」と比較して総出演者数が多かったということが言える。「なつかしの歌声」の総出演者が２０３名（グループを含み、司会者・レギュラーゲスト等での出演は除く。以下同様。）、「帰ってきた歌謡曲」が２８０名であるのに対し、「にっぽんの歌」は４２３名と、３番組の中で群を抜いている。放送期間は、「なつかしの歌声」の５年１０か月（昭和４８年４月～９月の「思い出のヒット曲」を含む）、「帰ってきた歌謡曲」の４年に対し、「にっぽんの歌」は６年と、２番組と比較して極端に長いわけではない。これは、「にっぽんの歌」が「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」よりも幅広い歌手が出演していたことを示していると言える。また、俳優やスポーツ選手など、歌手以外の人物が多く出演していたことも、総出演者数を多くする要因の一つであった。逆に、「帰ってきた歌謡曲」よりも放送期間が長いにもかかわらず総出演者数が少ない「なつかしの歌声」は、３番組の中で一番出演者が固定化されていたと言える。特定の年代の“なつメロ”に一番ターゲットを絞っていたのが「なつかしの歌声」

であった。

次に、出演回数上位３０人の比較表からは、「にっぽんの歌」に若手～中堅世代の歌手が非常に多く出演していたということが分かる。この点については、以下の「３番組における出演歌手のデビュー年代分布比較」のグラフにて可視化した。

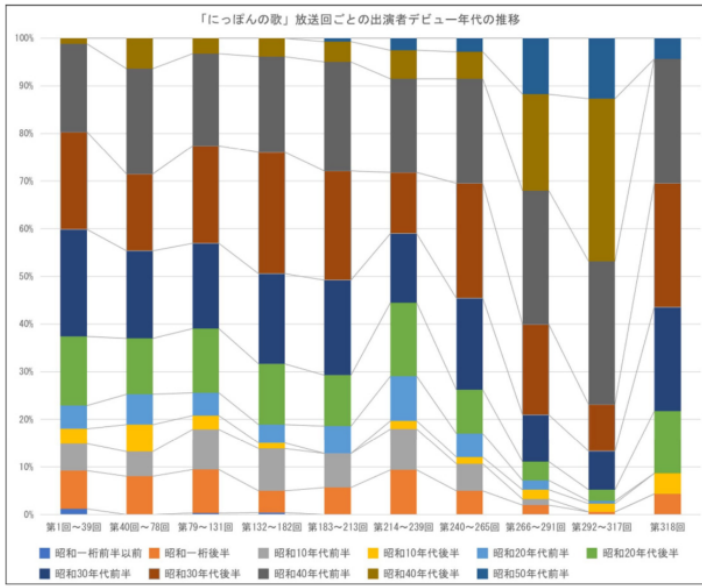


各番組が、それぞれどの年代の歌手を中心に出演させていたのかを比較したグラフである。出演歌手のデビュー年を５年ごとに区切り、延べ出演回数の比率をグラフ化したものである。なお、純粋な意味での歌手だけでなく、本業が俳優やスポーツ選手などの場合であっても、レコードを出した実績のある人物に関しては、レコードを初めて出した年をデビュー年とした（例　小林旭：昭和３３年、尾崎将司：昭和５０年）。

各グラフ中央の「なつかしの歌声」は、昭和１０年代以前（戦前）デビューの歌手の出演が全体の６７％を占めるのに対し、各グラフ右側の「帰ってきた歌謡曲」は全体の４２％、各グラフ左側の「にっぽんの歌」はわずか１５％である。逆に昭和３０年代以降デビューの歌手については、「なつかしの歌声」がわずか１０％であるのに対し、「帰ってきた歌謡曲」が３１％、「にっぽんの歌」は７０％も占めている。

２　放送期間中の出演歌手の年代変遷

続いて、「にっぽんの歌」の放送期間中、出演歌手の年代構成がどのように変化していったのかを分析する。「２　放送記録」での期間の区切りごとに、各放送時期の出演歌手のデビュー年代を次ページにグラフ化した。積み上げ縦棒の下側ほどデビュー年代が古く、上側ほどデビュー年代が若い構成である。



番組初期（第１回～３９回）は、昭和３０年代前半デビューの歌手が全体の２２％と最も多く、次いで昭和３０年代後半デビューの歌手が全体の２０％と続く構成となっている。この時点で既に「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」よりも若い歌手が多く出演していることが見て取れるが、番組が進むにつれて、より新しい世代の歌手の割合が増加していく。特に、第２６６回～２９１回の期間には昭和４０年代以降デビューの歌手が全体の６０％、第２９２回～３１７回の期間に至っては昭和４０年代以降デビューの歌手が全体の７７％となっており、もはやどこが“なつメロ番組”なのかという状況となっている。

放送時期が前半の頃は、

- 「第３の“なつメロ番組”」（『週刊ＴＶガイド』昭和４６年１０月１日号）
- 「いわゆる“なつメロ番組”の一つの典型」（昭和４７年６月２９日付朝日新聞西部版・名古屋版朝刊）
- 「彼女（池坊保子：筆者注）、この四月からＮＥＴの『にっぽんの歌』という、ナツメロ番組の司会者として登場したが」（『週刊新潮』昭和４９年６月１３日号）
- 「数少ないなつメロ番組で好評だった「にっぽんの歌」（ＮＥＴ系）が、九月から復活する。」（昭和５０年８月４日付朝日新聞東京版夕刊）

など、“なつメロ番組”として紹介されることも多かったが、

・「“なつメロ”とヒットパレードの中間を行く趣向」（昭和４７年２月１７日付読売新聞東京版朝刊）／「なつメロとベストテン番組の中間をねらった『にっぽんの歌』」（『週刊明星』昭和４７年７月１６日号）

と紹介されることも初期の頃からあり、放送時期が後半に入ると、

・「大人の歌謡番組が復活」（『週刊明星』昭和５０年８月１０日号）／「大人の歌番組！」（『週刊文春』昭和５０年９月４日号番組広告）／「熱烈な支持。いま、甦った『大人の歌謡番組』！（昭和５０年９月１日付読売新聞東京版朝刊番組広告）／「おとなの歌謡番組としてご好評をいただいた『にっぽんの歌』が、今夜よそおいを新たに再出発！」（昭和５０年９月１日付朝日新聞名古屋版朝刊）

・「ベテラン陣を常連に一貫して“にっぽんの歌”を追い続けてきた本格的な歌番組」（『週刊サンケイ』昭和５２年９月８日号）

など、“なつメロ”よりも広義な表現で紹介されることが多くなった。

『映画情報』昭和５１年５月号には、「こころの故郷／思い出のうた 50 年」と題しカラー刷りで藤山一郎、美空ひばり、八代亜紀、石原裕次郎、島倉千代子、橋幸夫、坂本スミ子、都はるみ、森進一、五木ひろし、菅原洋一、フランク永井、田端義夫、青江三奈、殿さまキングス、水前寺清子、北島三郎、三波春夫、三橋美智也、松尾和子、ちあきなおみの計２１人（組）の歌手の歌唱写真が３ページにわたって掲載されているが、この中で戦前デビューの歌手は藤山と田端の２名のみ、昭和２０年代デビューまで範囲を広げても美空と三橋が加わるのみである。同記事中の紹介文（以下参照）も、“なつメロ番組”というよりは“大人の歌謡番組”を連想させるものとなっている。

> かつて人々に愛唱され、いまなお世代を越えて生きつづける“こころの歌”“人生の歌”を、その歌の背景にあるエピソードをまじえてヒューマンなタッチでとりあげる「にっぽんの歌」（ＮＥＴ系）が好評だ。昭和のはじめから 50 年の歴史の流れの中からうまれ、庶民の心をささえたこれらの歌をヒットさせた、第一線のベテラン、実力者にご登場願った次第。

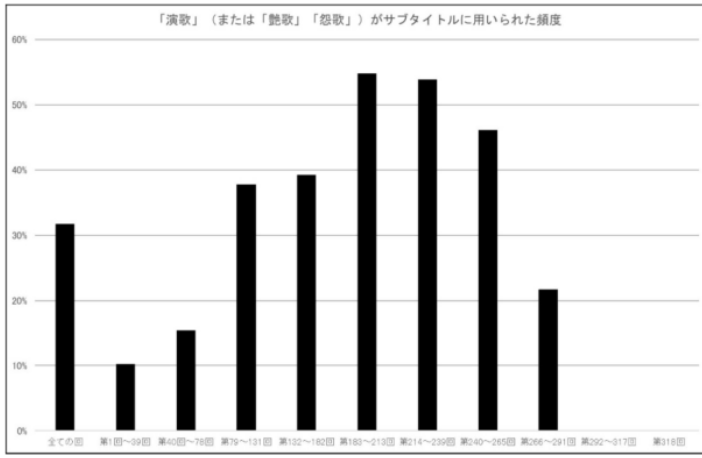
３　サブタイトルにおける「演歌」の使用頻度

本書１７２ページに掲げた「出演回数上位３０人比較」からは、「にっぽんの歌」に所謂“演歌歌手”が多く出演していたことが伺える。３番組とも毎週の放送回にサブタイトルがついていたため、各回のサブタイトルに「演歌」（類義語の「艶歌」「怨歌」を含む。以下同様。）という言葉がどの程度の頻度で使用されていたかを比較した。

まず、全放送回を通じての比較結果は一目瞭然である。「なつかしの歌声」では、全３０９回の放送で「演歌」がサブタイトルに使用されたことは一度もなかった。「帰ってきた歌謡曲」においても、全２０９回中わずか２回（１％）の使用に留まっている。

これに対し、「にっぽんの歌」では、全３１９回（放送回未カウントの昭和４９年大晦日の放送を含む。）中９８回もの放送で「演歌」「艶歌」「怨歌」のいずれかがサブタイトルに使用されており、その割合は３０．７％に達する。これは、先行する２番組とは決定的に異なる特徴である。

更に、「にっぽんの歌」の放送期間ごとの「演歌」の使用率の変遷を以下にグラフ化した。



この分析からは、番組中期（第７９回～２６５回）にかけて特にサブタイトルに「演歌」が用いられる頻度が高かったことが分かる。特に、第１８３回～２３９回の期間にかけては、放送回の半数以上でサブタイトルに「演歌」が用いられていた。「にっぽんの歌」が“なつメロ番組”ではなく“大人の歌謡番組”と紹介されることが次第に多くなった理由の一つとして、演歌を取り上げる頻度が多かったことも挙げられるであろう。

４　まとめ

「にっぽんの歌」は、「なつかしの歌声」及び「帰ってきた歌謡曲」に続く「第３の“なつメロ番組”」として放送を開始したが、実態としては先行２番組とは異なる方向性を持っていた番組であったと言える。

まず、放送開始当初から昭和３０年代以降にデビューした歌手が全体の６割以上を占めていた。最新ではない歌を「なつかしさをこめて歌わせる」（昭和４７年２月１７日付読売新聞東京版朝刊・本書１４６ページ参照）という点では先行２番組と共通していたが、取り上げる年代には大きな差があった。

また、番組の進行に伴い、森昌子、石川さゆり、西城秀樹といった若手世代の歌手も多く出演するようになり、流行ってからまもない歌を紹介する頻度が急増した。

他方、先行２番組では皆無に等しかった「演歌」を意識して取り上げた構成も多かった。

「にっぽんの歌」は、数十年前に流行った歌や往年の歌手だけを取り上げる狭義の“なつメロ番組”ではなく、子どもや若者向けではない“大人の歌謡番組”としての特徴を見出した番組であったと言える。

5　おわりに

第４章での分析を通した本書の結論は、「にっぽんの歌」は「第３の“なつメロ番組”」という触れ込みで放送開始したものの、当初から「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」よりも新しめの年代の歌や歌手を取り上げることが多く、時期が下るにつれて更に年代が若返り、次第に“大人の歌謡番組”という位置づけに変遷していったというものである。「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」との差異については、以下に示す証言からも裏付けが可能である。

筆者は、令和６年１１月、放送作家として「帰ってきた歌謡曲」の企画構成を担当していた尼子成夫氏から貴重な話を伺う機会に恵まれた。尼子氏によると、「帰ってきた歌謡曲」を企画するに当たり、昭和２５～２８年くらいまでに活躍した歌手までが“なつメロ”の範囲ではないかと考えた。一方で、戦前や昭和２０年代までに活躍した歌手だけではなく、中堅世代として当時第一線で活躍していた歌手に対しても、昭和２０年代以前の歌を歌ってもらおうという趣旨での出演交渉を行っていたが、これら中堅世代の歌手は、「自分を（第一線を退いた）なつメロ歌手扱いするとは何事か！」となつメロ番組への出演に対する抵抗感が強く、出演交渉が難航した。具体的には、鶴田浩二、石原裕次郎、美空ひばりといった人物である。鶴田と石原については何とか番組に出演してもらえたが、美空の場合は本人ではなくマネージャーを務めていた母親の抵抗が強く、結局一回も出演してもらえなかった。

試しに上記３名の各番組の出演回数を表にすると以下のとおりである。

	にっぽんの歌	なつかしの歌声	帰ってきた歌謡曲
鶴田浩二	６回	０回	２回
石原裕次郎	２２回	０回	２回
美空ひばり	２１回	０回	０回

石原こそ歌手デビューは昭和３１年であるが、鶴田は昭和２７年、美空は昭和２４年にそれぞれ歌手デビューしているため、「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」に頻繁に出演していても不思議ではないが、両番組にはほとんど、または全く出演することがなかった。「なつかしの歌声」への出演に対しても、「帰ってきた歌謡曲」と同様の抵抗感があったことが大きく影響しているものと推測できる。

他方、「にっぽんの歌」には３名とも少なからず出演している。美空に至っては、昭和４７年・４８年・５１年・５２年のそれぞれ最初の回、昭和４９年大晦日の特番、司会者交代後の最初の回（昭和５０年９月１日、５１年４月５日、５２年４月４日）といった記念すべき回に招かれるだけでなく、２週に渡るワンマンショー（昭和５０年２月３日・１０日、５１年５月１７日・２４日）が特集されることもあり、他の歌手と比べて明らかに厚遇されていた。昭和４７年１月３日の回の台本には、司会の二人による美空に対する称賛の文句が記載されているが（本書１４ページ参照）、美空を神格化した過剰な台詞であるように思えた。「にっぽんの歌」の制作陣は美空を別格扱いで迎えていたが、美空側も「にっぽんの歌」を“なつメロ番組”とは認識していなかったからこそ、何回も出演していたと言える。

（特に時期が下るにつれて）「にっぽんの歌」が“なつメロ番組”とは認識されていなかったのではないかという見方がある一方で、放送後期になってからも“なつメロ番組”と呼ばれることがなくなったわけではない。例えば、昭和５２年１０月２１日付読売新聞東京版夕刊には、「なつメロといえばテレビ朝日系『にっぽんの歌』も森光子が司会を降り」と記述した記事が掲載されている。この理由を考察するヒントが、『地上』昭和４９年１２月号に掲載された「ナツメロ奮戦記」と題する記事にあるように思われる。「なつかしの歌声」と「帰ってきた歌謡曲」の放送が終了した年の記事であるが、同記事では「なつかしの歌声」の後継番組「心で歌う 50 年」を以下のように紹介している。

> ひところのナツメロ・ブームは、一見沈静したかのようにみえるが、実はそうでもないことは、同局（筆者注：東京１２チャンネル）でさる十月二日からスタートした新番組『歌謡スペシャル・心で歌う五十年』（毎週水曜夜九時）が、早くも人気を呼んでいることでもわかる。
>
> これは、同局のヒット番組だった『懐かしの歌声』をさらに発展させたもので、みんなによく歌われた曲なら、戦前戦後を問わずクローズ・アップしようという番組である。
>
> （中略）
>
> たとえば、その第一回に登場した『美空ひばり・女の絶唱』では、森進一、五木ひろしが歌うほか、東山千栄子、京唄子らゲストが出演“人間ひばり”を語りながら、ひばりがデビュー以来ヒットした曲をふんだんに披露するというつくり方。
>
> 同局の演出部長でナツメロ・ブーム生みの親として知られる三枝孝栄氏はこう語る。「ナツメロというと、すぐに古い歌と受け取られるが、心に残っている曲なら、どんなものでも、つまり、つい最近のものでも、すべてナツメロといえるんじゃないですかね。でも一般には、ごく狭く解釈されがちになったので、このへんでナツメロという言葉に、イメージ・チェンジをしてもらいたいと思い、こうした番組に広げたんです」
>
> （中略）
>
> 『懐かしの歌声』が人気になったことの副産物は、ほかにもある。一時はバカにしていた他局が、そっくりそのままの番組をつくりはじめたのである。
>
> 『帰ってきた歌謡曲』（日本テレビ系）、『にっぽんの歌』（ＮＥＴ系）と並び、テレビ界はたちまちナツメロ合戦を演じる始末。
>
> 「最初のころ、ちょうどエレキ・ブームというか、グループ・サウンズの全盛時代でしてねえ。ふと気がついてみると、歌番組というと、どこの局もヤング向けばかりだった。そこで視聴者はなにもヤングだけにかぎらないはずだと思いまして……でも、それから六年。このへんでナツメロ・ブームもいっぺん脱皮していい時期でしょう」
>
> と、三枝氏はしんみり語る。

あれだけなつメロ番組への出演に拒絶反応を示していた美空（正確には母親）が「なつかしの歌声」の後継番組の初回に出演しているという事実が印象的であるが、「なつかしの歌声」の放送が終了した昭和４９年になると、従来のように「“なつメロ”の範囲は昭和

２０年代まで」と絞ることをやめ、“なつメロ”のイメージ・チェンジ、即ち広義化を図っていたことが分かる。また、上記記事においては言及されていないが、日本テレビ系列においても、「帰ってきた歌謡曲」の後続番組「こころの歌」は、「帰ってきた歌謡曲」よりも幅広い年代の歌を取り上げる番組に変貌していた。

「にっぽんの歌」の放送開始は昭和４６年１０月と、まだ「なつかしの歌声」や「帰ってきた歌謡曲」が放送されていた時期であったが、放送終了は昭和５３年３月であり、先行２番組が昭和４９年３月に放送終了してからも長く放送を継続していた。「にっぽんの歌」は、「“なつメロ”の広義化」という時代背景をいち早く取り入れた番組であったと言えるのではないだろうか。

「なつかしの歌声」の後継番組「心で歌う 50 年」は昭和４９年１０月～５２年６月、「帰ってきた歌謡曲」の後続番組「こころの歌」は昭和４９年４月～９月にそれぞれ放送しており、いずれも「にっぽんの歌」の放送時期と重複している。本書では「心で歌う 50 年」「こころの歌」両番組との出演者比較にまでは踏み込むことができなかったが、更なる知見が得られるものと思われるため、稿を改めて分析することとしたい。